
優しい魔王になるために

廻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい魔王になるために

【Nコード】

N7933V

【作者名】

廻

【あらすじ】

少年、篠崎 友は、完璧で天才で超人な幼馴染、白神 真といた。別に、その少女の暴拳にいつも振り回されるといふ訳ではなく適度な距離を保った生活を送っていた。そんなある日、友達の西沢が「

というわけで、今日みんなで学園七不思議を探索することにしました」と、突拍子もないことをほざいた。学園七不思議「おんぶさん」「選定の鏡」「笑う外道」「策士の無理問答」「聖剣伝説」「魔物の巣窟」。そしてこれら六つを斬り抜けたもの先には……

……。今、篠崎 友の、幼馴染のため、見たこともない他人のため、

そして、他ならぬ自分のための物語が、始まる。第一章終了いたしました。

第一話・Educational institution 7 is my

作者の暴挙。

とりあえず、飽きちゃうかと思いますが、最後まで読んでくださるとつ
ねしいです

うだるような日光が最近工事をしたばかりの黒いアスファルトを照らし、その照り返しさえも通行者を苛む夏。これがまだ日が昇って間もない朝からこの暑さだと言っただから本当にたまったものじゃない。

朝と言えば、通勤通学でおなじみだ。朝のジョギングやランニングを楽しむ人もいるかもしれないが、朝することと言えば、布団から這い出て、顔を洗い歯を磨き、トイレに数分籠り唸り声を上げたのち、もう一度手を洗い、お母さんが用意をしたご飯を食べて、そして、通勤通学のために玄関に向かい「いつてらっしゃい」「いつてきます」と言う挨拶をかわして、学校や会社に向かうわけだ。

とにかく、朝と言うのは、思い返してみれば複雑なことを無意識に行っている。

しかし、ある種の人間にとっては、それが無意識に行えないわけなのだが。

チリリリリリリ という耳障りな目覚まし時計のアラームが片付けられているのか片づけられていないのか分からない部屋で鳴り響く。今朝だけで、すでに8回は鳴り響いているだろうか？

「……………あれだ。この目覚まし時計は僕に恨みでもあるらしい」
 そんな捻くれた声とともに盛り上がった布団の中から、ぬっと手が出てくる。その手は辺りを右へ左へ何かを探すように動き回っている。どうやら、今も鳴り響いている目覚まし時計を探しているようだ。

がしっ！ とやっとのことで掴んだ目覚まし時計。器用に片手でアラームを止めるスイッチを探すが、どうにも要領を得ない。その間にもどんどんアラームは大きくなっていく。

「……………目覚まし時計の反逆か。僕はそんなに理不尽な行いをお前にしてきたのか？」

そんな捻くれたことをぼやきながら、今度はぬつと頭が布団の中から出てくる。

計7回。最初午前7時に設定したときから、7回ほどアラームを止めた後投げ捨てていた。少しだけ反逆してみたくなったのかもしれない。

布団の奥から最初に出てきたのは髪の毛。艶があるかどうかぐらの髪質で、それでも深い深い黒。ところどころ跳ねており、偏った跳ね方ではないので寝癖ではないらしい。

次に出てきたのは顔。まだ寝ぼけていて半開きであるが、全部開いても鋭く上がった感じだろうことが分かる。瞳は黒。全体的な評価は上の下と言ったところだろうか？

その半開きの目で今だ鳴り響く目覚まし時計を一瞥する。目覚まし時計の頭頂部にあるスイッチを押そうとした時、戦慄した。

短針が8に行くか行かないか、長針はすでに8のところを過ぎていた。

正確にいえば午前7時43分。今から上記に挙げたことを全てするとすると、余裕で8時は越える。そして、この少年が学生である身として、そしていつも7時40分には家を出る身として、取るべき行動は一つ。

「何で起こさなかつたの母さあああああああああああああああああああああ
ああああんッー!」

その日、田舎とも都会とも言えないような街で、一人の少年のシヤウトが響き渡った。

|| ||

|| ||

急ぐ。二階にある自室から一分ほどで白の半袖カッターシャツと藍色にチェック柄のズボンという制服に着替えを済ませて、階段を駆け降りる。ドタドタと足音を軽減する努力もしないまま、一気に一階へ降りると、

「何で起こさなかったの母さんッ!? もう40分回ってるよ!？」
台所の方へ走って行き、木製のドアノブを親の仇と言わんばかりに握りしめ回してドアを開けると、艶のある黒い長髪を持った年若い女性が洗面台で皿などをカチャカチャと鳴らして洗っていた。

「あら? まあ!? もうこんな時間だったの。あらまあ……。けど、友くんが起きてこなかったのが悪いんじゃないかな?」

「こつちとしては気づいてなかったのが驚きだよ! 今の今まで何してたんだよ!」

少年は頭に両手をもっていつて、馬鹿なアッ! と叫ぶ。そんな少年 篠崎 友はこんなところでコントをしている暇などなかった。

「母さん、弁当は?」

「……あらいやだ。朝作ったものをそのまま皿と一緒に洗って捨てちゃったわ。なんで今日はこんなに残し物が多いのかと思ってたら」

「そんな馬鹿な!?!」

口元に右手を当てながら「うっかりしてたわ」などと言っている。その様子に悪意は感じられない。天然そのものなようだ。

「はい千円。今日は売店で買ってね?」

ゆつくりと台所にある木製のテーブルの上にある装飾がそこそこ施されている鞆を手に取り財布を取り出し千円札を取り出した。

「……あの人ごみに、突入か。……厄日だ。自分の所為だけど」

篠崎が通う学校は売店が人気らしいということとは彼の口ぶりから分かる。なにせ、最近三ツ星レストランを退職した凄腕シェフがそこで腕を振るっているとかで、時々雑誌に載るほどである。

「ほら、もう50分よ? 今日は帰宅部の友くんが全力疾走できそ

うで、なによりです」

そんなことを笑顔で篠崎にいう女性。彼の母である篠崎 凜である。

10年前に夫を不慮の事故で亡くした後、女手一つで篠崎を育て上げた女性で、その過程で立ち上げた会社が大当たりをした、幸か不幸か分からない人生を送ってきた女性だ。

「い、いつてきます!」

「あら? ご飯は?」

「食べれるわけないでしょうが!」

そんなことを言つて玄関へ駆けていく。右手には通学鞆を抱えて、急いで白が基調の運動靴を履くと、振りかえつてもう一度、

「行つてきます!?!」

「はい、いつてらっしゃい」

母に向かつて渾身のあいさつを交わした。

玄関のドアノブを掴み、勢いよく押すと夏特有のもわん、とした外気が体を包み込む。「うつ……」と一瞬たじろぐが、毎日やってきたこと。そのまま外に飛び出す。

それと同時に向こう隣りからも落ち着きがなく慌てた様子の「行つてきます!?!」という女性特有の高い声が聞こえる。そしてバタンッ! とドアが開け放たれる。

出てきたのは日本人には見えないような白髪。純白と形容している肩で切り揃えられた白髪が篠崎と同じようにたじろぐ。

顔を上げると、血のように紅い瞳が篠崎のぼやつとした精神を貫く。

「と、友も寝坊したのか? は、はっは。ば、馬鹿だなあ」

「馬鹿じゃなくても寝坊すんだよ馬鹿。そんな白神 真さんは寝坊した僕と何で同じ時間に通学してるんでしょーね?」

その問いに「うつ……」と詰まらせる少女、白神 真。物心ついたときから一緒にいる、所謂幼馴染である。ブラウンのブレザーに赤が基調でチェック柄のプリーツスカート。胸元には篠崎と同じ校

章が入っている。

そんな少女は篠崎の問いに対して、

「そ、そんなことより走った方がいいわよね？ いいに決まってるわ！ 急ぐよ！」

逃げの口上とはよく言ったものだ。そんな感じで裸足で歩けば火傷しそうなアスファルトの上を走る。この上なく全力で。

「はッ、はッ、はッ……あ、足が、重い」

「なにチンタラ走ってんのよ！ ここから学校まで徒歩で30分！ 学校の門は8時10分には閉まっちゃうのよ！？」

走りだして5分。すでに元のスピードはほとんど失って、肩で息をしながらなんとか走っているという形を保っている篠崎。対して白神は汗は額に滲んではいるが、まったく息を切らさず仕方なく篠崎のスピードに合わせていると言った様子だ。

「スポーツ万能、成績優秀、才色兼備、天才少女なお前と一緒にするな！ 真を基準に考えんじゃねえ！」

そう。篠崎が言った通り、走れば風となり、跳べば鳥となり、知恵を絞ればスパコンになる。天才完璧美少女、マコトニ ミラクルとは誰が言ったものか。

「はッ、はッ。はッッ！」

ない体力を振り絞りながら、日光とアスファルトの照り返しを耐えながら、篠崎は死力を振り絞り走る。それなのに白神はこちらを窺う余裕を見せるほどで、男として嬉しいのやら悲しいのやらと言った状況である。

そんなとき、白神が急に歩を止める。篠崎はその背中に追突しそうになって体勢を崩す。

「お、おい！？ 急に止まんなよ！」

「……………」

いつもならここで「うつさい死ね」ぐらいの言葉が返ってきてそうだが、そんな暴言はおるか返答すらない。篠崎は恐る恐る白神の顔を見る。

その顔は横を向いていて、その視線は脇に逸れた小さな空き地を見ている。否、彼女が見ているのはそこにいる複数の男性とその中心にいる気弱そうな女性。

（あー、あー。朝っぱらサカってんなあ）

というのが篠崎の感想だった。恐らくあれはナンパやそれに類するものだろう。しかし、1人に対して5人ほどで囲んでいる状況はおかしい。恐らくこの後彼女は、暴行を受けた拳句、ボロ雑巾のような姿で路上に投げ捨てられるのだろう。

篠崎としても思うところはあるのだが、思うだけでそれができる力などどこにもない。身長と言えば周りより少し高いぐらいの170の後半。だからと言って腕力が見た目以上にあるわけでもなく、むしろ弱いぐらいだ。体力テストでは平均を指すのがやっとぐらいである。

そんな少年があの場合に割り込んだとしても、あの気弱そうな女性とともにボロ雑巾のような姿になって、路上にうち捨てられるだけである。

そんな無力な少年を誰かが責められるわけもなく、篠崎はそのまま白神を連れて学校に行こうと思ったが、

「朝っぱらからサカってんじゃないわよアンタら！」

学校指定の通学鞆片手に男達5人の中へ突っ込んでいった。

篠崎としてはこれは予想済みで「またか」程度のことである。

この少女は所謂『正義の味方』というやつだ。道端でゴミが転がっていけば律義に拾い、怪我をしている少年少女がいれば背負って病院まで運び、いじめっ子から弱気な子を開放したり、銀行に押し入った強盗たちを3分で制圧する等々……。挙げればきりがないのだ。

いつも篠崎は、そんな少女の正しい行いを隣で見てきた。だからといって、篠崎にそんな勇気もないし、それを成し遂げるだけの力

もない。

だから、黙ってついて行くしかないのだ。

「あア？　なんだこの白髪女」

「アニキ。コイツはコイツで可愛子ちゃんじゃないっすか」

「ん？　言われてみれば、だな」

どうやらこの不良たちはこの街にやってきたばかりらしい。否、この街どころかこの県に初めて来たと言うところか。

『鬼殺しの白神』と、この街はおるか県下に響き渡るほどの喧嘩の強さでも知られていると言うのに。この街の不良は全て、白神に制圧された。それはたしか、白神が高校生に入学したと同時だった。（ご愁傷様。精々、真に負けて、ツンデレにでもなってください）そう。白神に負けた不良どもは、ことごとく白神のことを慕うようになってしまう。それは、彼女の堂々とした気風と毅然とした正義にあるのだろう。

（まあ、僕には関係ないけど）

篠崎にとっては速く終わらせてほしかった。早くしなければ、学校に遅れてしまう。今はそちら方が重大に思えるほどだ。

「で？　お前はどのどいつだ？」

と、今時流行らないようなフード付きのパーカー（夏なのに御苦労さま）とサングラス。夏なのか冬なのかどっちかにしろ、と突っ込みたくなるようなファッションをした大柄な男が白神の前に立ちふさがる。

こうしてみれば大人と子供ほどの差があるようにも思える。白神の身長が低いというわけでは決していないが、180もある男と並ぶと160ほどの白神は子供のように見えるしまう。

「騎之塚学園、2年3組、出席番号10番、白神　真よ！」

篠崎の「そこまで教えなくてもいいだろう別に……」という小さな呟きなど、アドレナリンを大量に分泌している彼らには聞こえない。

その白神の大きな声にビクンッ！　と肩を揺らす気弱そうな女性。

不良たちに襲われただけあって、それなりに美人だ。

「今から1分以内にアンタらを肅清してあげるから、その女性をさっさと解放して、かかってきなさい！」

一瞬の沈黙。そして、

「ぎゃっはっはっははは！ 馬鹿かお前馬鹿なんだろう。今時そんな言葉はく奴なんていねえだろうが馬鹿！」

アニキと呼ばれた夏か冬か分からないファッションをした男性は豪快に下劣に笑う。

その瞬間、白神の右手に握られているバッグが唸った。

「ぐべっ!？」

その一撃が夏か冬か分からないファッション（以下、夏冬男）をした男の鼻っ柱に直撃し、後ろに吹っ飛んだ。

呆然とする残りの男たちの間にサラサラとした白髪を風に舞わせて割り込む。そこで気を取り直した男たちは次々と白神に襲って行く。

それに臆することなく最初に来た男の足の甲を踏みつけ怯ませ、痛みを蹲ったところで顔面に蹴りをいれ吹っ飛ばす。2番目3番目の男たちは左右から挟み込むようにして白神を襲うが、そんなことは意に介した様子もなく、左から襲ってきた男の顔面に右ストレート。その回転を生かして左から襲ってきた男の側頭部を左回し蹴りで打ち抜く。

「な、なんだこの女ア!？」

「白神 真よ。覚えておきなさい」

そう言っつて相手の腹部めがけて突き刺さるような蹴りを見舞った。後方へ3メートルほど吹っ飛んだあと、少し痛みにもたうち回った後気絶した。

「ふん。下衆男め」
ゲスオ

そう言っつて頬に汗で張り付いた白髪を右の手の甲ですくうように払った。

これが、白神 真である、といったらただのバイオレンスな高校

生にしか見えないのだが、そう言うしかなかった。

「あ、あの、あの。た、助けていただき、あり、ありがとうございませう、た」

解放されてからの安堵からか、こみ上げてくる涙を必死で押さえるように白神に感謝を述べる気が弱そうな女性。

それに白神は、

「どういたしましてっ！」

満面の笑みを浮かべて、その感謝を満足そうに受け取った。

〓 〓 〓

人助けをした後、彼らに残された時間はほぼなくなっていた。元からないような時間だったが、さらに消え失せた感じだ。

「おいおい。体力とともに時間まで擦り減らしちゃったよ。生活指導の竹原センセはめっちゃ怖いんだぞ」

竹原センセと言うのは篠崎が言ったように生活指導の先生であり、剣道部の顧問でもあり篠崎の担任でもある。校門の前で竹刀を体の前で構えたまま、一秒でも遅れた生徒を片っ端からボコボコにする鬼である。

しかし、これだけで言えばなんだか熱血で暑苦しい体操服を着た感じのむさい男をイメージしてしまうだろうが、竹原センセはクールで知的な所謂イケメンと言われる存在だった。実家は全国に百万人の門下生を抱える剣術家の本家であり、その跡継ぎである。

竹原センセの怖いところは、その剣術を遅刻してきた生徒に使うところである。竹原センセと言われるのは遅刻してきた生徒が言いわけをしようと、「竹原先生」と言おうとした時「問答無用。竹原一本流弐式、罰刀」と言うことで、最後まで言えなかったところからである。

「うっさいわね！　じゃあ友はあの人を見捨てればよかったっていうのー!？」

「ぐっ……。それは」

「違うなら黙って走る！」

「あいまむ！」

反論できないのなら、従うしかないのが世の常だ。篠崎は「あ、なんだかものすごく反論できそうな気がする……気のせいか」と呟いて、また地獄のアスファルトの上をひた走ることとなった。

走ること10分。最初の5分と不良たちを蹴散らした（篠崎は観戦）時間も含めると、残り時間は二分と言ったところだ。走り続けている間、ずっとアスファルトの上だったわけで、運動不足な篠崎には辛すぎた。

「あ。あんまり覚えていない父さんが見える。え？ こっちに来るな？ やめてよ父さん。そんな気持ちよさそうところ、一人で満喫しないでよ」

「早まるな友！？ アンタがそちらに行くにはまだ早すぎるわ！」

そんな天国を垣間見た篠崎だが、地獄のアスファルトにも漸く終わりが見えてきたようだ。

「ほ、ほら！ 学校よ。まだ2分もある！ よかったわね、間にあったわよ！」

「がっこ……っっ？」

うだるような暑さの中、アスファルトは熱せられて陽炎すら出してぼやけている中、漸く、白を基調とした彼らが通う騎之塚学園が見えてきた。しかし、生徒からしてみれば、アスファルトの上も学園の中も地獄であることに変わりはないのだが。

校門の前では、腰まである銀の長髪を後ろで結ってポニーテールにした男性、竹原センセが竹刀を構えて生徒たちに挨拶を交わしている。

このまま普通に走って行けば普通に間に合う。そう思っていたところだった。

しかし、彼らの幻想は淡くも崩れ去る。

ガッ！　と言う音とともに篠崎が何かに足を躓かせる。足元を見ていると、まだアスファルトを変える工事をしている途中なのか、微妙なでっぱりがあった。おそらくそれに足を躓かせたのだろう。

いつもの篠崎なら、体力が万全な状態の篠崎であれば、この体勢からでも無理矢理走り続けることができただろう。しかし、今の篠崎の体力はほぼゼロ。そんなところで躓くなど、ダンジョンの中でヒットポイントが3しかない時に猛毒状態、といったところか。

篠崎は糸がほつれた人形のように、大きく前に転んだ。前方を走る白神も巻き込んで。

「のわあッ!？」

「きゃアッ!？」

そのまま熱いアスファルトの上へと転んだ。一瞬、頭が飛ぶほどの熱が転んだ右肩を苛んだ。これは本当に火傷したんじゃないだろうか？　という心配が浮かぶ。

起き上がるうとした時、篠崎の右手に幸せな感触が伝わる。

手元を見してみる。するとブレザーで言う胸のあたりを、痛みで弛緩した指が、ふにっ！　と触っていた。

「み、見た目よりも胸がある。ということは、君は着やせだゲブラッ!？」

結論を言うと、人は翼がなくとも飛べる、ということだ。篠崎の顎を、すでに凶器と化した通学鞆が勢いよく打ち上げた。垂直に2メートル強。たしかに、人は翼がなくとも空を飛べた。

しかし、飛んだあとは翼がなくては滞空できない。飛ぶことはできたが、飛び続けることはできなかったようだった。

ドグシャッ!!　と鈍い音が辺りに響く。

そしてすぐさま起き上がったかと思うと、

「すみませんでした！　すみませんでしたなので早く学校に行こう!」

そう、彼らには余裕があるようでない微妙な状況だった。まだ体

は痛むがそれを気にかけている暇もなく、走りだす。

「……女としては、もう少し気にしてほしいんだけど」

白神も仕方がないと言った様子で篠崎のあとを追う。

「10、9、8、7」

「竹原センセ、おはようございます」

「おはようございます」

「ああ、おはよう。3、2、1」

ガチャン、と言う音とともに門が閉まりだす。ここは全自動なように、竹原センセはそれを黙って見つめている。

どうやら篠崎と白神が最後だったようだ。辺りには篠崎と白神、そして竹原センセしかない。

再びガチャン、と言う音とともに門が完全に閉まる。今日は遅刻生徒はいなかったようで、竹原センセの出番はなかったようだ。

そう、遅刻生徒には、仕事をしなくて良かったようだ。

そのまま次の5分後のチャイムに間に合わなければ、生活指導の竹原センセの御世話になるので二人はいそいそと校門から校舎の方へ駆けていく。

「おい。二人とも、どこに行く？」

後ろから聞こえる、竹原センセの声。

「ど、どうしたんですか？ 竹原センセ」

その声に戦慄を覚えながらも篠崎と白神は恐る恐る後ろを振り向く。

「私の担当は覚えているか？」

「え、えっと。生活指導担当、歴史の先生、および2組の担任です」

白神が実にそつない優秀な答えを返す。

「ふむ、正解だ。では、生活指導とは主に何を指している？」

何が言いたいのか？ と思いつつも篠崎は「生徒の安全のために学生らしい生活の仕方を教えるということでしょうか？」とまたもそつのない答えを返す。

「それも、正解だ。では、貴様等は騎之塚学園正門前で、朝から一

体何をした？」

「何をした……？」

思い出すのは、走って走って、意識が失いそうになって、白神を巻き込んでこけた。そして……といったところだろうか？

「不純異性交遊一步手前の行為を、私は目撃したぞ」

「なッ！？」

「えッ！？」

篠崎がなんとか言い訳をしようと、

「竹原センセ」

「問答無用。竹原一本流参式、罪斬^{ざいざん}」

こうして今日も、伝説は紡がれた。

|| || || ||

「今日は厄日だ」

むすっ！ とした表情で教室の自分の席でうずくまりながら愚痴る。

例えば、寝坊したり、弁当がなくて地獄の売店に行かなければならなかったり、50 は超えるであろうアスファルトの上でマラソンをしたり、幼なじみに人は飛べると言うことを身をもって体験させられたり、竹原センセの偉大なる伝説の礎になったりと、いろいろと厄日だ。

「まあ、いいじゃんか。明日から夏休みだぜ」

そう言うのはクラスメートの西沢。陽気な感じが好印象の面白い男、というのが篠崎の印象だ。

しかし、明日から夏休みということは何故今日弁当がいるのか。運動部ならまだしも、帰宅部である篠崎は午前中で帰れるはず、というのが普通の意見だろう。

しかし、この騎之塚学園には奇妙な伝統があって、昼までに終業式などは終えて、そこから昼食をはさみ、1時間ほどの大掃除があ

る学園だ。誰が決めたのかわからないが、八夕迷惑も極まりない。

「知ってるか？ 僕、夏休みは補習なんだぜ？」

「知ってるさ。俺もだからな」

「友よ！」

「おっさ！」

嘘っぱい涙を流しながら「友達っていいな」と言うことをかみしめる二人。男の友情は真夏の日差しにも照り返しにも負けないほどに、熱いようだ。

「けど、今日は学校早く終わんだろ？ というわけで、今日みんなで学園七不思議を探索することにしました」

「は？」

いきなりそんなことを言う西沢。この少年がいつも突拍子のないことを言っでは周りを困らせることは重々承知しているが、今回の群を抜いて突拍子がなかった。

「っていつか、学園七不思議ってなんだよ？」

「ええ！？ 知らないのか友！？ この学園に散在する七不思議を！」

「そんなこと言われても、なんていつか、あれじゃん。周りを気にすることなくぼーっと暮らしてる僕じゃん。そんなのは自然と耳の穴を右から左へと」

自分の手を使いながら右から左をジェスチャーする。そんな篠崎を見て西沢は、

「はあ~~~~~」

「なんだよ！？ 『お前って、無知なのな』っていう感じのため息は！ 今のは結構傷つくのでございますのよ！？」

「いや、だって実際そうじゃん。こんなに噂になってんに」

「こんなにして、どんなにだよ？」

「いいから、耳を澄ましてみろって」

「????？」

篠崎は意味がわからないまま意識を外側へと向ける。自分達が静

かになることで自然と周りの話し声が聞こえてくる。

『ねーねー？ 知ってる？ 昨日「おんぶさん」が出たんだって』

『え〜？ ホント？ あれでしょ？ 男か女か分からないようなナニかを、夜、校庭を歩いているといつのまにかおんぶしてるっていう。それで1分間おんぶを続けると「お前じゃない」っていうって、いつの間にか消えてるっていう』

『おい、聞いたかよ！ 一昨日、バスケット部の先輩が美術室で「選定の鏡」に質問されたって』

『聞いた聞いた！ 夜、午前零時きっかりにその鏡の前に行って月明かりを浴びながらその鏡に写ったら「お前じゃない」って言われるっていう』

『知ってる？ 「笑う外道」っていうの』

『知ってる！ あれだろ？ 図書室で一人になると、どこからともなくピエロの格好したナニかが出てきて「お前の一番大切な人は誰だ？ 答えたそいつを殺す。答えなければお前を殺す」っていうのを笑いながら尋ねてくる』

『「策士の無理問答」ってどんな質問だったっけ？』

『えーつとお。たしか、科学室で「今から腕相撲をする。お前の利き手の逆でだ。ここで問答。組み合った腕を使わず私を倒せ」っていう、訳の分かんない問答を仕掛けてくる男の人のことですよ？』

『「聖剣伝説」は？』

『あれだろ？ 騎之塚学園の所以、どこからともなくやってきた騎士サマが学園のどこかにある塚に剣をブチ刺したつつう奴だろ？』

『しかも、それは選ばれし者じゃないと抜けないっていうどこかで聞いたことがある設定』

『「魔物の巣窟」って、一番眉唾もんだよな』

『だなー。五つの不思議を斬り抜けたものにのみ現れるっていう奴だろ？ 「聖剣伝説」の直後にその不思議は現れて、いきなり異次元空間に飛ばされたかと思うと、ファンタジーな魔物たち10匹とバトらなきゃなんねーつつう全部の中で一番ふざけた奴だ』

と、クラスのほとんどの者が西沢の言う七不思議とやらを話題にして話しあっている。

『おんぶさん』 『選定の鏡』 『笑う外道』 『策士の無理問答』 『聖剣伝説』 『魔物の巣窟』

ここでひとつ疑問に思ったことがある。

「おい西沢。六つしかねーじゃねーか」

そう、いくら聞いてもいくら待っても、聞けども待てども、その七つ目とやらが話題に上がって来ないのだ。

それを西沢は、

「ああ、何を隠そう、七不思議ってーのは自作だからな」

そんなことをあっけらかんと言いつつ放った。

それを聞いて篠崎はうがアッ!? と頭を抱えて吠えた。そのまま篠崎お得意のツッコミマシーンが発動しそうになったが、

「いや、あんま知られてねーだけで、あるんだよ。七つ目が」

そんなことを真剣な表情でたまった西沢。篠崎は口まで出かけたツッコミを飲み込み、その話の先を促す。

「この学園の七不思議ってーのは昔からあつてな? 俺、気になつて図書室を調べてみたんだ。一人じゃ怖いから、ほら、お前を誘つたときだよ」

「ああ、あの時か」

1週間ほど前に西沢に「レポートまとめなきゃなんねえから図書室付き合ってくれ」と言われ、放課後に渋々付き合つたのを何となく思い出した。その時学校の資料を漁りだしたときはキレかかったが、こういうことだったのかと理解する。

「この学園って、校舎は数年に一回立て直すからキラーだけど、結構な歴史があんじゃない? それこそ、江戸時代ぐらいから。けど、文献とかに載ってないだけで、基礎のところはもつと昔からあつたっばいけどな」

この学園の創立は200年前だと言われている。今年なんかはその200周年とかで、テレビの取材がなんだかんだと騒いでいたのを篠崎は何となく思い出す。西沢の情報によると、なんだかそれ以前から存在していたようだった。

「で？ 僕をわざわざ付き合わせた成果は？」

これでしょうもないことだったら一発殴ってやろうと、篠崎は拳を固める。それを見て西沢は顔をひきつらせ「大丈夫だ。マジ話」という。

「この学園が本当は200周年ではなく、250周年だと仮定した場合だな？」

そこで西沢はあたりをキョロキョロと見渡し、誰も自分たちの話を聞いていないのを確認すると、その口を開いた。

「50年周期で、この学園、またはその付近で人が失踪している」

西沢は真剣な面持ちで、篠崎に語った。篠崎はそれを聞いて全身がぞわっ！ と総毛立つのを感じた。

「それって……」

「まあ、最後まで語らせるよ。ここからが俺の面白い仮説なんだからな」

「面白いって……」

人がいなくなっているのに、呑気な奴だな、と篠崎は呆れたように息をつく。しかし、聞いてみたいと思う気持ちが無くなったわけではなかった。そのまま西沢の話に耳を傾ける。

「『聖剣伝説』ってのは覚えてるか？ 今言っただばっかなのに忘れてたらお前の脳ミソは腐ってるぞ」

「覚えてるよ。学園のどこかにある塚にどっかからやってきた騎士サマが剣ブチ刺して、それは選ばれし者しか抜けないっていう奴だろ？」

「ああ。それでな？ その不思議と『魔物の巣窟』の不思議は、5

0年周期で現れているとしたら？　つていつか、50年周期でしか現れないとしたら、お前、どう考える？」

「失踪事件と関連性がある、とでもいいたいのか？」

「ああ。昔の子供の文集みたいなのを見てたら、50年周期でしかその二つの不思議は出てないみたいなんだ。はは、その当時でも学園七不思議とかは話題性があるもんだ」

篠崎は考える。失踪事件との関連性を。

結果、

「関連性なんてないだろ」

そんな非現実的なことをいきなり言われていきなり信じられる人間など西沢ぐらいなものだろう。篠崎は「下らない幕引きだぞオイ」と西沢に愚痴る。

「けど、面白かったろ？」

篠崎にわくわくした表情で聞く。

「まあ、な。で？　お前が考えた七不思議の最後の一つって、一体何なんだ？」

微妙に気になって西沢に聞いてみる篠崎。

それに西沢は口角を思いつき釣り上げて、

「ああ。七不思議と失踪事件に関連性があると断定した上での仮説なんだけど」

こう、答えた。

「　六つの不思議を斬り抜けたものは、異世界に勇者様として召喚される」

その顔は、受けは狙っておらず、本気で言っているかのような表情に変わっていた。

第一話・Educational institution 7 is my

感想・批判・指摘、お待ちしております

第二話・The bad day …… (前書き)

では、ストック投稿

どうぞ

第二話：The bad day ……

あれから西沢の仮説に大声を上げて笑った後、4時限目の授業が始まった。篠崎としては久しぶりに面白いことを聞いて満足で、なんだかいい気分です。授業に臨むことができた。

いい気分です。授業に臨むことができたのはいいが、西沢の仮説が何だか気になってしまう。大笑いしておいてなんだが西沢のアレは小説や漫画でよくある異世界召喚と言う奴だろう。篠崎としては十分に興味をそそる話題だった。

(200周年ではなく。250周年。50年ごとに失踪者。そして、今年がその)

そう。次に失踪者が出るとするならば、今年だ。最初に失踪者が出たときはまだこのあたりがあまり整備されていなかったために、この学園とはあまり関係ない人が失踪したと言う。

しかし、今はこの学園内のみで噂はもちきりだ。多分、出るとすればこの学園の生徒が失踪するのだろう。

(あれだよな。まだ『策士の無理問答』みたいな感じで全部知恵を使う感じならともかく、『魔物の巣窟』みたいな体育会系のお仕事は僕には無理なのですよー)

そんなことを思いながら馬鹿げたことに真剣に思考を裂いていた自分が、やはり馬鹿らしくなる。自嘲気味な笑みを浮かべて、窓の外を見た。

なにか、ぼやけたような、それでもなんだか剣のような形をした何か。二本窓の外に浮かんでいた。

(……ん？　とうとう目が腐ったか？)

目をこすり、何度か瞬きをした後、もう一度窓の外を見る。するとそこには、何もなかった。

(やっぱり、錯覚か。けど、どんな錯覚だよ。剣の錯覚とか、なにをどうやったら、見えるっていうんだ？)

不思議に思ったまま、食い入るように窓の外を眺めていると、

「おい、篠崎。貴様、私の授業をよそ見とはいいい度胸だな」

「やばい!? と篠崎は心の中で叫ぶ。そう言えば4時限目は我が担任竹原センセの授業、ホームルームだったと今になって思い出す。

そんな篠崎を見て竹原センセは、

「見せてやろう。素人で夜式よんしきを使わせたのはお前が初めてだ」

そう言いながら、竹原センセ自慢の竹刀を取り出す。竹原センセは風貌に似合わず、いつも竹刀を持ち歩いているということでも有名だったりする。

篠崎は、一日に二回もいやあつ!? と心の中で泣き叫びながら、無理だろうと分かっている言いわけをするために、

「竹原センセ」

「問答無用。竹原一本流夜式、罪罰」

「ヒギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?」

この日、竹原センセに夜式を使わせたという伝説が、騎之塚学園の新たな歴史のページに篠崎の叫びとともに刻まれた。

〓 〓 〓

「これで今学期最後の授業、いや、ホームルームを終わる。無茶をしない程度に夏休みを存分に楽しめ。あと、大掃除もきちんとするように。以上だ」

竹原センセの予想とは違った堅苦しく無く、それでいて生徒に抜群の効果をもたらす一言を残し、ホームルームを終える。

「起立、気をつけ」

学級委員長の波風が今学期最後のあいさつをする。凜として透き通った声だ。

「礼」

『ありがとうございました』

竹原センセが職員室に戻り、クラスの中は一気に沸き上がる。

「よっしやああああ!! この夏こそは彼女つくるぞ!」

「はは! おつと電話」

「お、おいおい。みなちゃん? つて誰だよ……まさかツ!？」

「へへ! お先」

「テメエらア! 裏切り者一名発見したぞおおおおお!!」

と、夏休み前から飛ばしまくる生徒多数。そして、その裏切り者の最後は誰も知らない。

「なあ、西沢。お前、みんなで行くとか言ってたけど、誰と行くんだ?」

「お前と俺。俺は波風を誘ってるぞ?」

そんな爆弾発言を、やはり突拍子なく当たり前といった表情で言い放つ西沢。それを聞いて篠崎の額に黒い線が何本も生まれ、両手両膝を地面に着き、打ちひしがれる。

「……は、はは。あれか、嘘だと言ってくれないあたり、ホントらしいな」

「何勘違いしてんだ? 別にそんなんじゃないよ。クラスの奴のこの遊び、もとい調査のことを話してたらいきなり横から『学校に不法侵入? そんなことしちゃダメ!』って言ってきて、まあ、俺がこねるわけだ」

「まあ、お前が口で誰かに負けたところは見たことないわけだな」

「それで俺がお前に今さっき話した仮説、失踪者のことを話したら『それなら、私もついて行くわ。学校の治安維持のために』ってなことになったわけだ」

この学園の正義感の強さは、現状のところツートップだと篠崎は判断している。それは幼馴染の白神と学級委員長の波風。2組の波風、3組の白神と呼ばれている（篠崎だけ）。

「じゃあ、3人で行くのか?」

「おいおい、むさい男2人に美女1名じゃあ、なんだかへんなことするみたいじゃねえか。だから、後一人。お前誰か誘え」

その思考に至る時点でお前は変態だ、と心の中でツッコミをいれた後、篠崎は悩む。

(女子の知り合いつていうと、相沢さん、波風、服部、その他色々あと)

あと、真、と付け加える。

その後篠崎は、うがアッ!! と頭を抱える。

(え? なんで真が思い浮かんだかな。そりゃ、一番親しい女子つつつたらあいつだけど、僕的には相沢さんでもよかったはず! つていうか、相沢さん一筋!)

そんなことを心の中で叫びながらも、やはり白神のことが頭から離れない篠崎。

10秒ほど深く悩んだ後、

「……真で、いいかな」

渋々ながら、なぜか白神のことを選んでしまった自分が分からない篠崎。頭上に疑問符を浮かべながら頭を捻っていると、

「……お前、人のこと言えねーよな」

西沢が意味の分からないことを言ってきた。

「人のこと言えねーって、なにが?」

「気づいてねーんなら、まあそれもいいんだろつぜ。おら、今日お前売店でメシ買ったろ? 一緒に行こうぜ?」

そう言いながら席から立ち上がる西沢。

「? お、おう」

篠崎はそれを不思議に思いながらも、西沢について行くしかなかった。

|| || || ||

篠崎のクラスは2階にある。そこから篠崎と西沢は少し急ぎ足で売店へと向かった。騎之塚学園の学食ランキングは全国でもトップクラスに跳ね上がった。今まで弁当持参組だった生徒も先生も、学

食に変えたぐらいである。

その理由はもちろん美味しさにもあるが、なんといっても学食ならではのリーズナブルなお値段。どんなに高くても一品300円という、育ち盛りのむさい野郎共から、小遣いが乏しくなってきた女子たちまで、大人気である。

しかし、篠崎はいちいち並んだりするのは面倒だと言う理由から弁当にしていたのだが、興味が無いわけではなかった。

「知ってるか？　ここに転勤してきた三ツ星レストランのシェフっつーのは、一昨年同じ時期に転勤してきた竹原センセの実家が経営するレストランのシェフで、竹原センセについてきたって噂なんだけ？」

「へー。なら、竹原センセにありがとーの一つでも言わなきゃな」

「天使と悪魔が同居した鬼教師だけどな」

「性格がねちねちしてないだけマシだろ」

「だな」

西沢の新たな情報に耳を傾けながら、篠崎の思考は昼食よりも、この後どうやって白神をお遊び、もとい調査に誘うかの方に傾いていた。

普通に考えて、幼馴染の立場を利用すれば造作もないことだが、意識すればするほど、刺そうと言う行為がなんだかむず痒く感じる。さらに誘ったとしても、口内不法侵入などに付き合ってくれるかどうかなど分かったもんじゃない。

（あゝ、鬱だ。今日は家に帰って無くなった体力を補充したかったのに）

そんなことしなくても、帰宅部の篠崎は夏休み中することもなく、体力は今のうちに削れるだけ削っておいた方が自分の為だが。

そんなことに思考をまわしていると、漸く篠崎達は売店および食堂についた。

そこは、人が蠢く、暑苦しい夏には最悪な、地獄だった。空調が効いているとはいえ、この数の人間がひしめき合っているとあまり

意味がない。

「……西沢。毎日こんなところにパンを買いに来てるお前を、僕は大変尊敬します」

「はっはっは！ そうだそうだ。崇めよ！ 讃えよ！ 敬いやがれ！」

そうして篠崎達は、暑苦しい人混みと言う名の地獄へ、一歩足を踏み出した。

「やっぱり、今日は厄日だ」

人ごみに巻き込まれ少し歪な形になったカレーパンと、あの長方形の形があまり残っていないオレンジジュースの入った紙パックを両手で抱えたまま、篠崎と西沢は座る場所を探す。

篠崎としてはこんなところで座る場所を探すよりクラスに戻って食べた方が快適だし手っ取り早いと思うが、別にいいかと思いい西沢の後ろをついて行く。

西沢の手元には、流石毎日通っているだけのことはあるのだろう。形の崩れていない焼きそばパンと250ミリリットル用の牛乳パックが抱えられている。若干凄いと思ってしまうた自分を恥ずかしく思う篠崎だった。

「ん？ お、丁度いい奴らを発見したぞ友」

「丁度いい？」

西沢が視線を向ける先には、こんなむさ苦しいところでも凜と咲く花の様な二人の女子が目に入った。一人は篠崎の母親と同じような艶のある黒髪を長く伸ばし腰のところで折り返して結んでいる波風 春風。もう一人は、日本人離れた純白の髪と、血のように紅い瞳を持った白神 真だった。この学園の『正義の味方』ツートップ。篠崎には恐れ多い組み合わせだった。

「ナンパ、もとい今日の夜のことについて今のうちに話しあっておこうぜ」

そう言っただけでなく二人の座る円形のテーブルの方へと歩いて行ってしまふ西沢。篠崎はそれを追いかける形となった。

「おっす波風」

「あら、西沢。どうしたの？」

「今夜のことについて話し合っておこうと思ってな」

そんな高嶺の花とやっぱりいつもの調子で話せる西沢のことを悔しく思いながら、波風の隣に座っている白神に視線を向ける篠崎。

目が合う。

「よ、よお。真」

「変態友さんこんにちは」

グハアッ!? と心の中で吐血する篠崎。白神ともう一度目を合わせる、頬を真っ赤にして顔をそむけられてしまった篠崎。

「まっでおくれよ真様! あれは不可抗力だ、無意識だ、不慮の事故なんだああ!」

一人、三人の前で頭を抱えてシャウトしていると、

「いいから座れよ」

「落ち着いて座りなさい」

「さっさと座れば変態」

篠崎はいそいそと「あい……」と呟いて席に着いた。丁度四人がけの円形テーブルだったらしく、波風と向かい合わせ、白神と西沢の間と言う形になった。

「で? 西沢。今夜のことってなに?」

波風が真剣な面持ちで尋ねる。篠崎や西沢にとってはお遊びでも、波風にとっては大切な学園の生徒が失踪するかどうかという重大なことなのだろう。

「いや、どうやって忍び込むかをだな……」

そう言っただけで二人で話し合い始めた西沢と波風。

ちらっと、白神の方を窺って見ると、

「むっすううう」

神様が頬を膨らませて怒っていらっしやっただ、このことは篠崎談

だ。

「あ、あの、マコトサン？」

恐る恐る機嫌を窺うように声をかける篠崎。

「なにか、何か言うことはないの？ アンタ、もしか本当に何も感じてないとか言わないでしょうね？」

「そ、そんなことはありません！ なんだか幸せな感触を手一杯にブベエツ！？」

「説明するな変態！」

そんな理不尽なっ！！ とやはり心の中で地面に頭を打ち付ける篠崎。

「で？」

「すみませんでしたア！！」

ガンツ！！ と木製のテーブルに頭を打ち付けて謝る篠崎。それを見て白神は一回ため息をつき、

「仕方無いわね。許す」

「真サマア！！」

一連のコントを終えた後、白神は篠崎に尋ねる。

「今夜のことってなに？」

「ギクリ」

「なに？ 今、変な擬音が聞こえた気がしたんだけど」

「き、気のせいなんですのよ〜」

篠崎は擬音のことは隠しつつ、そういえば自分は白神を誘わなければならなかったということを出した。

5秒ほど心の中で唸ったあと、心を決めて、

「なあ、今夜、学校にお遊び、もとい学園七不思議の調査に行かないか？」

（あれ？ 返事が返って来ない？）

篠崎は了承も断りもないことを不思議に思い、頼んだ時俯いた顔をゆっくりと上げ、白神の顔を見る。

白神の顔は、貧血みたいに今にも倒れそうなほど真っ青な顔になっていた。

「ど、どうしたんだ？ 大丈夫か真？」

蒼白になってしまった白神の顔を覗き込むと「だ、大丈夫よ」と、いつもより弱々しい返事が返ってきた。そんな返事がますます篠崎を困惑させる。

「友、アンタも行くの？」

「まあ、暇な夏休みの思い出になりそうだし、一応は……」

「そう……」

そういつて白神は顔をうつむかせて考え込んでしまう。その眼すらも、いつもの様な猛々しさはない。血のように紅い瞳からは、本当に血の涙が出てきそうなほどに。

篠崎が白神の方を心配そうに見つめていると、ぱっ！ と顔を上げる。

「行くわ。一緒に行く」

なんだか、一世一代の賭けに出たような決心が込められた瞳でそんなことを言う白神。しかし、よくよく考えてみればいつもそんな感じか、と篠崎は安心する。

「よかった。で？ 七不思議のこと知ってる？」

「知らないほうが馬鹿でしょ」

「……………」

よかった、いつも通りだ、と思いながらも、なんだかすごく痛いことを言われたような気がする篠崎。ちょっとだけ沈黙してしまう。「で？ その七不思議がどうしたのよ」

話の先を促すようにいう白神。

「いや、西沢が言うにはさ」

西沢が言ったことを、所々カットしながら、それでも要点だけはきちんと分かるような形で白神に教える篠崎。それを彼女はまった

く表情を変えずに最後まで聴いていた。そう、真剣な表情のまま。

「　　っていうわけでき、嘘っぱいけど楽しそうじゃん」

「……………そうね」

「?????」

やはり今日の白神はおかしい。そう思いながらも、これが朝のこの所為だつたらと思うと、迂闊に聞くことはできない。篠崎に眠った赤子を起こして苦勞するようなマゾな一面はなかった。

「ん？　説明できたっばいな？」

「ああ」

西沢が見計らったかのように声をかけてくる。渡りに船とはこのことだろうか？　と久しぶりに西沢に感謝をする。

「俺と波風の学校侵入計画はこうだ」

西沢が言うには、午後11時になると警備員も見回りを終了し、宿直の先生もそのころには寝てしまふとのことだ。そしてその先生の操作で学校全体の鍵が閉められるということらしい。

ならば手詰まりじゃないかと、篠崎は思ったが、話を聞くと1階のそれもこの食堂の窓の部分に馬鹿な生徒がガムを詰まらせてその1点だけは操作が効かず、1日中開きっぱなしとのことらしい。

篠崎は「どこからそんな情報手に入れたんだ？と西沢に聞くと「企業秘密だ」とのことらしかった。

見つければ、即竹原センセの元に送還されるであろう計画に、篠崎は戦々恐々としながら過剰に分泌される唾を飲み込む。

波風も「生徒の安全がかかっているし」と、苦々しい顔をしながらその計画に乗っているようだった。

白神の方を窺うと、やはりいつものような覇気はなく、どこことなく弱々しく感じた。

その時、昼食および昼休みを終了する『キーンコーンカーンコーン』という聞きなれたチャイムの音が学校に響き渡る。

「やっべー？　まだ食ってねーじゃん」

「急げ！！　飯くわねーと1時間ももたねえぞ！！」

女子二人が呆れた顔でパンを貪り食いだす男子を眺めている。
その視線に耐えつつも、見事完食し、馬鹿でかい校庭へと向かった4人。

|| || || ||

「厄日っていうのは、やっぱり何やっても厄日なんだなと、改めて認識したよ」

急いでパンとオレンジジュースを流し込んだせいか、それとも朝、アスファルトの上でマラソンをしたことが原因か、どちらにせよ体調が万全でない状態で炎天下の元1時間の作業（篠崎は草むしりになった）に耐え切れず、篠崎は意識を失い保健室で目を覚ました。

熱中症か日射病かと大騒ぎになりかけたが、保険医の渡辺先生（女）の「体力が底をついただけね」という冷静な判断により、救急車を呼ばずに済んだ。

今は涼しいクーラーの元、失った体力を取り戻すべく目を瞑っている状態だ。

「篠崎君。今日は竹原センセに2度も業を決められたり、倒れたり、と、ホント厄日ね？」

そう言うのは保険医の渡辺先生。深い栗色の髪がふわふわと背中まで伸びていて、髪と同じ色の瞳には細淵の眼鏡がかけられている。特筆すべき点は、学校教諭らしからぬスタイルの持ち主だと言うことだろうか。休み時間には男子生徒が入り浸ると言う、本当に学校教諭らしからぬ女性である。

「あ~~~~~。だるい」

「あら？　もしかして昨日女の子と激しい運動でも」

「シャラップ！」

「あらら？　でも、先生は保険医だからそういう相談にも乗ってあげられるのだけれど？」

「できるできないではなく、しないでください。お願いします」

「そ」

そう言うつと渡辺先生は向こうに行ってしまつ。ふるんぷるんと言
う擬音が聞こえてきそうな肢体を揺らしながら。

今一度、篠崎は天井を見上げる。

そして一言、

「知らない天井だ」

人生で一度は言ってみたい言葉ベスト10の8位ぐらいの言葉を
言ってみた。

大掃除が終わるころには万全の状態、とは言えないが普通の体調
に戻れたことを確認し、保健室のベッドから体を起こす。

ガチャリ、と言う音とともに誰かが入ってきたらしい。ドアの方
で渡辺先生と何かを話し合っている。

「……じょうぶなんですか？」

「ええ。だ……ぶよ」

そんな会話を聞きながら、この声の主にあたりがついた。

(真？ 保健室になんか来て、どうしたんだ？)

白神も気分が悪くなつたのかと思ひ、そのまま耳を澄ましている
と、シャツ！！と目の前を仕切っていたカーテンが開かれる。

「あら。盗み聞きはよくないわ篠崎君」

「は、はは………」

そこから出てきたのは大きな幸せが詰まつた塊を二つも胸に持つ
渡辺先生だった。丁度見上げる形となり、その幸せの大きさが改め
て分かる。

「変態……」

「ま、真」

その後ろでは頬を赤らめて両腕で胸を隠す白神の姿があった。

(い、いや！ 貧乳にも需要は！？ ……自分で考えてて自己嫌悪
した)

うがアッ！！ と心の中で鬱憤を晴らしながら、篠崎は先生に尋ねる。

「先生。真はどうしてここに？」

「それはもちろん。篠崎君をしんぱ」

「うっがあああああアアアアアアッ！！」

「のわッ!？」

いきなり叫び声を上げた白神。それに篠崎は思いつきり後ろに倒れ込む。

「い、いきなりどうしたんだよ真。ついにこの暑さで頭がやられたか？ そうなのか真!？」

「……友が馬鹿でよかった」

「馬鹿とは失礼な!!」

とりあえず篠崎は馬鹿だった。この上なく、一男子高校生としては考えられないほどに馬鹿だった。西沢あたりなら「馬鹿と書いて幸せと読むんですね分かります」みたいなことを言うのかもしれない。

「ん。元気そうね。もう帰ってもいいわよ」

渡辺先生は妖艶な笑みを浮かべた後、篠崎達をおいてどこかに行ってしまった。

えも知れない、微妙な沈黙が二人を包み込む。

「……帰るか。真」

「……うん」

微妙だが、とても心地のいい雰囲気のまま、家路へとついた。

第二話・The bad day …… (後書き)

感想・批判・指摘、お待ちしております

第三話・Moreover Friend (前書き)

物語のターニングポイントです。

第三話・Moreover Friend

暑さも和らいだ、工事をしたばかりの黒いアスファルトの上を篠崎達はゆっくり帰った。

白神が言うには午後11時に学校前に集合とのことらしい。その顔はやけに痛々しくて儂い感じがして、篠崎は不思議を通り越して不審に思う。

(どうしたんだろう？ まさか、真はすでに体験済みとかだったり) そんなことを思いながら今夜のことを白神と話しながら黒いアスファルトの上を歩く。和らいだと言っても、まだまだ暑い。額に汗がにじむ。

そうこうしている内に、いつの間にか家に着いたようだった。

家へ入ろうとお互いに背を向け、家へ入る寸前に後ろを振り返る。

篠崎の黒い瞳と、白神の紅い瞳が交差した。

学校が早く終わったためにまだ夕日になっていない。明る過ぎる

陽光が二人を照らし、一瞬にも永遠にも思える時間を脚色する。

「また、後でな？」

「うん」

そう言って視線を逸らし、自宅の玄関へと歩を進めた。

(あー、どうやってお母さんに言いわけしよう?)

そんなことを思いながら、篠崎はドアノブへと手をかけた。

そして、

「ただいま」

夜になり、日光が照らさなくなる。真夏の夜は遅く、7時後半にならなければ太陽はその姿を消さない。しかし、太陽がその姿を消した後も地球を焼いた余熱で、暑さが残るのは仕方無いことだが、もう少し手加減してもいいんじゃないかと思う篠崎だった。

夜と言つと夜ご飯だ。

朝、母である稟と切羽詰まったコントをした台所で向かい合つてご飯を食べる。

テレビには芸能人が篠崎よりもキレのあるツッコミをしながら、観客を沸かせていた。

そんな折、篠崎は今夜のことについて凜に切りだす。

「あら？ 肝試し？」

「うん。今日の夜11時に学校でやるんだ」

「楽しんでくるのよ？」

内心、篠崎はこんなにも簡単に了承してくれるとは思わず、若干拍子抜けに思った。しかし、篠崎としては面倒な言い訳をしなくてすんでラッキーと思っていた。

だが、息子としては、息子が夜に遊びに行くのだから少しぐらいは心配してほしかったとも思う。

「あら？ もしかしてお母さんに心配とかされたかつたりしたかつたのかしら？ あらまあ。けど、お母さんは結構放任主義者だったりするのよ？」

「いや、少しぐらいは心配しようよ……」

そんな篠崎の願い空しく、凜の視線はテレビに向かった。「ほら、ツッコミ役をしたいならあれぐらいじゃなきゃね？」などと言ってくる様は、篠崎の毒気を完全に抜いた。

「で？ 誰と行くの？」

唐突にそんなことを聞く稟。篠崎は少しだけ言い淀んで、

「西沢と、波風。あと、真だよ」

なんで自分は白神のことを強調して言っているんだろうと不思議に思いながらも、凜に嘘をつかずに言う。

それを聞いた凜は「あらあら」とからかうように微笑し、

「子作りは、高校卒業した後にしてね？」

「ぶぼっ！？」

口に含んだ麦茶と喉を少しだけ焼いた胃液を吹く篠崎。なんとか

横を向けたので、晩御飯は無事なようだった。

わなわなと肩を震わせながら凧を見る篠崎。凧は凧で「あらまあ。何か口に合わないものでもあった？」などと今さっきのことはなかったことかのように平然としている。

「……母さん、僕と真はそういうのじゃ」

「中学校に入るまで毎年夏祭りに一緒に行ったりしてたのにねえ。それに、たしかファーストキスの相手も……」

「うにゃああああああつ!？」

これ以上は言わせないと篠崎は奇声を発する。

しかし、凧はそれに構うことなく、

「『ぼく、まことちゃんとけっこんするんだっ!』とか私のことを見上げながら言ってた頃が懐かしいわ」

「僕の黒歴史を赤裸々に暴いてどうするつもりなのですか!？」

篠崎は箸を持ったまま、のおおっ!! と頭を抱えて叫ぶ。

凧にとってはこれはまだ序の口。入門編もいいところの息子をかからかう方法の一つだ。これぐらいはやめると言ってもしている感覚がないのでやめられない。無邪気と言うのは恐ろしいものだ。

「まあ、明日から夏休みだから、一杯思い出作りなさい?」

そう言いながら今日の看板メニューである『里芋の煮つ転がし』を口に運ぶ凧。「あらやだ。自分で言うのもなんだけど美味しいわね」と言いながらパクパクと食べる。

「……はい」

そう言っつて、篠崎も母親特製『里芋の煮つ転がし』を口に運んだ。その味は確かに、美味しかった。

|| || || ||

午後10時25分。この時間帯になると隣家からどこかで飲んできたのか「かえったよ〜〜」という間抜けな男性な声が聞こえる。

世間一般的にいえば当たり前とは言わないものの、別段珍しくも

ない風景だろう。しかし、物心がついたころにはすでに父親を亡くしていた篠崎にとつては、なんだか羨ましいものを感じる。

そんなことを思いながらも、夜の学校へ向かう準備をする。

篠崎はこう見えても結構心配性で、こういうことに行くときは万全とはいえないが安心できるような準備はする。

「懐中電灯に、携帯電話。あと、カロリーメイト。ジュースも持っていていった方がいいかな？　そして去年から取っておいた花火たちを！　ライターライター……」

などと言いながら、リュックサックに詰め込んでいく。懐中電灯と携帯電話までなら分かるが、後半のものはどこに行くつもりだお前と質問したくなるような物品である。

「備えあれば憂いなし。転ばぬ先の杖。石橋を叩いて渡る。うん、いい言葉だ」

しかし、どれもこれも、篠崎自身が何かに巻き込まれた時面倒なことにならないためなのだ。篠崎がこんな準備をやっても、大抵の場合空回りである。無駄手間と言う形で、こちらの方が面倒なことの気がする。

「さて、と。そろそろ行かなきゃ、また走るはめになる」

それだけは勘弁したいな、と呟きながらドアに向かう。

ふと、彼の視線に淡い光が飛び込んできた。

向こう隣の白神の部屋だ。白神も何かを準備しているのか、カーテンで閉じられているがその影が部屋をあっちへこっちへ動きまわっているのが分かる。

その時、一層強い光に変わった。白神がカーテンを開けたのだらう。

まだ着替えていなかったのか、騎之塚学園の制服を着たままだ。昼の大掃除で汗まみれのはずだが、気持ち悪くないんだろうか？　と思いながら、その動向を見つめる。

もしかして、学校に来る時は制服で、という校則を律儀にも守るつもりなのだろうか？　とも思いながら、やはり白神の行動から目

を離せない彼、篠崎。

その時、白神がブレザーを脱ぎ捨てた。その下からはやけに大人っぽい黒のブラジャーがその姿をのぞかせた。

(のっわっ!?)

思い切りのけぞりながら、しかしそれでも白神から目を離せない篠崎。これを男の本能ともいう。

その格好のままタンスの方へ歩いていき、下着を選び出す。なんだかやけに真剣な顔つきなのは気のせいだろうか？ 一歩間違えれば死ぬ、時限爆弾解除コードを入力する警察官の様な顔つきだ。

これじゃないこれじゃない、とそこら辺に散乱した下着。そこで手に取ったのが、白神の瞳と同じような血のように紅い下着。

(馬鹿なっ!?! 真、なんであんな大胆な下着を!?!)

そういつつも、罪悪感がわきながらも、やはり視線が外せないというより、視線を外したら負けと言ってしまうような変な感情が芽生え始めた篠崎。そう、男としてここで逸らしたら負けである。

白神はそんなことは露知らず、その紅い下着を握りしめ、少し唸った後、決心したかのように前のめりになる。

(まさかっ!?!)

白神はそのまま背中の中のホックへと手を伸ばす。まだつけ始めて間もないのか、手間取っている姿さえも扇情的に映る。

これ以上はいけないと思いつつも、目は外せない。男の悲しい性さがである。

そのとき、不意に白神の顔がこちらを見た。

篠崎の黒い瞳と、白神の紅い瞳が交差した。

(あ、やば)

そう思ったが早いか、篠崎が目を外すよりも早く白神の顔が真っ赤に染まる。

篠崎は「ち、違うんだ! こ、これは僕ではなく僕の本能が勝手に!」などと言っているが、どのぐらいの距離が開いていると思っっているのだろうか？ そんな篠崎の声は無残にも白神の耳には届き

はしない。届いたところで何かが変わるのかと聞かれれば、変わら
ないと答えるしかない。

ぴしゃりっ！！ と聞こえないはずの音が聞こえた気がする篠崎。
カーテンとともに心のカーテンまでも閉められたようで不安にから
れる。

「……今、何時だ？」

朝から数えて何回目になるか分からないが、目覚まし時計を見る。
時計の針は10時30分を指していた。

「……行こう」

もう、やけくそな気持ちのまま、自分の部屋を出た。

玄関まで行くとそこでは母の凜が待っていた。その目もとは心配
した様子もなくいつも通りニコニコした表情で篠崎を見つめていた。

篠崎は白を基調とした運動靴に足を通すと、一旦振り返って、

「じゃあ、いつてきます」

「はい、いつてらっしゃい」

幼稚園のころからもう数えるのも馬鹿らしくなるほどのあいさつ
を交わす。小さい頃は、曖昧ながらも父と一緒に出かけていたのを
覚えている。そう思うと、一抹の寂しさを覚えるが、玄関のドアノ
ブに手をかけた。

ガチャッ！！ と言う音が向こう側からも聞こえる。

「「あ」」

二人の目が合い、気まずい雰囲気になる。

しかし、このまま玄関の先で固まっているわけにもいかず、一歩
外へ踏み出しドアを閉める二人。

「……変態。許すのは今回だけって言わなかったっけ？」

こめかみあたりをピクピクと震わせながら篠崎に尋問する白神。

避けられない運命なのっ！！ と篠崎は声に出すわけにはい
かない叫びを心と言う無限の広さを持つグラウンドの真ん中で叫ぶ。

「ほ、本当にすみませんでした！！ いや、あんまりにも予想外の
下着だったからベボアツ!?!」

「この友^{ヘンタイ}!!」

白神のスーパーキックが炸裂し、一日に二度の空中浮遊を体感することになった篠崎。頂点まで上がると、そのまま重力に任せて自由落下した。グシャアツ!! という生々しい音が耳に残る。

パパツと立ち上がると、

「今、友と書いてヘンタイと読んだら!!」

「変態に変態っていつて何が悪いのよ、このクサレ変態!!」

「いや、それはハゲてる人に対してハゲっていうくらい失礼だと思
うけど」

「ふんっ!!」

両腕を胸の前で組んでそっぽを向いてしまう白神。

そう言えば、白神が制服から着替えていないということに改めて
気がついた。そして、その背中には学校指定の通学靴ではなく黒色
のリュックサックが背負われていた。

「お前、何で着替えてないの?」

「着替えたわよ。アタシは代えの制服持つてんのよ」

「なんだか怒ったような声で篠崎に言う彼女。実際むすっ! とし
た表情のままだ。」

「と、とりあえず、遅れるといけないから行こう?」

「うっさいわね、分かってるわよ!!」

「そう言うつと、ダツ!! と走りだしてしまっ。篠崎がぎりぎり追
いかけられるぐらいの速度で。」

(また、マラソンかよ……)

倒れないだろうな? と不安に思いつつも、夏特有のじめつとし
た外気に身を晒し、静寂の夜道へと走りだした。

|| ||

|| ||

学園のへ一本道を走りながら、なんとか白神の機嫌を治そうと奮闘した結果、篠崎は体力と精神力の代わりに白神の機嫌を獲得した。「本当に今回だけだからね？ 次、へんなことしたら……」

そう言っつて、ギリッ！！ と拳を握りしめる白神。篠崎はそれを見て、ヒッ！？ と情けない声を上げる。

他人から見たら何と情けないことか、と思われるかもしれない。しかし、篠崎は知っている。白神の本気の右ストレートは、人を死に追い込むことが可能なくらい強力だと言っつてことを。

小学校のころ、近くだったこともあり、白神の父が亡くなっているということもあり、篠崎家と白神家は親密と言えるほどに仲がいい。そして、時々家族ぐるみで遊びに行くこともあった。そんなある日、ゲームセンターに白神家とともにいった時、

『見ててね、ともくん！！』

そう言っつてパンチングマシンへと足を進め、身長が足りなかったために台座を用意し、それに白神が乗った。

そして、小さな体全身を使って振り抜いたその拳は、人のシルエツトだった測定器の皮を破き、フェルトを飛び散らせた。そしてその測定器の柱の部分をポツキリとやった。

その時はその機械が痛んでいたと言っつたことになったが、篠崎は知っている。白神のその測定結果がERROR表示だったということを知った。

なので、篠崎が恐怖に震えるのも無理はないということだ。

「しませんです！！」

「分かればいいのよ」

そうこうしている内に、月明かりに照らされて気味の悪い白い校舎、篠崎達が通う騎之塚学園へ到着した。

いつもは竹原センセが竹刀を構えて仁王立ちをしているところに、一組の男女の姿が見えた。

「お、今回は遅刻しなかったな」

「なんで男子は制服じゃないのよ……」

私服に着替えた西沢と、白神と同じように騎之塚学園の制服を着た波風の姿が在った。

「ようし!!! いっちょういきますか」

まだ11時になっていないのだが、西沢の「いいじゃんいいじゃん」と言う言葉に流され、行動を開始することになった。

門の中へと入ることは容易い。鉄柵のようなトゲトゲで痛々しい感じの防犯装置は取り付けられていないので、1mほどの門をひよいと飛び越える。

波風は最後まで学校の校則を破ることをためらっていたが、「生徒の為よ。行くのよ私!」という掛け声とともに華麗に門を飛び越えた。

飛び越えた瞬間、篠崎の体を奇妙な感覚が襲う。

(なんか、奇妙な感じがする)

形容するとすれば、奇妙としか言い表せられないような感覚。その感覚が体全体を舐めまわすような感じで這いまわる。

男としては、別にあまり気にしないような感覚。しかし、白神や波風と言った女子、それも美少女と言われるような女性にとっては、感じたことのある感覚だ。というより、毎日のように感じている。

「誰かに、見られてる?」

波風がそんなことを言う。目の前で隠すつもりもないようにジロジロと見つめられているかのような感覚だ。

「ねえ、白神さん。これは……」

「気にしない気にしない。ほら、最初の不思議に行くわよ」

そう言うのと、別に気にした様子もなく、まるで当たり前かのように、そのまま走りだす白神。

「最初っていうと、『おんぶさん』か?」

篠崎が西沢に確認する。

「ああ。この校庭を歩いていると、男とも女とも分からないようなナニかをおんぶしてるって言う奴だ。それで、1分ほどたつと『お前じゃない』って言って消えるって奴だ」

いきなりの奇怪な現象にたじろぐ一同。しかし、その中で白神だけは毅然とした態度で、

「いいから、歩くわよ」

そう言つて、月明かりに照らされた校庭をゆっくりと歩き出した。他の3人はそれについて行く形で、その後を歩く。

篠崎は相変わらずの白神のリーダーシップに感心していたが、一つ不思議に思うところがあった。

（なんで、あんなに平然としていられるんだろうか？）

白神はこういった奇妙な現象を前にして冷静にいられるほどクールではない。中学のころ初めて行ったお化け屋敷では、一緒に入った篠崎に抱きついて喚いたぐらいだ。しかし、2度目からそれほどでもなく、恐れるどころか篠崎が恐ろしくなるほどに係員の脅かしに冷静だった。

そう。今回の白神のように。

そんなことを考えながらも、篠崎は月明かりで薄く照らされ浮かび上がる校庭を、延々と歩き続けた。

ずん。背中になんかが乗つかるような違和感。

恐る恐る、その背中 of 違和感へと、自らの瞳を向ける。

そこには、髪が生えおらず、まるで襦袢衣の様なものはおつた、男とも女ともわからない小さなナニかがいた。

思わず、恐怖で叫び声を上げようとする。しかし、そこで敷地内には行つた時とはまた違つた奇妙な感覚に襲われる。

（歩く以外、何もできない！？）

まるで体が勝手に動いているかのように、右足を出せば左手、左足を出せば右手といったように、機械的にその動作が繰り返されるだけだ。

声を出そうとしても、喉のところまで声が届き、立ち止まろうとしても強制的に動きだし、逆に走ろうとしても一定の速度を保つ。前を歩く3人にこの異常を知らせることすらできない。

怖い。恐怖で全てが埋め尽くされそうになる。

しかし、一分もすればこれからも解放される。その思いだけを望みとし、恐怖に耐え続けた。

『ふん。お前じゃ』

待てよ、と篠崎は思う。

自分の存在は、こんなちっぽけな存在に否定されると言うのだからか？

自分の存在は、こんな訳も分からない奴に否定されると言うのだろうか？

違うはずだ。

(……………ツタレ)

『なッ！？』

篠崎の腕に、足に、喉に、自由が取り戻されていく。

(……………クソツタレ)

篠崎の思考が、恐怖から、怒りに変わって行く。

『ば、馬鹿な！？ この術式を途中から撥ね退けるなど、あの娘でも出来るかどう』

「舐めてんじゃねぞクソツタレがアアアアアあああああああああああああッ！！」

何かを呟く男か女か分からないナニかの毛も生えていない頭を握る。

その時、たしかにそのナニかは言った。

『……………二人目。お前だ』

そのまま怒りにまかせて篠崎は、男か女か分からないナニかを校庭へと叩きつけた。

おぞましいその姿は、叩きつけられた瞬間塵のように消え去った。

「はッ、はッ、はッ！？」

「ど、どうしたんだ友！？」

息を乱す篠崎に気がついたのか、西沢が後ろを歩いていた篠崎に駆け寄る。

「どうしたって、お前。今、僕の背中にナニかがいて、僕、叫んだ

だろう?」

何でもうちよつと早く気付かなかつたんだ、と少し八つ当たりをしたくなる篠崎。

しかし、西沢や波風、一番近くを歩いていた白神でさえも、

「叫び声?」

「篠崎、どうかしたのか?」

「……友?」

そんな篠崎を奇異の目線で見ていた。

「いや、今、背中に、男か女か分からないような奴が!」

「……………マジか」

西沢がそのことを聞いて若干顔を青ざめる。波風も白神も。特に白神は酷く、忌々しげに空を睨んでいる。

しかし、西沢持ち前の好奇心をフル活動させて「つ、次行くぞ次」とそそくさと歩いて行ってしまふ。篠崎達としてもここまで来て引き下がれるわけなく、西沢を追いかけた。

「真?」

忌々しげに空を睨みつけたままの白神。月明かりに照らされた白髪は神秘的な銀系のようで、見つめる血のように紅い瞳はルビーの如く輝いている。

「どうしたの?」

「……行くわよ」

「ちよ、待ってよ」

先に走って行ってしまった白神。それを追いかけてようと駆け足になりかけ、歩を止めた。

そして、後ろを振り返り、今さっき男か女か分からないナニかを叩きつけた場所を見た。

「……一体、何なんだよチクシヨウ」

そう忌々しげに告げて、篠崎は白神のあとを追った。

〓

〓

「いや、見事にあれからあたりが無かったな」

「……ああ」

あれから午前0時の『選定の鏡』を後回しにして、それを計画の基準にして動いた。

計画通り売店および食堂から校内に侵入した4人は、まず最初に図書室へと向かった。図書室に1人していると理不尽な質問を投げかけてくる道化師ヒエロが出ると言う『笑う外道』。1人でいなければ意味がないということで、立案者である西沢を図書室に入れて、100メートルほど離れた場所で見守っていた（これを放置プレイもどき）。

10分ほどして行ってみると気絶した西沢がいて、まさか一番大切な人を答えなかつたのではないか、という騒ぎになりかけたが、途中でむくつと起き上がり「ひ、一人つてのは怖いのだ」と言うことで、あまりの恐怖に気絶しただけだった。

これをガセネタと判断した4人は、次に科学室に向かうことにした。そう、『策士の無理問答』を調査しに行ったのである。これは別段人数制限はないようだったので、4人全員で向かった。

科学室の鍵は何度か揺らすと外れる、と言う生徒たち共通の知識で開け、中に入った。

しかし、待てども待てども男など現れないので「やっぱり1人じゃないと現れないんじゃないかしら？」という波風の意見に賛同し、もう一度西沢を残そうとしたら「よ、よおし、次いこ」ということになった。

呆れ顔で4人はそろそろ午前0時になると思い、美術室へ、『選定の鏡』へと向かった。

美術室の向かって右から3番目の窓は鍵が閉まらず、年中開きっぱなしという生徒公共の理解を利用し侵入した。

中に入ると、ちょうど月を映すような形で置かれた姿見よりの鏡。美術部員が服の皺の付き方などを確認するために用いているらしい。

これも人数制限はなく、1人ずつ月光を浴びながら鏡に映った。しかし、結果はただの鏡ということになり、その場を後にした。

次に3人は5つめの『聖剣伝説』を探ろうと、学校中を探したが、剣が突き刺さっている塚などどこにもなく、20分も探し回ると諦めた。

次に進みたいところだが、『魔物の巣窟』は全ての不思議を斬り抜けたものには現れないらしいので、これ以上の調査は無意味だった。

今は、最初に篠崎が体験した『おんぶさん』が出現した場所、校庭のど真ん中を歩いているといったところだ。

既に時間は午前1時。これ以上は親に怪しまれると、3人は家路に就こうとしていた。

しかし、今さっきから、何かがおかしい、と篠崎は思う。

前に歩いているのはさっきから、西沢と波風。

後ろを歩くのは、後ろを歩くのは、後ろを歩くのは　　篠崎、ただ一人。

「ッ!?　おい!　真は、真はどこにいる!?!」

「は?　お前の右を歩いてって、いない!?!」

「白神さんが、消えた!?!」

思えば、おかしかった。

『聖剣伝説』を探ろうとしたときには、もうすでに3人だったはずだ。それなのに、篠崎達は白神がいなくなっているということに気づいているにも拘らず、それが異常だとは思わなかった。

「友!!!　白神の電話番号知ってつか!?!」

「ああ!!!」

高校入学とともに携帯を買ってもらった篠崎。同じ時期に買ってもらった白神とは幼馴染と言ったこともあってすぐにアドレスその他諸々を交換していた。

ポケットに手をつ込み黒い携帯を取り出す。それを急いで開き、アドレス帳から白神の名前を探す。

そして、発信。

P r r r r r r、P r r r r r r r という機械的な音が等間隔で深夜の学園の校庭に鳴り響く。

しかし、待てでも待てども、聞けども聞けども、着信するためのプツツと言っ音は聞こえてきやしない。

「なんでだよ、なんで。クソ！ 発信、発信発信発信発信！！」

キーを押しまくる。それでも、それでも思い届くことなく、断続的な機械音しか耳に入らない。

思わず、携帯を地面に投げ捨てようと振り上げたとき、プツツという音が耳に入った。

「真！！」

反射的に叫ぶ篠崎。深夜の校舎に反響し、木霊するその言葉。

『なによ、うっさい、わね』

電話の向こうでは苦しそうに息を切らす白神の声。よかった、とは思う。しかし、あの、あの白神が息を切らしている。そんな姿など見たことがない。

「大丈夫なのか！？」

『……ねえ？ 友、アタシのこと、どう思ってる？』

「どうって……」

息を切らしながら、ノイズが混ざった声でそんなことを受話器越しに聞いてくる。

どうかと聞かれたら、形容し難いものがある。

物心ついたときから一緒にいるのだ。言葉で顕せられるほど単純な付き合いはしていないと思う、が、その白神の弱々しい声に応えるべく、篠崎は声を上げた。

「大事に思ってる。……大切だと、思ってる！！」

『……ありがとう。友。もう、会えないかもだけど。こっつ、言わせてね？』

篠崎には意味が分からない。だけど、ここで肯定したりしたら、本当に、もう2度と会えないような不安に駆られて、

「ダメだ、ダメだ!! 言うな真!!」

その言葉を聞いて受話器の向こう側の気配が消える。

「おい、おい!?! ま」

そんな声を遮るように、

「
またね? 友」

少女の弱々しい声が聞こえた。少女の泣くむ声が聞こえた。

そして、今度は本当に、受話器の向こう側の気配が消えた。

その後、ザリ!! という砂の上に何かが落ちる音が受話器と自分達の後ろ側から聞こえる。

訳も分からないまま反射的に後ろを振り向くと、白神が使っていた白い携帯電話が、校庭のど真ん中で画面を光らせて落ちていた。

「真? 真、真オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!」

その日、白神 真は行方をくらませた。

3人の友人の前で。

第三話・Moreover Friend (後書き)

さあ、あと少しで本編が始まる。

踏ん張れ廻！！

諦めないで読者様！！

ご感想ご批判ご指摘、おまちしております

第四話：To expiate the crime (前書き)

さてはて第四話。

お気に入りに入れてくださった方ありがとうございます！！

そしてこのグダグダ続くミステリーに飽きそうな人、あと少しだけ我慢して下さい！！

まだあと少しだけこんな感じの学園ミステリー系が続いちゃいますが、それもあと少しだったりします。

篠崎 友は、戦いに赴く。

第四話：To expiate the crime

白神が消えた。

家に帰って、親に事情を話し、警察へと連絡した。

残されたものは最後に白神と会話した白い携帯電話のみ。それすらも、たいした証拠になるとは思えない。

ほぼ錯乱状態で家へ帰った篠崎は警察へ連絡した後も、自分の部屋へ引きこもり鍵を閉め、人との接触を避けた。

白神の母には凜が説明することとで、篠崎はそれに甘える形でじっとしていた。

これは、なんなのだろう？ と思う。

新手のドツキりだろうか？ と思う。

篠崎は、ただ部屋の隅でじっとしている。周りのものに当たり散らかしたい衝動に駆られながらも、そんなことはやっても意味がないと思ひ、じっと手に血が滲み出るほど我慢する。

その後、西沢と波風も一緒にいた。そして、親と一緒にあって説明した。

その後、凜に「親御さんが心配するから、今日は自分の家に帰りなさい」と言われ、とぼとぼと帰って行った。

今になってみれば、これは無様な結果だと思う。

篠崎があの時、白神ではなく相沢さんを選んでいれば、そもそも、こんなくだらないことに興味を惹かれなければ、こんな無様な結果にはならなかっただろう。

篠崎は、今、非常に後悔している。

自分があの時誘ったばかりに、白神 真が消えたことに。

篠崎は、今、非常に恐怖している。

自分という存在がいた所為で、白神 真が消えたことに。

喉の奥から、熱いものがこみ上げてくる。涙なんて綺麗なものじ

やない。

猛烈な嘔吐感が、篠崎を苛んだ。

それを彼は口の中に血が滲むほどに食いしぱり、なんとか我慢する。

「くそ、くそ、くそ、くそ……く、そオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

思い切り、自分で抱えていた自分の膝を殴りつける。

何度も。自分の拳が麻痺するほどに、自分の膝が動かなくなるほどに。

その時、そんな篠崎を止めるためかのように、ドアの外で、何度も聞いたことのある声が聞こえた。

「……友くん。真ちゃんのお母さんが、話をしたいんだって」「ッ!？」

少し考えてみれば分かることだ。

4人しかいない学園で、そのうちの1人が行方を消したのならば、残りの3人が怪しまれるのは、当たり前のことだ。

そして、それはまず一番近いものへと向けられたということにすぎなかった。

殴り過ぎて膝が麻痺して立つかもやっとならったが、ゆるゆるとドアの方へと歩いていく。

これから責められることを予想して、体がドアを開けることを拒絶している。ドアノブに手をかける。しかし、回すことができない。

(こ、の!! 腑抜け!!)

体に喝を入れて、ドアノブを回し、押し開ける。

そこには、白神と同じ白髪、血のような紅い瞳をもつ女性が立っていた。

「……凜さん、少し、二人きりにしてほしいの」

凜に背を向けたまま少しだけ顔を向けた。それでも白神よりも長

い白髪がその紅い瞳を隠す。

「……白亜さん。……分かりました」

篠崎は、女性の向こう側にいる凜と眼が合う。

そして、首をこくりと頷ける。凜もそれに返すようにこくりと頷いて、一階へと降りていった。

「……どうぞ」

篠崎は目の前の女性を部屋へと招き入れた。「ありがと……」と俯いたまま答える女性。

そのまま部屋の真ん中を陣取るかのように二人で座る。ちゃんと話しあえるように、ちゃんと向き合えるように、向かい合わせで。

痛いほどの沈黙が篠崎を襲う中、不意に女性　白神　白亜は篠崎に声をかける。

「……友人。娘が、真がいなくなっただって、ほんと？」

白神と同じ血のような紅い瞳を真っ直ぐ篠崎に向けながら、悲痛そうな声で、今にも崩れそうな声で、篠崎に願うように質問した。

篠崎は、斜め下に顔を逸らしながら、

「……はい。目の前で、いなく、なりました」

白亜以上に脆そうな声で答えた。

突けば崩れてしまいそうな答え。まるで否定して欲しいといったような弱々しい声で。

「……最後に電話をしたのは」

「僕です」

そう。最後の最後で、白神の声を聞いていたのは、まるで自分の命を投げ出してもいいぐらいの愛情で育て上げた母親である白亜ではなく、目の前にいる幼馴染以外の何者でもない篠崎だった。

まだ、その電話が自分の元に掛かっていたならと、そう思っているはずだ。

「……娘は、最後になにを言っていたの？」

「それは……」

彼は思う。言っているのだろうか。

最後の言葉は、この母親に向けられた言葉ではなく、やはりただの幼馴染である篠崎に向けられた言葉だった。

彼は悩む。言っているのだろうか。

言ってしまうば、もう後戻りなどできない。

言ってしまったことは、もうどうすることもできない。

それを言ってしまうば、滅茶苦茶に責められるかもしれない。

それを言ってしまうば、この女性は滅茶苦茶に壊れてしまうかもしれない。

この、篠崎となんら変わらない女性は、篠崎以上に壊れてしまうかもしれない。

それでも、篠崎は、

「またね？ 友、と言って、まし、た……」

それでも、篠崎は、全部を伝えなければならぬのだろうと思い、全てを分かった上で、目の前の儂そうな女性に、聞かれたことを答えた。

滅茶苦茶に責められる、滅茶苦茶に壊れる、そう、どちらかが起こるか、どちらかが起こっても、もう篠崎には道は残されていないのだろう。

壊れそうな、壊れかけた声で、篠崎は答えた。そして、次に来るのであろう罵声に身を備える。

しかし、その罵声はいくら待っても篠崎の頭上に降り注ぐことはなかった。

恐る恐る、篠崎は白亜の方を窺おうとした。

しかし、窺おうとして上げようとした頭は、優しい何かに触れて、その動きを止められた。

篠崎はこれを知っている。この感触も、この温かさも、この優しさも、全部知っている。

これは 母の、愛。

篠崎の頭には、怒るために振り上げた手でもなく、蔑むために振り下ろした手でもなく、ただ、目の前の少年を慈しむ手が、そっと触れていた。

「よく、言ってくれたね？　ありがとう」

頭上から降り注ぐのは、罵声の嵐ではなく、傷ついた少年を癒すための優しい声。

壊れそうな少年の為に、自分も壊れそうなのに、それすらも我慢して、少年を心配するような声。

彼の頭に載せられた手は、ふわふわと撫でるように動きだす。

「友くんも、辛かったでしょ？　大丈夫、友くんの所為じゃ、ないから」

篠崎は、慰められた。

予想外に、慰められた。

それは、嬉しいことのはずなのに。

だけど、篠崎は、

「なんで……なんでッ！！」

そう言っただけで篠崎は頭の上に乗せられている優しさの塊を払いのける。

「なんで、責めないんだよ！！　責めるよ、お前の所為だと言って、お前が悪いんだって言って、ぐちゃぐちゃに滅茶苦茶になるぐらいに責めるよ！？」

今の篠崎には、優しくされるほうが、逆に、辛く感じた。

「本当は僕のことを責めたいんだろ！？　だったら心の向くままに罵声を浴びせるなり殴るなりしろよ！！」

その時、パンツ！！　となにかを打ち付ける音が部屋に響く。

その直後から、頬が熱く、ヒリヒリと痛みだす。

篠崎の前には、血のように紅い瞳を涙で濡らし、充血して赤黒く変わった瞳を向ける、母親の姿があった。

「なんで、あなたのことを責められるのよ。責められるわけないじゃない！！！」

ぼたぼたと、自分の膝の上やカーペットの上にシミを作る白亜。

「な、なんで」

「だって、だって!!」

真は、真は、あなたにそんなこと

をしても、嬉しくないと思うから、逆に、悲しむだろうと思うから
っ!!」

白亜は、壊れそうな声で、しかし絶対に壊れないであろう声で、
篠崎のことは責められないと言った。

自分は殺してでも、娘の為には、責めることなんてできないと。

「でも、白亜さんは」

「辛い。辛いわよ!! 娘がいなくなつたなんて事実、受け止めら
れるわけないじゃない!? でも、でも。友くんが、本当のこと言
つてるつて、直接聞いて初めて分かった。聞いたときは君のことを
責めようと思つたよ!? けど そんなこと聞かされたら、責め
られないじゃないのよ!!」

責めるべき対象でありながら、責めることのできない対象。

目の前にそんなモノがある女性の心境は、もう、

「分からない、分からないよ、友くん!! 君のことは責めたいの
に、責めたくないよ!! ごめん、ごめんね友くん、ごめん!!」

そう言いながら、篠崎の胸を、撫でるように優しく、殺すように
憎しみをこめて叩き続ける。

「……うう、うあ、あああ」

泣いてはいけない。目の前で泣きじゃくるこの女性の前では決し
て泣いてはいけない。

しかし、そう思えば思うほど、喉の奥から嗚咽が漏れだす。

漏れだす嗚咽とともに、熱いもの、何か熱いものがこみ上げる。

それは、綺麗でありながら、汚い涙。

その涙が頬まで流れ落ちたとき、目の前が真っ暗になる。

「今は、泣こう? 一緒に、辛いもん、ね?」

目の前の母と言う存在は、篠崎の想像を遥かに超えるほど脆く、
篠崎の想像を遥かに凌ぐほどに強い存在だった。

しかし、どうやって警察に話せばよいのだろうか。多分、本当のことを馬鹿正直に話しても、本気にはしてくれないし、高校生のいたずらとも思われてしまうのだろう。

そうしたら、操作も調査もしてはくれない。そうならば、絶対に白神は見つからない。

だが、嘘を言うことなんてできない。篠崎は、あの女性の前で、嘘を言わずに本当のことを話したのだから。ここで嘘を言っては、絶対にいけない。

そう思いながら、警察署の待合室の4人がけのソファに座って取り調べの時を待っていると、

「……バカ、やっちゃったな。俺が、変なこと言いださなければ、よかったのに、なあ」

いつも通り突拍子もなく、しかし、まったく覇気のない声で、懺悔するように呟いた西沢。

「私の、目の前で……守る、ためだったのに」
波風は自己嫌悪、自己憎悪に犯されている。目の下のくまが際立つように目を見開き、それがまた痛々しい。

2人とも、まだ何かを背負うには幼すぎた。否、弱すぎたと言うべきなのだろう。

まだ、2人とも16歳や17歳だ。人生経験なんて大人からしてみれば小指の先ほどしかしていないし、人ひとりを背負うには全ての点において弱すぎた。

まだ、2人とも折れてはいない。

だが、それも時間の問題だろう。

それは篠崎も例外ではなく、むしろ篠崎が一番ひどい状況と言える。

ぼたり、と口の中から血が垂れる。ぴちゃり、と手の中から血が垂れる。

篠崎の口や手は、何とか血色が残っている紫色に変化するほどに食いしばられ握りしめられている。家で握りしめたまま、かれこれ

1時間。彼の精神状況は、破綻寸前だ。

そんな彼を、警察官が呼びだす。

「篠崎 友くん。少し、いいかな？」

1人の警察官が篠崎の前に歩いてきた。そして、脇に控えるように、まるで犯罪者を扱うように、篠崎を取り調べ室へと連れて行った。

かつん、かつん、と静かな廊下に篠崎と警察官の足音が響く。

そのまま3つ並んだ取調室の一番奥の扉の前まで歩いて行くと、このまま地獄に放り投げられてしまうような恐怖感が彼の精神を蝕む。

それでも、地獄に落とされたとしても、篠崎 友は真実を離さなければならぬ。

幼馴染の為にも、その母の為にも、そして自分の為にも。

警察官の手が、銀色のドアノブに伸ばされる。

かちやり、と言う音とともに開かれる地獄の蓋。

篠崎は、警察官に促されるまでもなく、一步、その地獄の中へと足を踏み入れた。

篠崎の前には年老いた老警察官と言ったやつだろうか。優しい雰囲気醸し出した白髪が所々混じっている男性の姿がある。経験を積んでいるのが素人から見ても分かる。定年ぎりぎりと言う奴だろう。

につこりと、篠崎に笑いかける男性。

それは篠崎を安心させるためなのだろうか。

それとも篠崎を油断させるためなのだろうか。

そんなことを考えていた篠崎の心にするりと入ってくるような声で、男性は言葉を発した。

「篠崎、友くん、だね？」

「……はい」

「これからいくつか君に質問しなければならぬ。正直に答えてくれ。いいかい？」

「……はい」

薄暗い部屋の中、奥の方では記録係の警察官が話したことを書き留めていく。

これは、本当に、言ったことは曲げられない。

「単刀直入に聞くが、君が白神 真さんを、誘拐、したというわけでは」

「違います！！ 絶対に、絶対に違う！！」

これを聞かれるのは薄々分かっていった。4人のうち1人が消えたとすれば、他の3人が疑われるのは当たり前なこと。しかし、これが仕方のないことだったとしても、言われなくなかった。

声を荒げた篠崎に対して表情を変えることなく続ける男性。

「ああ、分かっているさ。子供たちだけの手で、おおよそ2時間で同じような体格をした、それもあの白神 真さんを誘拐できるはずがない。我々警察官が完全武装しても、抑え込むのがやっとだろう」

そう。篠崎達が白神を誘拐していないのは、他ならぬ白神自身の存在が証明していた。

白神のその圧倒的存在感には轟き、全国に名を知らしめている。

学問でも武術でも、やれば完璧にできてしまう。手加減したところで、その力はそこらへんの天才を軽く凌駕する。

そして、この警察署にも顔を出していた。小さい頃に、父親とともに。

そのとき、お遊びで柔道の組み手をした大柄な警察官を、3秒で捻りつぶした。

「あの時は衝撃的だね？ 戦慄したものだよ。だから、君たちみたいな素人には絶対にあの少女を抑えることは無理だ。まあ、君達が超能力でも使えると言うのなら話は別だけどね？」

そんな冗談を、やはり表情は変えずにいう男性。

そんな冗談を、篠崎もまた表情を変えずに聞いていた。

「次に思い浮かぶのは、共犯だね？　しかし、君達の過去を調べてみたが、これといった特徴はなく、平和で幸せそうな暮らしを送っている。それに、白神　真さんを誘拐する動機なんてどこにも見当たらない」

「……それが、どうしたんです？」

篠崎には、この老警官の言いたいことがまったく理解できない。というより、大人の考えがまったくつかめない。

自宅では滅茶苦茶に責められると思っていた白神の母からは、この上なく温かい優しさをもらった。

今、警察署では、精神が疲れ果てるまで取り調べと言う拷問がいつまでも続くと思っていた。

それなのに、大人達は、全然、自分のことを責めようとしなない。それが篠崎には分からなかった。

「疑わしきものは疑え、という言葉があるね？　高校生なんだからこれぐらいは知っているだろう？　これは君達が疑わしかったから行ったものにすぎない」

ということはどういうことなんだろう？　と篠崎は頭の中で首をひねる。いまいちこの男性が言いたいことがつかめない。

「この状況での失踪事件を、私は一度だけ知っている。それは、ちょうど50年前だ」
「ッ！？」

この老警官がいう50年前。それは騎之塚学園で失踪者が出た年。この老警官の年齢から言えば、その失踪事件について携わっているかもしれない。

「状況は、これと非常に似ていてね。私もびっくりしている。その時も友達4人で肝試しの感覚で学校に忍び込んだらしい。その中にも、当時稀代の天才と呼ばれた少年がいた」

状況は瓜二つどころではない。

まったくの同状況。イコールシチュエーション

「その少年もが失踪した事件について私は携わってね。最初は高校生のいたずらかと思われてただけで、一向にその少年が姿を現さなくてね。二日ほどたってようやく捜査に踏み込んだんだよ」

2日。誘拐された人質としては、肉体的にも精神的にも危険な状況だ。

「その事件での特徴は、失踪のはずなのに、おそらく誘拐のはずなのに、身代金の要求なんかがまったくなかったことだ」

それもそのはずだと、篠崎は思う。これは単なる失踪や誘拐とは別次元の問題だ。

それこそ、人間が関わっちゃいけないような問題。

「それで、今みたいに残された3人の取り調べを試してみたんだ。主にその少年が失踪した時の状況を聞いてみたんだ。私はそのころ下っ端でね？ 私の後ろにいる彼のような仕事をしていたよ」

そついうと老警官の後ろの男性の肩がびくりと揺れる。そして一瞬篠崎達の方を見て苦笑いをした。そして視線を戻す。

「その時の状況は『選定の鏡』という不思議を基準に考えて動き、

『おんぶさん』『笑う外道』『策士の無理問答』『選定の鏡』『聖剣伝説』という順番で回ったそうだ」

それは、まったく篠崎達がたどった経路と同じで、全身の毛が総毛立つ。まだ内装などが違ったとしても、これほどシंकクロしているものなのだろうか。

「『魔物の巣窟』というのは全部を体験しなければ現れないそうだから、『聖剣伝説』が見つからずに、3人で校庭を歩いていると、1人の少女が少年がいけないことに気がつくんだ」

「そして、後ろを振り向くと、その少年が持っていた何か落ちていた」

篠崎が先を読むように答える。

それにはびっくりした表情になる男性。

「うん。その時は帽子だったね。言い当てたということとは」

「まったく、同じです」

「……そうかい」

老警官は虚空を見つめて、警察官の顔つきとなった。

「今日は、帰った方がいい。君も、疲れていることだろう」

この口ぶりからすると、西沢や波風は他の部屋で同じように、昔の事件の当事者に話を聞かれているのだろう。

内容も、全部同じように。

あの学園には、なにかがある。

そう思った篠崎だったが、少し気になることがあった。

「あの」

「なんだい？」

「その、消えた少年っていうのは、戻ってきたんですか？」

祈るように、願うように、老警官へと尋ねる。

肯定という返事が返ってくるのを待ちながら、数秒後、男性の口が開かれる。

「今も、行方不明だよ」

その言葉が、篠崎の胸を深いところから抉っていった。

|| || || ||

取調室から出るとほぼ同時に、2つの扉も開かれる。

そこからは若干落ち着きを取り戻した西沢と波風の姿があった。

「……どうだった？」

「……びっくりだ」

「……びっくりよ」

感想の方は、どうやら篠崎と大して変わらないらしい。篠崎の予想通り、昔の当事者の警察官が話を聞いたのだろう。

篠崎達は、それから黙って警察署の待合室で時間を過ごしていた。時間は真夜中。緊急のことだったらしく、見かける人などはほと

んどおらず、酔っ払いのおやじが運び込まれてくるぐらいだった。

そんなとき、警察署の自動ドアが開く音が耳に入った。

そちらに目を向けると、いつものように凜とした竹原センセの姿があった。

つかつかと、いつも通り表情を変えることなく篠崎達の方へと歩いてくる。

ぼーっとした頭で、また業をかけられるのだろうか？ とどうでもいいことのように考えていると、

ふわっと、包み込むように3人は抱きしめられる感触を持った。

え？ と誰かが声を漏らした。

そんな3人を知ってか知らずか、

「……よかった。無事で、本当に、よかった」

いつも無表情ながら、いつも生徒のことを考えて指導をしていたやりすぎだ、と言われればそれで終わりかもしれない。

しかし、竹原と言う男には、やりすぎだ、といわれても、やりつづけなければならなかった。

生徒たちの為に。

そんな教師が、そんな先生が、自分の生徒が心配ではないはずがない。

「でも、僕達は」

「……自分達を責めるなよ、篠崎。私は、貴様等が悪いと思うほど、貴様等に責任があると思うほど、小さい人間のつもりはない。みくびるな」

ああ、そうだったのか、と心の中で理解する。

君のことを責めたいけど責められないと言った母親は、白神を守れなかった自分が悔しくて。

篠崎のことを責めなかったあの老警官は、篠崎が悪くないと分かっていたから。

そして、目の前にいる1人の先生は、自分達の先生だったから。自分達を責めなかつたんだらうと、そう思う。

「泣け。貴様等が背負うべきものは、私が背負おう」
そして、思い知った。

たしかに、責められることも罪を贖うことには必要なのだと。しかし、それ以上に、許されるという辛さに耐えることも、罪を贖うには必要だと言うことに。

深夜の警察署の待合室に、まだ子供の泣き声が3つ、浄化されるように響いた。

|| || || ||

1日後。篠崎は1人で真夜中の学園にいた。

母親が寝静まったことを確認し、音をたてないようにそろりそろりと家から出てきた。

リュックサックは肩にかけてある。中身は前回よりも多く。着替えや保存食料。その他、遭難しても3日は不自由なく生活できるほどの準備を母親に見つからないように急ピッチで進めた。

「全て、背負う、か」

篠崎は夜の校庭を、月明かりを頼りに歩きながら竹原センセの言葉を思い出す。

あのと、竹原センセは、自分達が背負うべきものはすべて背負ってくれると言った。

それは、嬉しいようで、悲しいようで、辛かった。

「出来るわけ、ねエだろ。真のこと、全部背負わせるなんて」

目の前で消えた。

幼馴染の白神は、他の誰でもなく、自分の前で。

幼馴染の白神は、他の誰でもなく、自分と話して。

忽然と、その姿を消した。

「真は、またねって、言ったんだよ。もう会えないかもしれないと分かっていながら、またねって」

篠崎は、あのとときの白神と同じように夜空を睨みつける。深い深い、闇の様な黒髪は、月明かりに照らされてもその黒さを衰えさせることはない。

そして、篠崎の闘志もまた、

「だから、あつちが会いにこれねエつつうんなら、こつちが会いに行くしか、ねエだろうが!!」

衰えることはない。

自分が弱いなんてことは既に思い知っている。

しかし、そんなことが、篠崎が戦わない理由なんかにはなりはしない。

自分が戻って来れないかもしれないということには恐怖を感じる。しかし、そんなちっぽけなことが、篠崎が約束を破る理由になんてなりはしない。

篠崎 友は、白神 真の、幼馴染なのだから。大事で、大切な、自分にはもつたいたいと思うぐらいの、最高の幼馴染だから。

「覚悟しろよ、七不思議。残るは六つだけだ!!」

大体の予想は1日じっくり考えることですのでについている。

(多分、真は少し前から七不思議に遭遇していた。だから、あの奇妙な出来事にも耐えることができたし、平然でいることができた) 一度したことやされたことの改善策や対抗策なんかは、白神は無

意識に立てている。

二の舞は絶対に踏まない。

(そして、ちよつとずつ、ちよつとずつ、七不思議を解いていった。最初は多分、忘れものかなんかを取りに行ったんだ。その時に『おんぶさん』を背負って)

こんなことになったと。

(そして、一昨日、『聖剣伝説』をクリアしたあと、『魔物の巣窟』に飛ばされた。馬鹿見てエなファンタジーに巻き込まれた。僕は、

もうそれを否定しない)

これはあり得ない。

しかし、目の前で起こったのだ。否定している暇があったら、受け入れて前へと進まなければならぬ。

西沢に補習の時に聞いたことがある。

『250年前から今までで、2人同時の失踪はなかったのか?』

『……あつたよ。たしか、最初の記録だ。こちら辺に住んでた武士の家で、その武士の子供同士が友達と言う奴だったらしい。武術や学問を競い合ってたってという記録も残っている』

『で?』

『ある日、片方の男が神隠しにあつたっていう記録が残っていて、その後、それを追うようにしてもう片方も神隠しにあつたって記録があつた』

ここから篠崎が導き出した答えは、

「この七不思議に、人数制限は設けられていない」

そう。ある一定の期間内でのみ『聖剣伝説』と『魔物の巣窟』という不思議が現れるだけで、人数制限などない。

だから篠崎は、この2つの謎が消えてしまう前に、行動に移った。それが、今夜と言うことだ。

篠崎は、銀色の月明かりに照らされた白い校舎を忌々しげに睨む。時間は午後11時30分。

「今、行くぞ。白神 真」

少年の呟きは少年の耳にしか届かなかった。

そんな少年の呟きが、長い夜の戦いを告げる鐘となり、1人の少年の幼馴染の為、見知らぬ他人の為、そして、他ならぬ篠崎自身の為の戦いに、一步、足を踏み入れた。

第四話：To expiate the crime（後書き）

今思ったんですけど、英語の題名カッ「悪いでしょうか……」。
そこらへんも含めて、ご感想ご批判ご指摘、おまちしております。

第五話：It is the one for which it waits

はい、では第五話。

恐怖を乗り越えたものの先に待つもの

どうぞ。

篠崎は銀色の光に照らされ不気味に浮かび上がる白い校舎に向けて歩き出した。

一昨日、西沢たちと忍び込んだ経路を思い出しながら、篠崎は校庭を闊歩する。

そして『おんぶさん』を背負ったところまで来ると、立ち止まる。思考する。

自分がここでされたことはなんだったかを。

(……あれ？ 噂では、『お前じゃない』って言われるんじゃない)

あの時のことを思い出す。アドレナリンを過剰分泌していたためあまり明確には覚えていないが、たしかに『二人目。お前だ』と、否定ではなく肯定された。

(なるほど、あれすらもなにかを試してやがったのか。多分、真も肯定されたんだろ)

そう思いながら食堂へ侵入するために窓へ手をかける。こここのとは警察にも聞かれなかったし、言ったところでどうこうできるような問題ではない。

かちやり、と言う音とともに窓が開く。思った通りと、少しだけ笑みがこぼれる。

そこから校内へ侵入すると、昼間の賑わいなどどこにもなく、ただうつすらと月の光に照らされるだけの食堂が見える。昼間の賑わいをまったく感じさせず、潰れたばかりの廃病院の様な、綺麗さを保ちつつも気味の悪さも一層引き立っていた。

しかし、こんなところで立ち止まっているわけにはいかない。4人がけの円形テーブルがいくつもある食堂を歩きながら、篠崎は午前0時の『選定の鏡』に間に合うように進む。

今思えば、どうして白神はこんなことに付き合ったのだろうかと思う。初めは偶然だったとしても、そのあとは自分の意思に違いな

い。こんなことする必要なんてどこにもないのに。

しかし、篠崎は彼女の性格を考えてみる。その性格を疼かせるようなことが起ったのだろう。

(例えば、『王国が魔王に、魔族に侵攻されて手も足も出ません。どうか救いの手を』みたいな感じか?)

西沢の仮説を笑ったことを今になって後悔する。

ふざけている、そう思う。

(舐めてんじゃねエぞ。クソツタレ。テメエらの問題ぐらいテメエらで解決しやがれ。出来ないぐらいなら、諦めてろ。勝手に人様の性格利用して、巻き込んでんじゃねエぞ)

そう思いながら、自分も自分の性格で巻き込まれていると気づき、自嘲気味に笑う。

(別に他人のことなんか、まあ心は痛みはするけど、知ったこつちやないからね。これは自分の為と、幼馴染の為だ)

言いわけ紛いの言いわけ紛れで、篠崎は自分の心を無理矢理納得させる。

最初は異世界召喚と聞いて心が躍った。こんなつまらない世界とおさらばして、勇者の力をもらって英雄無双なんかできる、なんて楽しそうなことだ、と、そう思っていた。

思い返せばフザケタことだ。

こんなにつまらないと思っていた世界は、あんなにも尊く、あんなにも面白い世界だったのだから。

篠崎は、重大なミスを犯したと後悔している。

だから、それを償うために、贖うために、責められる覚悟も許される覚悟も、もう出来た。

あとは、自分で償い贖うために、行動を起こすのみだ。

「オトシマエはつける。夏休みが終わるまでに全部終わらせてやんよ」

そんな言葉を吐きながら、篠崎は美術室へ向かうために階段を上る。ここは第一校舎の1階で、美術室は第二校舎の2階部分にある

ため、階段を上り、渡り廊下を進まなければならない。

監視カメラなどは付いていないので、篠崎は階段の真ん中を登り、廊下の真ん中を歩く。いつもはごった返している廊下も、今はまったくもって静かだ。こんなにも廊下は広がった、と心の中で少しだけ感動する篠崎。

そのまま2階に上がると携帯電話を広げてみる。

午後11時45分。

ここからまっすぐ向かえば時間が軽く10分はあまるぐらい余裕だ。

心に余裕を持たせつつ、美術室へ向かう。歩いている廊下は月明かりが差し込みそれなりに見通しがいい。

渡り廊下に歩を進める。

(西沢たちには悪いけど、今回は僕が主人公にならせてもらおうよ)

そう思いながら異世界に行った後のことを考える。

異世界召喚。主に召喚主の都合で異世界に強制送還され、何が何だか分からないうちに『我が国は今危機に瀕している。なので勇者様の力で救ってください』というある種の暗示をかけ、その勇者を好き勝手に動かせると言う奴だ。

「あれだよな。勇者召喚補正をかける魔法陣を構築できるぐらいなら、自分たちにその魔法をかけられるように努力しろって話だよな」
まったく、どんな矛盾点だボケ、と悪態をつきながら黙々と進む。驚いたことに、奇妙な感覚はあるが、恐怖心などはまったくない。それどころか、勇気がわき上がってくるほどで、今だったら何でもできるような活力が、篠崎を覆い包む。

これがアドレナリンだということは、多分一生気づかないだろう。抑えなければスキップでもし始めてしまいそうな体に若干の気味の悪さを感じながら、篠崎はとうとう美術室へ着いた。

美術室へ向かって3番目の窓に視線を向ける。ここは鍵が閉まらず年中開きっぱなしだ。

その窓に手をかけると、誰もいないのを確認してから音をたてな

いようにそろそろと右へ引いた。

窓を開けると絵具の匂いや、少しカビ臭い匂いなどが鼻につく。「うっ……」と一瞬たじろぐが、それは我慢して美術室へと侵入した。

中に入ると、一昨日と同じように、月の光を浴びて魔性の雰囲気漂わせる姿見用の鏡が置いてあった。

1日たったただけで随分と古臭くなったように感じる篠崎。

その鏡の前に立ち、ポケットにつっこみ白神と最後に話した携帯電話を開く。

午後11時57分。

もうすぐあの時のことが一昨日ではなく、3日前と表わされるようになる。そう考えると、なんだかどんだんあの日が忘却されてしまふようで嫌だった。

「だから、忘れ去られる前に取り戻すんだろうが。この腑抜けが」吐き捨てるように自らを叱咤し、そんなことはさせないと決意する。

目の前にある鏡をみる。そこには月明かりを浴びながら眉間にしわを寄せた切れ長の双眸を構えた、どこにでもいる普通の少年が映る。

時間はあと1分ほどで今日が終わる。しかし、少年の明日など、白神を連れ返さないことには始まらない。

カチ、カチ、とこの部屋のどこかにある時計が秒針を刻む。暗くて見えないが。

ここから弱者の反撃が始まるとわくわくする、と心を振るわせる篠崎。

彼は基本的に弱い者の味方だ。味方は一緒に戦うという固定概念はどこかに捨て去ってしまったようだ。

ふと、篠崎は鏡をしてみる。

そこには、篠崎ではない何かが映っていた。

「なッ!？」

たじろぐ篠崎。

鏡に映っているのは、黒いという点以外はまったくもって共通点の無いなにか。

しかし、背格好や、物腰なんかも似ているだろうか？ と篠崎は思わないおす。

黒い外套のようなものを羽織ったなにかは、篠崎とは違って、金と銀の瞳をもっていた。その顔は仮面のようなもので覆われていて、顔の下半分と、金と銀の瞳しか分からない。

（な、なんだあ？ けど、なんか、僕と同じ動きをしてないか？）

そう、篠崎が動くのと同じように、右手を上げれば右手を上げ、左手を前に突き出せば突き出し、不思議そうに首を傾げればそれも同じように傾げるのだ。

（……えつと、ボクのセンザイノウリヨクはマオウサマだ！！ っ て叫んだところであ）

なんでエッ！？ と篠崎は心の中で叫ぶ。ファンタジーなのは理解していたし覚悟もしていた。だから楽しもうと思ったのに、こんなに愉快で楽しい魔王様が現れてしまった。

心の中で両手両膝をついていると、どこからともなく、男か女か分からないような声が響いてきた。

『……2人目。お前だ』

「だ、誰だッ!？」

あたりを警戒する。月明かりを頼りに周りを見渡すが、見通しが悪過ぎて話にならない。篠崎は別にココロノメとかで目をつむっていても周りが見えるような達人様ではないし、サツキとやらを感じ取れるような殺人集団でもない。

しかし、声は聞こえる。

そう、篠崎の目の前から。

『お主に、折り入って頼みがある』

「か、鏡が喋った!!」

突然ファンタジーが顕現し驚く篠崎。そんな篠崎に対し『選定の

鏡』は構わず進める。

『我が国を助けてほ』

「断る!!!」

言うことがなんとなく予想でき、さらにその予想が嫌だったので即断る篠崎。

考える必要などどこにもないと言ったところか、思いなおすことはないようだ。

『我が国は』

「そんなことより真を返せ!!!」

がッ!! と鏡の両端を掴み、聞くかどうかわからない揺さぶりをかける。

『ちよ、そんなことをしたら割れ!?!』

「かああええええええええ!!!」

『お、落ち着け!!! いいから落ち着くのだ!!!』

「そういつて落ち着いた馬鹿は、見事王国の奴隷になりましたとさ。めでたくねエんだよクソツタレ!!!」

『お、落ち着かなくともよいから話を聞け!!!』

「よおし。このまま揺らしてっから、そのまんま喋りやがれエ!!!」

『いいから止める!!!』

「なんだ、やめてほしかったのか。だったら最初に言えよ」

『このクソガキ!?!』

「あ?」

こんなコントを数分続けた後、篠崎は仕方がなさそうに『選定の鏡』の話を書くことにした。

『我が国、というより大陸は、現在、魔の国ニースヘッグと拮抗状態なのだ』

「あつそ。別にどつちかに傾いてるわけじゃないんだったら、そのまんまいればいいじゃん」

『しかし、いつこの均衡が崩れるともわからない。だから』

そんな『選定の鏡』の言葉を遮るように、少年の冷徹な声が月明

かりしかない部屋に響く。

「奴隷にするために、マコトニ ミラクル・白神 真を召喚しましたくってか？ ふざけるのもタイガイにしろよ」

この鏡の生まれ故郷（製造場所？）では人を利用して自分は悠々自適に過ごすのがお好みらしい、と篠崎は吐き捨てる。

それを言ったら、篠崎が住む世界でもそんなことは蔓延っているのだが。こんな風に目の前に晒されると、なんだか許せないことのような気がする。

『だったら、お前は見捨てるのか？』

「ッ！？」

なんだかんだいって、だ。

篠崎は結果的に他人を見捨てたことはない。だいたい面倒事や困っている人が目の前に現れたときは、いつも『正義の味方』である白神がいた。

ぱぱっと白神が解決してしまう、ということとは、篠崎自身はあまり人助けをしたことはあまりないが、篠崎は人を見捨てると言う罪悪感を知らない。

人は、未知の感覚に恐怖を覚える。

それを避けるために、人は生きている。例えば、死。人は、死と言うものを味わったことがないから、死を避ける。

罪悪感も同じ、と考えることはできるだろう。

『ふん。どうなんだ、勇者の資格を持つものよ』

「……それで、真を連れ帰れるんだったら、やってやるオじゃねえか」

『ならば、さっさと行け。まだまだ、お前を試すものはこの学園に散在しているぞ？』

「上等だ、無機物野郎」

そして、篠崎は走りだした。こんな無機質な鏡は置いておき、自分の心の中にある温かいものを守るために。

次に篠崎が向かったのは図書室。

そこにあるのは『笑う外道』。1人で図書室にいと、道化師ビエロのようなナニかが出現し『お前の大切な人は誰だ？ 答えたそいつを殺す。答えなければお前を殺す』という質問を笑いながらしてくると言う怪奇であり不思議だ。

図書室は第三校舎の三階にある。そこに走っていく篠崎。

もう、悠長に構えているのは面倒になった。そう思い、篠崎はこんなフザケタ茶番を速く終わらせるために走る。

まずは第三校舎に向かうために渡り廊下へ向かう。

走りながら篠崎は、次の不思議のことについて考えていた。

(真は一体、どうやって答えたんだ？ まさか、本当に殺されるとは思えないけど、こんなファンタジーだ。絶対ともいえない)

だとしたら、

(だとしたら、真はなにをどうやって、この不思議を?)

考えつつも足は止めない。答えはでないが足は止めない。

足まで止めてしまえば、思考まで止まってしまいそうで怖かった。

(くそ、分かん。本当に、クソみたいなやつはクソみたいな不思議しか考えられねエのかよ)

それを人は下種と言う。

とにかく篠崎は寝癖ではない天然で跳ねている黒髪を風になびかせながら図書室へと向かう。

現場についてから、土壇場で挽回できる起死回生型であることを信じ。

少し走ると図書室が見えてきた。こここのドアもなぜか鍵が壊れているのだ。

まるで、この不思議を解く者が現れるのを歓迎しているかのごとく。

(舐めてやがる。この上なく舐めてやがる)

不思議に思うべきだったのだ。

なぜか、不思議が現れるとされるところの警備や施設が甘いのは、なにかファンタジーな魔法とかでも使っているのだからとあたりをつけながら、入口のドアノブに手をつけた。そして、開け放つ。ガチャツッ！　と言う音とともに図書室の入り口、『笑う外道』が待つのである。試験場に一歩足を踏み入れた。

「かかってこいやクソ、ツタ……レ？」

そこには誰もいなかった。

篠崎のイメージする、赤っ鼻に白いメイク、目の下にランプのマークやなんやらが入って、とにかく色とりどりの南国フルーツみたいな極彩色の服を着た派手な人間、という感じである。

とにかく、そんな派手な人間？　がいれば、こんな見通しのいい所で見逃すはずがない。頼りになる照明が月だけだとしてもだ。

一応、図書室の中へ入ってみる。

木のテーブルが3つ4つ並んでおり、漫画から小説、情報雑誌、ファッション雑誌までありとあらゆる本が集められている。下手な本屋に行くより蔵書量が多いくらいだ。

あたりを見渡す。まったくもって人影がない。

「なんでしょーか？　あれ？　もしかして、もしかすると、もしかするの？　……えっと、え？　もしかすると、どういことなんだ？」

「ぎゃっひい……ん！！」

「……………ッ!？」

いきなり、脇腹を人差し指でぶすつとされたような体を電流の様なものが奔り抜けるような、そんな感じが体を犯し足に力が入らなくなる。

それをぎりっ！　と食いしばり何とかこらえる。

後ろを向くと、大方、篠崎のイメージ通りの道化師ジエロがそこにいた。人を嘲笑い、人を貶め、人を誑かす。

道化師はこの上なく楽しそうに笑い、篠崎に丸まった目を向ける。「それではアンタに質問だよお……ん？」

いきなりか、と崩れかけた集中力をなんとかまとめ上げ、目の前の敵と対峙する。

質問の内容は分かっている。

考える。絶対の、そののない、優等生の答えを。

「なにか考えてるよ」だけドォ！！　では、質問。アンタの一番大切な人はだああれっ？　答えたそいつをぶっ殺死　　答えなければアンタをぶっ殺死　　」

「……………」
　　なんだか、七不思議とは大分違うなと思いつつ、若干の恐怖を感じながら篠崎は答えを探す。

（考える。大切な人。母さん？　西沢？　波風？　くそ、こんな頭がハッピーな奴ら、何しでかすか分かったもんじゃねえ。だったら迂闊に答えられねえ。消去法なんかも使えるような、ヒントすらない）

「ほくらほら？　さっさと答えないと　　」
　　道化師が異様にでかいポケットに手を突っ込んだ。どるるる、という恐ろしい唸るような音がそこから聞こえる。

篠崎は、この音に聞き覚えがあった。否、テレビを見たことがある者ならなんとなく見たり聞いたりしたことはある音だろう。それに気づいて、篠崎はたじろぐ。

そこから出てきたのは、異様にでかいポケットのことを加味しても、そこには絶対入ることはできないような、いろいろ装飾された回転する刃。

ようするに、

「チエ、チエーンソー!？」

どるるるるる、と篠崎を威嚇するように吼える。

分かつてはいた。分かつてはいたが、恐怖とは未知のものに対しても既知のものに対しても働く。そして、その威力を知っているのなら尚更。

どつと冷や汗が吹き出すのが分かる。

道化師はそんな彼を笑うように、

「ほくろほらア！ さつさと答えないとお、これで細切れ、明日の厨房のお肉に混ぜちゃうぞ？」

まさか、とは思う。

もしや、とは思う。

この謎に答えられなかったものは、もしや……。

そこでこのことについて考えるのはやめた。分かってもいない事実（ト）に妄想を働かせている暇などない。

（今は、この頭がメルヘンちつくにぶっ飛んでる野郎を、どうにかしねエト）

彼は、幼馴染の白神について思考を巡らせる。

唯一、この時代にこの謎々（命をかけた）を解いた人間だ。彼女について考えていれば、答えが浮かんでくるような気がする。

そう思っていたら、篠崎の頭の中にあの夜、白神が持っていたブラジャー（レジャー）をつけた彼女の姿が一番先に浮かんできた。なんと現実（リアル）的たっぷりの妄想である。

（アホか！？）

篠崎は自分の情けない思考形態を嘆きながら、それでも白神のことについて考える。

彼女ならば、こんなフザケタ謎々など、両手の指では足りないくらい答えが思いつき、その上、このフザケタメルヘンファンタジー道化師を痛めつける、もとい断罪する方法を選ぶのだろう。

（真は……『正義感』のある奴だ。それも、異常に。考える、この質問の答えを。真の性格を考えれば、出てくるはずだ）

「ん〜？ ど・う・し・た・の？ さつさと答えてよ、ね〜ってば」

どるどるどる、とチェーンソーのエンジンを何度も吹かす音が聞こえる。その後がまた、篠崎の恐怖心を煽る。

（……？ 今思ったけど、こいつに、もし殺されてひき肉にされるんだとしたら、なんでニュースとかになってないんだ？ どっか関

係ない奴を答えたとしても、このご時世だ、その場に血痕とか残さなくても、行方不明とかで搜索願がだされたり、報道されたりするはずだ)

なのに、全国ニュースはおろか、地方、そして篠崎の周りではそんなことは取り沙汰されていない。

ということは、真は答えていないのか？ と彼は思うが、それだと『聖剣伝説』にはたどり着けない。このチェンソーでひき肉にされて終わりだ。

(真なら、コイツからチェンソーを奪って、逆について感じだけだな)

クス、と彼は笑う。その姿が鮮明に思い浮かべられるのが面白い。「……逆に？」

彼の頭は、もうすぐ出答えにたどり着けそうなところまで来ていた。(……ッ!? ……………分かったぞ、真のやりそうなことだ。とびつきり、残酷だ。それでいて、一番スカツとするぜ)

そして、篠崎 友は、いつになく捻くれた笑みを浮かべ、道化師の方を向く。

「あつらくん？ 誰を言うか決めたのか〜い？」
道化師は篠崎を脅すように、どるるる、とエンジンを吹かす。そして、篠崎は一層笑みを深めて、余裕そうに答える。

「ああ、今、とびつきり大切な奴がいたよ。このムカツク現状をブチ壊してくれそうな、今、ノリにノってる奴だ」

「ふ〜ん。じゃあ、その答えを、アタシに教えちョーダイ？」
どるるる、と道化師は意気揚々と、これから誰の肉を引き裂けるのか楽しみと言った顔でエンジンを吹かす。

それが、自分に振りかかるとは知らず。

「僕が、今、一番大切な奴は

お前だよ」

篠崎は、迷わずそう答えた。

道化師は、なんだかきよとんと可愛らしく小首を傾げると、甲高い耳障りな声を上げて笑った。

「キヤツハツハツハツハツハ！　なあに？　アタシのことそんなに好きなの？　だったら一度くらい抱かせてあげてもいいけど、それはこの質問の答えには」

「なってるよ。僕は今、ヒジョーにムカついでる。お前にな。だったら、おまえを倒してくれそうな奴は、お前をぶちのめしてくれそうな奴は誰だ、と考えたわけさ」

篠崎は、スラスラと、罪状を述べるかのごとく、意気揚々と言葉を紡ぎだす。お前女だったのかということはお置いておいてだ。

「僕か？　いや、僕じゃあチエーンソー持つてる奴に勝てるわけない。真か？　アイツだったらお前に余裕で勝てるだろう。けど、今この世界にはいない」

「だったら？　と彼は邪悪な笑みを浮かべ、

「お前だったら、お前を殺すことぐれエ簡単だよな？　だから、今の僕にとって、一番大切なのは　お前だよ」

堂々と、死刑宣告を下した。

道化師は、ピタリ、とその陽気に動いていたチエーンソーを止め、にっこりと笑う。

そして、また、どるるるるるる！！　と今までにないくらい、エンジンが壊れそうなくらい吹かす。また、耳障りな甲高い声を上げて、

「キヤツハツハツハツハツハ！！　このまえの女の子と一緒に答えだすなんて、やるじゃんアンタ！！」

「それはどーも。さっさと、死にやがれ」

「はい」

どるるるる、と言う音を発したまま、道化師は自分の体にチエーンソーを食いこませた。

ブチブチブチブチイ！！　という肉が立ちきれる音が断続的に聞こえる。篠崎は、そんな道化師の最後を最後まで見つめる。

る。

「あ、うん。アタシ、基本的に不死の種族だから」

「うわ出た種族とか、ファンタジー用語!!! なにがどうなってんですかコンチクショー!!! あれですか? あなた様は、その、アンデッドとかそーゆー類の方なんですか!?!」

ちよつと許容量を超えてしまった現実に、篠崎は、んなーっ!?!? と叫ぶ。

そんな彼をやはり面白そうに見る道化師。血糊で白い化粧が落ち、今まで目立たなかったが、結構な美人だと言ったことが分かる。瞳は銀眼。髪の毛も銀髪と、ああ、やっぱりファンタジー、と認識する篠崎。

「んーん、アタシは吸血鬼^{ヴァンパイア}。ほら、アンデッドと違って形が整ってるでしょ?」

「……………あの、ちよつと犬歯を見せてもらえませぬか?」

「はい」

さらに口角を釣り上げると、おおよそ肉食獣などにつきそうな剣士が月明かりを浴びて、きらんと輝いていた。

わお、ふあんたずい~~~~。

「あ、あの〜、失った血を補充するために、僕の血をちゅーちゅーするってことは?」

「してほしーの?」

「ノン!!! 断じてノン!!!」

吸血鬼になるのは勘弁!!! と心の中で大絶叫する。

「だったら、早く行くのがいいんじゃないの? ほら、アタシも我慢できるとは限らないし」

「さらば!!!」

そう言つて、自己最高記録なのではないかと思つほどの速度でその場を後にした篠崎。

吸血鬼である道化師(女)は、その後ろ姿を眺めながら、

「…………さてはて、あの少年は、王国を救う勇者^{アンチキンヨー}となるのか、それと

も

「

魔の国を救う魔王様となるのか。キャハハ。楽しみ楽しみ。

そう呟いて、1人の吸血鬼である道化師は、夜の闇に溶けていった。

〓

〓

「……ホント、ファンタジーってあるんだな。自分の価値観を改めなければいけないときが来たのかもかもしれないと、少しだけ危機感を抱きながら僕は頭を抱えているんだよ！」

頭を抱えながら彼は走っている。信じられないようだが、頬をつねっても痛いし、ここまで鮮明だと夢でも何でも信じてしまっ。

次に彼が向かうのは科学室。『策士の無理問答』。『今から腕相撲をする。お前の利き手の逆でだ。ここで問答。組み合った腕を使わずに私を倒せ』という問答を、男がしてくるといふ訳の分からない謎だ。

「けど、それについては分かっちゃってんだよね。その解き方」
そう。彼はその不思議を聞いたときから既に答えを導き出していた。

別段、白神が行う分には楽勝な類のものだろう。

しかし、白神に楽勝なものが自分にも楽勝だとは分らない。

「あれだよな。『策士の無理問答』っていうぐらいなんだから、策士みたいに線の細そうな奴出てこいよな」

自信なさげにそう呟く。これならば普通に腕相撲やった方が成功率は高かったようだ。

そんなこんなで、階段を駆け上がり、再び第二校舎に戻った篠崎は、4階にある科学室を見つけた。

ここの鍵も、何度か揺らすと外れる。きつとあの道化師が何かやったのだらうとあたりをつけ、がたがた、と揺らす。

ことん、という音で鍵が外れたことを確認し、あまり音をたてないように中に入る。

そこには、眼鏡をかけ、その奥に黒い瞳、黒髪を長く伸ばした男性がいくつもある机の一つに頬杖をつけてこちらを見ていた。特徴といえば、とがった耳だろうか？ 人間離れしている。

じろじろと、篠崎を舐めるように観察すると、一言。

「中々に、不思議な方でありますな」

「あ、アンタみたいなのには言われたくない」

「それもそうであります。ほら、そこに突っ立ってないで、お座りになったらどうでありますか？」

「あ、ああ」

断る必要もないので、篠崎はその男と机を挟むようにして丸い椅子に座った。

向かい合う両者。

篠崎もその男を観察してみる。そうすると、彼の懸念は少しばかり晴れたらしい。

(よかった、)

「策士みたいに弱々しそうな奴で、とワタクシめは貴方がそう考えると予想するのであります」

「ッ!? …… ホントに、策士みたいな人だ」

自分の思考が読まれたのならはまだ分かる。

しかし、目の前の男は、読んだ上に先読みまでした。

油断ならないな、と舌打ちする。

そうこう考えていると、目の前の男は語りだした。

「さあ、始めるのでありますよ？ 今から腕相撲をする。お前の利き手の逆でだ。ここで問答。組み合った腕を使わず私を倒せ、ないのであります」

「……………」

篠崎は無言のまま左手を出す。それに対応するように目の前の男性も左手を出した。

握った瞬間、とても冷たく感じたその手。しかし、今更驚く必要もないので、強く握りしめる。まあ、使えないのだが。

彼は、左手以上に、右手を強く握りしめる。

そんな彼の心情を見抜いたのか、不敵に笑う男。

そして、

「ああ、ワタクシめが貴方を腕相撲で倒す前に、貴方はワタクシめを倒してください」

「……はっ！ 楽勝だ、ファンタジー野郎」

「いい気概でありますな。それでは」

睨み合う両者。一瞬の静寂。

そして、男の声とともに、

「のこった！！」

篠崎の右ストレートが男の眉間を撃ち抜いた。

「ぎゃふんであります!?!」

そのままいくつもの椅子を捲込み後ろに吹っ飛んだ男。

篠崎は人を殴ったこと自体あまりないので、痛む右拳をさする。

「お、おお。迷わずぶち抜いてきたのは貴方が初めてであります…

…。少しぐらいは迫力あるシーンも必要だと思っておりますが」

眉間を殴られ視界が揺れているのか、はたまた意識が飛びそうなのか分からないが、ふらふらと左右に揺れながら立ち上がる男。

「……で?」

「ああ、もう行っていいのであります。もう、貴方には用はないのであります。多分。ああ、痛い……」

人？ を殴ったことに対する罪悪感に苛まれながら、篠崎はすたすたと歩き、その場を後にする。

(……………このあっけなさは、何かの伏線か？ ベタなのは、上げ

て落とすって奴だな）そう思いながら、篠崎は窓の外をしてみる。
残っているのは『聖剣伝説』と『魔物の巣窟』。
そして、

「……『異世界召喚』、ね。あと、もうちよつとだ」

ポケットに手をつ突っ込み、携帯電話を取り出す。

時間はあつという間に過ぎ、只今午前2時37分。

窓の外から、オオオーン、と、犬の遠吠えが聞こえた。

そして、彼が行くのは、白神 真が消えた、あの、校庭へ。

「
待ってる、真」

第五話：It is the one for which it waits

ん。屁理屈屁理屈でした。

書いてて自分で解いてて、「うわ。無理矢理」って思っていました。

大丈夫だろうか？ 大丈夫だ、問題ないと言ってくれの方をお待ちしております。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております

第六話・Underdog(前書き)

これで、やっと、やっと……!!

そ、それでは第六話・負け犬

どうぞ。

第六話：Underdog

校庭に行くと、月明かりに照らされたグラウンドのど真ん中に、まるで陽炎のようにぼんやりとした輪郭しかない、それでも『塚』と分かるような盛り上がりがあった。その塚は神秘的に輝いており、人を惹きつけるような魔力も放っている。

なんだかやけにあっさりと見つけてしまったと拍子抜けする篠崎きつと、白神もこんな気持ちだったのだろうかと思う。

『策士の無理問答』を軽くクリアしたあと、帰りにみたのがこんな光景だ。

そのまま『聖剣伝説』もクリアすることができたのだろうか。けれど、白神はそんなことはしなかった。

一日でも長く、学校に居たかったから。

篠崎に『七不思議を探索しに行こう』と言われた時はどんな気持ちだったのだろうか？

彼が白神の事情を理解していなくとも、あまりに残酷すぎる。彼女にとっては、そのことが最後の踏ん切りを決めることになったということは言うまでもなかった。

そして、あの夜。篠崎達には見えていなかっただけで、彼女、白神 真の前には、こんな光景が広がっていたと思うと、彼はやるせない気持ちでいっぱいになる。

だから、少年は、やり直そうと思う。

自分の手で引き起こした悲劇だ。そんな劇場の幕は、自分の手で降ろさなければならぬ。

彼は、神秘的に光り輝く塚に歩み寄る。

しかし、歩いて行く途中で、なんだかおかしいことに気がつく。眠気で目が腐ったのかと思い、じしじしと擦る。

そして、もう一度塚を見る。

そこには剣などどこにも刺さっていなかった。

「どう、いう？」

彼の頭はオーバーヒート寸前だ。

今まで、戦って？　きた奴らの口ぶりからすると、その剣はいまだここにあるはずで、それを篠崎が引きぬけるはずだった。

なのに、目の前で神秘的に光り輝く塚の頂上には、どこにも剣など突き刺さっていない。

「……ペンシルみたいに、なんだかちっさい奴だったりして」

ちよつと意味の分からないことを呟きながら、一応塚の上に登ってみる。

そこには、足痕が残っていた。

8つ。大小様々な、形も様々な足痕が8つ残っている。

最初は騎士。そして、250年前に2人。そして、今に至るまで、最後に白神。

合計8つ。確かに残されている。

そして、いろんな方向から登った足痕は、全て頂上に集まっっている。

その頂上には、もれなく何かを突き刺していたかのような薄平べったい穴が見受けられる。

「えっと、なんでだ？」

西沢が言うには、250年前に2人、確実に行方不明（神隠し）になっている。

ということは、篠崎もこの『聖剣伝説』を受ける資格は十分にあるはずだ。

『おんぶさん』を引き剥がし、『選定の鏡』に選ばれ、『笑う外道』の裏をかき、『策士の無理問答』を軽く倒した。

そして、この第五の不思議『聖剣伝説』も打ち破れる。そう信じていた。

だが、目の前には、自分を試す物さえない。

篠崎の背筋を、つめいたものが伝う。肩にかけたリュックサックが、今では非常に重く感じられる。

まるで、この学園に一步足を踏み入れた時にかけられた魔法が解けてしまったかのように。

あの何でもできるような活力も消え失せそうだ。

そんなとき、ふと目に入ったこの中でも比較的古そうな足跡。その足跡は、一度この塚に上った後、降りている。

(え？ たしか『聖剣伝説』をクリアしたらその後すぐに『魔物の巢窟』に挑戦する^{トライ}ために、異次元に飛ばされる。いや、異次元とか普通に喋っちゃった自分の頭がかわいそうなのは置いといて……)

そう。降りる必要がない。

ラストの『聖剣伝説』『魔物の巢窟』『異世界召喚』の3つは一連の流れで行われるために、この塚の上から降りる必要がない。

なんでだろう？ と小首を傾げながら、その足跡を追ってみる。それは篠崎の下を通り、篠崎の後ろに行き、そこにあつた禍々しく黒々しい光を放つもう一つの塚の方へと向かっていた。

「え？」

篠崎はさらに混乱する。

今さっきまで、あそこには何もなかったはずだった。だけど、実際篠崎の前には、今登っている塚とは正反対の様な塚があつた。

黒い瘴気を放ち、近づく者すら殺すような、塚。

その頂上には、闇、と形容するに相応しい剣が突き刺さっていた。篠崎はそれに引きつけられるように、ふらふらと左右に揺れながら歩いていく。

「……なんだか、勇者の剣とかには、誰に何を言われようと見えません。ええ、見えませんよ。見えないんです。それでも」

真の元に、行けるなら。魔王にでも、なつてやるうじやないか。

いつの間にか、彼は瘴気を中心に居た。そこには勇者の剣という

よりも、魔王の剣と形容した方が相応しいモノが篠崎を恐怖に駆り立てていた。

そこで理解した。

あの足跡が誰のものなのかを。

(……2人目。250年前の、2人目か)

名も残らないような弱小武家だったのかもしれない。

大した武勲も上げられないような貧弱侍の子供だったのかもしれない。

だけど、その武士の子供は、友だちを見捨てることなんてできなかった。

不思議を、あんな頭がおかしい不思議を、当時はそんなことに対する耐性がなかったような怪奇を全てぶっ飛ばして。

こんなにも恐ろしい瘴気みりよくを放つ剣を、恐怖に打ち勝ち、

「友達のとこに、行っただってわけか。なかなか、カッコいいじゃねえかよ」

だったら、負けたられないな、と篠崎は吐き捨て、『聖剣伝説』ならぬ『魔剣伝説』に挑戦する。

今一度、どす黒い瘴気を放っている漆黒の剣を見る。

柄の部分には小さな髑髏や目玉、特に人が禍々しいと思うような装飾が施されていた。

刀身は、黒く、鈍く輝いていて、人を傷つけることに特化したかのように曲線を描く漆黒の闇。

「あれだよな。勇者になりたくないって言ったからって、なにも魔王っぽい奴用意しなくても」

そんな減らず口を叩きながらも、冷や汗が止まらない。

現代人の衰弱しきつた生存本能でも、この存在は危険だと警報アラームを鳴らしている。

きつと、勇者の剣とやらは、もっと綺麗だったんだろうなと思いつながら、彼は、『魔剣』を手に取った。

体の下、皮一枚のところを何かが駆け抜ける感覚がしたと思った

瞬間、体の内側を包丁で掻きまわされるような痛みが彼を襲う。

「ガッ!? ガ、ギい、ギイがガガアアアアアアアアアアアアアアアアア
あああああああああああッっ!?!」

人の声とは思えないような叫び声が、夜の学園に響き渡った。

体がくの字に折れ曲がる。

剣を掴んでいる右腕を見る。そこにはほとんど何かに侵食されるように、ゴツゴツとした黒い棘の様なものに覆われ始めている自分の腕があった。

「~~~~~ッ!?!」

人間に戻れないんじゃないか、化物になっってしまうんじゃないか、そんな思いが脳を駆け巡る。

そんな彼の思考を掻き消すように、体の中を包丁で掻きまわされるような痛みが彼を襲う。

剣を、離さねば、死んでしまう。そんな風に思えるほど、彼の中を駆け巡る痛みは尋常ではなかった。

しかし、彼は剣を離さない。これを離して、この挑戦が無効になり、二度と挑戦できなくなったりしたらと思うと、離せるわけがなかった。

そんなことを考えている内にも、黒い棘の浸食は進む。

そんなことを考えている内にも、掻きまわされる痛みは増す。

人間に戻れなくなると言った恐怖、それを上回る痛み。

しかし、彼には、それすらも塗り替えるような感情が、体の奥の方から、彼を満たしていく。

彼、篠崎 友は、所謂負け犬という奴だ。

何をやっても、何をどう努力しても、人並み以上に出来ることはなかった。

サッカーをやればボールに足を滑らせ、バスケットをやればドリブルしたボールが顔面にぶつかり、柔道をやればあえなく気絶する。

初めてやったことで上手く出来た試しなんて、一度もなかった。勉強だつてそうだ。努力しなければ、方程式のほの字も出てこない。得意教科の歴史や公民と行った社会科でさえ、普通よりはほんの少しできるぐらい。

そして極めつけは、いつも隣に居た才能の塊。白神 真。
なんでもやれば、なんでも出来て。

難であっても、難なくできる。

篠崎にとっては、所謂コンプレックスという奴だ。
だけど、彼は知っている。

なんでも出来た彼女は、なんでも努力をしていることに。
人前で努力するのが恥ずかしい、重度の恥ずかしがり屋であるということを。

だから、彼は知っている。

だから、彼は努力することを覚えた。

出来ないなら、出来るまでです。人には当たり前に行けることでも、自分には当たり前に行けないなら、精一杯頑張つて、普通にできるようにする。

何度も言う。彼、篠崎 友は負け犬だ。

努力しなければ何もできないような負け犬だ。

しかし、勝つて太つた豚に負けないぐらい、素晴らしいものを彼は持っている。

天才が持つ素晴らしいものが、才能と誇りだというならば。

負け犬が持つ素晴らしいものは、努力と意地であると。

負けて元々。地に這いつくばるのは当たり前。周りに笑い物にされ、死にたくなるような恥を覚えながら。

意地でも立ち上がり、努力を重ねて笑い物にされなくなった。

死んでしまいそうな痛みは味わったことはないが、死んでしまいそうな恥は味わった。

最後に、もう一度だけ言う。彼、篠崎 友は負け犬だ。

どうせいくら努力しても人並み以上には出来ない。

オオオオオオオオツ！！」

そう叫んだ瞬間、勝利の余韻に浸る間もなく、彼の周りに闇が取り巻く。

帯状の闇は篠崎の体を見えないぐらい取り囲むと、一気に圧縮し、篠崎ごと姿を消した。

残された、聖と魔の塚は、誰に見られることもなく、静かに姿を消した。

＝
＝
＝

「……あー、気分最悪のお目覚め。ついでに、見たことのない天井どころか、天井がない」

そんな捻くれたことを呟きながら目を覚ました篠崎。そんな彼が目を覚ました場所は、なにもない真っ黒な空間。間違えそうなので補足するが、真っ黒ではあるは、真っ暗ではない。

どこにも光源体などないにも拘らず、篠崎は自分の体を視認できる。

ファンタジーってなんでもありなんだ、とかフザケタことを考えられる余裕はあるらしいので、今さっきの痛みによるダメージはほとんど残っていないらしい。

とりあえず、彼は立ち上がろうとする。右手をつこうかと思ったが、上手く動かない。なんだなんだと思い右手の方を見てみると、「……………うわ。メルヘンにしてはグロいから、やっぱりファンタジー」

黒い棘のようなごつごつしたものが覆っていて、魔剣と同化している。

これ、このまんまだったらどうしよう？　と思いつつ、左手に力をかけてゆつくり起き上がった。

その時、彼の本能が横へ跳べと言った。

篠崎が飛びのいたあと、そこには巨大な腕があった。

いろんな生物を一切合財混ぜこぜにして、一緒くたにして、なんとか形を保っているような腕が。

篠崎は、顔を上げる。

『聖剣伝説』のあとには『魔物の巣窟』という不思議が現れるらしい。そんなことは知ったことではない。

彼がクリアしたのは勇者となるべき者が挑戦すべきものではない。いくなれば『魔剣伝説』。

そんなものをクリアした後には待っているものが『聖剣伝説』と同じであるはずがない。

勇者とは、弱いところから才能と誇りを胸にコツコツと強くなり、やがて魔王に挑むものだ。

魔王とは、レベル1でも、魔王なのだ。初めて戦う相手が、レベル100の勇者なのだ。

そんな奴に課せられる試練が『勇者殿』と一緒にわけがない。

顔を上げた先には、いろんな生物を一切合財混ぜこぜにして、一緒くたにして、何とか形を保っているような魔物が、一匹、5階建てのビルのような巨体を聳えさせ、勇者か魔王か分からない篠崎を睨みつけていた。

篠崎は恐怖に押しつぶされそうになりながらもあたりを見渡す。

篠崎とこの魔物以外の影は見当たらず、ただ延々と黒い空間が続いていた。

そこから推測するに、この魔物は、

「……合^{キメラ}成獣だ」

震える声を震わせながら、呟いた。

もう一度、改めてその姿を見る。

背中には鷲の様な黒い翼を悠然と構え、顔は獅子のように気高く、腕は巨人のように太く、後ろ足は馬のように逞しく、尻尾は禍々しい蛇が、口からは火を吐いている。

「……この空間に入ったのは、多分250年前」

だとすると、その長い間生き残るために、この場に居た魔物が喰

らいあった、そう考えるのが一番妥当だろう。

巨体というのは、それだけで脅威だ。

いくらノミが強大なジャンプ力を持っていようと、あのサイズの話であって。

いくら同じ大きさに仮定したところで、それは仮定の話であって。やはり、実際強いものは、強い。

合成獣が、篠崎を睨む。まるで待ち侘びていたかのように。まるで、倒されるのを待っていたかのように。

「ゴオウ……」

もはやどの魔物のうめき声か分からない。

辛かったのだろう、そう思う。

恐怖を感じる。

だが、恐怖はいつも感じていた。

可哀想とを感じる。

だから、見捨てるわけにはいかなかった。

いまだ見捨てると言う罪悪感を感じたことがない少年は、目の前の怪物を見捨てることなどできない。

だから、負けるわけにも、殺されるわけにもいかない。

この可哀想な生物を、殺すために。

「行くぞ、化物」

篠崎は、侵食された悪魔のような右腕を見る。

そして、それを構えた。目の前の化物に対して。体積が何十倍も違う存在に対して。

この剣では、殺すことしかできないだろう。

それでも、殺すことで、この可哀想な化物が救われると言っのな^ら。

喜んで、お前を殺すと。

篠崎は、何かを見捨てたことはない。

それが自分の力ではなかったとしても、見捨てたことはないのだ。だから、助けよう。

合成獣の口元が、大きく歪む。

それは、何百年も無意味に過ごしてきた生を嘲笑っているのか、それとも、目の前の小さき存在を見て久々に感じる生を嘯みしめているのか。

そのまま両者は大きく口を開いて、

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
アアアア！」

「ああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！」

負け犬同士、意地をぶつけあった。

まずは小柄な体格を生かして篠崎が突撃する。無謀にも一直線にそんな特攻は無意味と嘲笑うかの如く、巨大な馬の足が篠崎へと突き出される。

掠れば即死。正面衝突すれば熟れたトマトよろしく、18禁スプラッタな光景があたりに広がるであろう。

しかし、篠崎は、いつもの小市民な考えは消え失せていた。無限に分泌されるアドレナリン。沸き上がる不思議な力。それにまかせて、何と無謀なことか、大きく魔剣を振り上げる。それを見て合成獣もニヤリと笑う。どうやら知能は高いようだ。

正面からぶつかり合った両者。

魔剣いじと蹄いじがぶつかり合った。

大気を切り裂くような衝撃波。自分でもなんでこんなに力が沸いてくるのか分からなかったが、そのまま合成獣と拮抗する篠崎。

一瞬だけ拮抗した後、両者とも大きく弾かれる。

惨めにも受け身を取ることができず黒いだけの空間を何度も転がる両者。ほぼ同時に体勢を整え、再度ぶつかり合うために突進する。

合成獣の口から漏れたす火が、一層強まり業火と化す。

それでも構わず、篠崎は走り続ける。

ら『人は生きていくうえで』という論は置いておいて、彼の手で、殺そうと思つて殺したことはない。

魔剣が消えて、急速に一般市民に戻りつつある篠崎がこの後取るべき行動は一つ。

「おううエえええええええええええええええええええええええ！？」

吐瀉物をそこら中に撒き散らす。

罪悪感が、彼を苛む。恐怖感が、彼を苛む。責任感が、彼を苛む。だが、彼は、進むしかなかった。

罪を償うためにも、恐怖に打ち勝つためにも、そして、この化物の命を任せられるためにも。

篠崎は、こんなところでは、立ち止まらない。

「……で？ いつになったら『異世界召喚』とやらは、起きるんでしょーかね？」

最悪の気分を味わいながら、悪態をつく。

そんな彼の言葉に答えるかのように、魔剣を引き抜いたときと同じ帯状の闇が彼を取り巻く。

「……あっちについて、最初に何を言うか？ そんなの、決まつてんじゃねエか」

そんな言葉を残して、少年は黒い黒い闇にのまれ、姿を消した。

残ったのは、黒い空間に残る、唯一の灰色。

最後に生を感じた者の、残骸だった。

〓 〓

場所は次元を飛び越えて、異世界。

ここは、堅固で何重もの壁が魔の国ニーズヘッグとを隔てている王国。その名を、ファルム王国。ラジカル大陸の東半分でもっとも強大とされる国。

そのこの王都、永遠の名を冠するエターナル。その中心に大きくそびえる城。その下に広がる城下。

その城の一室で、ある異変が起き始めていた。

この国では異世界召喚術式というものを保有している。違う世界の人間に、自らある程度の手順を踏ませることで、こちらへの世界の接続とともに、その人間の資質も測れると言ったものだ。

これはちょうど250年前の英雄王が確立しており、大陸中に知られているが、その方法を知る者は王都でもほんの一握りの人間だ。その一室で、魔力の異常な震えを感知した老練な魔術師。王都でも知らぬものはないとされる大魔術師。世間一般からは『白翁』と呼ばれている。昔は『黒雄』と呼ばれていたが体の変化に伴ったことだった。

そんな白翁と呼ばれる魔術師は、目の前の魔法陣を見る。

(……何かが、来るのう)

そう思いながら一瞬で緻密な術式を展開。この異常を警備の者や王族と近衛師団長4人、そして今代の勇者、マコト＝シラガミに連絡する。

不審に思いながらも、彼はあることを思い出していた。

(あちらに行かせた者達からも連絡が入っておったのう。とにかく、型破りな奴がいると。それも、今夜破竹の勢いで)

そうこう思っていると、さらに震えが強くなる。ここまで長く生きてきて、ここまで濃く、深い魔力は指で数えるほどだ。

(確か、先代の勇者と今代の勇者　　あと、先代の魔王か)

もしかすると、それすらも凌ぐかもしれないと、表情を変えずに、蓄えた白い髭を撫でる。

もしかすると、歴代最強と謳われる初代の勇者と魔王に匹敵する可能性だってある。

(ふむ。型破りとは、言いえて妙じゃ)

驚きを感じつつも、やはり表情は変えない。

すると、一枚の岩を真つ二つに割ったような扉が、重いゴゴゴという音を放ち、開かれる。

(……魔力を通さんと、開かん仕組みのはずなんじゃが)

開けた者のことに呆れながら、薄暗い室内に差し込む光。そこにはいくつかの人影があるが、それを開けた張本人は、

「リード爺さん、なにがどうしたの？」

マコト「シラガミ。今代の勇者。肩で切り揃えられた白髪と、血のように紅い瞳が特徴の女の子。ちなみに、召喚された勇者が女性だったのはこれが初めてだったりする。

後ろからさす光を後光のように浴びながら、白神はリードと呼ばれた老年の男性の元に向かう。

その後ろには、この国を守る最強達。近衛師団長4人の姿がある。そして、それに守られるようにしてこの国の王、ガイア「U」ファルムと、王妃である、メディナ「U」ファルムの姿がある。

「いや、異常な魔力の揺れがあつてな。このような揺れ、召喚するとき以外ありえんのじゃが」

「あれではないのか？ 報告にあつた、型破りな挑戦者という」

そう言うのはガイア王。先代の王から王位を引き継いだ20も前半の王だ。王としては年が若いと言つても、その賢王ぶりは他国に名を轟かせている。力の籠った蒼い瞳と、それを際立たせる紅い髪。若さからか、溢れんばかりの力を漲らせている。

その隣には、王妃がいる。こちらはまだ年若く、もうすぐやっと十代が終わると言つたところか。しかし、若いガイア王を支える良妻ぶりは半端ではなく、なるのならメディナ王妃の様な女性になりなさい、と言われるほどだ。夫であるガイアとは逆に、燃えるような紅い瞳に、全てを癒すかのような蒼い長髪。

「今代の勇者様は、2人もおられるのですか？」

しつとりとしたつややかな声で聞くメディナ王妃。

「……………あの馬鹿」

白神は、内心気づいている。この魔力の震えを作っている人物の正体に。

一言でいえば、負け犬だ。

二言で言えば、負け犬であり、狼だ。

三言で言えば、負け犬であり、狼であり、獅子だ。いくら負けても、這い上がり、才能を努力でカバーする。

白神は、自分のことは天才だと分かっている。別に自惚れではない。圧倒的事実と、自分ができることを加味すれば、誰でも気づく。そんな天才の隣に、17年間、諦めることなく立ち続けた男だ。多くの人間が才能のせいにして白神を別格視して離れていくなか、天才だからなんだと言いながら、自分とは違うからなんだと言いながら、最後まで一緒にいた男だ。

その姿に普通に驚嘆したし、普通にカッコいいとも思った。それだけの、はずだ。

「……バカ、くんじやないわよ恥ずかしい。もう会えないと思って、あんなこと言ったのに」

アタシのこと、どう思ってる？

大事に思ってる。……大切だと、思ってる！！

思い出しただけでも、顔から火が吹き出そうだ。

顔を真っ赤にしていると、横から、声がかかる。

「どーしたの？ 勇者様」

「なんでもないわよ、バカ」

「？ 熱でも、あるのですか？ 顔、真っ赤ですよ？」

ふわふわとした金髪を肩で切り、優しそうな人懐っこそうな碧眼を白神に向けるのは、この国を守る最強の4人の1人。フィリア「ナナカトル」。

「ま、真っ赤なんかじゃないわよ？ ほ、ほんとなんだから」

「オイオイ、オレもまだ長いとは言えねえが、20年は生きてきたツンデレっていう奴に初めて会ったぞオイ」

「ツ、ツンデレ！？ バカ言ったらライカ、ふっ飛ばすわよ！！」

「怖ッ！？ まだオレの方が強いけどね」

「くうおおおおおぬうおおおおおおおお！！」

やんちゃそうな栗色の短髪に、やはりやんちゃそうな栗色の瞳を白神に向けながらからかうのは、この国を守る最強の4人の1人。

ライカ＝ベルドラーナ。

「からかってやるなライカ。年頃と言うのは、難しいものなんだ。お前だって16や17の時はこんなもんだったぞ？ 名言は『お、お前のことなんか、好きなんかじゃねえっ！』だったか？」

「包み隠さず言つなよシーナ！？ ちょっとはオブラートに行こうぜ！？」

「オブラートに包んだ結果があれだとしたら、お前、どうする？」

「……すみませんごめんなさい」

「……いい気味よ」

そんなライカのことを両手両膝つかせる相手、紫色でありながらまったく毒々しくないふわふわとした長髪を持ち、瞳も紫水晶アメジストのように透き通った紫色の女性は、この国を守る最強の4人の1人。シーナ＝アルメトリア。

「いい加減、静かに出来ないかねえ。ボクも、そう気が長い方じゃあないんだ」

「……」

「なんだあ。やればできるじゃあないか」

一言でこの癖者達を黙らせたのは、紅緋。男性にしては長く肩まで伸ばした髪、そしてどこか覇気のない瞳。そのどちらもが緋色である。

紅が指す色の意味。それは 強さ。

この男は、この国を守る最強の4人の1人。ダレン＝スカーレット。

その4人の格好は白銀の甲冑の背中にファルム王国のシンボル、賢さと知恵を司る最高位の龍種、ホワイトドラゴン『白帝龍』が描かれた布をたなびかせているといったものだ。

白神はあちらの世界から持ってきた制服の代えを着ている。

「で？ リード爺じい。型破りは、どこらへんまで型破りなんだあ？」

気の抜けた声を発しながらも重圧を感じさせる声。

それを受けながら平然とした様子で、リードと呼ばれた男性は、

「ふむ。そのお嬢ちゃんと、同程度といったところかの」
顎で白神の方を指す。

言われた白神は少し黙って、

「アタシと、同程度？」

信じられないと言ったような声を上げる。あの少年が、自分と同じ場所に来れるなんてのは、予想していなかったからだ。

「ふう〜ん。だったら、近衛師団長全員なんて、呼ばなくてもよかつたじゃん」

「……………暗に、アタシのこと馬鹿にしてるわよね」

「馬鹿にされたくなかったら、ボクに一度でも攻撃を掠らせてからいおーな」

「ぐぬぬぬぬぬぬ!!」

この1日で白神が得た情報は、自分よりも強い奴がいると言ったことだった。

今日、今さつき行なった仕合では、4人と手合わせして合計1分も持たなかった（交代する時間も含めて）。

最初の3人は、まだよかった。一度は剣を交えることができたのだ。

しかし、この男はいかにもつまらなそうな顔で、いつの間にか自分の前に立ち、首筋に剣を押し付けていた。

「いや、もしかすると、魔力の質や深さで言ったら、超えるかもしれないのう。ここに居る全員を」

『ツ!?!』

このことには、ダレンも含めて驚愕の色を隠せない。

白神も、魔術と言うのを教わっている。目の前の『白翁』は、先代の勇者パーティに参加していたという経歴を持つ、大陸でも最強の部類の魔術師だ。

それを超えるとなると、勇者や、それこそ魔の真髄、魔王と言ったものか。

まあ、なんにせよ。

それを見た、今代の勇者。マコト＝シラガミ。

小さく俯いて、こういった。

「友の、バカ」

このあと、ライカがまたツンデレだなんだとからかい大喧嘩になったことは言うまでもない。

第六話：Underdog（後書き）

はい。やっと異世界に行きました。

何で異世界に行くだけでこんなにも苦勞しなければならんだと、自分で書いてて思いました。

で、気づいたのが、次元に飲み込まれて「どこだここ？」展開はなんだかもうなあ、って無意識に思ってたみたいです。

見る分にはいいんですけど、書いてる方としては見たことある文章をまねてるようで。

なので、篠崎くんは、頑張らせて頑張らせて頑張らせまくって！！
異世界へと、旅立ってもらいます。

これからやっとファンタジーです。つたない作品ですが、どうぞこれからも宜しくお願いします。

ご感想ご指摘ご批判、お待ちしております。

第七話・Beelzebub's Mask(前書き)

遅ればせながら、第七話。そして第一章

『魔王の仮面』

どうぞ。

第七話：Beelzebub's mask

大理石が敷き詰められ、一本が大人が数人手を繋いでやっと囲めるような柱がいくつもあり、通常の意味の常識を覆すほどの輝きを放っている床には、絶対に安くない高級そうな赤い絨毯が敷かれている。その先にはまたもや石で造られた白い椅子が二つ。そこに2人の男女が座っている。まだ年は若い、そこに座るだけの風格は持ち合わせていた。

王と王妃。そこにはこのファルム王国を象徴する人間が座っていた。

ようするに、ここは玉座の間。絨毯を挟むようにして何人もの屈強そうな近衛兵が豪華な鎧を着用し、右手には槍が構えられている。そして、その王と王妃の隣には、この国を守る年若き最強四人。

王位継承と時を同じくして引き継がれた近衛師団長と言つ名。それに勝る実力を彼らは持っている。

それらに相對するように、白と黒が並んで立っている。

片方は、肩で切り揃えられた純白と形容するに相応しい白髪と、血のように紅い瞳の少女。今代の勇者、マコト＝シラガミである。

もう片方は何が気に喰わないのかむすつとしていて、ぴよこぴよこと跳ねている黒髪（寝癖ではない）を撫でつけながら、あまりやる気のなさそうな黒い瞳は怒ったように王と王妃を睨みつけている。ただのバカだ。と言ったら始まらないので、未確定者、トモ＝シノサキという少年だともいっておこう。

「（……ねえ？　なんで怒ってんのよアンタ）」

小さな声で横に立っている篠崎に話しかける白神。

「（ん？　怒ってない怒ってない。いや、なあに。何をどうやったから、あいつらを出し抜いて真を連れ返せるかっていうのをね）」

「（……バカ？　アタシ、帰りたいだなんて思ってないわよ。いつも通り人助けよ。終わったら適当に帰るつもりだったんだから）」

「（いいや、その後も軍事利用されるに決まってる。真は天才だけど、ドロドログチャグチャ系はまだ分かんないだろ？ こういうフアンタジーではそういう落ちがつきものなの。分かったか？）」

「（子供扱いすんじゃないわよ。それに、あの人たちはそんなことしないわよ。……多分）」

「（多分なんて信じられませんー。っていうか、またねって言ったのお前だし。だから、仕方がなく来てあげただけなんだからねっ！ほんとだからっ！）」

「（吐き気を催す御言葉ありがとう。どうぞ帰って）」

「ちょー！？ それは迎えに来てくれたナイトサマには失礼じゃね！？」

「アンタがナイトだったら世の中騎士だらけよー！！」

「ああ！！ それ僕のこと馬鹿にしてる。この上なく馬鹿にしてる！！！」

「だったら馬鹿にされないよう毅然な態度でもとりなさいよ馬鹿！！！」

うがーっ！ やら、きしゃーっ！ やら威嚇しあう二人を呆れ顔で見る重鎮、というよりトップたち。一名まったく興味をなさそうに欠伸をかいてる紅いやつもいるが。

なんで篠崎達がこんな豪勢な場所に居るのは、まあ王との謁見の為だが、あの子の事を説明すると。

篠崎が気絶して医務室に直行。そのあと、ただの疲労と寝不足であるだけ、と言うことが分かり、白神が枕元で「……よかつた」と呟き、ライカが「ツンデレツンデレ」と楽しそうに言っていると許容量を振り切った白神がライカと大喧嘩。シーナにいなされて終了、と言ったところだ。で、篠崎が目を覚ましたので、今に至ると。

「……すまないが、話を進めてもいいか？」

なんだか一番偉いはずの王が低姿勢で尋ねる。

「ああ、ホントすみません。このバカが馬鹿やって」

そう言っつて篠崎の後頭部をスパンっ！！ と平手打ちする。ぐぎ

っ!？ と倒れそうになるのをこらえ、怒るのも我慢する。この程度のことはあちらの世界に戻ったらいくらでもできる。

とにかく、この謁見を利用してどうにかこうにか言いくるめて、白神を連れ返そうと画策する篠崎。

いざとなったら魔剣を振り回してでも連れ帰るつもりだ。

「では、始める。そちらのシラガミ殿とは終わっているから、シノサキ殿と話を進めよう」

「……………わかりました」

物言わぬ重圧に渋々敬語を使う篠崎。本当はここで「真を還せ」といくらでも言うつもりだったが、出鼻をくじかれた感じた。

「我が国はこのラジカル大陸の東側でも大国と呼ばれるほどの力を持っている。実際に、魔の国ニーズヘッグの攻勢も凌げているし、他国からの侵攻も凌げている。しかし、力だけでは足りない。力だけでは、国民の信頼は得られないだろう」

「で？ それがどうかしたんですか？」

そんなそっけない態度には近衛師団長は気にも留めない。それは別に王の威厳よりも、命を重要視しているからか。

「だから、勇者殿たちの力を借りようと思う。こちらの勝手ながら、だ」

勇者？ として召喚された篠崎を前にそんなことを堂々と云ってのけるガイア王。篠崎はそれを気にした様子もなく、欠伸をかく。ちよっとした意趣返しのもりだったらしい。ダレンに向かってドヤ顔。しかし逆にぼやっとした顔で返された。

「で、だ。今代の勇者殿は2人いる。それは、こちらとしても嬉しい限りだ」

「いや、ゼロ人になるけど？」

篠崎はへんな駆け引きを考えるのが面倒になったらしく、頭をぼりぼりと掻きむしりながら一步前へと踏み出す。

「だから、真と一緒に帰るつってんだよ」

普段は小市民の彼が何故ここまで強気に出られるかと言うと、魔

なんか王様とかに礼も弁えない無礼の数々、本当にすみませんでした」

とにかくいつもの、アヤマレシヨウシミン 低頭友テイトーモ、になった篠崎友。いざというときの詫びを入れる方法ぐらいは知っているらしかった。その方法とは、とにかく謝り続ける方法だと、篠崎しよしきはその姿で語っている。

ぶっちゃけ、ジャパニーズドゲザだ。紅い絨毯の上で見事な顔面ドラミングを披露してくれている。そんな篠崎に困った表情を向けながら、王様が一言。

「頭を上げよう。そして私の方を見てくれ。でないと話が進まない」

「いや、ほんと、まじで、真剣と書いてマジで、すみまヒイ!？」
篠崎の頬をないか鋭いものが通過し、遠く後ろの方にある壁に突き刺さり、キイイイイン!! という音を彼の耳に刻み込んだ。

前にはつまらなさそうに何かを投げた後のダレンの姿があった。あまつさえ、欠伸さえしている。

とにかく、ヒイ!? というのは小物臭のする悲鳴だということ。彼は直立不動でガイア王の方を凝視する。

「……こほん。で、魔の国ニーズヘッグというのはラジカル大陸西側半分に広がるいわば魔界のことだ。主に魔族というものが暮らしており、手つかずの自然と濃い魔素が漂っている。そのおかげで通常の魔物でさえワンランク上の強さを保持している」

「でも、攻勢は凌げているんでしょう?」

「ああ。だが、さっき言った通り、それだけでは国民の信頼は得られない。そこで、異世界召喚術式を考案したんだ。それで、50年周期で最後の手順を作動させる」

「あとは、自分たちの意思でこっちに来させることで、この国との関係を良好に保つ、と?」

「ああ、そのとおりだ」

篠崎は内心舌打ちをする。そうだった、と。白神は、進んでこの世界に召喚されることを望んだのだ、と。

齒噛みする。自分は用無しだったのかと。

それを認めたくないのか、篠崎は王道たる質問をすることにする。

「あの……やっぱり、魔王サマとかは？」

「いたよ」

ああ、やっぱり、と篠崎は心の中で両手両膝をつきたため息を吐いた。

（あれだろ、魔王軍とかが城壁とかに突っ込んでくる……いた？）

そう。ガイア王は、現在進行形ではなく過去完了形で言った。真逆だ。

「ああ、それは先代の勇者殿が魔王から、魔王たる証を奪い取つてね」

「魔王たる、証？」

彼の心臓は破裂しそうなほど血液の供給を始めた。もしや、あの魔剣がそうなのではないかと。しかし、だとしたら最初の弱小武家の子供はこつちの世界には……。

「ああ、今からそれを見せに行こうかと思う」

「見せに？」

内心ほつとしながらも、もやもや部分はとれないまま、王の案内でその場を後にした。

＝
＝

「仮面？」

「ああ。この国が勇者を召喚する前から魔王に連綿と受け継がれてきた、まさしく魔の秘宝だよ」

篠崎はさっきの玉座の間を離れ一本の廊下を歩いている。おかしいと思つたのはその兵の数だった。

明らかに、玉座の間の人数の数倍はいるだろう。王の近衛師団長があの場合に居たということもあるだろうが、ただの財宝を警護するだけにしては、絶対におかしな量であると。

「それを王国の永遠にもわたる悲願を、先代の勇者殿がやってくれた」

「へー」

ぞんざいな返事をしながら、篠崎は行方不明となった稀代の天才とやらに思考を巡らす。

あの老警官が言ったように、まさしく稀代と評するに相応しい才能の持ち主だったようだ。今までの勇者が成し遂げられなかったことをやってのけたのだから。

「その仮面を被ると、まず最初に激痛が全身を苛み、それに耐えられたものに魔王の記憶を、そして魔王誕生、というわけだ」

「……………」

なんだか、あの剣を抜いたときに似ているなー、などと思う。

ついで、魔王の記憶などは流れ込んでこなかったが、あの激痛は半端ではなかった。痛みでショック死しなかった自分にびっくりするほどであるとは、篠崎談だ。

なんだか争いごとの話ばかりで辟易とし始めた篠崎は、少し平和的な話をしてみる。

「その、魔の国と手を取り合ったりしたことはないんですか？」

「あるよ」

そう答えたガイア王の顔は憎悪で歪もうとしているのを何とかこらえていると言ったものだったが、後ろを歩く篠崎は気づく余地もない。

「250年前から、その年の魔王と勇者殿が没するまで、平和は続いた。けど、悲劇は起こったよ」

それから、また闘争の輪廻が始まったとされるほどの輪廻。

茶々を入れたりする場面ではないと感じたのか、篠崎はこの質問は失敗だったなと思いつながら聞くことに集中する。

「魔族の1人が、一年に一回平和を祝う式典で、その式典場で、無差別殺人を始めた。民をかばった王が殺された瞬間取り押さえられたよ」

「……」

「やっぱり、失敗だったな、と思いながら聞くことはやめない。」

「尋問した。するとその魔族は『国からの命令だった』と言って、毒薬を飲んで自殺したよ。ニーズヘッグはそんな命令はしてないとの、一点張りだったらしいがね」

それは、なんとも生々し話して、少し寒気を覚えながら篠崎は廊下を歩く。

そうこうしている内に、より一層厳重な警備の敷かれている部屋を発見する。部屋というより、廊下と直接つながった廊下より少し広い四角い空間といったところか。天上からは光が差し込まれ、そのちょうど下あたりに何かが置かれている。

「ほら、あれが『魔王の仮面』だよ」

ガイア王が指さした先には、何十人もの精鋭の兵士に囲まれ、数名の魔術師の様な人間が四方を固めているガラスの様なものに入った目元を隠すタイプの漆黒の仮面だ。

「なんだか見たことがあるな、などと思いつつその仮面を凝視していると、何かに打たれたように体が沈みそうになる。」

「ッ!？」

それは誰にも気取られなかったようだったが、彼は頭の中に何かが入ってきたことを理解した。なにか、凄惨なほど残酷な、なにかの記憶が。それは断片的でしかなくまったく内容の分からない、ただ、悲しい、という感情のみが彼に流れ込んでくる。

近くに歩み寄ると、その禍々しい仮面は、なるほど、魔剣以上のおどろおどろしさを放っている。そして、それ以上の瘴気^{みじやく}。

「あの、どうしてそんなに危ないモノならこれを処分しないんですか?」

「出来ないんだ。煮えたぎる溶岩に放り込んで、近衛師団長たちに本気で破壊を頼んでも、傷一つ負わなかった。なにか特殊な術式^{マジック}がかかけられているとされているんだが、多分、古代魔術^{エレンヘンテママジック}が失われた魔術^{マジック}でね、それすらも分からない」

ちら、と篠崎よりも後ろを歩く師団長達を見る。気づいたのか、さっぱり、といった表情でお手上げ状態なようだった。

「けど、ここの警備状態、玉座の間より嚴重じゃないですか？」

魔王の証たる仮面が魔族の手から離れた今、統率者たる魔王がないニーズヘッグなどそれまでに比べれば格段に弱いだろう。そして、ここまですなくとも、ここまですたどり着けることはない、と、篠崎は安易に考えていた。

「ああ、それは」

全部言い終わる前に、光を取り入れていた天窓を割る音がする。

そして、光を差し込ませていた光から、薄暗い影に。

黒。全身黒づくめの何かが、天窓を突き破ってこの空間へと侵入してきた。

誰かが、こう呼ぶ。

「『ナイトウォーカー夜を駆る者』」

その黒い存在は仰々しい黒い剣を持っている。篠崎は魔剣に似た感じを受けたが、それよりは格が下の様な感じを受ける。

それを空中で振りかざし、狙っているのは『魔王の仮面』。

「させると、思ってたのかあ？」

こんな状況でも気の抜けた声で、ダレン「スカーレットはその剣を受け止めていた。ギーン！！と鈍い金属がぶつかり合う音が四角い空間に反響する。

しかし、室内の警備は慌てた様子もなく、淡々と臨戦態勢に入っていた。

場馴れしている、そう感じた。

その間も空中では刹那の攻防が繰り広げられていた。あの、近衛師団長の中でも別格の実力を持つダレンとナイトウォーカーと呼ばれた存在は剣を打ちあっている。

重力によって落下する侵入者は、ダレンの相手をしながらそれで

も『魔王の仮面』に意識を向けていた。その体に無数の傷がつくのも厭わずに。

「仮面を、返せ……」

聞こえてきたのは凜として透き通った女性の声。

それに対してめんどくさそうに、

「やだね」

そう返答したダレン。2人はやっとのことで地面へと着地する。

しかし、この状況。この場に居るのはダレンだけではない。数十名もの精鋭たちに、王国最強の近衛師団長。状況は侵入者に圧倒的不利だった。

相対する黒と紅。どちらも並の実力ではないことはド素人である篠崎にも十分理解できた。

周りの兵士たちも黙ってはいない。魔術師と思われる人が何かを呟く。そして次の瞬間、いくつもの魔法陣が侵入者に襲いかかった。侵入者はそれを気にも留めず、片手で魔法陣を砕くと、それに対応したように魔術師たちが意識を失い床へと倒れる。

「……だから、面倒事は起こすなと、いつてるだろおが」

「……だから、魔王の仮面を返せと、いつてるだろおが」

2人の体から痛いほどの何かが発せられる。ビリビリとなにかがこの空間に張り詰めた。

殺気。隠されない殺気は、素人である人間でも感知できるほどに、体を打ちすえていく。

「オレたちを忘れてねえか？」

「むっすう！！ ってやつですね」

「私は別にいいけど。放置プレイは嫌いだけど」

最後のシーナの言葉に若干引きつつ、悠然と構えていた残りの師団長が、やはり悠然と歩みよってきた。それを見た侵入者は「チツ……」と舌打ちをし、辺りを見回した。

そして、黒と黒は、目があった。

初めてはつきりと顔を見る。黒く艶やかな長髪をポニーテールに

し、篠崎と同じような深い深い黒い瞳が、彼を見据えて驚愕に染まる。

そして、素人しやうじんには訳が分からない速度で、いつの間にか目の前に来ていた。その行動には師団長達も予想外だったのか対応が遅れる。しかし、今更やってきたところでもう手遅れだ。この女性の手には、漆黒の剣が握られている。この至近距離であれば、命を駆り取ることは容易だろう。

「なにしてくれようとしてんのよアンタ!!」

そう。篠崎の隣には、勇者殿がいる。腰に下げていた剣を一瞬で引き抜き、軽々と操り侵入者の側頭部めがけて振り上げた。

それを受け止める侵入者。しかし、白神が握っていたのは普通の剣ではない。

聖剣。闇を葬る、絶対の武具。

受けた切っ先から膨大な光が爆発するように侵入者を襲った。「グツ!?」と苦悶の表情を上げて回避。もう一度あたりを見渡し、篠崎に一瞥をくれた後、「チツ……」と悪態をつき、凄まじい速さで飛び込んできた天窓へ跳躍した。

「逃がすわけないでしょうが!!」

白神が聖剣を大きく立てに振るう。すると、壁の様な光が侵入者に向けて放たれた。

それをチラッと見ると、漆黒の剣を一閃。同じく現れた闇が光を相殺している内に、その姿を消してしまった。

残された（追いつけていないほうの意味で）篠崎は、一言、

「……えっと……さっぱりですなアツ!!」

|| || || ||

「『ナイトウォーカー』
夜を駆る者』?」

この被害を修復するための作業が目の前で行われているのを眺めながら篠崎は白神でもなく王でもなく、ライカ＝ベルドラーナに話を聞いている。白神はなんだか思いつめたようにどこかに行ってしまう、王族は避難だなんだといってどこかに行ってしまう、師団長フィリアとタレン2人はそれを護衛する形で随伴した。

で、残っているのは警備の兵士と師団長2人。ライカとシーナそして、取り残された(全てにおいて)篠崎は、今さっき襲った人物についてライカに話を聞いている、という状況だ。

「ああ。魔族の美人さんだ」

いや、違うだろう、と思いつつも話を中断させるのも億劫なので黙っておく篠崎。

そんな彼らの目の前では「救護班は倒れた魔術師を」などとシーナが指示を出している。どうやらライカはサボっているようだ。

「先代の魔王から仮面を奪ったときから、何度も襲撃してくる奴だな？ あの真つ黒エ格好から、夜を駆る者なんて呼ばれてんだよ。まあ、美人さんなんで、こつちとしちゃあ目の保養に」

その時壁にもたれかかっていた篠崎とライカの間に鋭いなかが突き刺さった。天窓のガラスのようなものの破片だ。

何事かと思い、飛んできた方向を見る。

そこには、満面の笑みを浮かべたシーナが何かを投げたフォームのままこちらを見ていた。

般若だ！！ 笑みを浮かべた般若がこちらを見ていらっしやる！

！ と篠崎は心の中でひきつった笑いを浮かべていたりした。

ライカもひきつった笑みを浮かべながら小さな声で、

「(む、無視というか、気にしてませんよ的な雰囲気で行こう)」

「(お、おう)」

涙目のライカには、なんだか親しくなれそう、と思う小市民だった。

「で、時々襲ってくるんだ」

「いや、三日に一回はくるぞ」

「……なるほど、道理で場馴れしているわけだと」

「おかしいよな。もうすぐ全部終わりだってーのに、さっさと降伏した方が、どっちも被害が出ずのにすむのに、な」

どこか寂しそうにそう呟くライカ。

しかし、解せないところがある。

「もうすぐ終わりって言うのは？」

「ああ、言葉の通りだよ。あと少しで、魔の国は終わる。

均衡も、なにもかも、全部終わる」

「えっと、均衡云々は」

「いや、均衡は保っている。こつちがな」

なるほど、総力戦で同じ力を持つ勢力同士がぶつかり合って自然に作られる均衡ではなく、人為的に保たれている均衡、というわけか。篠崎は何だか騙された気分になりながら、もう一つの疑問をぶつける。

「だったら、勇者召喚とかしなくていいんじゃない？」

「勇者の価値が戦力だけにあると思ってたら、それは大きな間違いだな。勇者の意味は、その強さではなく、その偶像性カリスマにもあるんだ」

いるだけで効果を上げる。ようするにマスコットキャラクターとかだろうと適当にあたりをつける。

「今回の勇者召喚で、ホントのホントに、決着をつけるつもりだよ。ガイア王はな」

全ての連鎖を、終わらせる。

なんだかとても危うい時期に呼び出されたと、厄日に起こったこととは連鎖するのかと、少し涙目になる。

「……鬱だ。毎日が厄日の生活が、これから待っていると
いうのか」

「お、おい？ 何で泣いてんだ？」

「……心の浄化のため」

涙でぼやける視界の中、今回はどうにか奪われなかった『魔王の

仮面』を見る。

「なんだか「見たことがあるなあ、どこだったかなあ……」と既視感を覚えながらも、これから来るであろう波乱万丈（泣）の人生について思わず笑いがこみ上げる篠崎だった。

第七話：Beelzebub's mask（後書き）

とりあえず狂戦士 小市民へと戻った篠崎。

次は、まほーとかけんじゅーつとかですかね。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第八話：What is the importance of the c

今回はギャグに走りました。ギャグです。

いや、ギャグ未満シリアス以上です。意味分かりません

それでは第八話

『猫耳の重要性とは？』

どうぞ。

まだ、昼だった。篠崎が不思議を看破したときは確かに真夜中であつた。

つまり、彼の中には時差が生まれてしまったわけである。リードが言うには、

「うむ。この世界とそちらの世界には物理的ではない距離というものがあつてのう。お主が解いてきた不思議という奴は、その距離を結ぶ道を繋ぐための手順での。そちらからこちらまで、その道を通る時間がかかつておる、というのが、昔からの説じやのう」

らしかった。そういうのはまったくもって分からない、というか帰るつもりなのにそんな知識に汚染されて帰ったら、絶対にアブナイやうに見られる。そう思いながらも覚えなきや始まんないんだらうなーと思い、篠崎は自室に連れて来られていた。

というより、この時差が表わすものといえば、一つ。

「……死ぬほどお腹が減った。うん、死んでしまふぞうだ」

ベッドに突っ伏しながら死にそうなる声で呟く。本当は叫びたいところだが、それだけの気力すらない。

気を紛らわせるためにこれから過ごすことになるであろう自分の部屋を眺めてみる。

「豪華……。うん、豪華」

今まで見たことがないようなふかふかのベッド、シャンデリア、とまではいかないが装飾が施された照明。歴史的に価値がありそうな調度品の数々。

うは、すごいな、とぞんざいに呟きながらも、お腹がぐるぐる、と反乱を起こすすんぜんなまになつていた。

「……家具じゃあ、お腹は膨れませんよー」

うなー!!! と最後の雄たけびを上げてみた。

その時、救世主のような声が、

「シノサキ様、ご飯の用意が」

そこまで聴いただけで十分だった。そう、彼がその声の主に飛びかかる理由には。

「メシイいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

「キヤあアあああああああああああああああああああああああああああああ
あああ！？」

瞬間、篠崎の鳩尾に鋭いアッパーカットがめり込んだ。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい。勇者様を殴ったりしちゃつて！！」

「もぐもぐもぐ、ごきゅごきゅ、うまうまめりもぐ、いへ、らいろーふれす、おはんはへたらはいふひみひら」

『いえ、大丈夫です、ご飯食べたらいふひみひら』と篠崎は言っているつもりだ。

そんな彼に平謝りをするのは新たな小市民の登場を思わせる謝りっぷりを見せつけている、猫族のメイドだった。この世界には人族や魔族のほかにも、猫族やエルフ、ドワーフにアンデッド、龍族などなど、まあ王道を突き進んでいるとのことだった。

篠崎に平謝りを続けているメイドは人の方の血が強いのか、肌は毛むくじやらになっておらず、茶色いふわふわとした髪の毛の間からネコミミ、フリフリのスカートの後ろからは茶色い尻尾が、にゅつと出ていた。

(めのほよーめのほよー)

「あ、あのあの。このことは、内密に……」

猫のように瞳孔が縦に開いている碧眼を篠崎に向けながら、ネコミミメイド少女は謝り続ける。

「え？ 何を？」

「え、えつと、シノサキ様を、その、殴ったことを……」

「ん？ えつと、え？ いや、言わないよ？」

「そ、そうですね。あんなに深く食い込んでいましたもんね。そりゃ、言いたくなりますよね。けど、そ、その、わ、わたしを、好きにしているの………え？」

なんだか男にとつて至福な言葉が聞こえた気がしたのだが気のせいだと思ひ首を振る。

「えつと、その」

「大丈夫大丈夫。あれぐらい。そりゃ、暗殺者とかだったら言うかもしないけど、……見えないし。友だちとかの間だったら、フツ―フツ―」

そう言いながら果物をそのまま絞ったかのようなジュースが入った金属製のコップを傾ける。酸味と甘味がいい具合に混ざっていて、凄く美味しいと笑みをこぼす。

空腹状態に人は堪えられない。

お腹が幸せな感じに満たされていけば、人はほとんどのことを許せる。まあ、篠崎だと大体のことは許しそうなのだが。

「ん、ごちそうさま」

「お、おそまつさまです」

ああ、そういえば日本人が召喚されてたのか、と思ひながら篠崎はメイドに視線を向ける。

「ありがと。うまかったうまかった。そして今、真に会った時以上に安心な状況に陥った僕は、ヒジョーに眠気に襲われてきたと君に報告する。おやすみー」

そういえばまだ一睡もしていないことに気づくと、眠気が急に襲ってくる。お腹もいい具合に満たされ幸せそうな顔を浮かべ、ベッドに体を沈めた。うとうと、うとうと、としていると、

「あ、あのー！」

「みゅ？」

あとちよつとでいい感じに眠れたのに、と渋々顔を上げる。

「そ、その。ありがとうございました。わたし、リアって言いませ
す！」

「う、うにゅ？ 僕は、しのさき、とも、うなー」

そうして、極限状態の篠崎は意識を手放した。

|| || || ||

魔力とは、大気に存在している魔素を生物が呼吸などで体内に取
り込み、精製、変換することによって得られるものである。

魔素が薄い場所では魔力が回復しにくいし、魔素が濃すぎる場所
では逆に体が精製する作業に追い付かず魔素が体内に直接残留して
しまい、体細胞を破壊する。

しかし全ての人が同じような精製能力を持っているわけではない
し、一度に体内にとどめておける魔力量は人によって異なる。

以上が、次の日叩き起こされた篠崎が聞かされた最初の言葉だっ
たりした。

「……言っておく、寝起きの僕は、非常に機嫌が悪かったりする。

分かる？ フィリアさんとやら」

「分かりません」

只今お二人はお城の御庭でお勉強、といったところだろうか。緑
の芝生が青々と茂っていてぼかぼかとした温かいお日様のもと、白
い円形テーブルで金髪碧眼美女とおしゃべり。普通の男なら狂喜乱
舞しそうであるが、生憎篠崎はちゃんとしたお付き合いはしたこと
ないが、いつも白神という美女が隣にいた男だ。美人耐性は結構つ
いていたりする。

まあ、白神にはないものには目が惹かれるが。胸であつたりお尻
であつたり。

生憎ながら、目の前の美女は白神より少々胸が大きいぐらいだっ
た。

「この程度、勇者様は一回で理解されましたよ？」

「その、勇者様つてのはやめたげてよ。名前で呼んでやろっぜ？
道具じゃねえんだからさ」

「この程度、マコト様は一回で理解されましたよ？」

「なかつたことにされた！？ 自分の過ちをなかつたことにされた
！？ かなり強かな女性とお見受けする！！」

「では、講義を続けますよ？」

「……………そして、ツツコミは無視。理不尽だ」

「なんだか白神と自分との扱いの差を感じながら、もしや、こいつ
百合か？ などとぼやいていると、

「魔力とはこの世界に干渉するためのものです。体で魔力を作り、
魔力で魔術を発動させる。おおまかには、こういったものです」

「全てを無視される悲しさを覚えながら、一つ一つ頭に叩き込んで
いく。こつこつを聞き流して何かを出来るほど、篠崎は優秀な人
間ではない。」

「分からないなら、分かるまでやるしかない。」

「なので、ここは文句を言わずに聞くことにしたようだった。不満
だが。」

「魔力を世界に受け渡すことで、世界に不自然な現象を起こしても
らう。体とは魔力を作る工場とともに、その魔力を世界に送る發送
所でもあるわけです」

「比喻表現ありがとう」

「いえいえ。けど、頭では分かっても実際に出来なくては意味があ
りません。とりあえずやってみましょう。まずは魔力を体から出す
ことから」

「そういうとフィリアは机の下から人の頭ほどもある巨大な水晶を
とりだした。篠崎は、それで殴打するんじゃない？ と内心失礼なこ
とを考えていたが、もちろんそんなことはしない。」

「それをドスン！！ と机の上に置くとニッコリ笑って、

「はい、やってください？」

「いやムリだろ！？ 理屈説明しただけでできると思ってんのか？

それ平仮名を子供に教えた後に漢検一級の漢字読めつつってのと一緒だぞ!？」

「ひらがなやらかんけんやらは分かりませんが、できる人にはできるのです」

たとえばマコト様のように、と付け加えるのは忘れない。

「あと、魔力には属性があつて、基本属性の火、水、土、風、雷、氷、そして選ばれたものしか使えない光と闇。伝説には基本属性全てを使い、光か闇、どちらかを使える者は、無属性の魔術が使えるとされますが、大丈夫です。考える必要はありません」

馬鹿にしている。隠すつもりもなく馬鹿にしている。

(今は雌伏の時だ、篠崎 友オ!!!)

うおおおおおっ!!! と誰に聞かれることなく叫ぶ。もちろん、全てを受け止めてくれる心の中でだ。

「ちなみに、闇属性の魔力を持った人は、魔王に大犯罪人など、悪人が多いです」

「うがーっ!!! なんですか? それは魔力が魔王さまっぽかった僕に対する当てつけでございませうか!？」

「いえ。忠告です。ここで下手に闇属性だとかになると、魔族を過激に弾圧する派閥に、命を狙われることになるでしょう」

そんなことをサラリというフィリア。

分かっていたはずだった。ここは甘い幻想で満たされたメルヘンではなく、ちゃんとした人間がその意志を持って普通に生活しているファンタジーの世界だと。

笑えない。ドロドロのぐちゃぐちゃだというのは、本当だということだ。

とりあえず、篠崎は目下の不思議を聞いてみることにした。

「心配してくれてんの?」

「違います、忠告です。ああ、大丈夫ですよ? もし闇属性だったとしても、言いふらしたりしませんから。私はこれでも良識人のつもりですのぞ」

「……オーケー」

篠崎はやり方も分からないまま水晶に手を当ててみる。

（魔力を放出魔力を放出魔力を放出魔力を放出……できるわけねえだろコンチクショウ！！）

とりあえず水晶をゴツ！！と力強く掴んでみたが、逆に手が痛くなった。

（あるえ〜？ その、勇者補正とかはかかったりしないのでございましょうか？）

割と本気で握ったのだ。魔力は放出したりすることはできなくとも、パリン！！ぐらいいいきそうなのだが。

「何をそんなに力んでるんですか？ バカですか？」

「バカだよ！！」

辛辣な言葉を並べまくってくるフィリアに涙しながら、健気な篠崎はとりあえず力みまくる。

「ふう……。イメージとしては、体の中に何かが流れていることを感じ取り、それを押し出すようにして魔力を使います」

「馬鹿にしたような溜息ありがとう。そしてどこかで聞いたことがあるような説明御苦労さま。まあ、やってみるよ」

とりあえず、恥ずかしいが体の中に流れているものとやらを感じ見ることにした篠崎。

目を瞑る。

（カラダの中に流れる何か、ね。イメージとしては、血液、かな？ 魔力、か）

そういえば、とあの黒い空間でのことを思い出してみる。

あの時は、魔剣を出し合成獣を焼き切った後、魔剣は独りりで消えた。そしてその後、体の中の何かがごっそり持っていかれるような倦怠感に襲われた。おそらく、あれが魔力という奴なのだろう。

（……流れる。なが、れる。な、が、れ、る。……これか？）

あった。生まれたときから貴方のそばに居ましたよ、的な気軽い感覚で体の中に居た。血液とはまた違った感覚で、意識を向ければ

流れていると知覚できる。

（これを、押し出す感覚、ね。まあ、やってみるか。失敗しなかったら、得意だったよ！褒めてよフィリア先生！！　ってことで）

一瞬、フィリアの背筋を気色の悪い何かが這ったが、あたりを見回すと、誰かが魔術を使って呪いをかけたというわけではなさそうなので放っておくことにした。そのことで何かを傷つけられたような気がした篠崎。泣きそうになった。

（……あれか？　押し出すっていうのは、圧力かけて空気押し出すみたいな感じでいいのかな）

流石現代人だ。妄想力だけは逞しい。

しかし、この時代ではそういった妄想を手助けするような事柄がない。そして、その妄想については言葉が悪いが、想像力が魔力を操る力に比例する。

（あれか？　体を一個のポンプとして考えて、手の先を蛇口、そして、汲み上げた水を押し出すように……）

そのとき、水晶に反応があった。

「へえ。出来ましたか。驚きです」

まったく驚いていなかった。

「で？　僕の属性はなに？」

一応、褒めてよフィリア先生は保留にしておくことにしたらしい。水晶の中では様々な色が交差し、回転している。多分、紅が火属性なんだろうとか考えつつ専門家であるフィリアの意見を待つことにした。

「……火、水、風、土、ほかに、え？　これ、は」

フィリアの碧眼が揺らぐ。まるで見たこともないようなバケモノを見たときのように。

次の瞬間、水晶が砕け散った。

「キャ！？」

「のわ！？」

そして、一瞬の沈黙。弁償させられたらいやだなーとか場違いな

ことを考えている篠崎は置いておいて、フィリアの顔は驚愕に染まっている。

「……今のは、魔力量だけで？　けど、そんな、師団長でも、こんな素人が……けど、リード様でも本気で入れなければ割れないのに……」

「あの一、フィリアさん？」

「……今日の授業はここまでです。このあと剣術について、ライカ兄さんに聞いておいてください」

そういつとフィリアは椅子から立ち上がりその場から立ち去ってしまった。

「んー、放置プレイ？　わ、わたくしはそんなことで快感を覚えるような変態ではありませんのよ!!」

一人でボケると言うのは、なんだか、死ぬほど恥ずかしかったらしい。

一人、城の中を足早に歩くフィリア。歩くたびに揺れる金髪が今だけはなんだかとても鬱陶しく感じる。

そんなフィリアがそこまで取り乱しているのは、

（あれは、闇。違います、そんなことぐらいでは、揺らぎません）
そう。様々な色が蠢く中、たしかに全てに染まることのない黒が混ざっていた。

しかし、そんなちっぽけなことはどうでもいいと吐き捨てるように、歩く速度をさらに上げる。

（あの水晶は、圧倒的魔力量を流し込むことでも壊れます。しかし、彼からは、そんな魔力感じられなかった）

あの時の篠崎の体には、フィリアが少し慎重に感知しなければ分からなかったほどの魔力しか放たれていなかった。

つまり、篠崎はほとんど魔力を出していないということになる。

（そして、あの水晶を攻撃以外で壊す方法はもう一つある。

)

無属性。そう歩きながら、誰にも聞こえないような声で呟いた。

(無属性の色は、透明色。その圧倒的威力ゆえに、この世の色では顕されないとされました)

誰に説明するでもないのに、頭の中で丁寧な口調で情報を整理するフィリア。

彼女は、もう一人だけ、知っている。無属性が使える者を。

彼女が一番尊敬する人であり、彼女が一番敬愛する人である。

(……………ダレンお兄ちゃんと、一緒だなんて……………ツ!!)

彼女の脳裏に浮かぶのはいつも面倒くさそうに欠伸をかきながら、魔族の大軍を蹴散らしていく姿。小さなころから向けてくれる笑顔。

(……………ふ、ふふ。このことは、黙っておいてあげましょう。けど、覚悟してくださいね? どっちつかずの風来坊さん?)

すれ違ったものが引くぐらいの歪んだ笑みを浮かべながら、擦り減らした精神を回復するためにダレンの元へと向かうのであった。

まあ、昼寝をしている横で、笑みを浮かべている程度なのだが。

|| || || ||

今さっきの庭での昼下がりに、

「ぐへ!?!」

情けない悲鳴が響いた。とにかく、狙っているとしか思えないような悲鳴が今さっきから続いている。

「ううん。もうヤメたほうがよくな?」

「いや、あとは10本は」

「死んじまうぞ?」

「大丈夫、結構打たれ強くできた体……………だと思い込んでるんで!」

そういうのは我らが主人公、篠崎 友。その手にはよくある木の棒が握られている。まだ立ちあがっているのなら格好はつくが、立ちあがって仕合を挑む、十秒後に地に伏す、というのがかれこれ一時間は続いているだろうか。

そんな彼に仕合というか鍛錬を頼まれているのが、ライカ。茶髪がナイスなイケてる男だ。昨日今日で分かったものではないが、メイドなどにいろいろ声をかけているところから女ったらしということとは分かった篠崎。

謁見の間でも見せたあの實力。虚構でも何でもなく、歴然とそこにある事実だったわけだ。

「じゃ、行くぞ!!」

「はっは!! 熱い奴は嫌いじゃあないねエ!!」

篠崎が突っ込み、ライカが受ける。

これは鍛錬なのでライカはまだ攻める段階ではないと踏んでいるのだろう。一方的に木の棒を振り回してくるのを軽くいなす。攻めなければ攻撃できないというわけではないが。

篠崎は木の棒を振るう。素人以上達人未満といったところか。ようするに、普通である。学校の授業で剣道があり、西沢と練習していたところ、見事にぼこぼこにされたという経歴を持つ篠崎。まあ、死に物狂いで練習をし、なんとか人並みにはなれたが。

カンカン!! と木特有の乾いた音があたりに響く。

篠崎は汗まみれ息ぜーぜーと言ったところで、ライカは若干汗は滲ませているものの息は切らせておらず、両者の實力の差が見える。「ほら、一直線に突っ込むから。こうやって力を利用して、ひっくり返されるんだ、よ!!」

「のオツ!？」

篠崎が一步踏み込んだところでライカが屈み、足払いをかけた。踏み出した直後を狙われたので重心も取れず、あえなく地に伏すこととなった。

空は、青かった。

「うん、マコトが天性の勘だとすると、トモは努力による経験則みたいなもんだな。マコトが野性的なのに対して、お前には明確な型がある」

それもそうだ。一度やれば何でもできてしまう、いくつでも応用が利いてしまう白神と違い、篠崎は一つだけを一生懸命に努力し、それでも極められることはできないが、やっとのことで安定するといったものだ。

実力の差。多分、目の前のこのおちゃらけた男は、才能は白神と同等、努力は自分より行ってきたのだろう。

「まだ召喚術式による恩恵が得られてないってのも、あるかもな」
「恩恵？」

「ああ、実際のところ、お前が召喚されて一日も経ってないんだぞ？ まだ力が体になじんでないだけなのさ。まあ、その恩恵に耐えられるだけの資質を持つ者を選ぶのも、あの選定にはあつたんだがな」

選定というのは、あの七不思議のことだろうとあたりをつけた。

「もうすぐのはずだぜ？」

そうライカが言った瞬間、篠崎の体に溢れんばかりの力が沸き起こる。今さっきまで体を襲っていた痛みも薄らいでいく。

「……っすげ」

「お、来たみたいだな」

沸き起こる力とともに、もうひとつ、何かが沸き起こってくる。

「急に上昇すると、力つてのは行き場を失っちまう。今、すっげえ体動かしたいだろ？」

そう。それは躍動したいという強い欲求。体が疼いて仕方がない。そわそわと、走るだけでもいいからこの有り余る力を発散しようと、脳に直接訴えかけてくる。

するとライカが薄く笑う。

「こいよ、トモ。お前が大丈夫ってんなら、いくらでも相手してやるよ」

「……つのおおおおおおおおおおおお
おー！」

その日、ボロボロのくたくたになった篠崎が庭先で見つかった。

|| ||

「……あ、キレーなしょうめ……知らない天井だ」

これを言わないと始まらないと思ひ直し、篠崎は言い直す。

彼が目を覚ましたのは彼の自室。メイドに殴られてご飯を食べて寝た記憶しかない、あっさい歴史しか持たない自室だ。

あたりを見渡す。昼にしては暗いな、と思う。

「……外にはキレーなお月様が浮かんでおられます。それも、紅い
夜だった。

覚えているのは、自分の力の捌け口となってくれたライカに礼を
言いながらボコボコにされたところだろうか。今思えば礼を
言いながらボコボコにされるって、マゾじゃん、とぼやく。

「……ん。お腹、減ったな」

そういえば、朝叩き起こされた後、メイドのリアが用意してくれ
たフレーク状の朝ご飯を食べて以来何も食べていない篠崎。恩恵が
体になじんで、アドレナリンが大量に分泌されていた昼間は空腹を
感じなかったが、それが落ちてきてきた今となっては空腹という腹
からの砲弾が脳味噌に爆撃してくる。

そして、なんだか黒いシャツに毛が、猫の毛の様なものがひつつ
いている。さらに、いつの間にか体に包帯が巻かれていた。しかし、
それを気にする気力がないようで、

「……うなー。メイドさん、メイドさーん。うなー。うなーうなー
うなー」

どうやら、篠崎は空腹したり満腹になったりすると、うなーとい
うのが口癖らしい。彼なりの感情表現だろうか。これで感情を拾え
るものがあるとしたら、とんだ電波系少女だろう。

「うなー。腹、腹が、あとちよつとで革命を……」

そのとき、コンコンとこれまた古めかしい木で作られた扉の方からノックの音が聞こえる。

メイドさんか！　と期待を寄せて扉の方へ向かい「ちよちよお待ちを」と声をかけて引き扉を開けた。

予想通り、そこにはメイドさんがいた。ネコミミメイド、リアだ。

「おっおー。こんばんはリア」

「こんばん、はです」

「????」

リアはその碧眼を少し潤ませ頬を上気させていた。熱でもあるのかと心配する篠崎だったが、とりあえずご飯が欲しいらしかった。

「夕食をお持ちしました」

「んー。ありー」

篠崎は真つ暗な自室に自分よりも頭一つ分ぐらい小さなメイドを招きこむ。見る人が見れば、いかがわしさマックスだ。

「今日つのごっはんはなんだっるな」

篠崎は先に机につき、ワクワクしながら体を揺らしている。ここに来て、篠崎満腹キャラ説が浮上してきた。

キャリーの上に乗せてあった皿を篠崎が座って待っている机の上につつしながら、

「キュアフィッシュという回復効果の高い魚のマリエと、フルミナントデイツシュという治癒能力を一時的に高めてくれる野菜のサラダ、そして、^{ドラクーン}亜竜種の骨を煮込んで作ったスープに」

スラスラと練習でもしてきたかのように料理の説明をしながら銀色のドーム状のアレを丁寧の外す。篠崎の鼻孔を素晴らしく幸せな匂いが占領していく。

「リ・ア・サ・ン？　食べてもよろしいでございましょうか？」

「えつと、はい……」

そういつて俯いてしまいうリアに疑問を抱きながら篠崎はフォークとナイフを手を取った。作法なんてまずそんなものはゴミ箱に捨て

たのか、ガツガツと酒場で飲んだくれていた冒険者のごとくいろいと見栄えのいい料理を胃袋に納めていく。ここまで爽快な食べ方をされると、作った方も逆に嬉しくなるだろうことは間違いない。そこで、リアが気まずそうに、

「あ、あの、何も、覚えておられないの？」

「ふえ？ もむもむ、まみを？ うまうま。むまむまむまむぐーッ！？」

「し、シノサキ様！？」

「しえ、しえなか、しえなかさしゅって……」

どうやら詰め込みすぎた食べ物を喉に詰まらせたようだ。とりあえず口の中に含んでいるものを吐きだせばよいのだが、女の子の手前、そんなモノを見せることができるほど落ちぶれてはいなかった。トントンと背中をさすったり叩いたりしてもらっていると、なんとか意地と根性で飲み干すことができた。負け犬スキルの無駄遣いである。

「ごきゅごきゅ……うまー！！」

どうやら喉に詰まったことを懲りていないらしく、また馬鹿食いを始めた。そんな篠崎を呆れずに恥ずかしそうな視線で見つめるリア。

「がつむしゃぼりごりまむもむうまうま……ごっくん。ふい、うまかったうまかった。ごちそうさま」

「お、おそまつさまでした」

おっかなびつくりといった声色で、食器をキャリーに戻していくリア。完食終了時間、およそ3分の早業である。

「ん、そういえば、僕に何か聞きたいことでもあったんじゃ？」

ビックウー！！ とリアの小さな肩と可愛いネコミミが揺れた。尻尾もピーンとたった様には、なんだか抱きしめたい衝動にかられる篠崎。猫族恐るべし。

「そ、そのう……」

「オース、トモ。生きてっかー」

その時、鍵どころか扉も閉めていなかったのか、そのままライカが陽気な声とともに侵入してきた。師団長の中では一番仲良くなれそうな人物であるとは、篠崎の暗黙の了解だ。

「ん、生きてる。っていうか、今生き返った」

「そつかそつか。ん？ あ、ネコミミ娘のメイドさんじゃねーか」
またもやりアの肩と耳が揺れる。尻尾はさらに垂直に。

そんなリアの姿を見てライカがやんちゃな笑みを浮かべる、というよりこれからからかう気満々の笑みだ。

「ん？ なにか知ってんのか？」

「いや、ちよつとお前が幸せな思いをしたって言うのを知ってるだけだよ。いや、見ているこっちがほのぼのするぐらい幸せそうだった」

「なんだよ、早く言ってほしーなー」

そう言うつとライカの笑みはより一層深く、リアの肩と耳はより一層揺れ失費はほぼ垂直になる。

「お前が気絶した後、そのメイドさんとお前を運んだんだよ。で、お前を着替えさせたり、包帯巻いたりし終わって、ベッドに寝かしたらだな？」

「うん」

ちらつとライカがリアの方を一瞥した後、

「お前がメイドさんを抱き枕にした。たしか『うなー、抱き枕うな』だったか？」

リアの顔は真っ赤に染まる。毛でおおわれている耳や尻尾まで赤くなるんじゃないかというほどに。

そして篠崎は、いつも通り馬鹿だった。

「なんだってエえエえエえエえエえエえ！？ 僕が、そんな幸せそんな事件に巻き込んでおきながら、意識がないという欠陥過ぎる痛みを負っていただってエえエえエえエえエえ！？」

興奮しすぎてもはや何が言いたいのがよく分からない。男の皆さんなら理解できると思うが、とにかく、悔しいのである。その状況のど真ん中に居ながら、意識がなかったと知らされるのは。

「それであ……。服に猫の毛がついてたのは……。不幸だ、今僕はこの上なく不幸だ。幸せを逃すとか、不幸過ぎる」

いつのまにか床に両手両膝をついた篠崎はとりあえず悔しそうに床を殴ってみた。

痛かったらしい。

そんな篠崎がライカと『ネコミミの重要性』について話し合っていると、リアが人間の爪より長く、人間の爪より頑丈そうな爪を、カツ！！と伸ばし、

「シノサキ様の、おばかあああああああああああああああああああああああッ！！」

「うにゃあああああああああああああああああああああああああああああああッ!?!」

ああ、そういえば真に会ってないなと場違いなことを思いつつ、とりあえず貧血で意識を失うこととなった篠崎。

そんな彼が最後に見聞きしたのは、ライカの馬鹿笑いだったという。

第八話：What is the importance of the c

うん、王道だよな。猫耳、猫耳メイドは、王道だと信じたい。
抱き枕ネタも王道だと信じたいです。

とにかく、色々な伏線を張りながら、全部伏線で終わってしまいうな廻ですが。

よろしくおねがいます！！

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第九話：Method of all surviving(前書き)

だめだ、ファンタジーなのに戦闘に入れない。
何故だコンチクショウ。

だが、それもあとちょっと。

では第五話。

『みんな助かる方法』

どうぞ。

第九話：Method of all surviving

魔力とは、生物が世界に対して支払うことで、世界に不自然な現象を起こしてもらったための代価である。そして、その魔力を支払えば支払うほど、世界がもたらしてくれる現象の精度、威力ともに増加する。

しかし、魔力とは導線を通る電力のように、その全てが世界に届くわけではない。高く見積もっても、8割といったところ。何故、魔力の全てが世界に届かないのかははまだ不明、とのことだ。

だが、その魔力を少しでも効率よく世界に届ける方法があるとしたら？

それが、魔法陣や呪文、魔導具などといった補助器具である。

以上が、篠崎のポロポロの体を引きずり起こされ、最初に聞かされた言葉を彼なりに解釈したものだったりする。

「フィイイリアさああああああん？ キミ、反省という言葉を知ってるのかな？」

若干声が震えながら、不気味な笑い声とともに昨日の庭で、白いテーブルをはさんで喋っている2人。

「それぐらい知ってます」

「じゃあ、復唱しようか。反省という言葉の定義とは」

「バカな人をこれでもかというほどに痛めつける、という意味です」

「は、ははは。……やっぱり、帰りたいよ、おとつつああああん」

机を掌でバンバンと叩きながら不満を表明する篠崎。それを呆れたような蔑んでいるような目線で見るフィリア。

なんとというか、2人の間には超えられない温度差がある。

篠崎が摂氏三十度ならば、フィリアは零下三十度と言った風に。

篠崎が熱くなればなるほど、フィリアの態度は冷めていく。

こんな理不尽なツンドラ期は望んでいませんよーっ！！ と篠崎は声を大にして叫ぶ。

「それでは、魔術を使ってみましょう。そうすれば、あなたも頑張
って来た甲斐があったと喜ぶでしょう」

「え、やっど？」

「はい。そこまでいうのならば、何があっても保証しかねますが。
大丈夫ですよ、ライカ兄さんにあれだけポコポコにのされたのに次
の日にこうして普通に暮らしているのですから」

「……含みがあるもの言いただけ、まあ魔術は使いたかったし！」

篠崎は嬉しそうに笑みを浮かべる。魔術や魔法というのは、いわ
ば夢である。篠崎がいた世界でも「こんな魔法があったらな」など
と、だれしもが一回は思ったことだろう。もちろん篠崎もだ。

それが使えるのだ。嬉しくないはずがない。笑みがこぼれないは
ずがない。

「……そんな笑みも、浮かべられるのですね」

「いや、あつちの世界にいたころは、いつもニコニコ、ニコニコ王
子って呼ばれてたよ（嘘）」

「それでは、魔術について説明します」

思わず青々と茂る芝生の上に両手両膝をついてしまう。

「魔術とは言葉そのまま、魔力を型にハマった術式に当てはめた形
のことです。この術式の構成が甘かったり、ずさんだったりした場
合、基本的に十分の一程度の威力しか出せません」

スラスラと、当たり前のことのように言っているが、構成が完璧
にできる人物などほんの一握りだ。非才が努力しても、中級の中で
も比較的簡単な術式で精一杯といったところか。

世界には、綺麗事では片付けられない、才能という壁が存在して
いる。それは紛れもない事実だ。だから篠崎は努力してきたのだが。
「その術式を構成する方法はいくつかあります。まずは、詠唱から
入っていきましょう」

篠崎は内心キター！！と叫んでいた。詠唱とかも、なんとなく
夢だ。漫画とか呼んでいると、いやでも目にする。

「単語ワンスベル魔術からいきましようか」

専門用語をいうと、座っていた白い椅子からスツと立ち上がってしまった。そうして、座っていた椅子の後ろに回ってしまふ。

篠崎は自然と見上げるような形で尋ねる。

「ん？ わんすべる？」

「一言で術式を構築できる、初級魔術のことです。普段なら詠唱破棄するような低威力なんですがね、一応詠唱します」

そういうと、フィリアはその碧眼を瞼の奥に隠す。

もそもぞと、ぷるんとした唇が動き出した。

「燃えよ、ファイア」

フィリアの手から、熱い炎が噴き出した。拡散することなくますます伸びた炎は、今さっきまでフィリアが座っていた椅子を紅蓮に包む。轟々と、音を立て白い椅子が黒く炭化していく。

それを見た篠崎は、

「す、す、す、す、す、すっげえええええええ……………」

小さな感動を覚えていたとか何とか。

それを見たフィリアはふっと小さく微笑し、

「感心している場合ではありませんよ？ シノサキさんも、使える

ようにならないければならないのですから」

そう言いながらスタスタと篠崎の隣に移動する。

「ん？ どしたの？」

「いえ、巻き込まれたらたまったものじゃありませんので」

……………」

どうやらとことん信頼と安心は無いらしかった。目で語っている。

お前は信じられないと。

とにかく、篠崎は気を取り直し、自分も立ってみる。そして標的を見据える。たった今さっきまで自分が座っていた白い椅子に。

椅子に向かって手を翳す。そして、

「えつと……………燃えよ、ファイア」

……………。

何も起こらなかった。

「昨日何のために魔力を出す講義を行ったのですか？ 言葉を発するだけで魔法が使えるのなら、迂闊に喋ることもできないじゃないですか」

「……ああ。なるほどね。併用作業か」

最初から何事もできないのが篠崎という男だ。一度できなかったくらいではへこまないし嘆かない。出来ないのなら、出来るまでするのみだ。

気を取り直し、もう一度椅子を見る。

そして、体内に流れるなにかをイメージ。

ここまで来ると、昨日とは何かが違った。心当たりがあるのは、一つしかない。

(……イメージしやすくなってる。……なるほど、恩恵とやらのお陰か)

これには少しだけ残念に思うしかない。これから篠崎の努力やらなんやらで上げた成果などは、少なくとも半分はこの恩恵とやらの所為になってしまう。生きるためには仕方がないとしても、だ。

手を翳す。そして、魔力を放出するイメージ。投影、幻想を、現実へ。

「燃えよ、ファイア」

瞬間、篠崎の掌から直径一メートルほどの炎柱が放出された。それは狙った椅子は即座に炭化させ、青々と茂る芝生を焼き、白い円形テーブルを灰にした。それでも炎柱は留まらず、そこどころかますます威力を増していつている。

呆然と見つめていたフィリアが思考を取り戻し、焦ったように叫んだ。

「魔力の供給を断ってください！！ 庭を焼野原にするつもりですか！！」

「え、え、え？ ど、どどど、どやって？」

「この……ッ！！……水よ、全てに恩恵をもたらす恵みの水よ。

今この時のみ、主に敵対するものに牙を向け！！
ウォーターファンク流水牙！！」

おそらく中級魔術を展開したのだろう。淡く青紫色に光る魔法陣が空気中に現れ、そこから鋭く尖った水が噴き出された。篠崎が見てもそれは人体に被害を及ぼすには十分な量と水圧であり、それが篠崎が放出している炎と着火した場所を消火した。

しかし、篠崎の手からはいまだ炎が放出し続けられている。それと拮抗するように、前に居るフィリアが発動した水の魔術で相殺している。

「フィリア!!」

「とにかく! 流れを止めるイメージをしてください!! くツ! ? 初歩の初歩なのに、なんて威力…… ツ! ?」

炎と水がぶつかり合い、もうもうと蒸気が立ち込め始めた。フィリアも余裕はなさそうなので、迅速に魔力の供給を止めなければ、篠崎の名前が王城を焼き尽くした大罪人として歴史にその名を刻むことになるだろう。

(イ、イメージ……。水を、体の中で、堰き止める…… ツ! !)

轟ッ!! と酸素を失ったのかのように、彼の掌から放出されていた炎の柱が消えた。

「ちょ、いきなり止めッ! ?」

「え?」

大量の水が篠崎を襲った。押し寄せる水の牙に、篠崎は為すすべなく吞まれ、フィリアが無理に魔力の供給止めるまで流された。

一人のびる彼。

なんとなくお約束だと思い、飲み込んだ水を口から噴水のようにぴゅーっと出してみた。

「バカですかッ! ?」

トモシノサキは、おこられたようだ。

「なんで戦場でもないのにあんなにバカス力魔力を込めるんですか! ? 理解不能です、荒唐無稽です、天変地異です、波乱万丈ですッ! !」

一気にまくしたてるフィリア。若干意味が違うなーと思いつつ、

篠崎は額にへばりついた髪を払いながら、一言、

「いやー、怪我しなくて、ヨカッタヨカッタ」

「……………馬耳東風、馬鹿の耳に念仏とは、よく言ったものです」

「いや、そこは馬の耳に念仏ね！？ たしかに馬という字は入ってるけども！！」

篠崎は体を起こして一言文句を言ってやろうとした。が、周りの惨状を見渡してみる。

丁寧に整えられた芝生は所々焼け焦げ抉れ、あとちよっとで大火災。命の危機だ。

こんなものを見てしまうと、もう、黙るしかないのであった。

「…………ふう。いいです、私も言い過ぎました。勇者の恩恵というものを舐めていたようです」

「…………いや、こっちこそ、なんだか、ごめん」

気まずい雰囲気というのは慣れないもので、お互いに目を合わせることができない。フィリアは自分の失態だと思っっているようで、結構落ち込んでいる。篠崎は篠崎で、フィリアに声をかけ辛い。

「…………まあ、いいでしょう。芝生ぐらいならどうともなりません」

そういうと、スタスタと被害にあった箇所を転々と歩きまわり始めた。ポーチに手を突っ込んで、その場所ごとに何かを置いている。最後に、篠崎のところに戻ってくると、

「これも講義の一環だと考えれば安いものでしょう。その身で魔術の利便性と危険性を体感できたのですから。実戦でいきなりこんなことになるより、幾分かマシです」

「…………フィリア」

そういうと、フィリアは被害にあった箇所に手を向ける。

そして、

「巡る命。死と生。表裏一体、その境界線を揺らがせ、失った命に再生をもたらせ。リバーズライフ再生命」

呪文を唱えた瞬間、何かを置いて回ったところ周辺に、ぽこぽくと芝生の新芽が生え出した。それは一気に成長し、焼け焦げた跡な

どこにも無かったかのようになる。それでも成長は留まらず、芝生というより、校庭の隅に生えている雑草のようになってしまった。「まあ、草が生えるのを待つより良いでしょう」

「えっと、今のは？」

「魔導具、この場合は魔法石ですかね。土属性の魔法石を被害場所周辺に置き、その周辺の術式構築を容易にすると言ったものです。別に使わなくてもよかったです。シノサキさんに見てもらっために使ってみました。理解できましたか？」

あれが魔導具か、と内心感動しながら呟く。魔導具と言ったら、杖や魔導書といったものしか浮かばなかったため、新鮮に感じる。

「じゃあさ、フィリアは何個属性を使えるの？」

「土、水、火、雷、氷ですかね。一番得意なのは、氷属性です」

はは、だろうね、と笑ってみる。

何がですか？ と不思議そうな声色で尋ねるフィリア。どうやら自覚は無いらしい。

「では、今日の講義はここまでにしましょうか。あとで庭師の方を呼ばないといけませんし」

「ホント、ごめん」

「問題ありません。それに、これからこの国の顔となる人が、軽々しく頭を下げてはいけませんよ」

なんだか、フィリアに対する高感度が上がった気がする篠崎。もしかしたら、自分が勝手に距離があると思っていただけなのではないか？ と考えてみるが答えは見つかるはずもなくそこで終わる。

ただ、一つだけ言えることは、篠崎が思っているほど、この国の人物達の性格は悪くない。

「明日は、固有魔術について話しましょうか」

「固有魔術？」

「自分だけが使える、特別な魔術のことですよ」

そう言っつて、昨日とは違って篠崎に礼儀よく一礼をしてその場を去った。

「自分だけが、使える……？」

その言葉に、かなりの期待感を抱く篠崎。

やっと、周りの人以外のことができる、と。

明日に期待を膨らませながら、篠崎もその場を後にした。

|| || || ||

(あー、魔術って素晴らしい。何だか知らないけど使えただけでものすごく幸せになった気がする。ホント、魔術って素晴らしい)

あの後ライカを探して鍛錬に付き合ってもらおうと思ったら「悪い、これから任務だ」と言っただけに行っしまい、ダレンに頼みに行く……眠いから無理だ」とのことで、そういえばシーナさんは？　と思いついてみると「ごめんね？　あたしはマコトちゃん専属だから」とかなんだとかで。

何もすることが無いので、ふかふかのベッドの上でごろごろしているだけだ。

「だいたい、フィリアが朝起こしに来るのが早すぎるんだよな。まあ、感謝はしてるけど」

すっかり日和ってしまっているが、ここは魔族との戦争が絶えず起こっている世界だ。

ようするに、篠崎達が呼ばれた理由とは。

「……人殺しの、為なんだよな」

『人殺しとは何か？』と聞かれてどう答えるだろうか。

一つは、『法律に違反すること』と答えられるだろう。

一つは、『人を殺すこと』と答えられるだろう。

一つは、『悪いこと』と答えられるだろう。

篠崎 友という男は、『悪いこと』と答えられる人間だ。法律で決められていなくても、悪いことは悪いことだと分かるし、それゆえに、怖い。

こんなファンタジーな世界だ。あちらの世界に戻ったらもう接点

すら持たないだろう。

だが、殺してしまえば、自分は『人を殺せてしまおうような人』というものを背負わなければならない。

「……背負わなくちゃいけないものと、背負わなくてもいいもの、ね。どちらにせよ、そのときが来れば、分かる、か」

時は、いずれ回ってくる。望んでいようがまいが、それは絶対に。善も悪もひっちゃかめっちゃかに混ぜこぜにして、人の前に立ちふさがる。

だが、まだ時間はある。実力も心の準備も、今しておけばいいことだ。

「……つたく、人殺しの準備とか、どこの殺人鬼だよ」

そんな彼は思い悩む。

誰も傷つかずに済む方法はないのか、と。

答えはすぐ見つかった。

「……そんなものなんて、ない」

|| || || ||

目を覚ます。どうやら、あれから一眠りしてしまったらしい。

ベッドの上から窓の外を見してみる。そこには、オレンジ色に染まった城下の街並み、通常では考えられないほど大きな夕焼け。

なんだかんだいって、この世界に来て初めての夕日という奴だった。

「……綺麗、だな」

篠崎の黒い瞳にもオレンジ色の光が差し込む。昼間の突き刺すような鋭い光ではなく、全てを温かく包みこむ柔らかい光が。

しかし、あの夕焼けの向こうには今でも人と魔族が臨戦態勢になっ
ていて、ライカが言うにはいつでも制圧できるらしい。それにも

被害は出るし、悲しみも生まれる。

何をどう救ったところで、何かがどうかした形で救われない。

そんな方法、子供に考えろと言う方が無理だ。

「……そうだ、真に会いに行こう。何でか知らないけど、ナイト……なんちやらに襲われてから会ってないや」

会う理由なんて考えない。そんな理由を考えなければ会えないほど浅い付き合いではない。

そんなことを言うと白神は「な、なな、何言ってるのよ 안타！？」と言って顔を真っ赤にしてしまうのだが。何故かは分からない。ただ、それを見るのも一興ということだ。

そうして、白神に会いに行こうとドアの方まで歩いていくと、ピタリ、と篠崎の動きが止まる。

「……そういや、どこにいるんだ？」

リアがいうにはここは勇者用の部屋ではないらしい。篠崎は異例イレギュラーとして現れた、勇者か何だか分からない人物だ。それでも、恩恵を得られたということは勇者なのだが、急に現れた勇者に、勇者用の部屋を今から用意するなどできない。

ようするに、篠崎が今過ごしているのは、他国からの要人などの客室になる。

「……まあいいか。歩けば会えそうな気がするし」

そうして、カチャッとドアノブを回した。

カツカツ、と冷たい石造りの廊下を歩きながら、辺りを見渡す。

夕焼けも沈みかけ、太陽の光を十分に取り入れる設計の城は、今度は燭台の蝋に火を灯しはじめ。蝋燭特有の濃いクリーム色の光が等間隔に置かれた廊下を、ただただ歩く。

「おーい、まことやーい。どこにおるのかねー、おーい」

石造りの廊下の為、音の反響がすごい。少し大きな声で話せば、たちまち遠くにある廊下の突き当たりまで声が届きそうだ。

篠崎は知らなかった。これが侵入者などを警戒しての造りであることは。

そんなこと知らず「おーい、まことー。どこにおるのやーい」と間抜けな声を廊下に響かせている。

もつすぐ夜ご飯だ。それまでに自分の部屋に帰らねばリアを心配させてしまうだろうと思いい、今さっきよりも大きな声で言う。

「まああああこつとさあああああああんやああああい」

それが廊下に反響し木霊する。二回三回と続き、消える。

篠崎はやれやれといったように頭をかく。

しかし、なんでそうまでして篠崎は白神と会いたいのだろうか。

別に夕食を取った後でもいいような、別に理由もない動機だ。なので、さつさと諦めて自室に戻ればいいのだが。

篠崎は、仕方がないな、と呟くと、これまで以上に大きく息を吸い込む。

そして、

「まっことさんのパンティは！！ 派手派手な紅い」

そこまでいうと、どこからか地鳴りのように、ドドドドドド……とどこからか響いてくる。

廊下の遙か向こう側に、石造りの廊下ではありえない土煙が上がっていた。

茶色い土煙りの中には、一点の白。二つの紅。

それが、恐ろしい形相で恐ろしい速度とともに、篠崎に近づいてきた。

「とオオオオオオオオオオオオオッ！！」

自分でやっておいてなんだが、なんと恐ろしいことが。

さらさらとした純白の髪の毛は一本一本が生き物のようにざわめいており、血のように紅い瞳は何故か光を放っている。

鬼神。何故かそんな言葉が思い浮かんだ。

まさしく、白き鬼神からの鉄槌が振り上げられ、大罪人にその罰を下そうという時に、

「いやいや、会いたかった会いたかった」

「へ？ あ、あ、ああ、会いたかったって、な、にやんてこと言っ
てんのよバカ！！ この女ったらし！！」

「?????」

ざわめいていた髪の毛が動きを止め、光を放っていた紅い瞳がソワソワと目を逸らし、逆に顔が真っ赤になる。振りあげて握りしめられていた手は虫も殺せそうにないほど弱く握られ、後ろに回された。

ここで一発殴られるとでも思っていたのだろう。頭の上に疑問符でも浮いていそうなほど小首を傾げている篠崎。

真っ赤な顔を恥ずかしそうに俯かせ、もじもじと尋ねる。

「ど、どうしたのよ？」

「うん、とりあえず真の部屋に行こう」

「~~~~~ツ!？」

部屋に行こう。この言葉にどれだけの威力が秘められていたかなど、決められたその人にしか分からない。

カチコチときこちなく案内をする白神を面白そうに眺めながら、篠崎はその後を追った。

部屋につくと、そこは篠崎の部屋よりも豪華なのにさっぱりとした感じのある部屋だった。

例えるのならば、金に対する銀、黒に対する白、といったところか。目を引くには引くが、金や黒といったけばけばしさはどこにもない。

勇者が女性ということと急いで調度し直したのか、男モノの家具が混ざっているという感じになっていた。

「おお！！ なんだか、イイ！！」

「……………」

篠崎が一人はしゃぐ中、白神は一言も言葉を発さない。

部屋に行こう。これをどのような意味にとるのかは、その人次第だ。いや、言った人に対する印象にも依るのだろうか。

例えば、特に印象のない人なら『ふうん』、嫌いな人ならば『えー？』、そして、好きな人ならば『……ひゃっ！？ そこは』である。

もともと、白神が口を開く。

「ど、どうしたのよ？ いきなり部屋に来たいだなんて」

「いや、重大な問題が発生しましてね。僕にとっては死活問題なのですよ」

「？ まさか、暗殺者が部屋で昼寝してたとか？」

「この世界ではなくもないことなので、若干苦笑いを浮かべながら、違う違う。もっと切なくなるほど身近な問題」

「？ なんなのよ？」

「道に迷いました。部屋への帰り方が分かりません。教えてくださいお願いします」

いきなり篠崎が土下座をした。

彼が自分の部屋へ引き返さなかったわけは、迷子になって自分の部屋がどこにあるのか分からなくなったからだだった。

それに対する白神は、可愛らしく小首を傾げ、そして、

「ふっざけてんじゃないわよアンタあああああああああああああああああああああー！！」

「ごめんなさーいつ！？」

城全体に響き渡るような大声が、廊下を歩いていたお役人Aを驚かせた。

「し、シノサキ様？ そのお怪我、ど、どうなされたの？」

部屋に戻ると、ネコミミメイドのリアが心配そうに声をかけてく

る。

声をかけられた篠崎はというと、まるで生涯をかけた大冒険から何とか生還した冒険者みたいな感じになっており、一言でいえばボロボロだった。

「……鬼神？ 魔神だろ、あれは」

白き神が一瞬だけどす黒い瘴気を出して襲いかかってきた。意識を取り戻した時は、自分の自室の前に立っていたという有様である。勇者にあるまじき行為だ、となんとなく自分でも可哀想になるぐらいの悪態をつきながら、

「ご飯、食べよっかな」

「はい、今日のメニューは」

スラスラと、練習してきたかのようにメニューを読み上げるリアの横顔は、なんだかいつもより綻んで見えた。

第九話：Method of all surviving（後書き）

シリアス3割ほど、ギャグ7割ほどの構成になってますね。
シリアスな小説にしようと思ってたんですが。

嵐の前の静けさ、予定調和とでもいったところでしょうかね。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております

では、次回も宜しくお願いします

第十話・Person who is accompanied by the

今回で説明フェイズは終わりです。
では第十話。

『闇を従える者』

どうぞ。

朝。通学やら通勤に向かう　のくだりは、あまりこの世界には通用しない。正確に言えば、この世界に召喚された篠崎には通用しないと云ったところか。城下では市場の準備があわただしく始められ、店先に品物を並べ始めている。

「……うなー、ふわふわもっちりだいふくー」

そんなおり、まず一般人は一生触ることもできないようなふかふかのベッドで幸せそうな寝言を漏らす篠崎。

そんな彼に近づくと、黒い影。

足音を忍ばせ、寝ている篠崎に気づかれなないように、そろりそろりと近づくと、

そして、枕元に立つ。

篠崎は一向に起きる気配がないどころか、更に深い眠りに入りつつある。

振り上げられる腕。そして、

「シノサキ様。朝がやってまいりましたよ」

いきなり、ドアの方から声が聞こえた。黒い影は影をひそめる。

ドアの方からやってきたのは猫耳がぴくぴくと動いているリアだ。にっこりとほほ笑みながら篠崎が寝ているベッドの近くまでやってくると、

「シノサキさん？　まだ起きられてないんですか？」

心なしかワクワクした感じで篠崎に声をかけるリア。

「？　なんだか、違和感が」

鼻をすんすんと鳴らすリア。犬よりも鼻はよくないが、それでも人よりは数倍の嗅覚を持つ。気配の察知能力も並ではない。筋力以外の能力はほとんど人間を超えるだろう。

「……誰かが、ここ」

リアがすべてを言い終わる前に黒い影は、その影を濃くし、彼女

に襲いかかった。

能力は確かに高いだろう。しかし、それでも戦闘経験を積まないと何も意味を成さない。

「え？」

あまりの出来事に硬直するリア。黒い影には煌めくナイフが握られている。魔術的意味も付加したのか、淡く光っている。

恐ろしいまでの殺気が部屋を満たす。人を殺すという気持ちだが、その気配だけで、肌突き刺さる。

あまりにも残酷に、その刃は振り抜かれようとしていた。

今までの思い出が走馬灯となって駆け巡る。

路上で一人たたずむ猫族の少女。ボロ雑巾の様な布を一枚体にまとわせるだけで、それ以外の彼女の所有物など無かった。

親に捨てられた。幼い彼女がそう理解するには何日も時間を要した。というより、彼女は認められない。だから、捨てられた子猫のように、飼い主を待つように、じっと、その場にとどまった。

そんな折に、彼女を保護したのが先代の王だ。大規模な浮浪者雇用対策を打ち出し、多くの無職者たちを城に仕えさせた。

それで、今の自分がある。

それが、こんなにも、簡単に終わるのかと思うと、少しだけ笑えてくる。いろんな偶然が折り重なって、やっとここまで来た。

勇者の身の回りの世話を任された時は、終わったと思った。

だけど、勇者だったトモシノサキという男は、思った以上に気さくで面白くて、初めて男性に心を開けたと思った。

それも、この黒い影の一振りが終わると思うと、何も考えたくなくなつた。

「ど、どりゃあああああああ！？」

そんなとき、もう一つの黒い影が横からその男へと突っ込んでいった。

今さっきまで寝ていた篠崎だ。恐らく殺気で異変を感じたのだろう。そんなところで見知らぬ何者かによく見知った人が襲われているのだ。そこでぶつかって行かなかつたら篠崎ではない。

机などを捲込み倒れ込む二人。

「リアー！！ 逃げる！！ そしてよければ誰かを読んできてくれると有難、いイッ！？」

「シノサキ様！？」

黒い影の人物は黒い外套を被った男だったようだ。その男が勢いよくナイフを振るう。的確に眉間を狙った一撃を、不格好に伏せて避ける。が、魔術的に意味を付加されたナイフは避けたと思った篠崎の頬を掠めた。滴り落ちるどろりとした赤黒い血液。

「いいから、早く！！ 出来れば、師団長クラス、がッ！？」

二回三回とナイフが振るわれる。それをバックステップをしながらなんとかよける。それでも、避けたと確信できる余裕を持って避けているにも拘らず、篠崎の服を裂き、肌に傷をつけていく。

これは自分がいたところでどうにもならないと理解したのか、泣きそふな顔で篠崎を一瞥すると勢いよく部屋から出ていったリア。

「…………クソツタレが」

悪態をつく。寝起きは機嫌が悪いというのに、今までの強引起床シリーズの中でも極めて最悪の部類だ。

第一、自分がなぜこんな暗殺者の様な男と対峙しているのかが理解できない。

だが、見捨てることはできなかった。あの少女の笑顔を守るのは、あのときは自分の役目だったのだらうと、半ば強引に思いこむ。

とりあえず、時間稼ぎだ。目の前の男も、時間がかかれればかかるほど、篠崎の殺すのに手間取れば手間取るほど焦って行くだらう。

そして、あと5分もすればこの部屋には大陸に名を轟かせる最強の近衛師団長がやってくる。

それまで保てば篠崎の勝ち。

それまでに殺されれば篠崎の負け。

しかし、もう一つだけある。篠崎の勝利条件。

それは、目の前のこの男を倒すこと。

「……………」

刺客の男はリアが飛び出していったドアの方を見て舌打ちする。

そして、篠崎に本気の殺意を向ける。

素人から見てもこの暗殺者の実力は師団長より劣っているのが分かる。

だが、素人からしたら、自分より実力が上であれば、そんな些事
どうでもいい。

篠崎は現状の攻撃方法を考える。

（魔術は……ダメだ。威力は高いけど、当たらない。って、攻撃方法これしかないけどどうすんのッ!?!）

両手で頭を抱えそうになるが、やるかやられるかの戦いの中でそんな真似は素人でもしない。

（魔剣は……どうやって出すか分からな、いッ!?!）

魔法付加ナイフが、篠崎を一閃に切り捨てようと振り回される。

ピッピッ! と避けているはずなのに、完全に避けているはずなのに、肌を薄く切られる。

ナイフが振るわれるたびに、服が裂け、血が滲む。べっとりと、汗に濡れたかのようにシャツが張り付く。

「ッ!?!」

足元がふらつき、体勢を崩しかける篠崎。どうやら、血を失い過ぎたようだ。

（オイオイ、これ以上は、マジでヤバイ……………）

動くのも辛くなってくる。

体力が、指の先から奪われていくかのような錯覚な襲われながらも、ギリギリのところまで男の攻撃を避けていく。しかし、ギリギリで避けるようになったことで、今までよりも深い傷が篠崎の体に刻

まれていく。

(まだ、かよ……。勘弁、してくれよ)

まだ時間的には一、二分といったところだ。しかし、篠崎の精神は既に数時間相手の刃を避け続けたかのように疲弊している。刃物を見ただけで腰が引けるし、なにより武器の有無にかかわらず、篠崎の実力が目の前の男より低いことが疲労の原因の一つになっている。

武器だけなら。武器だけが相手の有利ならば、篠崎は構わず相手に攻撃を仕掛けるだろう。しかし、問題は相手の実力がそれなりに高そうということだ。

勝てるか分からない戦いに身を投じるほど、篠崎は戦士ではない。態々命を捨ててに行くような真似をするほど、篠崎は愚者ではない。ひたすらに避け続ける。

男も焦っているのか、攻撃の一つ一つが荒くなってきた。

しかし、それ以上に篠崎の疲弊状態は酷い。流血というのは、時間とともに体力を奪って行く。しかし、それと同じくらい恐ろしいのが、チェックメイト精神の疲弊。

手詰まりまで、もう、時間は無い。

「私の声に答える！！　そしてその高貴なる姿を顕現せよ！！」

ズパンツ！！　と空気を切り裂く音がする。

声の主の方向を振り向く前に、目の前の黒い男は壁に縫いとめられた。一本の、凍える氷柱によって。

冷氣。暖かな日差しでさえ凍えさせるような冷氣が肌を突き刺す。……まったく、どこから情報が漏れたのでしょうか」

ふわふわとした金髪を揺らし、篠崎の部屋に入ってくるのは、近衛騎師団師団長、フィリア・ナナカトル。

優しい顔とは裏腹に、冷酷で凍えるような眼差しで男を見る。

「凍りなさい」

「ッ!？」

縫いとめられた男が何かを叫ぼうとしたが、既に遅い。服に突き刺さった全長四十センチの氷柱から冷気が入り、男を一瞬で凍りつかせた。

味方であるはずのこちらが思わず恐怖してしまうような早業。

そんな畏怖の対象として見るべき彼女は、篠崎の方を見ると、

「ああ。今のが固有魔術です」

ニツコリと、太陽の様な暖かい笑顔を向けた。

|| ||

場所はいつもの庭。篠崎が燃やした個所は、城に従事している庭師が整備を行ったのだろう、前と大差なく均等にならされていた。白い円形テーブルも椅子も、それらすべてが元通り。

そこで篠崎とフィリアは、向かい合って話している。

「えっと、あの男は？」

「過激派ですね。どこからかあなたの閨属性の情報が漏れていたようです。ああ、私ではありませんよ？ あなたがいくら馬鹿でも、そんなことはしませんから」

「そ、そう……」

あれから篠崎の部屋に多くの人がやってきた。

まずは、助けを呼びに行ったりア。城を走り回ったのか、顔を紅く上気させ、肩で息をしながら篠崎の無事を確認しにきた。

篠崎の無事、とは言えないが、とりあえず生きていることを確認すると、腰を抜かしてその場にへたれこんだ。

その後に騒ぎを聞きつけた白神が、『どうしたのどうしたの？』と走ってやってきた。

篠崎の血塗れの姿を見るなり貧血でも起こしたかのようにクラクラしていた。いつもの気丈な姿は形を潜めて、『だ、大丈夫なの？』と彼を労わった。

その後、宮廷騎士団が数人、男を拘束するためにやってきて、凍った男をそのまま独房へと連れて行った。

呆然としている篠崎を白神が無理矢理立たせて、『こ、このままここにいる方が危ないから、医務室行くわよ』と手を引っ張って医務室へと連れて行った。そこで回復魔法をかけられたり、包帯を巻かれていた間に、白神は傷跡を見て顔色を悪くしたがすぐに顔を真っ赤にさせてどこかに行ってしまった。

それから、フィリアが、『今日も講義はありますので。治療が終わったら来てください』と医務室までわざわざやってきてそれを言うてどこかへ姿を消した。

医者が出すには傷の方はそこまで酷くは無いらしく、激しい運動をしなければ日常生活に支障はないとのことだった。

「おそらく、新たな勇者の情報を仕入れるために間諜でも放っていたのでしょうか。言い方は悪いかもしれませんが、利用価値は高いですからね。味方に収められるだけでも、利益を得ることができるとしよう」

そこで一息ついて、続ける。

「しかし、魔力の属性を測った結果を見てしまったのでしょうかね。本来、光属性であるべきはずなのに、そこには確かに持っているだけで悪と評されるような闇属性の反応が出ていました。はあ、こんなことなら、安易に属性なんて測らなければよかったです」

「……これから、僕の命って狙われっぱなしかな？」

不安そうにそう聞く篠崎。

助けるだとか救うだとか取り戻すだとか平和だとか、カッコいいことをいくら言っても、彼はまだ16歳。死ぬとか生きるとか、そんなことには父が死んだとき以外は関わったことが無い、どこにもいる普通で普通な高校二年生だ。

不安じゃないと言う方が、滑稽だろう。

「それは、どうでしょう。あの男が解凍されて、尋問で雇い主を吐けば一つは潰れます。それが抑止力になる、という希望的観測をし

てみるのも夢ですよ？」

「解凍とかサラリと言ってる……って、違う違う。ということとは、平和ほのぼのの農耕型ライフはもう送れないってのかーっ!？」

篠崎は、渾身の力を脱力し、両手両膝を芝生の上についた。

そして、これからの人生について考える。

「……お先真つ暗。光明なんてもの、ありはしないじゃないか」

「あなたが強くなればいいだけの話です。さあ、強くなるためにも講義を始めますよ」

「……………つるっ」

潤んだ瞳で『慰めてくれないのフィリア先生』と訴えかける篠崎。そんな彼に、氷の女王は一言。

「気持ち悪い目で見ないでください」

このまま地面に体を沈めたくなった。

とりあえず、篠崎相手には何事も容赦がない彼女。氷柱で男を磔にした時など、自分もされるんじゃないかとビビったほどである。

「今朝、固有魔術は見せましたね？ アレです」

「アレって……………」

芝生に体を伏せていた篠崎はその言葉に反応し、むくりと体を起こす。白い椅子に戻りながら、今朝見た氷柱のことについて考えた。しかし、どう考えても、何をどうやって考えても、

「…………アレが？ なんていうか、なんだろう。拍子抜けって言う奴かな」

そう。固有魔術は自分だけが使える魔法と聞かされ、『吼えろ！ギガンテスクラッシュアアアアアアア！』みたいなことを叫び何だかよく分からないほどの威力で相手を焼き尽くす、みたいなことを予想していた分、凄く拍子抜けだ。

「誰もかれもがそんな威力の魔術を行使できたら、この世界はとうの昔に滅んでいます」

「そ、それもそうだ……………」

想像する。そこらへんの通行人が、『爆砕せよ!!! ナンダカス

ゴイブレイカアアアアアアアア！』みたいなことを叫び、一瞬で魔法大戦が始まるのを。

一般兵Aが街を吹き飛ばすような魔法を使えるような場面を想像する。なんとも混沌とした戦場になることは容易に想像できた。

「固有魔術とは、ようするに魔力を世界に支払わず、魔力そのものを操ることです」

「メリットとかって、あるの？」

「応用性、ですかね。魔術師などは固定砲台として戦場では用いられます。その理由が分かりますか？」

篠崎は考えてみる。

その答えはすぐに見つかった。

「魔術が、高速戦闘には向いてないからだろ？ ほら、構築だ、魔法陣だ、詠唱だなんだとかやっている間に、前衛の敵兵に切られて終わりだからな」

「はい、その通りです。私もシノサキさんがそれを理解できるような講義が出来ていたようでほっとしました」

表情は変えずに胸を撫で下ろすフィリア。

「こんなもの、とちよっと調子に乗ってみようとした篠崎だが、答えられなかった時のことを考えると恐ろしかったので荒ぶりかけた気持ちを抑える。」

「ですが、この固有魔術では高速戦闘中にも使用できるのです。術式を構築したりする必要がありませんからね。詠唱も最初の一回だけで済みますし」

「それだったら、術式を使う魔術師が形無しなんじゃあ……」

「そうでもないですよ？ 特別魔力が多かったり、精度が高くなければあまり威力は出ません。さらに剣を振るいながら魔力も操りますから、術式や詠唱を用いる魔術ほどではありませんが結構集中力が必要ですね。私の声に答える。そしてその高貴なる姿を顕現せよ」

そういうと、フィリアが手の中に力を込めるようにする。急に、

辺りが冷え込みだす。篠崎の部屋で暗殺者を仕留めたときのように。それは手の中から漏れだしているようだ。

握りしめた手を広げると、氷の造花があった。

「お、おお！」

感嘆の声を上げ、フィリアの手の上にある造花を凝視する。

「この程度であつたら普通の魔術でも出来るのですがね。あと、大きなメリットとしては魔力の消費量が普通の魔術より少ないということですね」

もう一度手を握り、開くと、そこには何もなかった。

そして一つだけ息をつき、

「あなたは理論よりも実践で成長するタイプの人間だと思います。理論をペラペラ言われても、あまり分かってはいないでしょう？」

その通りだと、篠崎はコクコク頷く。

それでは、実践です、とやはり表情を変えずに促すフィリア。

「えっと、やり方は？」

「魔力を操る素養。自分の魔力をよく理解するところから始まりませう。魔力は同じ属性でも人によって質や感覚が変わりますから。下に私のイメージをあなたに押し付けても、逆にやりにくくなるはずですよ。だから、これは自分でやるしかないので。だから、とりあえず魔力を感じてください。話はそこからです」

固定概念を植え付ける前に、篠崎自身が、自分自身を理解する必要があるのだ。

例えば、『あなたは優しい』と言われたとする。否定はしていても、心の底ではそうなんじゃないかと思ってしまう。それが正しいか正しくはないかは関係せず、他人から自分というものを固定されてしまうのと一緒だ。

一度思い込んでしまえば、それは中々変えることは難しい。

だから、一番最初に自分を決めるのは、自分でなければならぬのだ。

「自分だけの、魔力……」

「そうです。あなただけの魔力です」
その言葉に心を震わせる。

難しいだとかなんだとか、そう言うのはどうでもよくなって、ただ、自分だけのモノが手に入ると思うと、頑張れる気力が生まれてくる。

目を閉じ、意識を集中する。

(……流れるイメージ。あった……。ここから、自分のイメージを押し付ける感じで、いいのかな。自分だけの魔力。ようするに、僕自身)

そこで自分のイメージとはなんだろう、と改めて考えてみる。

自分というのは、思っていたより自分を分かっていない。それでも、自分を分かる者は自分しかない。

だから、読んでいない小説のページを一枚一枚めくるように、丁寧丁寧に一字一句見逃さないように小説を読むように、自分を理解していく。

(……イメージってというと、やっぱり色、だよな。……やっぱり、黒かな?)

篠崎は自分の魔力を黒と定義する。

(黒って言うと、やっぱり強さとか、暗さとか、冷たいつていう感じかな。……闇、ね)

篠崎は自分の魔力に闇という定義も付加する。

(闇、か。恐怖だったり、悪だったり、あんまりいいイメージはないけど。無形、無限、包み込む包容力みたいなイメージもあるな)

篠崎が自分の魔力の闇という定義に、様々なイメージを付加追加していく。

その時、彼の体に異変が起こる。

「……そう、きましたか」

小さく呟くフィリア。誰に言ったことでもなく、ほぼ無意識化のうちに出てしまった言葉だ。

彼の体から、ドロドロと、それでいて纏わりつくような闇が零れ

るように溢れてきた。

闇。恐怖の対象でありながら安息という相反するイメージをもつモノ。

人は闇に恐怖し、明りを灯した。

人は闇を求めて、目を閉じ眠りにつく。

(? なんか、他にも、あるけど……。今は、これだけで、いいや)
「普通ならば、詠唱無しでは属性を付加した魔力を顕現させることは難しいのですが、圧倒的魔力が零れだしているんでしょうね」

その声に反応して、ゆっくりと目を開ける。

そこは、燦々と照りつける陽光で眩しいはずなのに、何かに通して風景を見ているかのような、黒いフィルターにかけて映像を見ているかのような感覚に襲われる。

闇が、体全体を覆っていた。

「その調子です。少し魔力を纏めてください。大丈夫、自分の体を動かすようにやれば上手くいくはずですよ」

統一性がなく、アメーバのように蠢いていた闇を、体の周りを流れるイメージをして纏める。そうすると、そのイメージ通りに闇が動き出す。

「さあ。詠唱を。自分の闇に対するイメージを言葉に乗せてください。そうすることで、固有魔術は完成します」

篠崎は、言う。

みずから闇を、自らに従わせるために。

「僕の声に答える。そしてその形無き存在を顕現せよ」

闇が、彼の言葉に従い、零れるだけの片鱗だけでなく、その姿を見せる。

ゴバアツ!! と闇が噴き出す。一瞬、フィリアが身構えるが、為す術なく闇に吞まれた。

「……暖かい」

そう、誰に言っわけでもない感想が、その口から零れだした。

「フィリア」

静かに言葉を発する、闇。

「ありがとう」

その優しさは、光にも勝るとも劣らない輝きを放っていた。

少しだけキョトンとしたフィリア。少しだけ間を置いて、

「クス……いえいえ」

小さく、笑った。

第十話：Person who is accompanied by the

ここからの展開は二つ考えられるわけですね。
言いませんけど。

っていうより、ほとんど伏線丸見えだっつーの、という方がほとんどでしょう。

さあ、物語は動き出します。十話にしてやっとの、亀展開です。
というより、十話記念です！！

ここで皆様に質問なのですが、旧デザインと新デザイン、どちらの方が見やすいでしょうか？

それも含めて、ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

次回も宜しくお願いします

第十一話：Of what does the boy who proceeds

遅ればせながら、第十一話。

『戦場に赴く少年は何を思つか』

初めての实战、に行く前の準備的フェイズです。

どしどし。

「実戦？」

「ああ、実戦だ」

あれから数日。とりあえず死に物狂いで鍛錬を積み重ねた。恩恵の効果が思った以上に凄まじく、やることなすことがどんどん経験値として吸収されていく。

篠崎とライカの2人は、そんな鍛錬をしている途中休憩をいれているといったところだ。

「えっと、魔の国に攻め込んだり？」

「しねエよ。今のお前が行ったらソッコーで手詰まりだ。ガイア王が言った通り魔素が濃すぎる。訓練を積んでない奴が行ったら、一週間でなにもしなくても死ぬ」

魔素は人の生命力の元でありながら、過剰に摂れば死に至る。

ちよつど薬の様なものだと考えればいいだろう。

篠崎は若干身震いしながら、

「じゃあ、どこに？」

「お前、なんかカンチガイしてんな。魔物ぐらいだったら王と周辺の森に居るぜ？ まあ、ピンキリだけどな」

この王都は、いくつかの壁で囲まれている。篠崎達がいるのが、一番二ーズヘッグから遠い区画だ。

一番近い壁は常に、二ーズヘッグに生息している小型から大型までの魔物の攻撃にさらされているためすぐにボロボロになってしまふ。修復をすぐに行わなければならないので岩の壁で作られている。そこは安全性がかなり低いため、主に下級階層の住民が住んでいるらしい。

その区画を挟んで二番目に鉄の壁がある。ちよつとやそつとの攻

撃では傷もつかない強度を誇る。主に中級階層の住民が住んでいる。そして、篠崎達がいる王都の要を守っているのが世界最硬の硬度を持つ金属類を二つ混ぜた合金の壁。アダマントイトとオリハルコンを使っている最硬の壁。

基本的にこの三区画は自由に行き来できるらしいが、魔物が壁を破ってきた場合は住民の避難を完了させた後、その区画を守るため騎士団が出動される。そして、完全封鎖だ。

今まで、三番目の壁は破られたことはないとのことだった。

「ん？ 王都が一番二ーズヘッグの近くにあるのか？」

「ああ。なんでも、この国を建国した王が、この都を最初で最後の盾とするため、とかなんとか」

「ふう。なんだか聖人って感じだな」

ぞんざいな感想を漏らす。それを見てライカも、「そーだなー」と似たような返答をする。

結構波長があっているのかもしれない。

「で？ どの森に行くの？」

名前を聞いてもどこにあるのか分からないが、一応聞いて見ようとしたらしい。

「王都の東側にあるロベ森林ってところだよ。この際、冒険者ギルドに登録してみるのもいいかもな」

「……………あるんだ」

ありますとも、と浅い笑みをこぼすライカ。

「冒険者ギルドってのは……………、まあ、行つてから美人受付嬢に説明してもらつた方がいいな」

「うん。絶対そっちの方がいい」

美人受付嬢のことを妄想してニヤツと笑う男二人。

そこから一気に会話が盛り上がる。水を得た魚のように会話が弾んでいく。

「受付嬢って言うと、やっぱあれだよな。丁寧な口調で』どのような御用件でしょうか？」って小首を傾げながら聞いてくるのサイコ

「！！！」

「おいおい。それよりもまずスタイルだろ。巨乳でナイスなお姉さんってのもありだが、貧乳で場違いな幼女、さらに舌っ足らず属性も捨てられないぜ！！」

「そうなると性格だよな。ドジっ娘、無感情、素直クール、ツンデレ、ヤンデレ、ツンドロ、ヤンドロ、口悪い、お嬢様、電波系、サド、マゾ、ボクっ娘、オレっ娘、妹系、お姉様系。僕的には無感情電波系ボクっ娘がお勧めだけどね」

「おまつ！？ サディストお姉様系ドジっ娘のが神に決まってる！！ いろいろ言葉攻めしてきて、それでいてお姉様という包容力を持ちながら、不意に見せるドジな面……。男って言うのはそんなギャップに惹かれる生物なんだよ！！」

「なんだとオ！？ 何故無感情電波系ボクっ娘の素晴らしさが分からないのだ！！ 無感情にぼーっとしていながら、不意に見せる意味不明でよく分からない言葉を放ち、その上に一人称ボクだぞ！！ 男って言うのはそんなミステリアスに惹かれる生物なんだよ！！」

「……ふっ。お前とは、決別の時が来たみたいだ」

「……袂を分かっつてのは、こーゆうのを言うんだろっな」

ゴゴゴ、と何故か二人の周りの大気が震えだす。一男二人（最バカたち）の圧倒的な女性への穢れた欲求が大気を震わせているのだ！ 即座に臨戦態勢に入る二人。実力で言えば、天と綿埃ほどの差があるが、とにかくそんなモノは関係ない。男の意地をかけた勝負が、今、ここに始まるうとしていた。

ガッシィッ！！ と最早人間レベルを超えたような握力で頭を掴まれる二人。

ギリギリギリ、と後ろに頭を回される。

鬼神が降臨なさっていた。

「へっ。やんちゃでイケてる男の子のライカくんは、そんなに言葉

で責められたいわけなのね？」

「悪かったわねえ。ボクっ娘じゃなくて！！ そうだ、そんなに無感情で電波系がいいなら、無感情に『あなたを実験の為に星に連れ帰る』とかいつてマッドでスプラッタな改造生物にしてヤローかこの下種男ゲスオ！！」

とりあえず、顔を見合わせる憐れな男達。

にへら、と情けない笑みを浮かべ、

「んぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああッ!?」

男達の夏は、終わった。

|| || || ||

「ガイア様！！ 突如現れた二人目の男、闇属性の魔力を持っているとのことではないですか。危険な芽は今のうちに摘んでおかねば、根を張った後では遅すぎるのです」

恰幅のいい金髪の男が謁見の間にて王に進言している。

彼はこの国の大將軍。王家直属の近衛騎士団以外のすべての軍事を任せられている男、ジル「コンフォーネ。

「駄目だ。それは、ならん」

政治にもかなりの権限を持っている彼に対し、ガイア王は厳しい表情を向ける。

そんなガイア王の言っていることが理解できないのか、同じような内容を繰り返す。

「何故ですッ！ 闇属性なのですぞ。あの、魔王が、忌まわしき魔王が用いて我ら同胞の体を引き裂いた魔力なのですぞー！！」

唾を撒き散らし、でっぷりと太った腹を揺らしながら、大將軍ジルは叫ぶ。まるで、何かに囚われているかのように。

そんなジルのことを諭すように、ガイア王も続ける。

「ならぬものはならんのだ。貴様は、250年前の愚かな失態を繰

り返すつもりなのか」

その言葉には棘があった。

さらに、今度はジルを試すように言い放つ。

「ジル大將軍。貴様は閻屬性を憎んでいるのか？ 違うだろう、我々が憎むべきなのは魔族だ。違うか？」

その声には、年に似合わない威厳と、肌突き刺さるような怒気が含まれていた。

そんな言い知れぬ重圧に、思わず頭を垂れるジル。

「で、出過ぎた真似を。お許しください」

「よい。貴様も魔族に家族を奪われているのだろう。憎む気持ちは分かる。だが、その矛先を向ける相手を間違えるな」

「は、はッ!!」

「うむ。下がれ」

「失礼いたしました」

でっぷりと太った腹が歩くたびに揺れる。

その顔は怒り、という小奇麗なものではなく、見下していた相手に丸めこまれた嫉妬で塗れていた。

歯を食いしばる。

(くそッ……くそッ。あの若造が、少し出来るからと調子に乗りおつて)

彼の腕は確かである。戦線を退き、体はこのようになってしまったが、現役時代にはその采配を以って万の大軍を翻弄した。

しかし、時というものは、何かを癒すのと同時に、何かを腐らせてしまった。

誇りを胸に、戦っていたあのときは全て忘れてしまった。

(……見ている。存分に利用して、始末してやる)

醜く薄汚れた彼は、ただただ、卑しく笑った。

|| ||

|| ||

場所は移り城下街。午前中も終わりにさしかかったということ、かなりの人で賑わっている。

元いた世界では見たことがないような果物や食材、中世ヨーロッパの様な服を少ししっかりした形にした感じの服、そして、人族以外のエルフやドワーフといった人々。

全てに目移りして、キョロキョロとあたりを見回す篠崎。

「ハハ。やっぱり目移りするか」

「う、うん。いや、こうしてみると、ホントに異世界に来たんだなあ、と」

改めて異世界だということのを再認識する。

「ほら、キョロキョロすんな！ 恥ずかしいじゃないのよ」

「仕方無いわよマコトちゃん。あなたも最初に魔術を見たとき」

「うわーっ！ なんだかオイシソーナ果物がーっ！」

そんな男二人の後ろを歩く女二人。

彼ら四人の姿はかなり目立つ。二人は近衛騎士団師団長の鎧を着て、もう二人は見たこともないような、陽光に反射する生地を着ているのだ。目立つなという方が無理だ。

篠崎とライカの二人は後ろの二人を見て、

「（なあ、なんで着いてくるんだらう？ 僕怖いよライカにーさん）」

「（おとーとよ、慄くでない。多分、監視プレイを楽しんでんじゃないか？）」

見当違いにもほどがあつた。

とりあえず、彼らの目的地は冒険者ギルドだ。城と向かい合うように一本道の向こう、その広場の中央に城と同じほどの規模を誇る建物がある。

それが、英雄と呼ばれる者が生まれる場所。冒険者ギルドだ。

別に道標されなくとも分かる。その理由はというと、屈強な体を持った男たちや、これから冒険に出かけますよといった人間がその方向に歩いて行ったりしている。

見えてくる、城にも劣らない建造物。大きさは流石に劣るが、風格というものがある。

「さ、入るぞ。おーい、お前らも着いてくるんなら固まれ。一度に済ませた方が楽だからな」

そう言つと後ろの二人は顔を見合わせて、タツと駆けてきた。

入った瞬間、というより、入る以前から爆音の様な衝撃が体をビシビシと叩いている。

酒、味付けの濃いそうな料理、喧嘩、殴り合い e t c ……………。

ギルドの中は、まさにゲームや漫画に出てくるような光景、否、ゲームや漫画の方がまだ小奇麗なくらいだ。男たちの汗臭い臭いと、肉や魚、エールやその他酒類、そして冒険から帰った者が浴びている返り血などなど、匂いも凄まじくキツイ。

「おーい！！ エール追加ア！！」

「お？ 奢ってくれんのか？ ありがたいねエ！」

「テムエらに奢るぐれエならそのウエイトレスに一杯奢るわボケエ！！」

思わず絶句する篠崎と白神の二人。元いた世界でこんなことをしようものなら三秒で通報されているだろう。

そんな光景を見て、ライカとシーナは苦笑いを浮かべて、
「相変わらず、だなあ」

「そうね。けど、こっちの方が慣れてるわよね」

そんな喧騒を目を細めながら懐かしむように見る二人。

「え？ ライカたちは騎士の家系云々じゃあないのか？」

「違うわよ。師団長わたしたち四人はギルドの冒険者の成り上がりよ」

「貴族サマの思考形態はいまだに理解できないしなー」

そうすると、フィリアとダレンもか？ と小首を傾げる篠崎。

ダレンは、貴族はナンダカ偉そうという偏見は当てはまらないから分かる、と半ば強引に思いこむ篠崎。

しかし、フィリアは、貴族はナンダカ気品があるという偏見は当てはまっている。

そんな中、篠崎達御一行に気付いた一人の男が声を上げる。

「疾風のライカがいるぞオ！！」

「迅雷のシーナもだ！！」

一瞬だけ、ギルド内の空気がぴたりと止まった。ざわめき一つ起こらず、ただ無言で顔を見合わせている。

そして、機を見計らったかのように一際大きな爆音と評すべき声が響く。耳元で集中爆撃でもされたかのようにくわんくわんと頭が揺れる。

またなんとも恥ずかしい二つ名が出てきたな、と篠崎は黙って耳を塞ぐ。

「酒飲んでけよライカア！ 今日には久々に女のエロさについて語らおうぜ！！」

「シーナー！ こっちで飲も飲も！ 混成獣と戦った時の話し、聞かせてよーっ！」

野太い声や黄色い声があっちこっちから二人にかけられる。

どうやらギルド時代はとても人気者だったらしい。

「ワリイ！ 今日とは別件だ！ また今度飲もうぜエ！！」

「ゴメンねー！ また今度、もつとスゴいの聞かせてあげるッ！！」

少しばかり罪悪感に苛まれる篠崎と白神。顔を見合わせて若干苦笑いを浮かべて、とりあえず影になることにしたらしい。

しかし、冒険者たちは「おう！ ヨッシャ飲むぞオ！！ 吐くまで飲め！！」や「楽しみに待ってるーっ！」と言って、喧騒へと戻って行った。

なんだか清々しい奴らだと、ちょっとばかり感心する。

そんな二人を見て少し笑い

「まア、なんだ。ここは置いといて、あっちだ」

恥ずかしそうに頭を掻くと、ライカは左側を指さした。そこに壁を隔てて、こちらとは違う小奇麗で清潔感のある部屋があった。

こちらの酒場エリアはよく破損するのか所々ぼろくなっているが、あちらの部屋は城に使われていたような大理石で造られていた。

「こつちが酒場と掲示板があるトコ。で、あつちが事務と任務受諾するトコだ」

「こんなところで事務なんて出来ないしね。それに分けておかないと男共が受付嬢をからかっちゃうのよ。どこかのバカは態々こつちまで来て口説いてたけど」

「て、手厳しいなオイ」

そう言いながらあちらの部屋へ移動すると、入口付近は少し喧騒が聞こえるが、完全に中に入るとあちらとはまるで別世界だった。魔術か何かでも使っているのだろう、と適当にあたりをつける。

奥の方に窓口が五つ。受付嬢が並び、さらにその奥ではあわただしく人が動いている。

ギルドの売り文句といえば『二十四時間年中無休』である。交代制で働いているのだろう。

その窓口の一つに歩いていくと、赤毛を腰まで伸ばし、それを中間地点で結んだ女性が用件を聞いてきた。

「本日はどのような御用件でしょうか？ ライカ様」

「あー、ちよい待ち。シーナとマコトは隣でやれよ？ 待つのもなんだかもつたいねエしな」

ライカが後ろを顔だけ振り向き二人に言った。「分かってるわよー」と木のない返事をするシーナ。同時並行で進めるらしい。

「今日は、コイツのギルド登録に来たんだ。優しく対応してやってくれよミアちゃん」

「わ、分かっていますよ！ もう……………」

どつやら面識があるらしいこの二人。

そう言うつやり取りを軽くしながらライカは篠崎をずいっと前に押しやる。

「ぶふ、緊張なさらなくていいですよ」

「は、はい……」

蠱惑的な深紫の瞳でからかうように言われ、少しドギマギする。軽く目を逸らすと、ミアと呼ばれた女性が続ける。

「ギルドの登録ですね？」

「はい」

少し気持ちが落ち着いたのか、普通の返事をする事ができた。

「ギルドの詳細などはお知りで？」

「いえ、まったく」

きっぱりと答える篠崎。堂々とし過ぎて逆に清々しいものがあった。

「では、そこからですね。ギルド、ここのギルドは冒険者ギルドですが、他にも商工ギルドや傭兵ギルドなど、様々なギルドがあります。最も規模が大きいのは冒険者ギルドですがね」

基本的にこのギルドで一般生活を送るつもりなら、ギルドに加入した方がいい。例外として騎士などは外れるが。

ギルドに加入すると、大多数の人間は食に困らない。これだけでも大分魅力的だ。

「ギルドに加入するための条件はほぼありません。ただ、ちょっとした契約の様なものをしてないといけません」

「契約？」

まさか呪印でも刻んで邪魔になったらすぐに消せるようにするのでは？ とものすごく失礼なことを考えている篠崎。

警戒している彼を見て、ミアは、

「ふふ。そんなに恐ろしいものではありませんよ。書面にサインしていただくだけです」

そう言うとしたから一枚の紙を取りだした彼女。羊皮紙というのだろうか、手触りなどが生々しそうで茶ばんでいる。

しかし、普通の羊皮紙と違つところは文字が光つているということだろうか。

「ギルドで受けた任務などでもし死亡した場合、よほどの不測の事

態で無い限りギルドは一切の責任を負いかねます」

「あ、はい」

「……軽いですけど、いいでしょう。それでは、このペンに魔力を込めてここにある空欄を埋めていってください」

「……文字」

そういえば、何故自分はこの世界で話せるしもじがかけるのだろう、と今更ながらに思う。

そんな彼の疑問に答えるようにライカは棒読みで、

「恩恵バンザイご都合主義サイコー」

「バンザイ」

とりあえずノリに合わせる。

そしてペンを取り、軽く集中して魔力を感じ、加減しながら流し込む。

篠崎の魔力量はかなり多い。それこそ、初級の魔術でも中級並みの威力が出るくらいに。

なので、こういう魔導具を使うときは少しだけ加減をしなければ魔導具の方が壊れてしまう。

サラサラ、と意味の分からない形の文字を書いている自分が怖く感じる。それでいて日本語変換して読めるというのだから、とても素晴らしい。

ふと気がつく。『あなたの魔力属性は？』と書かれた文字。

篠崎の魔力属性は光属性以外全てだ。ということは闇属性も混じっているの、出来るならば書きたくない。ライカの方を見ると、
「全部じゃなくてもいいんだぜ。ただ、そういうのを見てギルド側からオファーがかかったりするからな」という言葉が返ってきた。
ならば『雷、その他諸々』と書いておくことにしたらしい。

コンとペンを机に置き羊皮紙をミニアに渡す。

「はい……トモシノサキ様ですね？ 少々お待ちください。ギルドカードを発行いたしますので」

そういうと隣に置いてあったプレス機械の様なものに羊皮紙をい

れると。ガシユン！！ と音を立てた。十秒ほどガタガタ揺れた後、何か落ちる音がした。

「では、これがギルドカードです」

「ど、ども」

手渡されたのは、銅、のようでも何かが違う。何か魔力の様なものを感じる。

「それは魔力伝導率の高いミスリルを少量混ぜた銅の合金で造られています。初回発行は無料ですが、紛失なされると、再発行に銀貨五枚ほど請求させていただきますので」

銀貨一枚のレートが分からないので五枚だなんだと言われても……、と思い頼れるライカの方を見る。

「銅貨百枚で銀貨一枚。銀貨百枚で金貨一枚。金貨千枚でレジエント貨一枚だ。大体、平民の平均年収が金貨一枚だな。んで、一食大体銅貨五枚程度かな」

なるほど、食事百回分か、と理解する。ようするに一カ月の食費と同等かそれ以上ということだ。

「次に、ギルドランクについてなのですが。ランクはFからSSまであります。基本的に加入直後はFランクとなりますが、なにか実績を挙げたことがありそれを証明できるようなものがあれば、それに見合ったギルドランクになりますか？」

「ないです」

まだこの世界に来たばかりか、城の中にしかいなかったのだ。何をしようにも、何もできない。

「それでは、Fランクからのスタートとなります。ギルドで任務などをこなしていくとギルドポイントというものが溜まります。それの合計ポイントで、その掲示板に名前が乗ります」

ミーアその方を指さす。そこには魔力で書かれたのか蒼紫に光る文字でいくつかの名前が書かれていた。

「次に、ギルドに加入した際の特典を説明いたしますね？ ギルドに加入すると、ギルド系列の施設を格安で利用でき、他国への移動

が普通よりも容易にできたりなど、多岐に渡ります」

「ちょ、待つてください……」

とりあえず篠崎は言われた情報を頭でまとめるのに必死になる。

「金貨一枚がギルド加入特典の条件必須ならカンタラ……」と
呟き続ける。

「……ん、大丈夫です」

「そうですか。それでは、貴方様のご無事を神にお祈り申し上げま
す」

そついうと首にかけていた十字架のペンダントを手に取り十字を
切る。

どうやら、この世界にも宗教というものは存在するらしかった。

そこで、まさかとは思いいライカに確認する。

「もしかして、神様とかいるの？」

「ん？ ああ。いるらしいな。このラジカル大陸の北側にある、神
聖大陸ヴァルハラってとこに住んでるらしい。それを信仰する信徒
の国もあるぜ」

「……………」

よもや、現実として存在しているとは、予想だにしなかった。生
憎篠崎は無宗派だが。

隣を見ると白神達も説明が終わったのか、こちらに近づいてきた。

「で？ どうする？ 一丁いくか？」

「そうね、まだお昼前だし、普通に行って帰って来れるわ」

そんなことを二人が話している横で、篠崎はギルドランク掲示板
を眺めていた。

この掲示板の一番頂点に居ると言うのは、ようするに、最強。あ
りとあらゆる困難を切り開ける力を持つ者。

一つ、名前があった。

ルシア＝ウエーヴァ、と。

二位との差をぶつちぎっての一位。桁が違うギルドポイント。そ
れが、この名前の主の実力を明確に表している。

その人物などに興味を感じたのか、篠崎はルシアという名前について聞いて見る。

「なあ？ ルシア＝ウエーヴァってのは、どんなヤツなんだ？」

瞬間、ライカとシーナの目が曇った。あからさまに拒絶反応を起こしている。というより、言葉に出すのも躊躇われる、といったところだろうか。若干、恐怖の様なものも感じ取れた。

少し間をおいて、ライカが、

「『悪英雄』、ルシア＝ウエーヴァ。ある任務で、数万の人間を虐殺した英雄だ」

|| || || ||

「あびやアアアアアアアアアアあああああああッ!？」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!！」

只今、篠崎 友は超高速で空を飛行している。

もちろん、自分で、ではない。

「よしよし。もうすぐだぞウイン。ちよつと速度落とせ」

「ゴオウ！」

篠崎とライカはある生物に乗っている。

白っぽい薄緑の体色、黄色い眼に荘厳な双角。堅牢な鱗。一振り
で命を断つ爪。そして、何物にも勝る、空の王者の証たる翼。

最強のイキモノ。竜。

その後、とりあえず『小鬼^{ゴブリン}20頭の討伐』を受けた。行き先は口
べ森林。王都周辺では始まりの森と呼ばれる、どの冒険者も一度は
訪れたことがある森だ。魔素も比較的に穏やかで、生息している魔
物も大体は、Fランクの冒険者でも普通に倒せるレベルだ。

場所的には二日あれば行って帰って来れるぐらいの距離であり、まさに初心者向けといったところである。

しかし、手っ取り早く終わらせよう、ということになり、じゃあどうやって行くんだよ、ということになって、かくかくしかじか云々かんぬんになり、ライカが、

「よし、オレのウインに乗せてやるよ」

何を素っ頓狂なことを言っているのかと思い、「女性に跨る趣味はありませんよ」と小馬鹿にした表情で篠崎は答えた。

これが、彼最後の余裕になるとも知らずに。

それに対してライカはやんちゃそうな笑みを浮かべて、

「まあ、女には違いないな。くっくっ……とびつきりだ」

遂に女に対する欲望で頭を壊されてしまったらしい、と篠崎は嘆いた。

そんな篠崎は見てライカは、「まあ、着いてきなさいよ」とだけ言って、篠崎たちを城へと連れ帰った。

すると、ライカは城の中にある家がいくつも入りそうなドーム状の建造物へ連れて行った。遠目から見てもかなりの巨大さが分かる中に入る。

そこに、龍が五頭いた。紅色、青紫色、空色、薄緑色、そして純白。

「……………ぼく、たべられちゃうの？ ネーオトツツアーン」

現実が信じられないようで、とりあえずあの世のお父さんに助けを求めだした篠崎。

とりあえず、精神的にも物理的にもこの場から離れたかったよう
で無言で回れ右。両腕を腰に当て駆け足のポーズ。「カケアシース
スメエ!」、と一人で掛け声をしながら走り去ろうとしたところ、

「まあ待ちなさいな」

ガシリツと力強い手が肩を掴んで離さない。それでもかけ足をやめようとせず、一心不乱に掛け声を言い続ける。

「イチニツ! イチニツ! イチニツ!」

「カケアシー！ トマレエ！」

「イチニツ！！……………ハッ！？」

気付いた時には、既に全てが遅かった。

後ろ襟首を掴まれて、ズルズルと引きずられていく。

「コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ」

無表情に棒読みで『コワイ』を連呼し続ける篠崎。

後ろを歩いている白神は、「アンタバカア？」みたいな顔で篠崎のあとを追っている。

パツと襟首を離され、鈍い音を立てて地面に落ちた。「ゲエツ！？」と、聞くに堪えない声を上げる。

とりあえず文句を言おうと立ち上がろうとしたら、鼻先三センチの位置に、龍の可愛らしい瞳があった。

「あばばばばばばばばばア！？」

「はっはっ！ ビビリすぎだっ！の！ よーしよし、ウイン。いい子にしたかー？」

「ゴウ！」

そう言っつて、ライカは目の前の龍の喉を撫でる。顔だけで人間一人分ぐらいありそうな龍の首を、である。

龍も気持ちがいいのか、「ゴウウ……………」と目を細めている。

「ん、こいつに乗ってくぞ」

「……………ドラゴンライダーカツコイー」

視線の先に映るのは、目の前の竜とは違う種類の竜と戯れている白神。その体色は白神の髪と同じ純白。一点の穢れもない純白だ。

ただ、首筋には一本一本が恐ろしいほど太い体毛が生えている。

「ライカ、あれは？」

ホワイイトドラゴン

「白帝龍だ。最高位の龍種だな。勇者が召喚されると、どこからともなく飛んできて、勇者を試し、認めたものを背に乗っけて大空を飛びまわるらしい」

「……………」

あれ？ 僕は？ と心の中で思うが、何だか言えそうにない雰囲気らしい、と我慢する篠崎。

ただ、凄く気になっっているのは、あの体毛。

「……めっちゃもふもふしてえ」

手をワキワキさせながら白神のほうに歩いていく。

すると、白帝龍が篠崎をその赤い瞳で睨みつけ、

「キユオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

「のおッ!？」

まるで親の仇のような感じで威嚇された。

動物に嫌われる体質だったかな？ と若干足を震えさせながら考える。

すると白神が、

「アタシでも一週間はかかったのよ？ そんじょそこらの下種男ゲスオが触れるわけないじゃないのよ」

「それは酷い……って、それでか。最初の方なかなかお前に会えなかったのって」

「ふっふーん。そうよ。偉いでしょ？ 褒め称えなさい」

胸を思いつきり逸らしてふんぞり返る白神。

そんな彼女を見て、ハンっ！ と鼻で笑う篠崎。思いつきり見下している目だ。

「な、何で笑ってんのよ」

「いや、無い胸そらぶべぼらッ!？」

笑った鼻っ柱を思いつきりぶん殴られ、鼻血が弧を描ききらきらと光りながら吹っ飛んだ。

殴った張本人である白神はもう一度胸を逸らして、

「誰の胸が、ないですって？」

「い、いえ。見事なお胸があるのでございます」

少し涙をにじませ、鼻を押さえながらライカの元へいそいそと戻る。

「若いって、いいな」

「そろそろ落ち着きたいお年頃だよこっちは」

「くっくっ。シーナア！ 準備出来たかあ？」

この馬屋……竜屋とでもいうのだろうか。かなりの幅と高さがある。それもそうだ、竜たちにストレスを与えないためにそれ相応の広さがある。

結構向こう側に居るシーナに向かってライカが叫んだ。

「オツケーヨー！」

あちらも準備ができたらしい。

遠く離れていてもよく分かるその巨大さ。

体色は青紫、といったところだろうか。白神が駆る白帝龍が柔らかいイメージがあるとするのなら、あの青紫の龍は鋭いイメージとあったところか。所々が尖っていて、攻撃性の高そうな竜だ。

そんな篠崎を見て説明補足するライカ。

「オレのウインは『風王龍』ウインドドラゴン。シーナのは『雷皇龍』サンダーキング。どっちも最

高位の龍種だぜ？」

「……どうやって手に入れたんだ？」

そんな当たり前なこと聞くんじゃないかねえとでも言いたげな顔で、一言、

「倒して」

そして、あの場面に戻るわけである。

恐らく、音速は超えている。それはもちろん音が後から聞こえるからだ。

何故篠崎達が音速突破の衝撃、所謂ソニックブームで粉々に砕け散らないのかというと、

「龍種が衝撃緩和用魔術使ってるらしいぜ。この音速突破も魔術行使だしな」

「マジユツバンザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
イー！」

篠崎がもう少しでロベ森林ではなくあの世にご到着しそうになっ
ている時、ライカが、

「よっしゃ。着いたぞ。ロベ森林だ」

朦朧とする意識の中、眼下に広がるのは広大な森林。まさに原始
から残っていると聞いた感じだろうか。

「よし、降りるぞ」

どんどんと高度を下げていく龍。それに伴って、後ろをついてき
ていた白神とシーナが乗っている龍も高度を落とし始めた。着陸地
点は、あの湖のほとりだろう。

これから起ころであるう戦いに陰鬱になりながら、とりあえず戦
場に降り立つことにした篠崎だった。

第十一話：Of what does the boy who proceeds

龍が出てきましたね。

言っておきましょう。魔術サイコー、と。嘘ですごめんなさい。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

これからも宜しくお願いします。

第十二話：Of what does the boy who proceed

ふう、学校が始まってしまいました。

鬱です。楽しいですが鬱なのです。

だって、小説の更新スピードが遅れるのですから……。

グスン。

では、第十二話

『戦場に赴く少年は何を思つか〜』

どうぞ。

湖のほとりに降下し、着陸すると、大きな翼が土煙を舞い上げる。ズズウンとその巨体を着地させる風王龍。

それにならって、白神が乗っている白帝龍、シーナが乗っている雷皇龍も湖のほとりへと降り立つ。

そこで若干の違和感が体を襲う。息苦しいような、それでいて体に活力があふれてくるような、不思議な感覚だ。

このことについてライカに尋ねてみる篠崎。

「ああ、魔素だよ魔素。魔素がこいの」

ようするに、呼吸吸引中の酸素の割合が、空気中に存在する魔素に圧迫されているということだろう。

しかし、そんな違和感にも数分経てばすぐに慣れる。それはここがまだ魔素が薄いところなのだろうが、少しでも不調があるような戦場には赴くべきではない、というのが篠崎の考え方だ。

とにかく、王都からここまで約百キロメートルはあっただろうか。それをものの二十分やそこらで走破 飛破してしまった。ずっと最高時速を保っていればどうなっていたんだろう、と冷や汗が背中を伝う。

「よし、ウインはここで待ってるな」

「ゴウ」

「サンドラもここで待ってるのよ」

「コウ」

「ビヤクも待ってなさい」

「キユオ」

「……………」

それぞれの騎乗者が乗っていた龍に声をかけているのを眺めながら、ちよっぴりしょっぱいモノが頬を伝った。

とりあえず、羨ましい。

「よし、行く……ん？ トモ、お前なんで泣いてんだオイ」

「泣じゃねーやい！ 心の搾りかすだい！」

そうやって拗ねて、地面にの字を書くのを五分ほどやめない憐れな姿が偶然通りかかった冒険者によって確認されたとかされなかつたとか。

「まずは探索からだな」

ライカは少し顔を引き締め、戦場の空気をその体で感じながら、これからのことについてまとめる。

「とにかくこれは訓練だからな。無茶して死んだら元も子もない。

危険を感じたら迷わず逃げろ。命あつての物種だしな」

そういつて、腰に差してあつた白銀の剣を抜き放ち右手で握りしめる。

「この剣はミスリル製だからな。魔力伝導率がすこぶるいいんだ」説明も求めていないのに、余程の自慢の逸品なのかブオンブオンと振り回す。空気を切り裂く音が、軽く振っただけでも聞こえる。

「よし、行くとするかね」

そうライカが皆に声をかけたとき、篠崎はある重大なことに気がつく。

自分の姿をしてみる。

ライカにはあつて、自分には無いもの。それは、

「ねえ。僕さ、武器、持ってなくね？」

一瞬、場の沈黙がロケットミサイルほどの威力で篠崎を襲った。皆が一樣に、『え？ お前何しに来たの？ 頭大丈夫か？』みたいな目で篠崎をジト目で眺める。その視線にうめき声を漏らしたじろぎながら一歩さがる。

「だ、だって仕方がないじゃありませんか！ 武器とか僕の日常生活には必要だったわけなのですからっ！ ぼ、僕の所為じゃねーしっ！ 僕の平和ボケした本能の所為だし！」

「いじけんな。そつだ、お前には聖剣つっ—立派なもんがあんじやねーか」

「……………」
篠崎は、あの魔剣のことをまだ誰にも話していない。もちろん、白神にも。

怖いのだ。ようやくなんとかなった状況が、ようやくなんとか落ち着いた状況が、あの事を話すのと同時に崩れ去るのが。

「……………ゴメン。出し方、分からないんだ」

「ハあ？ アンタ、なにしに来たのよ。こつやって念じるだけで出てくるでしょうが」

そつすると白神の手のひらがポウつと白光し、剣の形になっていく。

光が収まると、そこには重厚でいて、どこか羽の様な剣があった。篠崎が手に取った剣とはまさに正反対といったところか。アレが殺す剣としたら、コレは生かす剣だ。それをするだけの力が、コレには宿っている。

「……………ゴメン、分かんないや」

「？ なに落ち込んでんの？ 最初からできないのはアンタらしいじゃない。今更なんでも出来るようになっても違和感しか覚えないわよ」

「……………善処するよ。ま、剣のことはどうとでもなるとして」

篠崎は瞳を瞼の裏に隠す。

自分の体の内にある流れを、魔力の流れを、掴みとる。

そこにある深奥。もっとも自分の深い部分に居座っている魔力を、引っ張り出す。

それを引き出す言葉。

「僕の声に答える。そしてその形無き存在を顕現せよ」

ブワッ！ と篠崎の体から闇が噴き出す。ドロドロとした闇、サラサラとした闇、ゴウゴウとした闇、いろいろな闇が混ざり合って、形を潰し合っている。

闇の定義として定めた無形。無形とは、なにも形が留められないわけではない。何にでもなれるから、どんな形にでもなれるから、無形なのだ。

彼は一同の視線が釘つけになっっているのを気にも留めずに、空間に闇の渦を作りそこに手を突っ込む。

(……形は剣。表面上を高速回転しているチェーンソーみたいな感じだ)

そこまで思考して、篠崎は闇の中から手を引き抜く。

ずるっ！ という臓物を引き抜くような音が生々しく耳に残留する。

「これで武器問題は解決。行こうか」

篠崎の手には、両刃剣の形をした全長一メートルほどの闇が握られていた。

それは空気を不気味に振動させて、蠅の羽音をもっと澄んだような音を周囲に撒き散らしている。

刃の表面上で硬さを持った粗い闇の素粒子が秒速百万回ほど高速回転しているのだ。

「それって……」

シーナが驚愕の声を上げる。他の二人は声には出していないが、似たような感想を持ったのだろう。

醜い、やらなんやらといった。

しかし、篠崎は別段興味がないと言った表情で、闇で造られた剣を横に軽く一振りし、こういった。

「生きる手段」

フォン、と軽い音が耳を通り抜けた。

|| || || ||

「小鬼^{コブリン}ってーのは、全長一メートルにも満たない人型の魔物だ。体色は濁った緑、目は黄ばんで、耳はとんがり、髪は生えていない。

小鬼と評されているから、小さな角が一本頭頂部に生えてる。武器は、鉞、棍棒、短剣、人から奪ったものを主に使っている」

森の中は日の光があまり差し込まず、それでいてジメジメしていない生物が生息するにはうってつけの環境だった。魔素も湖のほとりより少し濃いくらいで、それ以上のことは無い。

周囲を見渡すと、見たこともないような多足昆虫が何枚もの羽を飛ばたかせて飛んでいたりと、小さな動物がふわふわと空中浮遊しているのが目に入ったりする。

そんな風にあたりを見回す篠崎に目を配りながら周囲に注意をすするシーナ。今この時も突然攻撃が襲ってくるのか分からないのだ。

そんな中、ライカが軽い感じで説明を続けていく。

「小鬼は忌み嫌われてる。どうしてか分かるか？」

それはな？ と白神とシーナに目をやりながら、まあ仕方がないかとため息をつき、

「異種族の雌を襲って孕ませる」

そのことを聞いて白神の顔がカアツ！ と紅くなり、シーナは、「やれやれ」と首を横に振る。

篠崎はというと、別段気にした様子もなく、

「でも、染色体の数とかが違うから、受精はしないはずじゃないの？」

「するんだよ。孕まされた雌はどうなるか知ってるか？」

少し真剣な表情になる。ここが、一番忌み嫌われる理由だと言わんばかりに、

「小鬼の胎内に宿っている期間は、おおよそ三十カ月。それでいて、墮胎させようにもさせられない。腹の中で小鬼が搦んでやがんのさ」
少しいら立った表情になる。

そんなこと、男がするようなもんじゃねえよな、と言わんばかりに。

「そして、誕生の瞬間。親の腹突き破って、周りの内臓を喰らって栄養を補給して、ソッコでその場から立ち去んのさ」

「まア、残酷って言えば残酷だけど、あれだよ。自然界では別に普通だな」

怒りを覚えないわけではない。嫌悪感を抱かないわけではない。ようするに、それだけのこと、だということだ。そんなことで、それぐらいのことで生殖活動をやめていけば、瞬時にその種は滅びるだろう。

仕方がない。

だからと言って、憤りを感じないわけではないが。

「……男と女の思考の壁を感じるわね」

「そもそもの思考形態が異なってるだろ」

例えば、二次元の女の子の絵を題材にしてみよう。

男に聞く。八割方は『可愛い』などの意見が出るだろう。

一般女子に聞く。八割方は『キモい』で一蹴されるだろう。

女子にしてみれば男子の可愛いへの欲望が分からないのと同じく、男子にしてみれば女子のアイドルへの欲求が理解できないのと同じだ。

「何よ。なんか文句でもある？」

「無いよ。これっぽっちも無い」

人差し指と親指を微妙に離し、ジェスチャーする。

そこらへんでシーナが、「こほん」と場の雰囲気仕切り直すように咳をする。

それから一時間ほど歩いたが、まったくもってあたりはない。

それもそうだ。この森には多くの小鬼が住んでいるとしても、この森自体の容積が広すぎる。プールの水がいくら多かろうと、海に投入してみれば何ともちっぽけなのと一緒に。この森にどれだけいようと、見つけようと運良く小鬼を見つけられることなんてほとんどない。

ようするに、あちらからこちらを狙ってやってきてくれるのが一番手っ取り早いのだが。

「どうすんだよライカ。このまま今日が厄日でした、括弧笑いな

感じて終わりそうな感じじゃないですか」

「うーん、どんな簡単な依頼でも、こればかりはなあ。もしかして、龍^{ライオン}たちに乗ってきたのが悪かったのか？」

圧倒的強さを誇る龍。生存本能が腐りかけていた篠崎でさえ、その存在がそこに存在していると言っただけで、心の最奥から震えが出た。

ましてや、相手は野性の魔物。生存本能の塊といってもいいだろう。

ようするに、龍は核ミサイル、小鬼たちは高性能レーダーといったところか。

「どうする？ 引き返すか？」

「……ちよっと待って」

篠崎に、ある名案が思いついた。

名案というより、珍案かもしれないが。とにかく、篠崎が自分にはできないことを言う。

「僕の闇で、森を探そうか？」

そんな素っ頓狂なことを恥ずかしげもなく言い放つ篠崎。その眼にフザケタ感じは無いが、それがまた逆にふざけているように感じってしまう。

「お前の闇は、使ったらこの森を伐採するのに便利かもな」

勘違いをしている、そう思う篠崎。

自分の手の中にある闇で造られた剣をみる。いまだに蠅の羽音をもっと澄んだような音を出し続けている。

彼らはこれを取り出したところを見て、『コイツの闇は硬い』とでも思ったのだろうか。

それは、正反対なほど違う。

彼の闇は、無形だ。全方位三百六十度全てをカバーできる縦横無尽の無形だ。

何にでもなれるし、何にでもなれない。

ようするに、何の意味も持たさず、ただ自分の感覚として薄く薄

く闇を伸ばしていけば、それは高感度レーダーより高性能なレーダーとなるだろう。

(……闇を、薄く、出来るだけ森と同化させて、伸ばす。感じていいのかな?)

そして、篠崎の体から闇が滲み出る。それは一瞬だけ彼の体の周りにまとわりついたと思っただら、ゴバア!!! と音を放ち森に広がり渡る。

それを目で捉えてちゃんと広がるのを確認してから、目を閉じる。不思議な感覚。実際に目の前にはあるはずのないモノが鮮明に見える。というより、触って形を確認している、といった方が正しいか。そんな篠崎式闇レーダーに、複数の生物が引っ掛かる。

湖のほとりで龍たちがじゃれ合っている姿や、もちろん至近距離に居る白神たちも。

「どつちだろうな……北西の方角に三百メートル、全長一メートル前後の生物の群れがいる。数は二十前後」

そんな篠崎の奇行に目を見張る三人。

「……アンタ、なんでもありね」

「語弊があるな。なんでもあるんじゃない、なんでもないからこそ、出来ることだってあるんだよ」

「……よし、トモ。よくやった。じゃあその北西に向かうぞ」

そう言われて、さっさと闇を閉ざそうとしたとき、彼のレーダーに何かが引っ掛かる。

しかし既にライカたちが歩き出していたので、自分の思い違いだろうと思ひ、そのまま後を追った。

こんな初心者用の森に、アレがいるはずがないと思ひ。

そこには、まるで地獄から這い出てきた鬼の様な穢れた姿をした生物がいた。

体色は濁った緑。黄ばんだ目。頭には小さな角。

小鬼だ。^{ゴブリン}

棍棒などを振り回して、鉈を構え、短剣を握りジロジロ見ている。口元からは涎の様なものが絶えず垂れ続け、引き攣ったような笑みを浮かべている。

それを、茂みの影に隠れて観察している四人。

「……よし、トモ、マコト、お前ら二人で行け」

小さな声であのトンがった耳で察知されないようひそひそ話す。

「いきなりかよ」

「オレらが出たら一秒で終わって、お前ら何しに来たんだ？ みたいな雰囲気になるけどいいか？」

「いきます。いかせてくださいライカにーさん」

「はっは。おとーとよ。精進せよ」

シーナも白神に同じことを言ったのか、白神は篠崎の方を見て、「頼むわよ」とアイコンタクトを取った。彼は気の無いように軽く頷いた。

そして、群れに視線を戻す。

そこで、何やら異変が起こる。一斉に群れが興奮した声に包まれる。

「ギシユギシユ！ ブジャア！」

唾を撒き散らしながら、他の個体より少し体つきがいい小鬼^{ゴブリン}が命令の様なものを下す。

周りの個体はそれに従い、奥から何かを運び出してきた。

半裸体の、黒髪の女性だった。

乱暴に扱われたのか、体中に切り傷がついていた。

「……なるほど、ね。次はあの人を孕ませるつもりかな」

そこまで言うと、白神が飛び出そうとする。その腕をがっしりと篠崎の手が掴んだ。

キッ！ と篠崎を睨みつける血のような紅い瞳。

それでも、気取られてはいけなそうと思ったのか声を押さえて、篠崎を威圧する。

「（何してんのよ！ 早くしないと、あの女の人が）」
「（もし、僕達がここで突入したら、あの怪物たちはあの女性を傷つけないと思うか？ 理性もなにもへつたくれもないような奴らなんだぞ。もし、ありとあらゆる奇跡と偶然が折り重なったとしても、絶対にあの女性は無傷じゃ済まない。大丈夫、あのボスみたいな小鬼が犯すつて時に狙って、助ければいい）」

随分と冷静な判断だった。

篠崎とて、飛びだしたい気持ちはある。だが、感情任せに飛び出したとしても、いいように事が運んだことはほとんどなかった。ほとんどは中途半端。

知っているからこそ、同じ轍は二度も踏まない。

「ギシュギシュ！ ギュガ！」

下卑た笑い声を上げる小鬼のリーダー格。その声に反応したのか、女性が身じろぎを起す。

「……ここ、は？」

女性が目を覚ましたらしい。そして周りの状況を確認した途端、恐慌状態に陥った。

「ひ、ヒイツ！？ い、やだ！ こっちに来ないで。触らないで！ 助け、誰か、助けて！！」

「ギジュシュ！！」

さらに下卑た声を上げ、下卑た笑みを浮かべる。

ここまで下種という言葉が合う生物もそうそういないだろう。

叫び声をあげながらも、為すすべなく女性は大きめのゴブリンに組み敷かれる。

その時、周りのゴブリン達が一步退いた。

「行くぞ！！」

「死ねワラジムシが！！」

ドゴン！！ と肉を打つ音が聞こえる。

一気に加速した二人は、大きめの小鬼を持っていた剣で切り刻み、女性を救出する。

呆然としている周りの小鬼達を蹴散らしとりあえずの安全圏を作った。

女性は切り刻まれた小鬼のどろどろとした緑色の肉片を浴び、呆然としていたが、気を取り戻すとまた気絶した。

周りの小鬼の数は精々二十程度。

込み上げてくる吐き気と戦いながら、篠崎は一步前に踏み出す。

「ギシャ！」

ビュンビュン！ と小さな鉈を手当たり次第に振り回しだした小鬼ども。一発一発の威力が低いために、ああやって数と殺傷力で獲物を襲うのだろう。

篠崎は構わず横に一閃。それを小鬼は持っていた鉈で受け止めようとしたが、フォンと音を放ち空気を切り裂く感じで何の抵抗もなしに頭部と鉈を切り裂いた。

秒速百万回転の刃が、あの様なナマクラ物に防げるわけがない。

緑色の体液と、ドロドロとした脳漿が飛び散る。ぐわんぐわんと揺れた後、どちゃりと肉が潰れる音がする。

あちらでは白神が聖剣を振り回し、光速の斬撃で次々と緑の血の雨を降らせる。

「ギシャアアアア！」

錯乱したように小鬼が数体、篠崎に特攻を仕掛けてきた。

ダダダッ！ と短い脚を回転させながら、その醜い顔をもっと歪ませながら、篠崎に勝てないと分かっているながら、生きたいと思うから、彼らは攻撃を仕掛けてくる。

だから、彼は戦う。

強さ、弱さなど、この際関係無いだろう。この女性を襲っていたことも関係なくなった。

今から、生物同士の殺し合いだ。

フォン！ と軽い音を立て、空気を切り裂く闇の剣。「ギシャ！」と一声し小鬼はバックステップを取る。

その間に他二頭が篠崎の後ろに回り込む。流星は野生物。チー

ムワークはほとんど相図なしでできるようだ。

そしてバックステップを取った小鬼と、後ろに回り込んだ二頭が三方向から一気に攻めてくる。

殺った、小鬼たちはそう思っただろう。

その、闇を見なければ。

ビュギュツ！！ と篠崎が持っていた闇の剣が無形に戻る。それは体にまとわりつき、そして恐るべきスピードで伸びた。

ポタリポタリ。緑色の血液がこぼれおちる。

その三頭の眉間のだ真ん中に闇の鋭い槍の様なものが突き刺さっている。

それは篠崎の体から放たれたもの。一度闇を無形に戻した後、それを一気に伸ばす。

ビュルン、と突き刺さっていた小鬼の頭から闇の槍を引き抜く。

何かが潰されたようなグジュという音が耳ざわりだった。

そして、自分の力を確認する。

これも、殺すための力なのだ。

体から、闇が濁流となって噴き出した。周囲一帯を闇が包み込む。肉を潰す音と、何かを噛み砕くような音。

そして、闇を退く。

そこには、今までいたはずの小鬼二十頭強が、一つの緑色の肉団子となつて存在していた。

闇が退いたことで、視界を取り戻した白神。

彼女は見た。

その異常な血と肉の残骸の中心で、一人佇む闇を纏わりつかせた黒を。

無。何も感じられない。そこにあのよく見知った少年がいるはずなのに、まったくもって違う存在のように感じてしまう。

彼が、どこか遠くに行つてしまふ気がした。

だけど、彼はそこで佇んでいる。

彼が、白神を見た。ニッコリと笑つて一言、

「……帰るっ?」

|| || || ||

「トモ、お前すげえな。固有魔術をあんなに操れる奴、ほとんどいねえぞ」

「妄想力は豊かだからね。一匹の猫を一人のネコミミ美少女に脳内変換することなんて朝飯前だ」

森の中を二足歩行している。当たり前といえば当たり前だが、この森の中では四足歩行の生物の方が多いので当たり前ではないと言えは当たり前ではなかった。

彼らは今五人。救助した女性をライカが背負っている状態だ。

「小鬼ゴリンつつつても、数は暴力だ。あの数があると、まあ初心者の冒険者だつたら三秒で肉塊にされるだろうな」

篠崎は四方八方からあの小さな体がのしかかってくる様を想像し身震いした。

「そこに行かせるって、アンタら凄くイイ性格してるわよね」

篠崎の左横を歩きながら、白神が呆れたように言う。

「あなたたちの実力を信じてのことよ。悪く思わないでね」

それに、万が一殺されそうになっても後方にはこの二人がいた。

そのおかげで落ち着いて戦うこともできたし、絶大な安心感も得られた。

それだけ、この二人が強いということだ。

とりあえず、一路帰りの道につく。

その時、気持ちが悪くなるほどおぞましい叫び声が、耳を劈き、森を震わせる。バサバサと鳥が逃げる音がそこから聞こえ、魔物が逃げ惑う声があたりに響く。

「なんだ? どうしたんだ!？」

「分からねエ! とりあえず固まれ!」

ライカの言葉に十分に動ける間隔も保ちながら密集する。

大地を踏み鳴らす音がする。
大気が揺れて、鼓膜を震わせる。

「ゴオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

声の先には、いろんな生物を一切合財混ぜこぜにして、一緒くたにして、何とか形を保っているような魔物が、七匹、五階建てのビルのような巨体を聳えさせ、巨木の上から五人を睨みつけていた。

背中には鷲の様な黒い翼を悠然と構え、顔は獅子のように気高く、腕は巨人のように太く、後ろ足は馬のように逞しく、尻尾は禍々しい蛇が、口からは火を吐いている。

ライカが呟く。

「合キメラ成獣、か？」

あの黒い空間に居たものより、幾分かマシな形をした怪物が、彼らの前に立ちはだかった。

第十二話：Of what does the boy who proceed

出てきました、合成獣。

さて、どうなるのかは作者に聞かれても分からないのでございますよ。

では、ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

これからも宜しくお願いします。

第十三話：Of what does the boy who proceeds

ふう、少し短めになってしまいました

が
第十三話

『戦場に赴く少年は何を思うか〜3〜』

でしよ。

五階建てのビルのような巨大な生物が、壁のように折り重なって篠崎達の進路を塞いでいる。

ライカは少し舌打ちをして、

「なんでこんなトコに合成獣キメラがいるんだよ。ギルドから任務地不安定の報告受けてねエぞ！」

苛立ったように声を上げながらも女性をそつとその場に下ろして白銀の剣を構える。

シーナもこの状況に辟易としながらも、ため息をつき剣を引き抜く。

「なあ、アレってそんなにランクの高い奴なのか？」

一度倒したことがある身として、あの生物の強さは十分に分かっているが、それでも自分が倒せたのだから、と篠崎はライカに尋ねる。

ライカはこの状況に呆れながら、その質問に答える。

「あの魔物は魔素が濃くて、その上強度の強い魔物が数体から数十体互いを喰らい合って出現する魔物だ。混成獣キマイラとは違って、生まれたときではなく生まれてから変わる奴らだ」

目前に地響きを立てながら歩いてくる合成獣を睨みつけながら、
「そして、喰らい合った魔物のランクに応じてその強さも変わる。

アイツらはパツと見、Bランクの魔物を練り合わせてるみてえだから、ワンランク上のAランク程度と見ていい」

よく見れば、個体で姿形が若干違う。篠崎が戦った合成獣よりもほんの少し脆そうに見える。

ライカが叫ぶ。

「トモ！ マコト！ その女性連れて逃げろ！ こんな奴ら七匹もいたら、お前ら守って戦う自信はあんまない！」

一番重大なところは、篠崎達が足手まといだということだろうか。

一匹だけなら、ライカが瞬殺していただろうが、一匹倒している間に他六匹がこちらを襲ってきたら完全にアウト、熟れたトマトを踏み潰すように紅い華をこの深緑の森に広げることになる。

篠崎は女性をヒョイッと背負って白神の腕を握ると全速力で走り出した。

今、彼の精神状況はあの時のように最高潮ハイエンドではない。あの時の自分がオカシカッタのだと思い、とにかくこの場から離れることを最優先とする。

しかし、掴んだ腕の中で白神が暴れる。

「ちよッ!? さつさと話さないよチキン友! いくらなんでも、あそこに二人だけ残すなんて出来るわけじゃないじゃない!」

白神の正義感があそこから離れるのをよしとしない。いくら危険だとしても、いくら敵わないと分かっているとしても、とにかく逃げることはよしとしないのだ。

だが、篠崎も負けるわけにはいかない。負け犬にとって、死ぬことこそが負けることなのだ。それに、

「僕達が戻った方が、アイツらが危険にさらされるつつウことを理解しやがれイノシシ真! それに、この女性はどうすんだよ!」

それにつめき声を漏らして反論ができない白神。

その間も篠崎は彼女を引きずるようにして走り続ける。

後ろで剣と蹄を打ち合わせる音や、魔法による爆撃音がまるでメロディーを奏でるように、篠崎達の耳に入る。

いつ、後ろからあの巨大生物が襲ってこないとも分からない。

とにかく、龍のもとにつけば篠崎達の安全は約束されるだろう。

どう考えても、あんな不安定な生物よりも龍の生物としての格の方が高い。

安全に、辿りつけられればの話だが。

「ゴイイイアアアアアアアッ!」

前方に三匹。またも壁の様な巨体を揺らしながら篠崎達の進路を潰す。

ここで、終わるわけにはいかない。この先、まだまだ終わりどころが満載の世界だ。

こんな、つまらない顛末で終わらせられるはずがない。正義でもなく悪でもない。慎重でも臆病でも無い。

勇気を、ポケットの中にある小さな勇気を掲げる時だ。

ギリリ！ と歯を軋ませる。こんな選択肢しか選べない自分がクソみたいにちっぽけに見えて、どうしようもなく卑怯者に見えて、悔しい。

だけど、そんな悔しいも残念も、今は拘っている時ではない。生を、選べ。

「僕の声に答える！ そしてその形無き姿を顕現せよ！！」
今まで以上の量の闇が篠崎の体から噴き出す。それは船の様な形を形成し、そこに白神と女性を投げ入れる。突然のことに受け身を取れなかった白神は、少しだけ叫び声を上げるが反撃に出る。

「ちょ！ 何すん」

「そんな反撃、帰ってからにしろ」

闇の船は白神と女性の手足を縛る。どれもこれも、篠崎の意思どおりに動く。

そんな彼女たちを、目を細めて見る。

そして、言うべき言葉は。たったの一つ。

「生きる」

その一言を皮切りに、闇の船が木々を薙ぎ倒しながら高速発進する。

合成獣たちはそれに見向きもせず、篠崎を睨みつけている。その重圧、尋常ではない。

今から篠崎は、死地へと赴く。

そこを生地と化すために。

(ただ……思うだけ)

そう、思うだけで篠崎の手に魔剣が闇を纏い、顕現した。相変わらず、この世の全ての悪を孕んだかのような形と雰囲気を放っている。

ただ、悪を手を取った。今までとは^{ちが}違った心が、篠崎の心を満たす。

ただ、^{ハイエンド}最高潮に上りつめていく。止められないだろう。このままでは自分を止めることなんて一切できないだろう。

恐ろしい、と思う。自分が本気を出したら、どうなってしまっかなんて全然分からないから。

だけど、分からなくてもいい。分かる必要があるのは、ただ一つ。それで、白神 真が護れるのなら。

「来いよ、魔物」

剣を敵前へと構える。闇が、彼の体を覆い尽くす。

そして、死を宣告する裁判官のように、

「殺してやる」

死を執行する、死神のように。

|| || || ||

「こつも数が多いと、やりにくいぜ!」

蹄を魔力を込めた剣で受け止めるライカ。やんちゃそうな顔も今では少し苦い表情になっている。

体積の比率が明らかにおかしいが、攻撃を放った方の合成獣の方が押しやられた。そこに巨人の様な腕が横から振るわれる。それを跳躍して腕を駆けのぼる。

「ライカ!! そつち行つたわ!」

横から鋭い爪が振るわれた。侮ることなかれ、爪と言えども一撃で城壁を破壊できる強度を持つ鉄の爪だ。

掠れば、それだけで内臓が吹き飛ぶ。

「ッ！？」

ギヤリギヤリ！！ と剣の腹で鉄の爪を流す。その脊力に押しやられる感じでライカが空中へと飛ばされる。

人間であれば、何もできない空中。

そこに、巨人のような腕と、巨大な蹄をもった馬の足、巨大な鉄の爪が三方向から同時に襲いかかる。

それをより一層の魔力を込めた白銀の剣で迎え撃つ。

轟！！ と空気を切り裂き、衝突する各々の武器。衝突した瞬間、言葉にしにくい音と衝撃波があたりを吹き荒んだ。

三匹同時の力比べには負けたのか、ライカがさらに天高く吹き飛ばされる。普通の人間がいきなりここまで的高度に引つ張り上げられたら錯乱するのだが、強い精神を以って何とか維持する。

眼下にはシーナが行使しているであろう雷の魔術が閃光を散らしている。

それでも、あの巨体の一部分を焼く程度にとどまり、まるで海の水をコップで減らしていつているような感覚さえ覚えさせた。

その眼下から合成獣が一匹、背中にある翼を使ってその巨体を浮かべ、ライカに追撃をかけた。

それを見て、ライカは面倒そうにため息を吐き、

「始末書、書くの面倒だな……、オレの声に答える！！ そしてその捉えられぬ姿を顕現せよ！！」

大気に、ライカの声が響き渡る。

瞬間、この空の下にある風が、彼の制圧下に収まった。

師団長四人は、その圧倒的強さから、生態系に異常を与えぬよう魔術の行使と本気で剣を振るうことは許可なしでは行えない。

それを破った場合、A4ほどの紙十枚ほどに始末書を書かされる。彼の後方で風が渦巻く。遠心力を風にも適応させ、どんどん速度を増していく。

刹那、ライカの体は音速を超える。

ドパアンツ！！ と何かを破る音が喧騒渦巻く森に一際響き渡った。そして地上に群生していた木々の一部分が空高く吹き飛ばされる。

その中心に、一つの人影。

「人間の凄さ、見せてやるよ」

次の瞬間、空から血の雨が降り注ぐ。

風を自分の後ろで爆発させ、圧倒的推進力を以って合成獣キメラの体を中心から破裂させた。

血の雨が降り注ぐ中、ライカは悠然と歩きだす。

「私の声に答える。そしてその刹那の姿を顕現せよ」

そのライカの鼻先を、直径十メートルほどの雷光が奔った。バチバチと音を立て、その一直線上に居た生命を根こそぎ焼き払った。

「オイオイ。オレまで殺すつもりかよ、シーナ」

雷光でドロドロのオレンジ色に溶解し一瞬で灰となった道をゆっくりと歩く人影がある。

紫色の髪を掻き上げ、ライカに一言。

「マコトちゃんたちが心配だから、さっさと終わらせるわよ」

「ハイハイ。分かってまーすよ」

その日、森の一部分が丸々焦土と化した。

|| ||

魔剣を手に、黒々とした闇を従え、篠崎は木々の間をすり抜けるように合成獣の元へと駆け抜ける。木々の上から押しつぶすような腕が振り下ろされる。器用にそれを避けると、今さっきまで自分が走っていたルートがそのまま押しつぶされた。

そして前方から凶悪で強靱な巨大な脚が、木々を薙ぎ倒しながら篠崎へと襲い来る。

右側に避けようとするが、そこは巨人のような腕がある。

「クッ！」

左へと飛んだ。

ゴボリ！！ と土ごと木々を吹き飛ばしたその強靱な脚。こんな風に根つこが強靱な張り巡らされた土壌は、下手な鉄よりも十分な強度を持っているはずだ。

避けたところに、炎の壁が襲いかかる。

「ア、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」
恐怖など掻き消された脳内。篠崎はただ心のままに魔剣を振るう。炎が魔剣に喰われ、消失していった。その様子に一瞬怯んだ合成獣だが、野性の力が強いのかすぐさま攻撃へと移る。

振り上げられる剣、振りかざされる蹄。

状況として違つと言えば、両隣からも巨腕と巨脚が振るわれている。

現在の篠崎の実力で言うと、コレ三つを同時に受けると真っ赤に弾けてしまう。

ビュル！！ と何か彼の体を見えなくするほどに覆い尽くす。黒々しくて、どこか寒々しい。堅そうで柔らかさそうで強そうで弱そうで、そんな様々な意味を持った闇がその三つを受け止めようと彼の体を覆い尽くしたのだ。

結果は、無音。その強大なエネルギーを以ってして行われた三つの攻撃は、その闇に攻撃を受けたという結果さえ与えられなかった。さながら、幼児の駄々を受け止めるかのごとく。

その闇が一気に離れる。

その中に、仄かに赤く染まった魔剣を今にも振り下ろそうとしていた篠崎の姿があった。

そして、目の前の一匹に向けて、その魔剣を一振り。轟！！ と喰らった炎の魔力を何倍もの威力にさせ、合成獣の一匹を焼き尽くす。

「ゴイイイイイイイイイイイイイイイッ!?」

爛れるような熱さで苦しみながら、合成獣は篠崎へと攻撃を加える。

今度こそ、ゴウン！！ と鈍い音が響き、篠崎がいた場所の半径数メートルが陥没する。

それほどの威力の攻撃を、篠崎は魔剣で受け止めた。腕で直接受け止めたわけではないのに、彼の脳はダイレクトに痛覚をキャッチした。

言い知れぬ痛みが彼を襲うが、ここで立ち止まっていられるわけではない。

闇が鋭く切り裂くイメージを以って、受け止めた腕を細切れにした。黒い血液がシャワーのように篠崎に降り注ぐ。

横から巨腕が振るわれる。一撃で城壁を壊せるレベルの攻撃だ。

しかし、その一撃をやはり無音で受け止める闇。その闇は高速で渦巻き、螺旋状の槍がその腕を貫いた。腕の中で静止した闇は、次の瞬間腕を突き破って無数の棘を現した。それが、グジュ！ と音を立て肉を引き裂き、腕をボトリと落とした。

段々と、力に溺れながら篠崎の頭はこの闇の使い方を理解してきていた。

態々剣の形にして自分で持たなくとも、闇自身に自分の行動を起こしてもらえばそれでいい。

そう思った瞬間、篠崎の体に纏わりついていた闇が触手のように蠢きます。それに触れた物質は、切断されたり、潰されたり、喰われたように消失したり。

そんなとき、一匹だけ無傷の合成獣が襲いかかってきた。大地を踏み鳴らし、鉄の爪が生えた手を上から振り下ろす。

フォン！！ と蠅の羽音をもっと澄んだような音がしたと思うと、その鉄の爪が生えた手首から先の手をゴッそりと切断した。

そこから、闇の動きは迅速だ。篠崎が手を振りかざすと合成獣に襲いかかった。まず、四肢を切断し体内に侵入し内側から食い破り、そして肉や骨を噛みつぶす音が響いたと思うと、闇が退いた場所にはただの肉の塊が落ちていた。

「……これが、闇だ」

恐怖。その感情を腕を失った二匹の合成獣に刷り込ませる。地獄へ落ちて、天国に昇っても、いずれにせよ忘れられないよう、きつちりと。

ゴバア、静かに闇があふれ出す。

二匹の足元からその巨体を這いずるように闇がその体を駆けのぼる。

「……………ゴイ……………ッ!? ギ……………」

肉の潰れる音が、骨を砕く音が、肉を刻む感触が、骨を割る感触が、闇を通して自分の体へと刻み込まれていく。

最後に、その巨体全体を覆った闇。それを操作し、一気に圧縮する。

ブシャー!! と肉が破裂する音とそこから血が噴き出す音が同時に聞こえる。

闇がいつも通り彼の体に纏わりつくために、合成獣を包み込んでいた場所からその身を引く。

退いた後には、やはり、ただの肉の塊しか残ってはいなかった。

そして、魔剣もその姿を消した。

この場で生き残ったのは、篠崎ただ一人。その篠崎も、体に異常を感じる。

体の中を掻きまわされたような、言い知れぬ痛みと戦いながら、ゆっくりと前に前に手を伸ばす。

「……………反撃受けなきゃ、始まんないだろうが」

そう言って、篠崎の意識は闇へと沈む。

|| || || ||

「知らないでんじょ……………」

定番のセリフを吐こうとしたが、それ以上の違和感を感じる。

顔を横へと向ける。なにやら危なそうな瓶などが戸棚に陳列されているから、どうやら保健室、ではなく医務室の様だ。ツンとくる

薬独特の匂いがこの部屋全体に染みついているようだった。

体の方は、別にどうってことは無い。ただの健康体だ。あのときは単なる痛みとそれに耐えるだけの疲労が無く、篠崎は気絶したのだろう。

とにかく、篠崎はあたりを見回しこの違和感の正体を探す。とにかく起き上がろうと手の感触を確かめるためにぎゅっと握りしめると、

ぶにつ、と篠崎の手に柔らかくて幸せな感覚が広がる。

手元を見る。そこには騎之塚学園の制服を着た、幼馴染の白神の寝顔があった。篠崎の手はそのちょうど下あたりにあると言ってよ
いだろう。

よつするに、白神の控え目かつプリティーな胸があるというわけだが。

ぎゃーっ!? と篠崎は歓喜やら恐怖やらが入り混じった叫び声を心の中で上げる。口に出して叫んで、もし絶対神を起こすモノならば、神が荒神へと変貌し、篠崎を滅茶苦茶にしていこう。もちろん、精神的側面もだ。

利口で賢い篠崎くんは、そつと掌の力を緩め若干惜しいと思いな
がら胸の下から掌を引き抜く。

しかし、途中で何かに引っかかる。白神の微笑ましい寝顔だ。

(こうしてみれば、なんかものすごく可愛い……あ、相沢さん一筋だもんね！)

いろんな言いわけを心の戸棚にしまいながら、その寝顔の下から手を引き抜こうと思案錯誤する。

なんだかシートに濡れている部分があるが、白神の涎だろうと思
いそのまま実行する。ちなみに、学園の白神ファンの間ではこの涎は時価十万は降らないとかなんとか。

そのとき、白神の顔がシートに埋もれる。当然、その下には篠崎

の手の平があるわけで、現在間接的に唇がキツス中である。

(……おーまいごっど。し、しのさきくんは、りせいをすてたりしないんだから!!)

篠崎とて男の子である。そう言うのに興味が無いわけがない。

必死に本能と戦いながら、篠崎はどうにかこうにか手を引き抜こうと人類史上稀に見る集中力を見せる。

そんな彼の努力をあざ笑うかのように、白神の眼が見開かれた。

最初は自分の口の下で何が蠢いているのか分からず、そして寝起きだということもあってよく分からないでいた。しかし、天才でなくても出来ちゃうマコト二 ミラクルはこの状況を理解した。

ギョルリ!! と顔を篠崎の方に向けて、

「こおんの!! クサレ下種男ゲスオがアアアあああああああああ

あああツ!!」

「あんまりだあー—————!!」

この後、白神が何で助けたのよとか言ったり、篠崎が守りたかったからとか言ったり、白神が顔を赤く染めたり、篠崎が照れ隠して紅く染められたりしたのは、言うまでもないだろう。

|| ||

「報告です。合成獣襲撃作戦キメラは失敗いたしました」

「なんだと!? ……クソ、やはり師団長がいるときに隙は無いか」

城のとある一室で、金髪で丸々太った中年男性と、黒い服を着た黒子のような人物が穏やかではない会話を続けている。

中年男性の名はジル。大將軍のジルだ。

長年に渡る魔族との戦争で家族を失い、全てを忘れた男。

「……まあ、いい。じっくりと、いたぶってやるとする」

机に置いていた熟成した紅ワインを注いだグラスを手に取り傾け

る。

芳醇な味わいが、喉も鼻の中も通って、充足に満たされる。

「……魔は、許せんだよ。絶対に」

その深い味わいでも彼の怒りを治めることは無く、静かにその業火を燻らせる。

全ては、復讐の為に……。

第十三話：Of what does the boy who proceed

がながれ廻。

もうすぐで闇の光明が見えてくる！！

色々仄めかしながら

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

これからも宜しく願います

第十四話・Boy who depended too much (前書き)

ふう、学校、疲れた。

とりあえず、第十四話。お気に入り登録して下さいの方々や読んで下さった方々に感謝しながら

『甘ったれた少年』

をどうぞ。

第十四話：Boy who depended too much

「勇者のお披露目？」

「そうです。この国の勇者を国民に披露することで国民の士気及び名声を得られます」

いつもの庭でフィリアと今後のことを話す。

勇者のお披露目。それはこの国において最重要とも言える政だ。まじいこと

この一大行事が成功するかしないかによってこの国の命運が大きく変わる。失敗すれば民の信頼は勝ち取れず、少しずつ腐敗していく可能性がある。

しかし、この一大行事を成功すれば、この国はまた成長を遂げるだろう。魔の国ニーズヘッグを討ち取るのに十分なほどに。

そして、今回の勇者の数は二人。その効果も二倍となるだろう。もしかしたら二乗かもしれないが。

とにかく、篠崎も白神もこの国の最重要ポス特的立ち位置についているのは間違いない。

「この一大行事を見るために、この王都に多くの国民が押し掛けてきます。その商業効果も凄まじく、十倍から二十倍に膨れ上がりま

す。さらに、

「ちよつと待とうか!? 僕が思っている以上に物凄いことじゃないのかそれ!？」

篠崎の驚きとか驚愕とか言った言葉を聞き、少しだけ視線を上に向け考えるフィリア。

視線を元に戻すと、フィリアは、

「さらに、他国との同盟や外交問題も円滑に進むことでしょう」

いつも通り無視を決め込んだ。その行動に篠崎は両手両膝を地面につけて、「何だよチクシヨウ……、信頼と安心の無視ですか」と打ちひしがれている。流石のフィリアと言うべきか、それすらも完

目があつという間にミイラになりますが、よろしければお持ちいたしますよ」

「……結構です」

何だか少々残念に思うが、別にこの程度の距離を保った方が接しやすいことは目に見えているので篠崎は喰いつくことはやめた。

「その祝典は一週間後。それまでに心の準備やらいろいろしておいてください」

「一週間後!? 凄く急じゃないか?」

「これはあなた方が召喚されたときから決められていたことです。で……、聞いていませんか? マコト様はお知りになっていましたか」

「……」

改めて自分と白神の扱いの差に呆れる篠崎。別段これはこの世界に来てからのことではないので大して気にはしないが、こういう時ぐらいいは、これぐらいのことは平等に扱ってくれてもいいだろうと呆れる。

そんな篠崎に追い打ちをかけるようにフィリアが寒々しい声で言う。

「あと、最近どこかの過激派の活動が活発化してきているとのことなので、十分注意しててください。では」

そう言っつて席から腰を上げる彼女。

一瞬、その言葉に思考が停止して、三秒後に彼女の言葉を理解して、五秒後に声をかけた。

「え? ちょっと、フィリアさん! 今、さらつと重大なこと言いませんでしたか? オーイ、フィリアやーい!!」

彼の声は絶対に聞こえているはずなのに、やはりフィリアはすべて無視。その背中にビシビシと悲しみの視線を受けながら無情にも去ってしまった。

「……不条理だ。明日にはテンペンチーが起こるんじゃないだろうか?」

ぼん、と一人で打ちひしがれていた篠崎の肩に手が置かれた。

真紅の髪、真紅の瞳、目はぼやっとしているがどこか覇気に満ちている、そんな人物が顔を向けたその先に居た。

「……ダレン？」

「少し、話がある。着いてこい」

最近見かける姿は全て昼寝中、というなんだか逆に凄い人物ランク第一位のダレンがそこにはいた。

篠崎が戸惑っているとは彼はスタスタと歩いていってしまった。篠崎はその後ろ姿を、「ちよ、待てよ！」と泣く泣く追いかけることになった。

「ボクたちの生い立ちって奴を、アイツらからなんか聞いたかあ？」
ダレンが連れてきたのはダレンの自室。自室といっても、ベッドと机、あと本がほんの少し並べられた本棚ぐらいしかここにはない簡素な造りだった。

そこについた途端、「椅子に座れ」と命令されて、先程の話を振られたわけだ。

「えっと、ギルドの冒険者からの成り上がりってことだけは聞いたよ」

全てを聞いたのか聞いていないのか、少しだけ不安になりながらも、篠崎は師団長かれら四人の生い立ちについて少しぐらいは興味がある。興味はあるが聞くべきものなのかどうか分からなかったので今まで保留となっていたが。

そんな篠崎に対してダレンの無然とした態度は変わらず、一発欠伸を掻いた後、なんでもないうような表情で、

「孤児だよ。戦争孤児い。ボクたちには親を魔族に殺された」

「……………」

ある程度予想はしていた。フィリアが他の三人のことを兄さんやらお兄ちゃんやら姉さんやらと呼んでいたあたり、それも名字が違ホームネーム

うののだ。それにこんな世界だ、そんなことは当たり前のように起こっているのだろう。

少し傷心的な話だなと少しだけテンションを下げようとするが、ダレンはなんでもないとやわらばかりにまた欠伸を掻いた。そして、再度言葉を紡ぐ。

「で、ボクたちは孤児院で出会ったわけだ。そのころは一人じゃ何もできないただのガキだったからなあ。ただ、孤児院のみんなとは仲良くなったよ。みんな同じような生い立ちだったからな」

篠崎は黙って彼の言葉を聞く。ここで何かを喋ってしまうことは、何か違う。そう思いながら静かに耳を立てる。

「必死で努力した。まさに、必死でなあ。復讐するため、とかなんとか言って、自分の弱さが許せないだけだった。目の前で親が殺されんの、見てるだけだったからなあ」

魔族が攻めてきて、全てが死んだ。親は命がけで子供を守り、子供は命がけで生き伸びた。

そして、今、魔族に対抗する最強にして最終の手段へと強くなった子供を、あの世、天国か地獄に居るかも分からない両親はどのように見ているのか。

いろいろ詮索したところで何かが始まるわけでもなかった。

だから、自分で何かを起こした師団長かれら四人。

「冒険者として、いろんなところを駆けずり回った。とにかく、魔物へのこの黄色い脂肪みたいな塊の憎悪を、ぶつけてやりたかったからな」

その手で、昔の自分を切り裂くように、魔族を切り捨てたいと願ったのだろう。そして、国に認められるために冒険者になった。強くなる方法と言えば、それぐらいしかなかった。

「ニーズヘッグへの侵攻を手伝えるのはBランクの冒険者からだった。普通、Fランクの冒険者がBランクに上がるためには最低でも二年は必要だと言われていた。だが、そんなのは待ちきれない。絶対に、だ」

はち切れんばかりの憎悪をその身に宿しながら、ギルドからの自分に今できる最高難易度の任務を受け続けた。任地から帰ってきてはほとんど休まず準備を行い、また任務へと赴くことの繰り返し。

「人間やればなんとかなる。半年でBランクに上りつめられた。四人揃って。それで、初めてニーズヘッグを訪れられるとなった時は笑ったよ。やっと殺せる、ってなあ」

その憎悪をぶつける相手のところに赴ける。それだけでどれだけ心が躍ったことか。Bランクへ上がった瞬間など、その場で小躍りをしたい気分には駆られただろう。

そして、遂に、

「そこで、魔族の軍勢とぶつかった。初めてニーズヘッグでの任務だったからな、魔素が濃すぎて息苦しかった。だが、魔力が体に溜まる暇もなく、どんどん敵に向けて放出していく。それでも、倒れて終わることもできないほどの魔素が体に流れ込んで、体が戦闘できるよう準備される」

敵か味方が分からなくなるような血みどろの戦いの中、師団長四人は全てを懸けて戦った。命はもちろん、これから先の人生も、これから後の魂さえも。

「結果としては王国側の勝利。だが、生き残ったのはボクたち四人だけだ。そして、今の王が王子だったところにその実力を認められて、先代の王に王子を守るよう召し仕え始めた」

ぶよぶよとした肉と、脂が混じった血の海の中で、たった四人の青年たちは戦った。守るだとかそう言うのは関係なく、殺すことだけを考えて。

しかし、ここまで聴いて篠崎は違和感を覚える。

これを自分に話して何になるのだろうかということに。篠崎としては少し興味があったが、逆に言えばそれぐらいの興味であって、ダレン達の視点から考えると自分に話すことで何のメリットも産まない。何かが産めるようならそれもいいが、篠崎はそう言った能力は無い。

そこでダレンの声が少しだけ低くなる。たったそれだけのことに、この部屋の温度が数度下がったかのような錯覚を感じる。

「お前、閻属性らしいな。フィリアから聞いた」

「あ、ああ」

ぎこちなく答える篠崎。その背中に一筋、冷たい汗がタラタラと流れ落ちた。

一瞬でも気を抜けば精神的に押しつぶされそうな重圧プレッシャーに耐えながら、ダレンに視線を合わせる。

視線を合わせてもダレンはこれと言って気にした様子も無く、ただ少しだけ重圧が重くなる。

「別に、閻属性だとかそう言うことは、そんな矮小なことを気にするほど小さくはない」

そう言うと同時に、面倒くさそうに小さく燦る炎の宿った瞳を瞼の裏に隠す。そうすることで若干プレッシャーが和らぎ、篠崎も少しだけ胸を撫で下ろす。

だが、それはいけなかった。満腹になったからと言っても、猛獣の前で気を緩めてはいけないように。この青年の前では、一瞬たりとも気を抜いてはいけなかった。

「だが、敵対しようというのなら、殺す。引き裂いて磨り潰して抉り取って筆取り取って引き剥がして細切れにして、殺してやる」

ただ、雑な言葉を並べただけの様な言葉。ただ、その一言一言に含まれる憎悪の念が濃すぎて、何も無いはずなのに、どうということとは無いはずなのに、胸に圧迫感を覚え息がし辛くなる。

そう。面倒くさがり屋の彼がああ庭まで出張ってきたのは、これを言うためだった。

カワイソウな過去でも、これからのクダラナイ未来も関係は無く、ただ、今現在、お前はこの国に反乱を起こす気はないのか？ と喉元にナイフを突き付けながら問いただすために、この行動を起こし

ただ。

酸素を失いつつある体から何とか声を捻りだし、言葉を紡ぐ。

「……ねエよ。僕は、ない。今のところは、な」

息も絶え絶えと言う表現がよく似合う。運動をしたわけでもないのに、少し言葉を発したただけなのに、肩で息を始める篠崎。これが、精神攻撃だ。何もない部屋はどこかに気を紛らわせる手段を奪うため、あの無機質な喋り方は自分の底を見せないため。全ての存在が、そうでないかもしれないのに、全部自分を追い込むための罠に見えてしまう。

このダレン＝スカレットと言う男は、危険すぎる。

ここで篠崎が、「ある」と答えていれば、コンマの後ろに数百のゼロを並べても追いつかないような速度で彼はありとあらゆる方法で答えていただろう。

篠崎の答えは、「今のところは」と言うことだった。ということは、この先何かがあれば反乱を起こすかもしれないということをはのめかしている。篠崎としてはそうならないことを切に願うばかりだが。

未来に反乱を起こす可能性が少しでもあるのならば、ここで摘み取るのが定石。今の篠崎の実力とダレンの実力ならば、篠崎が闇を顕現させる前に彼は剣を抜き炎を顕現させ、証拠一つさえも焼失させ、何事も無かったかのようにベッドに寝転ぶだろう。

篠崎の喉元には見えないナイフがあてられている。ただのナイフではない。嘘付きだけを切り裂くナイフが。それを振り抜き、頸動脈を切り裂くも切り裂かないも、どちらにしてもダレンの掌の上。

全てこの場においては、篠崎よりもダレンの方が勝っている。

そんな篠崎の答えに対してダレンは見えないナイフを彼につきつけたまま、こう答える。

「そうか。なら、一週間後、頑張れよお」

何とも気の抜けた答えだった。

そんな返答とともに、喉を締め付けられるような圧迫感と、肺を

押しつぶされているような感覚は消え去っていた。ダレンが篠崎の言ったことを信じた、と言っているのだから。

そつと胸を撫で下ろし、詰まっていた息を一息に吐き出す。

そしてダレンが完全に寝ていることを確認すると、何も言うべきことは無いと判断し早々にその場を去った。

誰にだって辛いことや悲しいことがある。

しかし、それはきつと、魔族も同じはずなのに。

やはりどの時代でも人間という種族は自分の主を主体的に考えるらしい。

そんな人間に辟易としながら、自分も人間だと思い知り少しいなだれながら自室へと戻る篠崎。

パタン、と何もない部屋に静々と音が響いた。

|| || || ||

自室に戻りベッドに寝転ぶ。ふかふかとしていて、全てを包み込んでくれるような気もするが、勘違いだということに気づく。

とりあえず、一週間後のことについて考える。とにかく怖い。人前に立つ、という行為をほとんどしたことが無く、緊張で胃が押し潰されてしまいそう。とりあえずあちらの世界から持ってきた超クールミント味のブラックガムを噛みまくり落ち着く。

クツチャクツチャ、とこの部屋には完全に不釣り合いな音が響く。何千万もの国民の前に立つ。その効果は国の武力面でも政治面でも経済面でも、勇者の利用価値は高い。

そうだとすると、篠崎が閻属性の魔力云々というだけで過激派から襲われる。というだけでは話が済まなくなってくる。より一層、ガムを噛む速度が上がる。

この王国は、ラジカル大陸において最も強い国の一つ、列強国の一つだ。

「っ」ということは、この王国の発展をよしとしない国もあるわけで、

その国からも狙われると」

何だかジーンと来るものがある。別にガムのミント味が強過ぎたというわけではなく、とてつもなく泣きたい気分陥った。

何も、敵は内側だけに居るわけではない。普通に考えれば外側が主に敵なわけなのだ。篠崎も、最初はこの世界の全てを敵だと認識していたわけだし。

しかし、ここ数週間で悪い奴ばかりではなくいい奴もいるという当たり前のことに今更ながら気づいた。随分と疑り深い人間になってしまったと少しだけ後悔する。それで生き残れるというのならいくらでも疑ってやろうとは思うのだが。

ライカは、時々意見が食い違うがそれも他愛も無いことで、西沢を彷彿とさせていい奴だ。いまだに女性への趣味が一致しないのは不服だが。

フィリアは、何だか篠崎にだけというよりはバカには手厳しいが、心の底から嫌っているというわけではないし（そう思いたい）、時々優しいいい奴だ。そもそも篠崎のことを毛嫌いしているというのなら、あの暗殺騒動の時に助けに来てくれるはずがなかった。

シーナは、他の人間と同じように自分に接してくれているし、頼りがいのあるお姉さんみたいでいい奴だ。篠崎としてはシーナとライカの関係が怪しいと睨んでいるのは秘密だ。そう思い至ったのはライカの趣味が完全に一致しているからであって、後略。

ダレンは、何だかよく分からないが悪い奴ではない。そう断言することはできる。

リアも、小動物というより猫その物のように甲斐甲斐しく自分の世話をしてくれて、なんだか居心地が悪くなるくらい献身的にサポートしてくれている。それが演技かどうかは、この前の暗殺騒動で助けを呼びに行つて戻ってきてくれたところで決まった。

それでも、と篠崎は思う。

「……僕は、どこに行っちゃうんだらうな」

よく分からないな、とぼやく。

あたりを見回す。

立派な調度品の数々、懇切丁寧に磨かれた棚や床、どれもこれもが一般市民の篠崎では天と地が逆になった程度では手に入らないようなものばかりだ。

だけど、何だかもうどうでもよくなってきた。

いつそのこと、身分やら身元やらを隠してこの世界の隅っこにでも隠遁したい気分が駆られる。それだと第一の目的が瓦解して、『お前は何をしに来たんだ？』と聞かれれば何も答えられなくなるのではないのだが。

今まで、自分は何も考えなくても生きられた。ただ学校に行って、遊んで帰ってくれば、優しい優しいお母さんが作った温かいご飯を心行くまで食べられた。時々、夜遅くまで夜更かして次の日寝坊なんかしてしまって、大体その日は白神と同じようにダッシュして竹原センセに怒られて、そのことで西沢にいじられて、相沢さんで遠巻きに笑われて、学校帰りにゲーセンにでも寄って、愚痴愚痴言いながら以外にもハイスコアを叩き出したりしてしまって。

こんな上辺だけの平和じゃない。上から下まで、手前から奥まで、どこからどう見ても平和。平和と気付かないほどの平和が、今、非常に懐かしい。

殺す、殺される。そんな単語が平気で飛び交う世界なんて、絶対に嫌だ。

だけど、もう、逃げられない。

分からなくなっていた。自分が、どっちの世界で笑っているべきなのかを。

あちらの世界で真の平和を享受し、何も考える必要が無く笑っているのか。

こちらの世界で戦いの輪廻に身を晒し、何も考えることができないくらい戦いに明け暮れるのか。

どちらがいいかと聞かれれば、即答できる。あちらの世界だと。

どちらでなければならぬと言われれば、迷うだろう。大方、こ

こちらの世界だと。

篠崎は戦いに身を投じるほどの戦士ではない。しかし、誰かが悲しんでいるのにそれを背中で受け止めてそのままでいられるほどの大物ではない。

そこまで考えると、今日の思考フェイズは終了を迎えた。

「特訓フェイズ特訓フェイズ」

そう言いながら篠崎は自分の魔力を感じ取るために目を瞑る。

今のところ闇魔術は固有魔術しか扱えない、というよりどこにもそういった類の情報は全く無かった。それは、そんな情報を持っているだけで敵罰に処されるからか、それともこの国の民がそういうものを毛嫌いしているからか。どちらなのかは分からない。

ライカに聞くとところによると、この城のどこかに闇魔術をほぼ網羅している『黒の書』なるものがあるらしい。先代の勇者が先代の魔王から『魔王の仮面』を奪ったときについてに持って帰ってきた物らしいが、どこにあるのかは分からないしかなかった。

そういうのを喋っているライカを見ると、ますます西沢を思い出す。

意識を集中し、魔力を感じ取る。そして、

「僕の声に答える。そしてその形無き姿を顕現せよ」

ブワァー！！ と彼の体から血のように噴き出す黒々しい闇。それを部屋全体に伸ばしていく。

完全に部屋全体を覆い包んだのを確認したのは二秒後。最初は一分ほどかかっていたが、これも努力のお陰だと信じたい篠崎だった。手に取るように分かるとはこのことだろう。机の上に置いてある自分のリュックサク。その中身。数々の調度品の凹凸。これは、実際に目で見るよりも鮮明に分かるだろう。

そう。ベッドの下に居る男の姿だつて丸分かりだ。

材質はオリハルコンが一割ほどの合金だろう。そこら辺では売っていないナイフだ。その他にも単発式の銃。怪しい液体の入った小瓶。もはや暗器ではなさそうな爆弾など。

ベッドの下の男は闇に包まれているのに気づいていないのだろう。じつと息を潜めて気を窺っている。篠崎の闇はちよつとした影にでも同化できるので、ベッドの下などは完全にテリトリーだ。

「(ナメてやがるな)」

殺ろうと思えば、すぐにでも実行に移せたはずだ。それが実物の篠崎を見て少し安心したのだろう。コイツくらいならいつでも殺せる、と。

篠崎だって、今の今まで気づかなかった。もし、闇を張り巡らそうなどと思わなければ、それがもう少しでも遅れていれば、死んでいたかもしれない。

しかし、それは仮定の話。今は現実問題、自分の下に居る男の命は篠崎の掌の上だ

現実には驚くほど簡単に篠崎に有利に傾いた。

そして差し出された有利から選べる選択肢は二つ。それも驚くほど簡単で明快な二択。

生かすか。殺すか。

殺すのであれば、このままグシャグシャで熟れた柿のように握りつぶし、闇に城の外に運ばせて捨ておけば楽勝だ。

生かすのであれば、このまま闇で手足を縛りそのままライカがフイリアぐらいにでも突き出せばよいだろう。

生かすのも殺すのも、自分の魔術を行使するだけなので労力はほぼ変わらない。

だが、自分を殺しに来たやつを簡単に見逃していいのか。そんなに甘い世界ではない。殺さなければ殺されるといふ、ハリウッド映画の様な世界だ。

「(ダメ、だな)」

それでも、と思う。

この世界がそんなに甘く無く、殺すか殺されるかの世界だというのは全てではないがそれなりに理解はしているつもりだ。

あの口ベ森林にいた小鬼ゴブリンだって合成獣キメラだって、殺しに来たから殺

した。そこに善も悪も無い。

だけど、それでも僕は甘い人でいい、そう思う。優しく無くても、強く無くても、誰の為になるでもない甘い人になれればいい。そう思う。

この考え自体が甘々だな、と篠崎はベッドの下でスタンバイ中の暗殺者に聞こえないように小さく笑った。

闇でベッドの下に居る男を弾き出す。男が暴れ出す前に手足を闇の縄で縛り上げ、目隠しをして床に転がした。この間約一秒。

ジタバタと暴れ回るが、単純な力でどうこうできる魔術ではない。少しだけ痛み到我慢してもらおうとして、首をキュツと締めて意識を落とす。

意識を失った男を闇の中へ押入れ、自分の影と同化させてライカの元へと運んだ。

その後のことなど、知る由もない。

第十四話：Boy who depended too much（後書き）

さて、もうすぐですね。

長いプロローグには終止符を打つとしましょう。

まあそれは置いておいて、師団長四人の過去が明かされましたね。

ここでフィリアが他の師団長のことをお兄ちゃんやらなんやらと呼ぶ理由を明かしたつもりです。

兄以上の感情を寄せているのは明らかなのですが。血は繋がっていないので大丈夫です。

それではこれにて失礼させていただきます。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

これからも宜しく願います。

連日投稿が出来て嬉しい限りです。

物語は、変革の時を迎える。

それでは、第十五話。

『優しい魔王になるために』

どうぞ。

「ほら、シノサキ様。ちゃんとおめかししないと」

「いや、大丈夫だつて。イ、イヤ、ピツチリ七三分けはイヤアーツ
!？」

あれから一週間。遂に勇者の祝典の日が訪れた。

今は篠崎の部屋にある大きな鏡の前でリアにいろいなる指南を受けていると言った状況だ。例えば、他国のお偉い方と挨拶をかわす時の作法やら、国民の前に立つときのスタンスや、社交辞令、批判された時の対応の仕方、などなど。

今日は死ぬ。そう思う篠崎だった。

篠崎としては今日この日までは平然としていますよアピールを何とかしていたのだが、いざその日が近づいてくると緊張で体が内側から破裂しそうになる。おおよそ、一般人の許容量を超えている。自分の両肩にこの国の発展だとか、滅亡だとかのしかかっていると今すぐにでも逃げ出したくなってくる。

けど、そこはあちらの世界から持ってきていた超クールミントガムを噛みまくって何とか落ち着かせていた。

とにかく意識を他のことに向けていないと本気で魔力が暴走して破裂しそうなので怖い。

クツチャクツチャ、とこの部屋には不釣り合いな音を上げながらガムを噛んでいるとリアが不思議そうに見つめていた。

「どしたの？」

「その、今さっきからずっと噛んでいるのは……?」

この世界ではガムなどはないのだろう。そもそも一度口に含んだものを数分間口の中で噛み続けると言うのは普通ではない。少し不快に思ったのだろう、眉間にほんの少しだけ皺を寄せている。

篠崎はそれに弁明するように、

「こ、これはな？ あつちの世界でガムっていう嗜好品で、合成樹皮にいるんな味をしみ込ませて噛み続ける食べ物なんだ。タバコと一緒にだよ」

タバコと違って周囲に無害だからいいだろ？ と篠崎は一枚リアに進める。

そこから飛び出したのはそこら辺では絶対に打っていきそうにないほど黒々しいガム。どこにどう清涼剤を混ぜたのか、どんな配合でこんな匂いを放っているのか、辺り一面に濃いミントの匂いが充満する。

しかしそんな刺激臭よりも好奇心の方が勝ったのか、恐る恐るリアの小さな手が伸ばされる。

ツン、と指先があたり湿りっ気のない乾燥した感触にびっくりしたのかビクリと手が揺れる。それでも人差し指と親指で挟み、そろそろと口元に運ぶ。ペロ、と赤い舌先で舐めてみるとほんのりとミントの味がする。

それで安心したのかポイっと口の中に投げ込んだ。

表面の味よりも実際のガム本体の味の方が数倍も強い、なんて当たり前のことも知らず。

一回、咀嚼した。

瞬間、口の中を始発とし、脳天から指の先まで鋭い衝撃が駆け巡る。口の中とて無事では済まない。既に感覚が麻痺し、鼻から突き抜ける清涼感たっぷりのミントの匂いが非常に苦しい。

そしてなにより問題なのは、リアの鼻が人間のモノより敏感だということだろうか。

口を尖らせて、頬に両手をあてながら叫ぶ言葉など誰でも予想でき。

「かつらア~~~~~いッ!？」

そのまま目にもとまらぬ速さで部屋を飛び出し、どこかへと走り去ってしまった。

残った篠崎はというとちょっととした罪悪感に苛まれながらも、

「……………七三分け回避成功ッ!? なんという奇跡!」

とりあえずガッツポーズを決める。

けどそんなに辛いかな? とガムを噛み続けながら小首を傾げる篠崎だった。

蛇足だが、そのガムはあまりの刺激の強さで小児が誤って咀嚼すると気絶する等といった事例が多発し、多くのクレームが来ている問題商品だということを篠崎は知らなかった。

|| ||

とりあえず涙目になって戻ってきたリアから、「時間までゆつくりしててください」というお言葉をいただいた(親の仇を見るような眼で)ので、篠崎は無駄に長い時間緊張という最悪の敵と戦うはめになった。

「ウウ、なんだか緊張しすぎて吐き気が……………」

高校の入試の時など、これと比べれば遙かにマシだ。もしかしてセンター試験に届くかもしれない、味わったことは無いけど、などとうわ言のように言葉をつなげていく篠崎。

とにかく喋っていないと死ぬ。そんな病気にかかってしまったようだった。

そんなとき、この世界では珍しくノックの音が部屋に響く。この世界の奴はリア以外、どいつもこいつも勝手に部屋の中に入り込んで、あまつさえ暗殺までしようとする不届き者までいると来た。

ライカ然り、暗殺者然りだ。

とにかく珍しいなと思いつつ、「ちょっと待っててー」と気の抜けた声を上げる。

ドアの方に歩いていき、かちやりと開けると、そこには白神がいた。

よくよく思えば、白神がこの部屋に来たことは無かったなあ、などと思考しながら黙っている彼女を部屋に招き入れる。

借りてきた猫のようにあたりをきよるきよると見まわす白神。

そんな白神に若干の違和感を覚えながら、「どしたの?」といつも通りの口調と雰囲気で尋ねる。

「……………」

それでも白神はだんまりを続けた。

篠崎は、彼女が自分と同じように緊張して自分のところに来たのだろうか? とある種希望的なことを考える。しかし白神自体は人前に立つなんてことは当たり前前のおこなってきたので今更緊張するとは思えない。

そんな篠崎の思考の対象である白神がついに口を開く。

「……………アンタ、いいのね? この国の勇者になっちゃって」

「……………」

篠崎は黙る。

篠崎は自分が恥ずかしくなった。心配だとか緊張だとか怖いだとか恐ろしいだとか。目の前の自分より一回りも小さな少女は、もはやそんなステージには立っていないかった。

ただ、少年のことを心配していた。

それが恥ずかしく、悔しく思った。

「勇者になるって言うことは、綺麗事だけじゃ済まなくなるのよ。魔物退治だけで魔王は倒せないし、有り体に言えば生きた兵器として利用されるの。どんなに綺麗事を並べても、そこは絶対に揺らがないの」

「……………だけど、それはお前だった」

「アタシはいいの。アタシは好きでやってるんだから。だけど、アンタは違うでしょ? なんていうか、その、ア、アタシを助けるためだとかなんだとかでこの世界に来たわけでしょ?」

「……………」

そう。最初の目的、というより今も変わっていない目的はそれだ。あのとき、もう会えないかもしれないと、もうあの世界に白神が戻って来ないかもしれないと思うと、動かすにはいられなかった。

だから今、自分はこの場に居る。

そして今、自分は勇者になろうとしている。

どこでどう変わったのか。白神を助けるどころか、逆に縛り付けているではないか。

「……だったら、ここらへんで終わってもいいと？ 違うだろ。僕はこんなところで燻らない。笑わせるなよ、白神 真。そして見くびるな。僕はお前が思っているほど、弱く無い」

だったら縛り付けたまま、白神を守る盾となればいい。ガチャガチャに固めた鎖で覆い尽くせばいい。

そしてさっさと魔の国二ーズヘッグを殲滅して帰る方法を探せばいい。

そんな簡単なこと、出来ないはずがない。

篠崎は少し自信なさげに言った。だけど確信を持って言った。

お前に心配されるほど、弱いつもりはない。

『正義の味方』は周りの心配などせず、世界を救うことだけを考えている。周りはお前が思っているほど貧弱ではない。

そんな意外な言葉に少しだけ黙る白神。何かを考えるように顔を俯かせた。

しかし、少しすると俯かせていた顔を上げてニッコリ笑う。

「……そうね、傲慢だったわ。友、アンタカッコよくなつたわね」

「僕は最初からイケてるメンズ。略してイケメンですー」

そこからあちらの世界のことやこちらの世界のことと華を咲かせる。二人ともニコニコ微笑みあって、久しぶりにこんなに笑った。

平和も何もかもあったもんじゃない世界だ。甘つたれたことをめかせば笑われ、誇大妄想は侮辱される。皆が傷つかずに笑える方法なんてどこをどう探しても無いのかもしれない。侮蔑と侮辱以外の笑みを浮かべるなんて難しいのかもしれない。

だけど、そんなことはただの戯言だ。

ただ理路整然とした道筋を立てた理論を、淡々と語っただけのバカらしい戯言だ。

篠崎 友という少年は、そんな戯言を鼻で笑い飛ばす。そんなことは知ったことではない、と。

最終的に大事なものは、やはり自分なのだと。

だから笑おう。

当たり前前にことに気づけた自分を、当たり前前にことに今まで気付けなかった自分を笑い飛ばすように。

誰も傷つかずに済む方法は、そんなものはない。

だから、そんな方法に自分になってやる、と。

ないならば、創る。

一番当たり前だ。

篠崎は笑う。現実には希望が見える。想像の中の理想が、やっと現実にはまってきたことを嬉しく感じながら。

幼馴染と、笑い合った。

|| || || ||

あれから白神と本番までしばしお別れということで、篠崎はこれからのことを話すためにリアのことを探していた。あそこまで調子に乗った発言をしてしまうと、何が何でも成功させたいと思う。

なので篠崎は英単語を何十回も読み直すかのようにリアにもう一度確認を取りに行っているのだ。

しかし、決定的な間違いを篠崎は犯していた。

一つは篠崎自身がリアの居場所を知らないということ。この時点でお前は何をしに行ったんだと問いただしたくなるほどの馬鹿である。

もう一つは篠崎という生物が頭を抱えなくなるほどの方向音痴だ

ったということである。

白神の部屋を訪れた時など、自分の部屋への戻り方を忘れたほどである。さらに行き先がどこだか分からないまま出発したということは、目的地ゴールなど存在しない砂漠無限マラソンを敢行中とほぼ同じだ。

ゆえに篠崎は困っている。

「あゝ あゝあゝあゝあゝ……」

足がだるくなってきた、肉体的な面ではなく精神的な面で。

この城、どこを歩いていても同じような風景が続いているのでちっとも進んだ気分がしない。歩いて歩いても、どこまで突き進んだとしても地平線が続くかのように廊下が続いている。下手をしたらいつもいる中庭への行き方も忘れそうだ。篠崎自身は覚えていると思っっているのだろうが、彼は自力で中庭へ行っただけが無いというお墨付きである。

とにかく、カツカツという音が石造りの廊下に響く。

「部屋に戻る方法なんてこれっぽっちも分からない。さながら、ダイヤとプラスチックのおもちゃを並べられたときかの如く」

よく分からない比喻表現をしながらそれでも歩く。

こういつ時はぼーっと歩くのが一番だと思い、とりあえず何も考えず歩き続ける。それこそが方向音痴たる所以なのだが。

ポケットに手を通り込みブラックガムを取り出す。この時点で爽やかな（強烈な）ミントの匂いが鼻孔をくすぐる。その包装紙を手早く取り外しポケットに突っ込むと口の中にガムを放り込んだ。

入試前のテスト勉強はこれで三日間徹夜をしたなあなどと感慨にふける。その結果、なんとか合格点ギリギリで合格したときは冷や汗が流れた。

「そういえば、何で僕は騎之塚学園に進学希望したんだっけ？」

思い出してみる。面接の時はもっともらしく、『自分の進路にある』といったような気がする。本当はそこではないような気がする。

あからさまに言ってみれば、直感という奴なのかもしれない。そんなことで普通に高校を選んだ自分が普通に恐ろしかった。なににより、そんな志望動機でよく普通にお母さんが許したな、と思ったが放任主義だということを出し、まあ普通か、と普通を連続で多用する。

普通っていいよな。何がイイかって？ 普通だからに決まってるだろ、ともはやよく分からないことを口走りだした。

そんな彼の前に一人の女性が出現する。
多くの人は彼女をこう呼ぶ。

「……ナイトウォーカー？」

あの時と同じように、黒い髪をポニーテールにした彼女が、凜とした表情のまま篠崎の前に立ちはだかっていた。

手には、やはりあの時と同じように黒い剣が握られている。

「……貴様、勇者になるのか」

「……それはどうい」

全てを言い終わる前に彼女はほぼ消えるような速度で篠崎の前に移動した。

間近で見る彼女の目。残念と後悔と悲しみが内包された怒りで全てが満たされた目だ。この目は知っている。この目は篠崎が白神をこちらの世界に行かせてしまった時の目だ。そして西沢と波風の目でもある。

しかし、剣を振るうことなくただその黒い瞳で篠崎を睨みつける。

「……勇者になるのか。そう聞いている」

「……それが、どうしたっていうんだ？」

それは肯定の返事だった。篠崎だって分かっている。自分には勇者なんて柄じゃあないと。だけど、それをこの魔族の女性に言われる筋合いはないだろう。そう思い、思わず睨みつける。

それで篠崎は戦闘になると思っていた。

しかし、何も起こらない。それどころか、件の女性は泣きそうな表情になっていた。今まで信じていたものが全て嘘だったかのよう

に、サンタクロースは居ないと言われた子供のように、グツと涙をこらえていた。

「?????」

それが一体全体何を意味しているのか、篠崎にはさっぱり分からない。別にこの女性にフラグを建築した覚えはないし、と場違いなことを考える。

そして、目の前の女性が動き出す。

解けば何かが漏れだしてしまうかのように堅く結んでいた口をゆるゆると開く。

「……そうか。ならば、死んでもらうッ!!!」

簡単に言えば、その場に居るのが辛くなるほどの殺気を当てられた。

意識がどこかへ吹っ飛びそうになる。親の仇だとか、昔からの怨敵だとかではない。

純粋な憎悪が、篠崎にぶつけられた。

「ッ!?!」

タンツタンツ!! と後ろにバックステップ、何とか距離を取ろうともがく。相手はあの師団長でも最強のダレンと渡り合える存在、篠崎程度すぐさま挽肉にされてしまう。

とにかく戦ってはダメだ。逃げる。そんな命令が体を支配する。

そんな篠崎を見下しも嘲笑いもせず、ただ見つめるナイトウォーカー。

彼女は人差し指を距離を取った篠崎に向けた。

「……それは七つの罪。一つは傲慢、一つは憤怒、一つは嫉妬、一つは怠惰、一つは強欲、一つは暴食、一つは色欲」

おそらく魔術詠唱だと思われる言葉を紡ぎだしはじめたナイトウォーカー。

しかし、篠崎が今までに感じてきた魔力と、全てが異なる。それでいていつも自分が感じていたもの。

闇。闇属性の魔力がその指先に集まり始めている。そしてその魔

力の質と量と密度は、篠崎が扱うようなちやちな固有魔術とは比べ物にならない。一撃で万の大軍を吹き飛ばせるレベルだ。

恐怖する。あんなモノをここで使われれば、被害は篠崎一人では済まなくなる。もしかしたら、この城のどこかに居る白神に直撃する可能性だつてある。もし、という仮定表現。だが、それは見逃せない場合はしなければならぬ心配だ。

「集え、地獄の眷族よ。嗤え、全てを壊したその後に。狂え、禍根も残さず的確に」

闇の光。そう形容するに相応しい闇の光線が七つ広がる。

あの魔術を何の被害も無く受け止める方法は無いのか。それだけを考える。しかし焦った思考回路ではいい考えなどほとんど浮かばない。

（闇で受け止めるか？ 駄目だ、質が違い過ぎる！？ 避けるか？

駄目だ、そんなことをしたら誰かが……ッ!?!?)

セラン・テッドトリア・シンズ

「……殺せ、全ての罪を背負わせて。七つの大罪」

七つの闇の光が一つに収束していく。

何がしたいか。そう問われればこう答える。

護りたいのだ、と。

思うだけ、そうすれば道は開かれる。

やがて一本へと収束した闇の光が急激に渦を巻き、そして超高速で放たれた。ギユガッ！ と空気を食い破る音がする。

篠崎は、思わず手を振り上げた。

ドゴンッ！！ と何かがぶつかる音がした。ギリギリと何かに押しされる感覚がする。

そんな自分の手には、しっかりと。殺すだけの意味しか持たないはずの魔剣が、しっかりと誰かを護っていた。

魔剣が闇の光を喰らい尽くそうと鬨ぎ合う。世界の悲鳴が聞こえる。思わず耳を塞ぎたくなるほどの悲痛な叫び声。

「……魔剣ティア……ッ!!」

魔術を行使したまま怒りの声を上げるナイトウォーカー。それに呼応するように魔剣　ティア　にぶつかる威力が上昇した。

思わず仰け反りそうになるほど圧力。魔力を喰らっているにも拘らず、まったくもってその威力は衰えを知らない。

篠崎は、魔剣を両手で握る。絶対に、外させない。

「オ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」
様にならない格好でとにかく踏ん張る。これを一瞬でも外してしまえばこの城が吹っ飛ぶ。それだけはさせない。

しかしナイトウォーカーは周りの被害など考えず怒りのままその力を振るっている。

あまりの魔力的圧力に強化されているはずの肉体でもギリギリと後ろへ追いやられる。握っている剣の柄にも鮮血が滲みだした。

それでも篠崎は諦めない。負け犬は、絶対に諦めない。負け豚にだけは、絶対にならない。

勝って誇れる豚になれ。

負けて意地を張る犬になれ。

世界の悲鳴がより一層強くなる。ただ、莫大な力同士がぶつかり合い、喰らい合う。

だが、泣いているのは、世界だけではない。ナイトウォーカーの目から小さな雫がこぼれおちる。

「……でだ」

篠崎には聞き取れない。目の前で爆発が起こっているようなものなのだ。少し咳いた程度では音は届かない。

しかし、ナイトウォーカーは、叫んだ。

「なんでだアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!」
?

ゴバアッ!! と黒々しい闇の光がその半径を拡大させる。

だが、それと同時に一つの異変が起こる。

篠崎の視界が赤黒いモノで覆われた。

「……血？」

力を込めながら、篠崎は訳が分からないまま首を振る。確かに、目から血が飛び散った。別に目が破裂しているわけではない。涙腺から、血が溢れだしてきたのだ。

頭が、白熱する。

その悲しみはどこから来たものなのだろう。その怒りはどこから来たものなのだろう。

それでも、悲しみは起こり続け、怒りもまた湧き上がり続ける。

気付けば、ナイトウォーカーも同じ状況だった。涙を、血の涙を流しながら、怒りに染まった顔で篠崎を睨みつけている。

「。。。」

ナイトウォーカーが何かを言った気がした。しかしそれは分からない。

より一層威力が増したと思った時、唐突にその圧力は消え失せた。

同時に、ナイトウォーカーもその姿を消していた。

ふっ、と赤黒い涙もその流れを止めた。頬には赤黒い痕が流れている。

全て消えた、そう思った。しかし、何かが残っている。白熱した感情だけが、頭の中に残っている。

「チクシヨウ、なんなん、だよ」

それから篠崎は、またあてもないまま歩き始めた。

|| || || ||

頭が白熱している。頭が目まぐるしく黒くなっていく。

白と黒が混ざって、灰色かと思えばやはり白と黒に戻って、頭の中で回る感触と感覚に吐き気を催しながら篠崎はゆっくりと廊下を歩く。不思議なことに誰も歩いていない。

ふらふらと、ぐらぐらとしながら、ここがどこだなんて些細なこととは気にせず、ただただ歩く。

考えることは複数。いろいろあり過ぎてどこからどう手をつけていいのか全く分からない。

（血の涙はなんだ？ あの感情は？ 今の感情は？ どうして人が歩いていない？ ここはどこだ？ 何を考えている？ 何で泣いていた？ なんで襲ってきた？ 何で分からない？ 何でなんでナンデ……？）

一気に自分が壊れそうだと。気を抜けば壊れる。

そんな危うい橋を歩き続けるかのように、ただただふらふらと歩き続ける。

ふと、目に映った階段。とにかく、下に降りなければと思い、やはり石造りの階段を今にも転びそうになりながら不安定に降りる。

どこまでも続きそうな階段を降り続ける。どこまでも続いているならどこまでも墮ちたい気分だ。

カッン、カッン、と無機質で堅い音が何百回と続いた後、異変に気がつく。

明りが、灯されている。そして、日の光が差し込んでいないことに気がつく。

窓が無い、ということとはここは地下なのだろうか。そう思いながらも篠崎はさらに深く墮ちていく。

「……臭う？」

異臭がする。あの外から見たら清楚の塊のような城からは想像もつかないような異臭が、いつそのこと悪臭といっても差し支えのない臭いが階段の下から沸き上がってくる。思わず吐きそうになる。

まるで下水処理をせずに放置した下水処理場の様な臭いが、例えると意味が分からなくなるような臭いが、嗅覚を襲った。

その時、金属同士を擦り合わせたような金切り声が階段の下から少しだけ耳に入ってきた。

壮絶。そんな声だ。

篠崎は行ってしまったらもう二度と戻って来れないような不安に駆られながらも、行かなければならないという謎の使命感に駆られ、

またゆるゆると階段を降りはじめた。

「ッ!? ッ! ギッ!?」

人間が出していい声を大きく外れた声、というより音が篠崎を苦しめる。

悲痛な声だ。今まで聞いてきた声の中で、一、二を争うほど悲痛な声だ。聞くのが嫌になりながらも、耳を塞ぐのでさえ躊躇われる悲痛な声。

遂に、地の底が見えた。

そこから臭いも、声も、全ての元凶が、そこから、そこから来ている。

意識が拘泥する中、篠崎はその地の底に足をつけた。

それと同時に、何かを潰すような鈍い音。この音を、篠崎は知っている。

闇を使い、合成獣^{キメラ}を握りつぶした時の音とよく似ている。つまり、肉を握りつぶす音。これは、それよりも酷く、何か固い鉄の塊のようなもので叩き潰している、といった音か。

地の底はかなり広い空間だった。かなり広く、それでいて光源体が蝋燭の光だけで、不気味な雰囲気漂わせている。違うところは、今までは綺麗に舗装されていた石造りの廊下だったが、ここは洞窟そのものといったところか。

「ギユおきユふわグげエアああああああああああああああああああああッ!?」

恐ろしい声が響いた。

獣のようで、それでいて中途半端に理性が残っていて、生々しく幻想的で吐き気を催す悲鳴と、形容してはいけない、ナニかの音が、聞こえた。

手が震える。

それでも一歩を踏み出した。全てを知るために。

そして、後悔することになる。もう、戻れないだろう光景を目の当たりにして。

人の体をしていた。そう形容すべき肉の塊が、ゴツゴツとした岩の壁に鎖で吊るされて、胸の中央が不自然に陥没し、口と肛門から内臓が飛び出ていた。

思わず、篠崎は吐く。朝食べた朝食も、昨日食べた夕食も、今まで食べたすべてのものを吐きだすように。吐く物が胃に無くなったところで嗚咽は止まらない。岩の部屋に篠崎の嗚咽が響く。

とりあえず、立ち去ろうと振り向くと、同じように吊るされた女性と思われる体に、無数の刃物が突き刺さったまま生かされていた。目は死んでいるが、それでも呼吸はしているらしく僅かに胸が動いている。

一歩、後ろにたじろぐ。ブジュ、となにかぶよぶよした物体を踏みつけた。見ると、赤紫に変色した、肉。蛆虫が集り、ビチビチと跳ねている。

頭の白熱がさらに白熱する。真っ白が真っ黒になって、真っ黒が真っ赤になって、真っ赤が真っ白になる。

叫べない。コレを見て、何を叫べと言うのか。何の感想も湧かない。

あたりを見回す。

そこに、生きた人間の姿が複数あり、それがこちらを見て話している。その体には飛び散った肉片などが付着している。そして、下卑た笑みを浮かべていた。

「勇者ドノじゃ、ないですか」

「コノヨウナ場所でどうなされたのですか？」

そんなことを平然と聞いてくる。

完璧に狂っている。頭が、脳味噌が直接曝されたような、死体が、そこら中に転がっているというのに。

「ん？ ああ、コレですかい？」

目の前の男は息を吸うかのような気軽さで、死体を指さしながら

コレといった。
そして続ける。

「魔族の処刑ですよ。拷問も兼ねてますがね」

魔族。そう、魔族だ。こうやって山積みされた死体は全て魔族だ。だから、殺しても、なんの、問題も、ない？

こうやって、惨く、酷く、殺しても、どうせ、魔族だから、なんの、問題も、ない？

自分という自分が刻まれていく。

今まで信じていたものはなんだったのか。この国は、なんだというのだ。

そんな風に自分が壊れていくのを感じながら、男は下卑た笑みを浮かべて、

「勇者ドノもやってみますか？ 魔族にフクシュー出来るチャンスですよ。殺しの練習ができるチャンスですよ」

そう言われる篠崎の視界で、小さな影が動く。

次の処刑待ちなのか、手に枷を嵌められた、小さな小さな金髪少女が、死の恐怖に、これから行われるであろう凄惨な出来事に、その小さな体を目一杯震わせて、恐怖していた。

その少女を見ていることが分かったのか。男が。尋ねてくる。

「おお？ 勇者ドノもいい趣味をお持ちだ。オイ、連れてこい」

そういうと男のうちの一人が少女の金髪を引っ掴んで痛みにのたうちまわる少女を引きずって連れてきた。

下卑た笑みを浮かべる、男。

泣き叫ぶのをいつの間にかやめ、絶望に笑っている少女。

ブチリ。何かが切れる、音がした。

ぼーっとしている篠崎を不思議に思ったのか、男のうちの一人が

尋ねる。

「……………」

それでも何の反応もない篠崎。それを見てあまりの恐怖で失神したとも思っただろう、男が顔を覗き込む。

だが、戦慄することになる。その、無機質。一切の感情が切り捨てられた瞳を見て。

自分よりも一回りも小さな少年に恐怖し、一歩たじろぐ男。

そして、口を開く少年。

「ンだよ。なんなんだよオツ！ クツソ野郎がアアア

アアアあああああアツ！！」

恐怖でたじろいだ男の顔を右手で掴む。男が何かを叫ぼうとした。それよりも先に少年は男の頭をゴツゴツとした岩の床に叩きつける。

肉を打ち付ける音の後、どろりとした脳漿が飛び散る。ビクビク！ と体が痙攣を始め、一向に収まる気配を見せないただの死に体。それをただ呆然と眺めていた男達。事態に気がつくのと各々の拷問器具を手にとった。

棍棒や鋸、鉈に槍に短剣に、不気味な形をした鎌。

しかし、何をしてもない。

「僕の声に答えやがれ！ そしてその形無き姿を顕現しろオツ！！」
一瞬で闇が噴き出し、男たちを切り刻み握りつぶし摩り下ろし、ただの肉の塊へと変えた。

金髪の少女を見る。何が起こったのか分からないと言った表情で意味も分からず泣きじゃくっている。

その頭を、血に塗れた手で撫でつけた。

自分が撫でられたということに気がついた少女は、その金と銀の瞳で篠崎を確認して、にっこりと、この場では不釣り合いなほどの笑みを浮かべた。

「オア……、ア、ア、ア！ アアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！？」

王城の一角が、吹き飛んだ。

そこから漏れだすのは、圧倒的闇。

堅いとか柔らかいかとか、強いとか弱いとか、優しいとか怖いとか、
そんなものではない。

闇。深い深い、闇としか表現できない何か溢れだした。

〓 〓 〓

謁見の間にこの世のものとは思えない鋭い衝撃と、獣の様な人間の
様な声が響き渡った。

勇者の祝典に際して、ガイア王とメディナ王妃。その衝撃と叫び
を耳にして何事かと立ち上がる。

傍らにはあまり揃わぬ師団長四人と、勇者マコト〓シラガミの姿
がある。さらに先代の勇者パーティであるリード魔術師団元帥もい
る。おおよそ、この大陸でこの厚い壁を破ってガイア王やメディナ
王妃に傷をつけられるものはいない。いるとしたら『悪英雄』ぐら
いだろうか。

それだけの最高戦力がこの場に集まっていた。

まず第一に何か崩れ落ちる音がする。光が差し込む窓から見え
るのは、何百年も間不落を続けてきた王城の一部が崩れ去って行
く姿。

ガイア王は叫ぶ。

「何の騒ぎだッ！？」

それに答えるように、床がぶち破られた。魔術的に補強してある
はずの外壁などを軽々しく、紙を破るかのような気軽さで、下から
闇が溢れだしてきた。

「大騒ぎだよ！！ このクツソ野郎がアアアアアアアッ！！」

闇を従える者。そう表現するに相応しい少年が怒り以外の感情全てを捨ててガイア王に、否、この国全てに殴りかかってきた。

しかし、そんなことはこの国の最高戦力が許さない。ダレンが動き出す前にライカが動いた。あのサボることでは有名なライカがだ。

ガイインツ！！ と鈍い音があたりに響き渡る。

白銀と黒が交差した。

実力的な問題。そんな問題を全て吹き飛ばすかの如く、篠崎の魔剣は振り抜かれた。

闇の波動が、ライカを後方へ吹き飛ばす。

そんなこと気にも留めず、篠崎が叫ぶ。

「なんなんだよあれはッ！！ 魔族がナニしたってんだよ、あそこまでできていいわけねエだろうがア！！」

ここで動揺することを望んだ篠崎。ここで動揺してくれれば、まだ話し合う余地がある。

しかし、現実には、無情。

「魔族にどれだけ酷いことをしてもいいだろう？ 我々は、酷いことをされたのだからな」

そんなことを、『何を今更』といった表情で言い放つガイア王。

他の面々も同様に、コイツは何を言っているのだろうと、あの惨劇を知っていながらなんの感情も抱かないのか、ただただ小首を傾げている。

正義とは、そういうものだ。

善意だとかは正義ではない。

世間一般論が極大化して正義となる。普通こそが正義。正しいから正義なのではなく、正義だから正しいという考え。

この世界の正義は、アレなのだ。魔族になにをしようがどんなに惨いことをしようが、アレこそが絶対的な正義であり真実なのだ。そうだ、真は？ 真なら分かってくれ。こんな狂った正義は間違っていると言ってくれ。

そう信じ、白神の方を向き事情を一息に説明した。帰ってきた言葉は、

「それが正義よ。当たり前のこと言ってるんじゃないのよ」

白神 真は、正義だった。

お前は何を言っているんだ？ 悪いことをしたら何をされても仕方がないじゃないかと言わんばかりの顔で、篠崎に敵意を向けている。

狂っている。何もかもが、狂っている。

あの幼馴染はなんなのだ。護りたかった幼なじみは、アレなのか。血も涙もないような残酷無比冷血冷酷な正義の塊なのか？ アレを説明しても、アレを見たところで、何も変わらないのか。

「は、」

思わず、笑いがこみ上げる。

今、自分が信じていたものが全て崩れ去った。

正義だからこそ、正しい。

普通だからこそ、正義。

悪だからこそ、悪い。

歪ちがっているから、悪なのか？

この世界において、全ての人にアンケートを取ったところで判決は変わらないだろう。

このことにおいて、誰が悪いのか。全員が全員、悪は篠崎だと答えるだろう。

「は、はは」

最初は、白神を護りたかった。それは徹頭徹尾貫くつもりだ。彼

女が自分が思っていた彼女ではなかったとしても、それは曲げるつもりはない。

だけど、今は、どこでどう間違っただろう。白神と敵対してしまっている。

ガラリと壁の瓦礫の中からライカが起き上がる。

そして向けるのは敵意の視線。

ライカもフィリアもシーナもダレンもガイア王もメディナ王妃も

白神も。

全て、壊れてしまった。

残念には、思わない。

その時、篠崎の肩に鋭いナイフが飛んできた。ドドドツ！！と肩を貫くか貫かないかの絶妙な位置で止まり、篠崎は痛みで絶叫する。

投げたのは、ダレン。そして、口を開く。

「お前は、敵かあ？」

その言葉と同時に太股あたりにまたナイフが数本突き刺さる。倒れそうになるがこらえる。

全てが崩れ去った。

だから、どうしたというのだ。

篠崎は肩に突き刺さったナイフを手に取る。力を込め歯を食いしばった。

「オオオオオオオオツ！！」

ズチャ、という音を放ち血が噴き出しナイフが大理石の床に転がる。

次に太股も同じ要領で抜き取る。カランカラン、と乾いた音が乾いた心に鳴り響いた。

歯を食いしばり、眉間に皺を寄せ、口を開く。

「
。
」

けで血が噴き出してくる。肩も、下手をすれば意識がトンでしまい
そうなほどの痛みが襲っているというのに。

自分はこの世界に何をしに来たのだらう。それは白神という少女
を救うためだったはずだ。

どこで、どう、変わってしまったのか。白神の中には、自分が知
らない白神がいた。

知らないというのは、とても怖い。

だが、たったそれだけで、壊れてしまった。一つ、相手のことを
知らなかっただけで、ここまで無残にバラバラにぶっ壊された。

とにかく、篠崎はここから離れなければならぬ。

この国で、この世界で、篠崎という存在はただ一人、異端だ。魔
族の心配をするという異端だ。異端は、悪だ。悪は、裁かれる。

とにかく、篠崎はここから逃げなければならぬ。

しかし、逃げた後のことはどうなるのだろうか。ずっと、世界の
隅っこでみすばらしい生活をしなければならぬのだろうか。

頭を掻き毟る。そんなところで悩んでいる場合ではない。

とにかく、生き伸びなければ話にならない。

そのとき、ゾッ！ とする冷気が背中を伝う。感じたことのある
冷気だ。だが、違うところがある。

これは、自分に向けられた冷気。

瞬間、今の今まで篠崎が座りこんでいた壁際一帯に巨大な氷柱が
出現した。ゴゴゴゴッ！ と数十本単位で突き出してくる。

それをギリギリで避ける。次はバチリッ！ と空気を何かが駆け
抜ける音。ロベ森林で逃げたとき、その背中から聞こえていた爆音
に混じっていた音だ。

ほぼ本能的に横に飛んだ。傷口が広がる音がするがそんなモノは
関係ない。

次の瞬間、篠崎がいた場所が吹き飛び、ドロドロのオレンジ色に
融解していた。

「ハ、ハッ、ハッ!？」

篠崎は横に飛ぶ。ただ、無音が続いていた。それはおかしいことだ。今の今までガシャガシャと鎧が音を立てて走りまわっていたはずなのだから。

ヒュッ！ と真空の刃が篠崎の頬を薄く抉る。ドロリ、と生温かい血が唇に垂れてくる。恐ろしく、不味かった。

おそらく大気全てを操っていたのだろう。音の振動さえ、その支配下において。

「トモ、なんで……」

目の前には、いつの間にかライカがいた。やんちゃな表情は全てなりを潜めて、ただただ篠崎を悲しい視線で見つめる。

その両隣りにはライカと同じような表情を浮かべたシーナと、恐ろしいほど冷酷な無表情をこちらに向けるフィリアの姿が。

「なんで、だ？ それはこ」

全てを言い終わる前に、篠崎の体が鋭い痛みに襲われる。いや、そう思った時には石造りの壁を突き破り、数十メートルも吹き飛ばされた後、なにかガラスの様なものにぶつかりガシャンと割れる音。無数の破片が体に突き刺さり血が溢れだす。

その瓦礫の中に埋もれるようにして、ピクリとも動かなくなった篠崎。意識はまだある。だが、手足が思うように言うことを聞いてくれない。

「敵に何かを喋らせるなあ。瞬時に殺せ」

この期に及んでも、まだ気の抜けた喋り方をする。だが、明確な違いはある。

そこには、明確な怒りがあるということだ。

ゾロゾロと瓦礫に埋もれる篠崎を取り囲むように、近衛騎士団と師団長が集まってくる。

そこに、一点の白。

純潔の正義が、ここにやってきた。

「……………友。なんでよッ！ 勇者になるって、アンタ、言ったじゃない！」

篠崎のことが心底分らないと言った表情で、今にも泣きそうな表情で、彼を見つめる白神。

「……………」

篠崎は、答えない。

なんでもクソもない。そんなことは篠崎にだって分からない。あそこでグッと我慢すれば全て円滑に事は運んでいたはずだ。

あそこでグッと我慢してあの恐怖に怯える小さな小さな少女を見捨てれば、全て円滑に事は運んだはずだ。

出来るはずがない。

（見捨てる？　なんだよ、そりゃ。知らねエんだよ　知ってたまるかよッ！！）

ガラスの破片が無数に突き刺さった体をフリリと起き上がらせる。今、篠崎は、篠崎という体には痛覚という感覚は消えていた。

突き動かすのは、ただの、意地。

体を安定させようと篠崎は手近なものに手を懸けた。

ナニかに、手が触れる。

また、悲しい感情が濁流のように流れ込んでくる。何千年もの感情が、何十世代もの感情が、一人分の容れ物でしかない篠崎に流れ込んでくる。

手元を、見る。

血に塗れた手の中に、黒い仮面が握られていた。

それは、何十世代もの魔王がその顔に嵌め、その威厳を、その恐怖を振りまくための物。

そして、魔王が、守りたいものを守るために被ったモノ。

『魔王の仮面』が、その手にしっかりと触れられていた。

篠崎は、分かった。

「は、は。はは、は」

何もかもがごちゃ混ぜにされた世界の中、何一つマトモと言える確証がない世界の中、分からないことだけが確証できる世界の中、篠崎は分かった。

笑う。嗤う。晒う。

機械仕掛けのお笑い人形のように。

死を直前にした大罪人のように。

誰かを守りたいと願う、『魔王』のように。

「ハツ、上等だ、『正義の味方』共……、」

篠崎は決める。この世界で何をすべきかを。

見えていたものは、見失ってしまった。

代わりに、したいと思えることは、莫大な混沌の中、小さな闇とともに見つけた。

正義だから、正しくなんかない。

普通だからこそ、正義なんかじゃない。

悪だからこそ、悪いんじゃない。

歪ちがっているから、悪なんかじゃない。

「その、正し過ぎる正義を、殺たしてやる」

そのためにも

だから、篠崎は、覚悟、というものを決めたのだろう。

死ぬのは嫌だ。嫌われるのも嫌だ。殺すのも嫌だ。

そんな甘ったれた少年は、甘ったれた少年だからこそ、そして、

篠崎 友という男だからこそ、こつ叫ぶ。一つの禍根も、断ち切るために。

「僕は！！優しい魔王になってやるツツツ！！！！」

「！！」

『正義の味方』が見つめる中、少年は魔王になるために、その証を、被った。

どうでしょうか。やっとこの小説が本格スタートしますね。この話が最長で、一万五千文字です。文章をまとめる能力ないんです。すみません。

今まで苦節十数日。（意外と早い気がするけど）色々と苦勞がありました。

第一に夏休みの宿題というあのクソツタレな宿敵が待ち受けていたわけですね。廻の高校はまさかの24日に学校が始まるバカなのです。偏差値がそんなに高くもないのに、そんな日に始まってバカみたいに勉強を始めやがるのです。

愚痴言つてごめんなさい。けど、誰かに、言いたかった……。

とにかく、やっと十五話。そして魔王へ。

今まで支えてくださった皆様、これから支えてくれるおつもりの皆様、廻はとても感謝します。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。（・・・）感想ほしーな。

これからも未長く宜しくお願いします。

第十六話：Night Walker（前書き）

おはこんにちばんこ。廻です。

遂に、ひそかに作者お気に入りキャラが合流します。

そして明かされる、彼女の一端。

それでは、第十六話。

『夜を駆る者』

どうぞ。

第十六話：Night Walker

体が、破裂しそうになる。

血が、沸騰しそうになる。

脳が、蕩けそうになる。

魂が、吹き飛びそうになる。

「グ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！！」

時折、獣のような叫び声を上げながら、仮面を手で押さえる。これは、魔剣を手にとった時の痛みの比ではない。脳にダイレクトに痛みが届くどころか、魂そのものを鋸で削り取られて行かれるような感覚に襲われる。

包丁で脳味噌を滅多刺しにして、目玉をスプーンで抉り取って、耳をただの腕力で引きちぎって、指一本一本をペンチで潰していつて、掌を溶岩で溶かして、腕を三十回ほど折りたたんで、顔面の皮を不規則に剥がして、鼻を内側にめり込ませて、足の指を口に突っ込み噛み砕かせ、そのままの勢いで首を切り裂く。

そんな感じの、痛みと表現するのが躊躇われるほどの痛み。

雄叫びを上げながら、仮面を抑える。じわじわと、闇が溢れだしてきていた。

そんな篠崎を見て、周りの近衛騎士たちはたじろぐ。魔王が、再臨しようとしている、と。

そこで、莫大な魔力が練られる。篠崎ではない。そして師団長でも白神でもない。

魔術師団元帥、リード。

「魔王に、なりおるのか。それだけは、防がねばならん」

白い髭を蓄えた顎をフンツ！ と鳴らす。久々の実戦に血が沸き起こっているのではない。ただ、この世界の未来を守るために、憤慨したのだ。

両手の人差し指と中指を体の前で交差させる。その意味は退魔。全ての魔を打ち払わんとする十字。

「全ての魔に、全ての悪に、全ての元凶に、その力を以ってして正義を知らしめよ」

ポウッと鋭い閃光が二つ、リードの指の先でクロスする。小さい指で摘まめるほどの小ささだ。

しかし、その威力。恐ろしいことにどんな生命でも一撃で葬り去る力を有している。第一に挙げるのはその光の密度。次に挙げるのはその強度。

たつたこの二つの意味で、あらゆる魔を滅する力を有している。

「グランドクロス偉大なる十字架！！」

光を放っていた十字が一気に極大化し、触れるもの全てを消滅させながら篠崎へと襲いかかった。

そこで、誰かが異常に気がつく。否、異常が普通に戻ったことに気がつく。

篠崎の、痛みに堪える雄叫びが、止まっている。

莫大な光を放ちながら静かに佇む少年へと突き進む光の十字架。

その威力はどんな生物でもどんな魔でも一撃で葬り去る力を有している。きつと、あの魔王になりかけている少年を滅することもできるだろうと、魔力消費でたるさを感じる体でそう思った。

バズンツ！！ と音を立てて、その光の十字架は少年へと激突した。

その少し前、篠崎を襲っていた痛みが、永遠とも思われた痛みが、唐突にその姿を消した。

そして、次の瞬間。ありとあらゆる、数千年にも及ぶ、各代の魔王の記憶と経験が流れ込んでくる。

最初は、普通だった。ラジカル大陸に生まれた生命として、普通に普通に過ごしていた。平和を望み、誰しもが笑って暮らせるよう

な世界を目指し、その力を暴力以外で使っていた。

魔王は、ニーズヘッグで一番強い者になる。力量でもいいし、頭脳でもいいし、心の強さでもいい。とにかく、大陸西側全ての民を先導できる統率性が求められた。

それで、『魔王の仮面』が生まれる。幾重もの古代魔術エンシェントマジックを使い、絶対に破壊できない魔術的補強をした後、使用者を試す術式も追加される。

それはあらゆる痛みを与える。身体的にも精神的にも。

あらゆる痛みを耐えられる者だけが、魔王になれた。

そこから、ますます発展するニーズヘッグ。魔素の濃い環境の為、人体に影響が出たのか、最初は人間と同じだった体にある異変が起きた。それは金と銀の瞳を片方ずつに持つということ。

そこから、差別と偏見と闘争の歴史が、幕を開けた。

そこから魔王の記憶はほとんどが悲しみで覆い尽くされている。どこまでいっても、戦いの輪廻。次々と死んでいく同胞。そして、攻めてくる人間達。自分一人が死に物狂いで戦っても、どうすることもできなかつた。

二百五十年前。時の大英雄が勇者召喚術式を完成させ、長きに渡る戦争に終止符を打とうとした。

そこで、魔の長である魔王もそれに挟み込むように自らの後継者もそこで選ぶことにした。

きつと、同じ世界の者ならば、何の偏見も持たない者同士ならば、絶対に分かりあえると。

それは大方成功した。同時期に召喚された人間が、今の篠崎のようにニーズヘッグへと逃げ込んできた。

そこから血を流し合いながらも、なんとか平和を取り戻した。

そこから五十年。世界は平和だった。

しかし、突然の人間側の攻撃。意味も分からず被害を減らすために反撃をすると、『やはり』だとか『そうなのか』などとか、意味の分からないことを言いだす人間達。

そこから現在まで、闘争の歴史が続いた。

……そして、最後の魔王は。

そこまで来ると目の前に極大の光の十字架が襲いかかってきた。

この攻撃を知っている。篠崎の頭に流れ込んできた記憶の中にこれを使った人間が複数いた。しかし、これはその中でもかなり強力。一撃で万の軍勢を吹き飛ばすだろう。

それでも、不安は無かった。

ゴキリ、と腕を鳴らす。そして、そのまま腕を振り抜いた。

バズンッ！！ と音を立てて篠崎に光の十字架は衝突した。鬨ぎ合うように、篠崎の体から放出された闇がぶつかる。

そして、消滅した。

リードの、光の魔法がだ。

そんなことは一切気に留めず、篠崎は足元に転がっている一冊の書物を手に取った。印象は黒。手で触れた瞬間、常人ならば気が狂いそうになるほどの狂った魔力が流れ込んでくるが、それを気にせずまじまじと見つめる。

「……これが、『黒の書』ね」

『黒の書』はどこにあるか分からないとされていた。簡単なことだった。それは誰にでも目に触れることのできる『魔王の仮面』の台座の中に隠されていたのだから。所謂、ミスディレクションという奴だろう。

周りからはどよめきが起こる。

篠崎の傷が、あれだけボロボロに痛めつけられていた傷が、ほぼ完治している。

そんな彼は、薄く笑う。

「そら、魔王の再臨だ」

何故だか知らないが、圧倒的余裕が心に生まれていた。こんな、常人がこの状況に陥ったら一秒と持たず失神するような状況に居ながら、まったくもって危機感という奴が湧いてこない。

湧いてくるのは、王者としての、圧倒的余裕。

しかし、体に異変を感じる。頭が、熱に浮かされたようにぼーっとしてきた。気を抜けば倒れてしまいそうなくらいに。地に足がついている感覚がしない。むしろ、浮いている。ぼわぼわと、ふらふらとする頭をフル活動させ、とりあえずこの場から逃げ出す方法を模索する。

その時、氷と風と雷と炎が同時に襲ってきた。それを闇で抑え込む。

そして気がついた。出力が、魔力の出力が段違いに上がっている。まるで、今まで蛇口は完全に開けていたが射出口が狭められている感覚があつたが、それが消えた。ガンガンと魔力が流れ出す。

さらに、それでいて魔力の底が見えない。

一人で四人の魔術を抑え込む。だが、ふらつく頭が全てを台無しにする。

チラリ、と白神の方を見る。少しの望みを懸けて、ちよつとだけ希望を寄せて。

しかし、無残にも、白神の目には明らかに憎悪が宿っていた。悪を憎む白々しいまでの憎悪が。

それでも、篠崎は諦めない。

とにかく、今はこの場所を脱出せねばいけない。今のまま戦つても、確実に削り負けする。万全な状態ならともかく、篠崎は謎の症状に浮かされている。まともに戦うことすらできない。

そして、さつさとあの金髪の少女を助けて、この国から出よう。

そう考えながらも意識が朦朧とする。時折鋭い偏頭痛が襲い、集中力を乱していた。

『黒の書』は持っている。後は、逃げるだけ。

ゴールの見えないマラソンを、始めるだけだ。

篠崎はこれでもかというほどに闇を放出する。ゴバツッ！　という音を放ち四角い部屋を覆い尽くした。攻撃性はほとんど持たせて

おらず、ただの目くらましよの闇だ。

それを受け、周りにどよめきが起こる。その完璧な布陣の一瞬の隙を突き、人の間をくぐり抜け、握り拳を壁にめり込ませる。

ドゴンツッ！！と壁に大きな風穴が開いた。それでも闇は停滞し続ける。闇は、気体ではない。空気が抜けようが抜けまいが、主の命に従うのみ。

そして、篠崎が崩落させた個所を目指し、足に力を入れ一直線に突き進んだ。

さながら、弾丸の様。目にも止まらぬ速さで、今さっきまで篠崎がいた場所が遠ざかっていく。そして反対に近づいて行くのは、アシが行われていた忌むべき場所。

そこに一人の少女を待たせている。あの、地獄には不釣り合いな笑みを浮かべる、小さな小さな少女を。

瓦礫を吹き飛ばし、篠崎は着地する。

そこに、呆然としている金髪の少女が一人。魔族の証である金と銀の瞳を持った小さな小さな少女だ。

何が何だか分からないといった表情で、ふらふらする篠崎を見ながら一言、

「まおー、さま？」

小さく小首を傾げて、小さな小さな疑問を投げかけた。

そして篠崎は、

「ああ。僕が、魔王だ」

肯定の返事をした。

|| ||

魔王の出現は、魔の国の過去の重鎮たちにとっては簡単に察知できた。

一人はその強さを値踏みするかのようになり、一人はどうでもいいた言っただよように無関心に、一人はその魔王の再臨を喜ぶように、一人

はフザケタ笑い声を上げながら転げ回り、一人は真つ暗な空間でふと上を見上げ、一人は艶やかな声を漏らし、一人は不遜にも傲慢に満ちている。

元『地獄の七公』たちは、様々な感情を感じながらも、一つの表情を浮かべていた。

笑み。

〓 〓

篠崎は、路地裏に隠れている。傍らには小さな小さな少女の姿もある。早く、早くニーズヘッグに行かねばと思う。しかし、熱に浮かされたような頭ではまともに歩くことすらできなかった。

そして、こんな状態では、アダマタイトとオリハルコンの合金の壁を超えることなど不可能。運が良くても体が人の形を保つのが精一杯だろう。

熱い吐息を肩で漏らす篠崎。風邪だとしても、いきなり熱が出るのはおかしい。それ以外が原因だということは分かっているが、分かったところで何ができるわけでもない。

傍らでは金髪の少女が心配そうに顔を覗き込んでくる。

「まおーさま、だいじょうぶ？」

「ああ、だいじょうぶ。ありがとね、えっと……」

「キイトって名前だよ」

「キイトちゃん、ありがと」

目の前の少女はキイトと言っただけだった。

いまだ心配そうに顔を覗き込んでくるキイトを安心させるために、今できる最高の笑みを浮かべた。引き攣っていないか心配だが。

とにかく、今動かないと警備が強くなる。しかし、今動けば確実に捕まり殺される。

そういえば、と思う。

「キイトちゃん。僕の瞳、何色かな？」

「うんと、金と銀だよ」

やっぱり瞳の色が変わっているらしい。

この状況では絶対に宿屋に入り込めない。普通の一般市民にもばれてしまう。何をどうやっても手詰まり。ここまで逃げ場所がないと逆に笑えてくる。

まるで相手の駒が全て飛車などの高レベルの実力に成ってしまったかのような錯覚を覚える。王手を百通りほどかけられているような絶望的状况。

それでも、篠崎の頭はうわつき、今にも意識を失いそうだった。

あそこまで偉そうなことを言っておいて、ここまでかと思うと自分を蔑みたくなる。意識が落ちないように歯を食いしばり、掌に血が滲むほど握りしめる。

せめて、キイトだけでも、と思う。

しかし、彼女一人を助けたとしても、また繰り返されるだろう。

アレが。あんな惨劇がいくらでも簡単に、息をするかのような気軽さで行われるだろう。

だとしたら、篠崎はここでくたばるわけにはいかない。

いかないのに、もう、限界を超えている。

「キイト、ちゃん……」

「まおー、さま？」

篠崎の意識はゆっくりと、まどろむように母なる闇の中へと姿を消す途中。

それとほぼ同時に一つの黒が近づく。

「貴様、魔王になったのか」

「どの、口が、……」

その姿を見た瞬間、かろつじて意識を繋ぎとめていた緊張という名の糸がぷつりと音を立てて切れた。

ただ、その姿を見て、安心できた。

意識を失った後、キイトは気絶した少年を守るように立ち塞がる。自分よりも倍近い身長を持つ人間に対して、それでも守りたいと思っただから。

小さな少女は、勇気を振り絞って小さな質問を投げかける。

「あ、あなた、だあれ？」

黒い女性は答える。まるで夜空のように黒々しい髪の毛を揺らしながら、

「『ナイトウオーカー夜を駆る者』」

日が落ち始めた王都の路地裏で、夜の主は、そう名乗った。

|| || || ||

女性は少年を肩に抱えて、少女を小脇に抱えて日の沈んだ夜の街を闊歩する。

監視の目を縫い、暗がりから暗がりへと飛びまわり、屋根の上を渡り歩き、気配を殺し人の後ろでやり過ごし、月にだけその影を捉えさせて夜を縦横無尽に駆け巡る。

その姿はその名の通り、『夜を駆る者』。月のように冷酷で、月のように暖かな光を放つ一つの名。

音もなく人が賑わう通りを少し横に入った誰も来ないような路地裏に降り立つ。一人の移動と違って単純計算で重量も疲労も三倍。その額には彼女には似合わない汗が滲む。肩で息をしながらあたりを警戒する。

「お、おねーさん、だいじょうぶ？」

小脇に抱えられた名も知らない少女が彼女に問いかける。少し眉間に皺を寄せたまま少女を見やる。

そして、

「心配するな。そこまで軟な鍛え方はしていない」

「でも、汗だくじゃ」

「もう行く。舌を噛むから喋るな」

そして夜の闇へとまた駆けだす。その移動は影すらも後に残すと
言われるほどの速度。さながら絶影を体現していた。眼下には無数
の人の営み。あの一つ一つが、自分たちに憎しみを持っていると思
うと、やるせない。

この広大な王都で、仲間と呼べるのはこの三人のみ。たった三人
での逃走劇だ。

いや、本当ならばナイトウォーカー一人だけだったならば、この
状況も看破できる。しかし、足手まといが二人もいるとなると、流
石の彼女でも出来なくなることがある。

それでも、彼女は彼らを見捨てたりはしないだろう。その名にか
けて。

だから彼女は夜を駆る。誰にも捉えられぬ速度で、夜を支配する。
しかし、そんな彼女を捕捉する影がある。それは即ち同じ影に生
きる者。それも相当の実力者。気配からして三人ほど。完璧に位置
は掴み切れていないようだが、それも時間の問題だ。

これは、殺るしかない。腰にぶら下げた黒剣を見る。ニーズヘッ
グが誇る鍛冶師がその命を注ぎ込んだと噂される名剣だ。銘はサイ
レンス。今まで苦楽を共にしてきた相棒とも呼べる剣だ。

それでも、あの魔剣ティアには存在として負けているがな、と自
嘲気味に言葉を並べる。

そして肩に抱えているお荷物に目を見やる。まるで高熱にうなさ
れるように苦しい顔でうなされている。おおよそ、魔王の記憶と魔
力に頭がやられているのだろう。知恵熱の様なものだ。一、三日も
したら収まる。

とにかくこのお荷物たちを抱えたまま戦闘など出来るはずがない。
一般兵程度ならば蹴散らせるが、この気配の相手、相当血を吸って
きたように感じる。

彼女は眼下に広がる街並みの中から気がなく、それでいて十分

な広さをもった空き地のような場所に音もなく降り立った。

「おねーさん？」

「そこで、待っている。そして、目を瞑っている　一分だ」
「う、うん」

少女は言われた通りに目を瞑る。それに付け加えて、「耳もふさげ」と追加で言った。それにも大人しく従い、ぎゅっと目を閉じ力いっぱい耳を手で覆った。

その時、ズババ、と何かが同じ広場に降り立った。

黒装束。一点の穢れも無いはずなのに、汚れきっている。

「……反逆者を引き渡せ」

その黒装束のうちの一人が彼女に問いかける。三人の手にはそれぞれ緑、紅、薄青の光を放つナイフが握られている。おそらく、魔術的效果を付加した魔導具なのだろう。風と火と氷といったところか。

彼女は、答える。

「反逆者らしく、抗って見せるさ。だが、思い知れ。今から敵対するのは、夜の闇そのもの。己の身の程を思い知れ」

命を懸けてな。

瞬時、四つの影がぶつかり合う。

お荷物を下ろしたことでナイトウォーカーの速度が今までの数倍へと膨れ上がっている。しかし、そんな攻撃を巧みな連携でいなしていく三人の黒装束。

一瞬と言え間に数十の剣撃を放つ。それを三人でそれぞれ分割されてどんなに連撃を叩き込もうと三分の一に減少させられてしまふ。

ならばと思い、サイレンスに魔力を込める。そして切っ先がかき消えるようなスピードで散発した。放ったのは闇の斬撃。一流の剣でありながら、魔導具でもある。所謂この剣も魔剣という奴だった。一撃の威力が高いうえに、一人一人が受けなければならぬ闇の斬撃の雨。ギユバツ！！と夜を切り裂く音がする。

しかし、見誤っていた。一人一人の実力を。その魔術付加のナイフで闇を次々と迎え撃つ。

ここで、ナイトウォーカーは諦めた。

本気を出さないことを、諦めた。

「 不服だが、見せてやろう。本気、という奴を、な」

なにを、と鼻で笑う黒装束達。今まで散々我々に押されておいてどの口が、という感想でも持っていたのだろう。彼女の底を見たと思っていた。自分たちの力はこの女性に届いていると。

夜の底は、人には測れない。

刹那。ゼロの後ろにコンマを置いて、更にその後ろにゼロを十数個。瞬きをする暇もない。

黒装束たちの視界に紅い線が走る。ピッ、ピッ、と体中に紅い線が走っていく。

何事か？ 最後に、その思考をした後、黒装束達の体が微塵に崩れ落ちた。ドチャ、と血と肉がぶつかる音がした。

「 一分だ。休憩時間は終了だ」

「 ほへ！？ ね、ねてた」

目をゴシゴシと擦る少女を小脇に抱え、荒い息を吐き続ける少年を肩に抱え、また夜の闇を走りだす。

彼女を捉えられるのは、月の光だけ。そこに照らされた影のみが、彼女の存在を知らしめる。

|| ||

柔らかい。そして、どうしてこんなにも温かいのだろう。

篠崎は熱にうなされながら、ぼーっとした感覚の中、重い瞼をゆるりと開く。火照りきった顔に夜風がギョオギョオとぶつかっては後方にすっ飛んで行く。

ただ、眼下には王都の夜の街並みが映っていた。それすらも恐ろしい速度で、一つ一つの風景が線となって過ぎ去っていった。視線を少し、傾ける。

そこには、必死な女性がいた。恐らく、一人であれば何の苦労もしないに決まっている移動を単純計算で三倍の疲労を感じながら、それでも自分達を守るために、無だつた表情を烈へと変えて、必死に夜を駆けていた。

小脇には、この体勢でぐーすかと眠っているキイトの姿がある。器用にも鼻ちようちんを膨らませていたりした。

「休め。まだ、動く時じゃない」

「ナイ、ト、ウォー、カー」

篠崎が目を覚ましていたことに気付いたのだろう。ただ前を見たまま夜の闇を駆けていく。

「トモシノサキ、だ」

篠崎は自分の名を彼女に教えた。既に、信頼に足る人物だと分かっていたから、このまま自分だけが名前を呼ぶというのも気が退けたのだろう。

「シノサキ……死の、先？ 死の先にいる、友、か」

「????」

彼女は何かよく分からないことを言っていた。しかし少し考え事をすると鋭い偏頭痛が彼を襲う。ズグンズグン、と得体の知れない痛みが頭の中でのたうちまわっていた。

痛みに顔をしかめる。

「寝ると、言っているだろうが」

「お前、は……?」

「心配するな。そこまで軟な鍛え方はしていない」

「睡眠は、関係ないと、思う……」

そう言いながらも、篠崎の思考回路は段々と回らなくなってきた。ふわふわと熱に浮かされたように頭がぼーっとする。時折襲う偏頭痛がさらに体力を精神を削って行った。

消えそうな意識の中、最後に一つだけ、言葉を残すことにした。

「おやすみ、前魔王様」

「おやすみ、現魔王殿」

そうして、篠崎はふわふわと意識を浮かせたまま、暗闇に包まれた。

第十六話：Night Walker（後書き）

ナイトウォーカーさんが強い。廻イチオシのキャラです。

そして読んだ方の中で『なんでナイトさんの眼は黒なんだよ！』と思った方がいるでしょう。いや、居て欲しいです。

それは次話か、それ以降ですね。説明フェイズを終えたのであまり文字数は伸びません。

というより説明に時間かけすぎなんだよ馬鹿。

さて、次は遂にアダマタイトとオリハルコンの壁ですね。

熱に浮かされるお荷物を抱えたナイトウォーカーはどうするのか。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

末長く宜しくお願いします。

第十七話：Even now even if it is too late

今日は台風でお休みだった、というのを報告して忘れてました。引きこもって執筆していたわけではありませんのことよっ！

とまあ、閑話休題です。

今回は厨二成分が多分に含まれております。注意です。
では、第十七話。

『手遅れでも、今更でも……』

どうぞ！

絶壁、とはこういうものを呼ぶのだろうか。高さ三十メートル、厚さ十メートル、長さは見えなくなるほどの巨大な壁。そこにちらほらと穴が見えるが守衛室だ。壁の上には巨大な大砲。それら全体が月光に照らされて淡い光を放っている。石ではない。しかし、普通の金属とも呼べなさそうな存在感を放っている。

それは世界最硬の金属、オリハルコン太陽鉄。決して砕けることのない最硬にして最強の金属。

それは世界最堅の金属、アダマンタイト金剛鉄。決して屈する事のない最堅にして最強の金属。

ともに何人たりとも砕けぬ強度を持ち、並はずれた魔法耐性を持つ。それが使われた武器は冒険者にとつて夢。それを手に持つだけでも一流と呼ばれる。

もちろん、こんなにも巨大な壁全てに使っているわけではないだろうが、合金というだけあってその風格は損なわれていない。

「……この荷物を持ったままでは、侵入できんしな」
彼女は愚痴る。肩に背負った少年と、いまだ安らかに眠り続ける小さな少女を見て。

彼女が最初にこの王都へ侵入したときは、巨大な壁から比べてみれば針の穴ほどの小さな守衛室の窓から入り、やり過ぎし、心臓を破裂しそうなまでの緊張に浮かされながらやっとのことで侵入した。しかし、今はそんなこと無理だろう。この状態では気配を消すことさえ不可能だ。時々、そこら辺を歩く一般人に気取られてしまう時だつてあるのに。

だが、立ち止まってはられない。恐らく、今この王都の中心からは、ローラー作戦で彼女らの捜索が行われているだろう。あちら側としては少年が少女を抱えて逃げ回っていると思つているので、そんなに捜査速度は速くはないだろうが、隈なく探しているはずだ。

そう、これは後ろから壁が迫っているのと一緒。時間的余裕など
ありはしない。

「おい、少し起きろ」

「う、にゃ？」

そういつてまだ名も知らぬ少女を起こす。小さな少女にとっては
久々の安眠だったのだろう、とても心地よかったのを無理矢理起こ
されて半目半開きだ。

「ど、どうしたの？」

「私の首に手を回せ。いいか、絶対に離すなよ」

「う、うん」

名も知らぬ少女はその言い知れぬ迫力に素直に従った。彼女もま
た、少年と同じようにナイトウォーカーを見て安心できたのだ。

彼女はその巨壁に一番近い物陰から静かに見やる。

壁の周りには複数の警備兵がいる。バラバラに配置されたように
見えて、実はこの壁全体を隙間なく警備できる配置となっているの
に彼女は気付いた。

しかし、その絶対とも言える布陣にも、絶対の隙が存在する時が
ある。

交代時間だ。おおよそ数時間に一度、警備兵が休憩をとるために
ランダムに交代を行う。

約十秒間。その間は、ほんの少しだけ、百メートルが九十九メー
トルになっただぐらいの違いだけ、警備の目が薄くなる。

その時を、彼女は獲物を狙うような眼で待つ。

狙いをつけたのは欠伸をしている兵士。恐らくもう少しで交代時
間なのだろう、少しだけ気が抜けている。それでもダラダラという
わけではなく、この王都の最前線を守っているという自信があるの
か、隙はあまり見受けられない。

「……………」

その、交代の時を、一秒も殺さず活用しなければならぬ。

その時、警備兵が後ろを向き、自分の持ち場から離れていった。

行く！！

「ダンッ！！」と地面を蹴り、一直線に壁へと向かう。背中には、「うわわ」と声を漏らす名も知らない少女。左肩にはいまだ熱に浮かされたように熱い吐息を漏らし意識を闇の底に沈めている少年。そして、右手には、長年苦楽を共にしてきた、魔剣サイレンス。

そのサイレンスに魔力を込める。この剣はミスリルとアダマンタイトをニーズヘッグ最高の鍛冶師が命を懸けて打ち上げた名剣。強度的にはあの壁と五分。

ブウン、と剣に魔力が充満する。

そして眼前には恐ろしい速度で近づいていく壁。その壁に、音もなく剣を振るった。

「ガインッ！！」と鈍い感触がする。それでもまだ、弾かれてはいない。

「ゲッ」

ナイトウォーカーは静かに力を込める。

そして、その最硬の壁を薄く薄く削り取った。深さ五センチ、二センチほどの小さな溝ができる。それはそれはとても、普通ならば何の価値さえも見出せないような小さなもので、しかし、今ならば、これから生き残ることができる大きな希望の一欠けらだった。

彼女は、その小さな溝に足を懸け、蹴った。

垂直に。掛け値なしに垂直に伸びた巨大な壁を、彼女は登っていき。

剣を振るい、小さな傷をつけ、垂直に飛ぶ。

この簡単に見えて、実は万の大軍を相手にするかのような所業を、ほんの刹那の内に行って行く。

「ギギギギギギッ！！」と小さな傷が、近くから見えなければ分からないような小さな傷が、縦へ縦へと刻まれていく。

しかし、重力というのはどんな希望的状況であっても、どんな絶望的な状況であったとしてもその身に襲いかかってくる。

「ッ！？」

彼女の体が垂直からほんの少しずれる。それだけでも致命傷一手前だ。

重心が崩れ、落下しそうになりながら、それでも彼女は上へ上へと足を動かす。

守るべきは、小さな希望。

光だとか、闇だとか、そんな些細なことは関係ない。

今、この背中に居る小さな希望達を、守るために。

あと、三メートル。水平な地面で走ればどれだけ楽かというだけの距離。しかし、重力に反して走り抜ける彼女には、地平線の彼方のようにも感じられる距離。

しかし、駆けのぼった。

希望を、掴むために。

やはり彼女は、音もなく壁の上に降り立った。

少しだけ冷たい風が上気した頬を撫でていく。さらさらとした黒い髪が、夜空に星のように舞った。

その目は、金と銀。魔族の、証。

少し息を整えると、彼女はまた、夜の闇へと姿を消した。

|| || || ||

その夜、崩れた城の内部で、闇にその身を晒す白い影が動いていた。

一応、勇者の式典は成功した。大方の部分はリードや他の魔術師が土属性の魔術で城を修復したからだ。

しかし、この場所は違う。

いまだ強い闇の魔力が残留し、他の魔術構築を妨げる。それは魔術師団元帥であるリードも例に漏れなかった。さらに、一般人が足を踏み込むだけで錯乱するほどの濃い魔素が充満している。

これが、あの少年が魔王になった証とも言える。

いまだ昼の喧騒の後が残る中、彼女は一つの言葉を思い出す。

『ハツ、上等だ、正義の味方』共……、その、正し過ぎる正義を、殺^たしてやる』

なにが、いけないというのだろうか。

正し過ぎることの、何がいけないというのだろうか。

世界は、正義を求めている。どんなことがあっても、どんなに壊れても、ぶれない正義を、世界は一番に求めている。

それを行って、何が悪いというのだろうか。

正義以外の何を語ったところで、誰にも何にも相手にされず、批判され弾圧され、搾取されるだけだ。

そんなことに、何の意味があるというのだろうか。

「……友。アンタ、アタシを敵に回すって言うのね。もう、戻れないのね」

静かに、彼女は闇が蠢く夜の中、無機質にそう言う。

「 だったら、覚悟しなさい。ぶち殺してあげるわ」
彼女は、そう言った。

この世界で、たった一人心を共有できるであろう人物に対して、小さなころから一緒に居た幼馴染に対して 自分でも気付かない小さな思いを寄せていた、少年に対して。
ぶち殺す。

一つの禍根すら消し飛ばす、一つの疑念すら討ち滅ぼす、一つの迷いすら呑み込む、たった一つの正義を以って。

彼女 白神真は、何の容赦もなく、少年の前に立ちはだかるだろう。悪に対する正義のように。

彼女が信じるのは、たった一つの事実。

悪は、正義には勝てないということ。

「アタシの声に応えろ。そしてその純潔たる聖なる姿を顕現せよ」

全ての悪を討ち滅ぼすように、四角い部屋に蔓延る闇を消し飛ばした圧倒的光。

その光が収まった後に残ったのは、天窓から静々と差し込む淡い月光に身を晒した、一つの正義。

|| || || ||

夜を駆け抜ける女性は息を切らしていた。あの最硬の壁を数十回に渡って切りつけ、傷つけたのだ。並大抵の力では削りとれない。しかし、彼女は休憩を挿まず第二区画を走り続ける。夜も更け、だんだんと人の入りが悪くなった街を踏破していく。

前述したように、彼女たちには時間がない。少しでも休んでいれば追手に追いつかれる。そして、一瞬で師団長達がやってくる。

あの四角い部屋で師団長筆頭のダレン「スカーレット」とはほぼ互角の戦いを演じて見せたナイトウォーカーだが、一つの事実があった。

あの男は、完璧に手を抜いていたということ。

態々、こちらの実力に合わせて剣を振るっていたということ。準備体操のように軽い気持ちで死闘を繰り広げていたということ。

さらに、他の三人。よくても自分と同じ、悪く考えるなら彼らの方が実力は上だろう。

そして、リード元帥。彼が先代の勇者とともにやってきたのはかなり昔の話になるが、それでも実力はほぼ衰えていないだろう。一撃で自分の万の軍勢を吹き飛ばしたのだ。

そして、今代の勇者。まだまだ甘い、確実に才能などは自分より上だ。油断していれば簡単にやられる。

他にも、隠居してはいるだろうが前師団長なども侮れない。

あの国の怖いところは、その実力の底が見えないということだろう。豊富な資源と豊富な人材と、それらを求めてやってくる新たな人材。勇者の式典だって、この少年が消えたところで通常通り一人の勇者を挙げて成功しているだろう。そしてますますの発展。全てが好循環で回っている。

まるで、ニーズヘッグとは逆のように。

そんな国、まるごと全部敵に回したのだ。この少年が全ての恐怖を知ってか知らずか、それともそんなちっぽけなことは考えず、ただ魔族を救いたいと願ったのかは分からない。

だが、危機的状况なのは変わりがない。

そして、彼女は夜を駆ける。

「……鉄の壁だ。貫通できるか」

眼前に見えてきたのは大きさは先程の合金の壁とほぼ同じ。

しかし、その威容は数段格下だ。いや、そもそも次元が違う。

だが、その厚さは十メートル。さて、普通の両刃剣を何本重ねた程度の厚さだろうか。一本の厚さを大体十センチ程度だとする。

おおよそ、百本。それを一撃で叩き折るのとほぼ同義ということになるだろう。

彼女は少し考える。そして、少しだけ自嘲気味に、

「楽勝、だな」

たかが百本程度。いくらでも折ることができる。

この壁の次に待ち構えているのは岩の壁。後ろのことは気にする必要はない。すぐに脱出できるからだ。あちらもニーズヘッグの敷地になんの準備も無く入ってくることはないだろうと確信した彼女は、魔術詠唱を始める。

「それは魔法の槍。全てを貫く雷の槍。貫け、突き崩せ、内包したその魔の力を以って」

彼女の魔剣サイレンスがバリバリと雷のように迸る闇に覆い尽くされる。まるで、槍のように、一本の、槍のように。

彼女はそれを手に取る。そして軽く投擲の格好を取る。

眩くのは、一つの槍の名。

グイボルグ
「魔雷槍」

その槍が空気を駆け抜ける音はしなかった。

ただ、その結果のみをもたらす。

闇の雷が鉄の壁に衝突する。すると、鉄の壁はなんの抵抗も出来

ずにあっさり融解し、オレンジ色の溶岩のように溶ける。

直径三メートルほどの全体像からしてみればかなり小さめの穴が、されど自分たちが通るには十分すぎる穴が完成していた。

そして、今になって轟ッ！！ という烈風があたりに吹き荒れる。

彼女は走る。そのドロドロとオレンジ色に溶けた穴に向かって。

近寄るだけで熱風が体を焼いた。彼女一人であれば問題ないが、

この小脇に抱えている小さな少女と魔王を抱えた状態では無理だ。

「凍れ、アイス」

氷属性の魔力を持つ者なら誰でも使えるような簡単な単語ワンスベル魔術だ。

それを魔力を注ぎ込み無理矢理威力の底上げを行う。結果、熱伝

導率の高い鉄はあっという間に固形に変わった。

彼女は十メートルの短い鉄の洞窟を軽く走り抜ける。

次は、岩の壁。それを越えること自体は至極簡単だろう。

しかし、その先。

待つのは二、三メートル。魔素の濃さは心配しなくていいだろう。

この少年もこの少女も魔族だからだ。

問題は……、

彼女は歯噛みする。恐らく、無傷では通ることはできないだろう、と。

あたりから喧騒の音が聞こえてくる。どうやら壁に巨大な穴が開いていることに気がついたらしい。

しかし、気付いた時にはもう遅い。絶影。そんなスピードで彼女は岩の壁がある第三区画へと侵入し、捜査網が張られる前に突破したからだ。

彼女は、走る。

この先に、簡単ではない困難が待ち受けていることを十分に理解して。

|| ||

|| ||

「フン、だから言ったではないか。あの小僧は危険だと」

一人、自分の部屋で愚痴をこぼす丸々と太った金髪の男。彼の名前はジル。この国の近衛騎士団以外の軍全てを統括する大將軍である。

彼は悪態をついていた。あの時、自分の進言を受け入れることになかったガイア王に対して。

しかし、この場合はどちらにしても同じことだった。

ガイア王がジル大將軍の進言を聞き入れてあの魔王となった少年に様々な手を打ったとしても、激昂した少年は紆余曲折を経て、魔王になっていただろう。

そして、逆に何もなかったとしても、少年はいろいろな偶然が重なり魔王となっていただろう。

この表現に好みはあるだろうが、やはりこの表現が一番しっくりくる。

運命、だったのだと。

いずれにせよ、彼の少年はこの憎悪と戦いの輪廻に何らかの形で終止符を打つだろう。

それが恐怖かどうかは分からないが。

ジルはため息をつく。

彼とて、この国に仕える者だ。この国の未来を憂えないわけではない。というよりも、自分こそがこの国を一番案じているという自負がある。

先代の勇者と戦場を駆け巡る情景を久々に思い出した。懐かしい記憶だ。

彼も、勇者パーティの一員だった。その時はまだ十五やそこらではあったが、その采配を以って、魔族に多大な損害を与えたのは言うまでもない。

ジル＝コンフォーネ。彼は、この国に仕える者。

この国の未来を案じ、よりよい未来へと導く義務がある。

彼は、夜空に浮かぶ月を見てため息をついた。

「……いつから、変わってしまったのだろうか」

彼はワインの入ったグラスを傾ける。果物の芳醇な味わいが口の中を犯し、鼻孔をくすぐった。

そんな時、窓の外から異様な気配が漂う。

まるで、感じたことも無いような、神々しさ。

暗い部屋を照らすように、光り輝くソレは入ってきた。

「誰だ、キサマ」

入ってきたのはほんのりと黄色を帯びた髪の毛と、淡い金色の瞳をもった男性か女性か分からないようなソレだ。

ジルは近くに置いてあった軍用サーベルを手取る。こう見えても剣術には覚えがある。そこらへんの暗殺者には殺されない自信もある。それが元勇者パーティとしての経験と実績だ。これ以上の異変ぐらい、いくらでもこなしてきた。

しかし、彼は気づかない。この状態が、今までとは次元が違ってしまうことに。

そんな彼に、ソレは問いかける。

「ジル」コンフォオーネ様、折り入ってご相談がございます」

正体不明のソレは、静かに、それでも威容を讃えた声色で、ジル「コンフォオーネに語りだした。

「
」

長らく、眠っていた存在が目を覚ます。

存在としても、一種の天災としても、ただの最凶としても、その名を馳せた。

受け継がれる記憶。母から受け継いだのは数千年前と、ほんの数百年前の出来事。

産み落とされた存在は、感じ取る。

共に、空を飛ぶべき者が現れたことを感じて。

死の先にも、ついていける友を感じて。

中。
いまだ暗闇が支配している龍の山の、さらにその奥深く、洞窟の

存在は、目を覚ます。

やがて、一条の希望となるであろう友に会うために。

宝石のように、光を放つ、その瞳を開けた。

『迎えに行こう』

〓 〓

「ハア、ハア……」

「だ、だいじょーぶ？」

「いい、大丈夫だ。それと喋るな、舌を噛むぞ」

彼女ナイトウォーカーは疲れていた。単純計算で三倍の疲労。そして上級魔術の使用による体の軽い虚脱感。そして戦闘。迫りくる追手への緊張。

彼女は夜の街を走りながらそう感じていた。

疲れたなら休めばいい、などという安易な行動は行えない。

なぜならば追手が、見えない追手がどの辺まで来ているのか分からないから。

「クソ……」

彼女は、悪態をつく。石造りの家屋の屋根と屋根を飛び交いながら、遙か前方に見える岩の壁に向けて走っていく。

こんな時、過去のアイツが居てくれればいいと思う。

しかし、それは一生叶わない夢物語だろう。彼女は、戦場を共に駆けまわったアイツを、裏切ったのだから。自分を選んでくれたアイツを……。

彼女はそんな思いを振り切るように岩の壁へと一直線に突き進む。ここで止まるわけには、こんなところで手こずっているわけには

いかない。あの岩の壁を越えた先には、それ以上の困難が待ち受けているのだから。

せめて、肩に抱えている少年が目覚ませばと思う。そうすれば経験は無いにしろ、その魔王の力でどんな困難でも突破できるだろう。

「ないものねだりだな」

ビュンビュンと風を頬に受ける。生温いが、それでも心地よく感じるほどに彼女の体は熱を持っていた。過度な運動による体の拒絶反応だ。

構っている暇はない。

彼女は黙って駆ける。遙か前方に見えていた岩の壁が見る見るうちに近づいていく。

周りには複数の兵。しかし、もはやそれすらも構う必要などなくなつた。

一人の警備兵が彼女が凄まじい速度で岩の壁に近づいてくるのに気がついた。

そして、その金と銀の瞳を見て、こう叫んだ。

「魔族だああああああアアア！」

怒りと憎悪が入り混じつた声と、どこか狂つたように血走つた目を彼女たちに向けて。

すぐに、様々な対魔族用設置術式トラップが起動される。何十もの魔法陣が空に大地に刻み込まれる。一撃の威力は大したことはないだろうが、この物量。そこらへんの攻城兵器を軽く超える威力を生み出すだろう。

それがどうした、と彼女は鼻で笑う。

首に手を回している少女は、「うわわ!?」と間抜けな悲鳴を上げる。しかし、これぐらいの術式、容易く突破できる。

「渦巻け闇よ。逆巻け氷よ。二つ合わせて形を成せ！」

闇と氷の二つの魔力がそこら中でぶつかり合う。

これは魔術構成の応用技。単一の魔力だけではなく、複数の魔力

属性を掛け合わせて作る術式。

デュアルマジック

多重魔術。単純に掛け合わせる魔力の属性が多いほど難易度は上

がる。さらに、火と氷を掛け合わせても普通に水属性の魔術を使つた方がよいとされる、普通の術式より頭を使わねばならない術式だ。

「闇氷城壁！」
ランバート

ゴゴゴ！ と地面を砕き、彼女らが走る両脇に黒く冷たい巨大な城壁が出現する。

次の瞬間。魔法陣から合計百以上の多彩な魔術が展開される。

両脇で起こる爆撃音。その魔術の威力を物語っている。

しかし、城壁には傷一つつかない。その強度はそこらへんの城壁とは比べ物にならない。たかが即席の設置術式だ。トランプ威力など知れている。

彼女はその城壁に囲まれたまま一直線に岩の壁へと駆ける。

そしてサイレンスに今まで以上の魔力を込め、横に風いだ。

ボガンツ！！ と岩の壁が吹き飛び、辺りにその残骸が飛び散る。その衝撃は軽く十メートルの壁を貫通し、鉄の壁にあけた穴よりさらに大きな穴を形成していた。

当たり前だ、岩なのだから。

「ひゃーっ！！」

背中でも知らぬ少女が声を上げる。若干楽しそうに聞こえるのは気のせいか。

そして、岩の壁の向こうに広がるのは、魔の国ニーズヘッグのちよつとした入り口。

強靱な魔物が闊歩する、地獄の平原。

人外魔境。

息をすると濃い魔素が体に流れ込んでくる。今さっき消費した魔力を恐ろしい速度で回復していくのが分かる。

しかし、体力までもは戻らない。

少し立ち止まる。が、後ろからなにやら術式を構築している感覚がする。

休めない。

そのまま平原を駆けだした。

この平原の名はフェイト平原。運命の名を冠する平原だ。今まで何度となくこの平原で魔王軍と人間との戦争があった。それでも圧倒的魔素によつて植物が次々と生えてくる平原。

この平原自体はそれほど大きな方ではない。およそ十キロ程度と言ったところだろうか。

およそ時速百キロほどの速度で草原を駆けるナイトウォーカー。すでに岩の壁は遙か後方に見える程度となっていた。

しかし、ここからが本番である。

ここはニーズヘッグだ。魔素が濃い。魔物が強い。

何を意味するか？

魔族とは、人が魔素の影響を受けて体質変化した種族である。

魔物とは、獣のことである。

彼女は若干息を切らしながらも平原を駆け抜ける。ものの六分ほどで平原の端まで着いた。

平原を越えると待っているのは、およそ数万平方キロメートルにも及ぶ森林が待っている。ここは、Aランクの冒険者が踏み入つて何とか生還できるレベルの森。肩に背負った少年が行つたことのあるロベ森林とは訳が違う。

その名もジエネシス森林。原始の名を冠する森だ。

鬱蒼とした木々が生い茂り、平原以上の魔素が立ち込めている。

しかし彼女は迷わず踏み込んだ。平原は危険だ。何故か。それは見晴らしがいいからである。空を飛ぶドラゴン亜竜種や飛竜種ワイバーンに襲われる可能性だつてある。

木々を掻い潜りながら前へと突き進む彼女は若干安心していた。

いや、油断と言つた方が正しい。

自分の杞憂だったのかと、油断していた。何も起こらない。そう、何も起こらないのだ。

魔物とは、獣のことである。

別に、魔族には手を出さないというわけでは、ない。

ベギベギィー！と木が粉碎される音がする。幹の直径は十メートル近い木が混在しているにも拘らず、それを粉碎しながら、こちらに近づいてくる音がする。

木が、空を舞っている。それが、目の前で止まった。

「ブルガアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

体躯は毒々しい紫色。目は紅く、猪のように尖った鼻先に、口からは鋭い牙。頭には二本の双角。筋骨隆々と言った体で二足歩行にも四足歩行もできるような体つき。鉄の棒の様な尻尾。今は二本足で立ちあがり、五メートルほどの巨躯をまじまじと見せつけている。
「ベヒーモス 獣王……」

ランクAの冒険者が死に物狂いで戦い、勝てるかどうか分からない強さである。

まず、その強靭な体から繰り出される一撃は防御という概念ごと全てを打ち崩す。もう、体の全てが武器と言っても差し支えない魔物だ。

そんな時、空からナイトウォーカーを狙って木々を蹴倒し何か降りました。

「キシヤアアアアアッ！」

緑の体躯に、腕と翼が一緒になった竜。口からは鋭い歯が並び、その口から酸をかけると言った攻撃方法もある。蛇のようにうねうね動く尻尾まで合わせると八メートルはあるだろう。

「ワイバーン 飛竜もだと!?」

それだけに留まらなかった。森の奥から強大な魔力が練られる気配がする。それだけを感じて横へと飛ぶ。次の瞬間、全てを焼き尽くす球体上の業火が森を突き抜けた。

「……………」

例えるなら死神。黒いローブに鎌を構え、そのローブの奥からは青白い炎を纏わせた白い髑髏が見え隠れする。体は常に浮いており、

それ自体が術式のように振る舞う。

「死^{リッチ}霊王、だと」

この三頭。小さな国であればこの三頭が攻め入れれば壊滅的打撃を受けることは間違いない。一頭が一個小隊を軽く捻り潰せる強さだ。Aランクの冒険者だと逃げるしかない状態である。

しかし、周りからはこの三頭だけではない、数多の視線を受けた。逃げ場など、どこにもない。彼女は、この森に入った時点で狙われたのだ。獲物として、見られていたのだ。

彼女とて、自分一人であればこの状況を打破することはできる。

しかし、やはりお荷物が邪魔となる。

「……………」

怖い。死ぬのが、怖い。彼女はそう感じている。

しかし、また、見捨てるのか。死を前にして、全てを投げ捨てて、逃げだすのか。

あの時のように、圧倒的に屈した、あの時のように、また見捨てるのか。

「違う……違うッ！ もう、私は、逃げない！！ 私は、見捨てない！！」

彼女は震える手でサイレンスを握る。

何がどうなっても、この二人だけは護って見せる。見捨てたりはしない。絶対に。

「お、おねーさん？」

泣き出しそうな瞳で、彼女を心配する名も知らぬ少女。

それでも、彼女を心配させないようにしているのか、絶対に涙は零すことは無かった。

その勇気があの時私にもあれば、こんなことにはならなかったのに。

彼女は、初めて笑いを浮かべる。

そして、口を開いた。

「心配するな。そこまで軟な鍛え方はしていない」

彼女の名は『ナイトウォーカー夜を駆る者』。

真の名は、メイヴ・デュラン・ミッドナイト。

彼女はこう呼ぶ。何も護ることの出来なかった、弱い弱い魔王だと。

「今から護っても、今更だし手遅れだということは重々承知している。だけど！今更でも手遅れでも、私はもう見捨てない！！絶対にだ！！」

我が捨てし名は、魔王。魔を統べる魔王。

彼女は、死地へと赴いた。

連続して肉がぶつかる音がする。獣王が地面を殴りつける音だ。それをナイトウォーカーはステップを取ることで避ける。

上から強酸が振りかけられる。それを魔力を込めたサイレンスで打ち払う。飛び散った酸はあたりの木々をジュウジュウと焼いた。そんな彼女の横から炎の塊が三つ、全てを焼き尽くしながら襲ってきた。彼女はそれを真正面から受けて立つ。ギョバツ！！と魔力の込められたサイレンスが闇を放出した。

「きゃあッ！」

あまり激しく動くと、背中の少女はその衝撃に耐えられない。

着地の瞬間も攻撃の瞬間も、羽のようにふんわりと動くしかない。肩に担ぐ少年ははまだ熱に浮かされたように苦しい吐息を漏らしている。

「一頭でも、減らさねばな」

こんな気概があの時あったなら、そう思う。

彼女は動きまわる。時には魔物の背中を、時には木々の枝葉のバネを生かして。

高速戦闘。近距離戦闘。遠距離戦闘。今この場では、それら全てが行われている。

しかし、ジリ貧だ。今はなんとか均衡を保っているが、基礎体力、

骨格から体格から、魔物の方が強い。均衡では駄目なのだ。

剣の切っ先が掻き消えるほどの速さで数回振るう。闇の魔力波が魔物たちを襲う。

「ブルウアアアアッ！」

「キツシャアアアッ！」

「……………ッ！」

あるいはその腕で、あるいはその鱗で、あるいはその鎌で。ナイトウォーカーが放った闇を迎え撃った。

結果は、闇が消失。全てが打ち負けた。疲労による術式構築の粗さが目立っている。威力も格段に落ちてきていた。

頭がふらつき、一瞬体勢を崩す。

それを見逃さなかったベヒーモス。その巨腕を大気を削り取るように振るった。

ガンツ！ と鈍い音がする。その巨大な一撃を剣では受けた。だが、止められない。そのままメートル以上平行移動する。瞬時に背中の少女を抱きかかえるようにして包み込んだ。木にぶつかると、それでも止まらず砕き、地面に落ちた。

「……………ッ!?」

完璧に、腕が砕けた。手首が、動かない。肺に、酸素がない。

今の衝撃で名も知らない小さな小さな少女は悲鳴を上げることなく気絶した。肩に担いでいた少年は近くに飛ばされている。

そんな少年を狙うかの如く飛竜フレイバーンが急降下してきた。その鋭い爪であの少年の肉を引き裂くつもりなのだろうか。

しかし、それを叩き落とすように筋骨隆々としたベヒーモスの腕が振るわれた。

彼らは別に共闘しているわけでも共生しているわけでもないのだ。ただ単純に狙っている獲物が同じだったというだけのこと。

その腕を何とか避けると飛竜は酸をベヒーモスにぶちかけた。

ジュウ、と肉が焼ける音がする。

「ブるうアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

そんな二頭の争いをしり目に、死霊王は音もなく空中を浮遊して高速接近してくる。その鋭い鎌を構えて。

「ッ！？ クソッ、うご、けエ……！！」

あまりのダメージに、体が動かないのを知る。

こんな状態では、あちらに転がっている少年も、こちらで無様に転がっているナイトウォーカーも一撃で殺される。

周りの気配も、隙ありと言わんばかりに一斉に動き出した。

これが、野性の世界。

弱者が喰われ、強者が喰う。

実力など関係なしに、生き残った者が強者。

ジワリ、と涙があふれ出す。金と銀の目が、おぼろげに歪んだ。

まるで電波状況の悪い画面のように、周りの風景が歪む。

やっぱり、守れないのか。

「ア、ウ、ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアあッ
！？」

負け犬の、遠吠えだった。

鎌が、少年に向かって振るわれるのを、意識あるこの目で、ただ眺めることしかできない。希望が、こんなところで、潰されてしまう。殺されてしまう。

恐怖ではない。

単純な、悔しさ。

そのせいで、流れる涙。

あと、少年に鎌が振るわれるまで、一メートルを切った。普段の彼女ならば、行って帰って剣を仕舞うことができるほど余裕のある距離だ。

出来ない。何も、出来ない。

終わる、のか？

彼の者の名は最凶。

全てに恐怖を与える魔物の中の最強。

そして 強者が弱者を喰らう時がやってきた。

残ったのは、ナイトウォーカーと少年と名も知らない少女。そして
ブラックバハムート
て黒龍神。

何故この場にコレが現れたのか分からないナイトウォーカーは、
次は自分たちなのかと冷や汗をかく。

その巨体で音も立てず、荘厳と少年の元に歩み寄る。

喰われる、ナイトウォーカーは叫んだ。

「ヤ、ヤメロツ……ヤメ、ロツ!!」

その時、少年の体がピクリと動いた。それを見たナイトウォーカーは、少年に向けて叫んだ。

「逃げる、逃げるシノサキ!」

どんと近づいていく圧倒的存在。ゆるゆると起き上がる少年。

そして、少年に向けて長い首をもたげて顔を近づかせる。

思わず、目を伏せた。

「ブラック、バハムート……? じゃあ、ブラハだな」

そんな素っ頓狂な声が聞こえた。

何をそんな馬鹿なことを、と彼女はガバツ! と顔を上げる。

そこには、ふわふわと熱に浮かされながらおぼつかない足付きで、
黒龍神のノドを撫でる篠崎の姿と、それを目を細めて受ける黒龍神
が居た。

「はあ?」

思わず間拔けな声を上げる。

そして気付いた。この黒龍神は、あの子のアイツと同じように、
少年を選んだというのだろうか。

魔王には、その時々、その人々に応じて、最強種の魔物がその元に訪れる。

だとしたら、これは数千年にも及ぶニーズヘッグの歴史の中でた
ったの三回目。

初代と、二百五十年前の片割れ、そして現在の篠崎。
篠崎は震えるナイトウォーカーを見て、こう言った。

「 行こう、共に」

その言葉とともに、手が伸ばされた。

その姿は、まさしく 。

彼女は、フツ、と笑う。そして、その伸ばされた手を、しっかり
と、掴んだ。

いやー、書いてて恥ずかしいところがありました。作者は厨二病なのでそこはよろしくです。

さてと、また新設定がでてきましたね。ご都合主義全開です。

やっこのことで、魔の国に到着です。長かった、様な気がします。

そしてナイトさんはどんな過去を持っているのか。廻にも分かりません（え

さてはて、一体全体、どうなることやら。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。
未長く宜しくお願いします。

第十八話：What swallows the sun, and the

少々遅れました。いや、眠気は恐ろしry

では第十八話。

『太陽を飲み込むものと月を捕えるもの』

どじど。

彼女、ナイトウォーカーは黒龍神、伝説の中の伝説、あの白帝龍と同じ、最高位の龍種の中でも更に異端。古龍と呼ばれる龍の上で胡坐をかいて前方を見据えている。腕には即席のギプスをつけて。

本来、ニーズヘッグの制空圏は飛竜などが飛び交い危険なわけだが、この黒龍神、少年が言うにはブラハらしいが、この存在のお陰で飛竜ごときは寄せ付けない。

いつもより近い空を見上げて、

「……いい、天気だな」

少し現実逃避気味にそう言った。

そんな憂鬱な彼女の後ろでは、

「……レイコは、少し開いたドアから部屋の様子を覗いたのです。瞬間、視界が真っ赤に染まったのです」

「ぶるぶるぶるぶる」

「なにかな？　　と思い、彼女はおそろおそろ顔をぬぐった……どろり　、それは、唇の中に滑り込んで来ました」

「ひっ……ひっ……」

なんとなく大根役者の匂いを漂わせる篠崎が子供に聞かせちゃいけないような話を、名も知らない少女改め、キイトに話しを聞かせている。キイトは今にも泣き出しそうで、ぶるぶると震えていた。

「鉄の味がする、　　真っ赤な視界が晴れると、そこには、頭と胴体がバラバラに置かれた人間が居ました。……そこで、気付きました。この、生温かいどろどろとした赤いものは　　彼女は、中に入りました」

「や、やめ、いっちゃだめえ……」

ナイトウォーカーは気にしない。とにかくこの先のことを考えねばならない。

彼女の目的は、既に達成された。もう、時代遅れの元主人公は退場しなくてはならない。

こんなにも空は突き抜けているのに、彼女にはこの空を飛べるだけの翼がもうない。自分で引き裂いてしまった。

逃げて、全てを失った私には、もう何も残ってはいやしない。

「ゾワリ！ 次の時、またも視界が真っ赤に染まり、ぐるぐると回りました。あたりを、いや、前を見ます。……斧を振り下ろした男が居ました。でも、おかしい。一体、誰を斬ったのだろうか？」

「……………？」

「あれ？ あそこに立っている首なしの体は、なんだ？ ……ああ、そうなのか。私は、自分の体を見ていたのです。そこから噴き出る真っ赤でどろどろした血を、浴びていたのです」

「……………っ！？ ひゃ、ひゃあっ！？」

最初は意味が理解できなかったようだが、少しすると内容が分かり可愛らしい悲鳴を上げた。

それでも、篠崎の言葉責めは終わらない。

「消えていく意識の中、男は私を見て 斧を振り下ろしてきた意識が闇に消える直前に、私の視界は二つに……………」

「ひゃっ、ああっ！？」

やはり可愛らしい悲鳴を上げながら篠崎に飛びついたキイト。その目じりには涙すら浮かんでいる。

彼はそれを見て、にっこおと笑って、

「はっはっはっ！ キイトは怖がりだなあ」

ナイトウォーカーは思った。「（仕方無いだろう、まだ十歳ぐらいいんだから）」と、呆れ顔で篠崎をチラリと見た。子供相手に本気で怖い話をして怖がらせて喜ぶ変態の図式が成り立っていた。

篠崎はそんな視線に（意味は分かっている）に気付き、

「ナイトウォーカー、今どこに向かってんだ？」

そして、止めはコレである。

思わず頭を抱えそうになるが、前魔王の威厳やらなんやらが許さないのでやめておく。現魔王を見ているとそれが馬鹿らしくなってくるが。

「とりあえず、王都だ。大陸の西端にある」

というより、王都以外にどこに行く場所があるんだ？ と疑問に思う。

「貴様は今から魔王に成りに行くんだ。王都以外に行つて何をするんだ？」

それから篠崎は近い空を見上げ、うーん、と悩むと、

「魔の国巡り、激動、ブラハの背に乗って、三泊四日ツアー？」

「ツアー！ やったーっ！」

やっぱり頭を抱えた。まさか、『魔王の仮面』がこのような少年を本気で選ぶとは思わなかった。

今、件の『魔王の仮面』は完璧に篠崎と同化して見えなくなっている。外そうと思えば外せるが、外す必要もないので外していないと言った状況である。

彼女の後ろでワイワイやっている篠崎とキイトはこのままでは本気でツアーに行きそうだ。

しかし、この少年たちともあと少しで別れなければならぬだろう。もう、あの国に彼女の居場所はないのだから。

久しぶりに人と接しあった。殺す殺されるの言葉以外で会話をしたのは、十数年振りだろう。そう思うと、少しだけ、惜しいと思う。

行こう、共に。

その言葉が、やけに胸に突き刺さった。

彼女の後ろでは、今もじゃれあう二人の姿がある。

|| || || ||

篠崎の前では、黒い彼女がなんだか儂げな表情でこちらを見てい

た。

彼が不思議に思い、首を傾げると彼女は慌てて前を向いてしまった。そうされることでますます不思議に思っわけだが、とりあえず無視することにした。

「まおうさま。どーしたの？」

くりくりとした金と銀の瞳で篠崎を見上げるキイト。

ううん、大丈夫だよ、と篠崎は優しく返した。

そして、彼は思考を始める。これからのこと。彼だってなにも馬鹿ばかりやっている馬鹿ではない。ちゃんと頭を使う猿でもあるのだ。

「（魔王になる……って、言っちゃったんだよな。実感が全然ないけど。なっちゃんだよな、魔王に。あの、薄暗い城で勇者と最後の戦いを繰り広げる魔王とかになっちゃんだよな。デスタムーア的な感じになっちゃんだよな……轟け、サンダー）」

ちょっとギガデイン風になるかなと思い、せめてデインぐらいにはなっちゃんだよなと思っちゃんだよなとした遊び心で単語魔術を詠唱破棄でやってみる。

瞬間、凄まじい轟音とともに黒々しい球形の雷が地面へ降り注いだ。それを見てナイトウォーカーが、「な、なんだッ!？」と慌て始めた。

それが地面に着弾する前に高度が高すぎたので消えてしまった。

一同は啞然とするが、戦慄したのは篠崎だけだった。

「（……ギガデインどころか、ジゴスパークではありませんか）」
とにかく、このことに気がついてしたのは、篠崎自信と、あとブラハである。

「……友よ。まだ魔王の魔力を扱えきれないうちは無闇に魔法を使うべきではないと思うが」

「……うい」

このように、ブラハと篠崎は意思疎通を測ることができる。というより、ブラハの魔術なのだ。

ブラハに説教を受けて少ししょんぼりしながら、やっぱりもう一度空を見上げる。

そして、思い出すのは、あの夜の学園。

「夏休み、終わっちゃったよ」

夏休みが終わるまでに、ありとあらゆる禍根を断ちきってこの世界から白神を連れ返す。

しかし、今日がこの世界に来て四十日目。ちょうど、夏休みが終わる日だ。

あつちの世界は、どうなっているだろう。もしかして、駆け落ちだとか思われてないだろうな、と少し心配になる。

けど、連れ返すつもりだったのに、何をどう間違ったのか、今は敵対している。

それでも篠崎は、どんなに長い時間をかけても、アイツをあの世界に返すつもりだ。

……………絶対に。

|| || || ||

「見えてきた、アレが王都だ」

見えてきたのは、普通のどこにでもあるような王都。別段天を貫くような巨大な塔が聳えているわけでもないし、薄暗い雰囲気醸し出しているわけでもない。

そう。魔族だからとかなんだとかではなく、普通なのだ。

「名前は？」

「ヨルムンガンド」

また神話の想像上の生物の名前。世界を取り巻くほどの巨大な蛇の名だ。

そこら辺は、そこら辺なのだろう。色々な事情と見解があって篠

崎が思いもよらない何かを生み出しているはずだ。

『トモ、どこに降りればよいのだ？』

「ブラハがどこに降りればいいのかって」

「とりあえず、高度を下げて、あの城門の前に降りる。いきなり都市上空を飛んだら対空魔術兵器で撃ち落とされるぞ」

それを受けても平然と飛んでいそうなブラハの姿を想像しつつ、篠崎はブラハに高度を下げるようにお願いをした。あくまでブラハは友であって、下僕ではないのだ。そこところは篠崎もきちんと理解していた。

ゆつくりと高度を下げつつ、豆のようだった人影が近づいていく。ふと、彼女、ナイトウォーカーの方をしてみる。

忽然と、その姿を消していた。

「なッ!？」

篠崎は慌ててあたりを見回す。しかし、広いと言っても精々見回したら十分に分かる範囲。このブラハの背中には今、キイトと篠崎しかない。

「あれ？ おねーさんは？」

心配そうに篠崎の腕の中で尋ねてくるキイト。

困っているのは篠崎も一緒だが、この小さな少女の不安を少しでも取り除くべく出来る限りの笑みを浮かべて、「大丈夫。ちよつとだけ、別行動を取っているだけだよ」と彼女の金髪を撫でつけながら言った。

キイトも気持ちよさそうに目を細めた。

篠崎はそんな彼女から少しだけ視線を外すと、空を見上げた。

今さつきまで、あんなに蒼かった空が、少しだけ、濁って見えるのは気のせいか。

(……ナイトウォーカー)

篠崎も彼女が前魔王だということは知っているが、肝心の記憶再

生途中にリードに攻撃され防御に移るしかなかった。それから、分らず仕舞いである。

しかし、しっかりとした恐怖が、彼女の記憶からは流れ込んできたのは覚えている。あの、彼女からだ。

とにかく、篠崎は二ーズヘッグの王都ヨルムンガンドへと、舞い降りた。

「な、なんだ貴様等は！？ その龍はどこからやってきた！？」

色々とテンパリながらまくし立てるように問いただしてくる守衛と思しき男性。ゴツゴツとした鎧の隙間からは金と銀の双眸が覗いていることから魔族であるということが分かる。

「その、一応金と銀の瞳をしているので、魔族なのですけど」

「最近、カラーチェンジという魔術があるからな。瞳の色では信じられんのだ」

それでか、とナイトウォーカーのことを思い出す。彼女もその魔術を使って王都に忍び込んで宿などを借りていたのだろう。何年も路上生活は辛いだろうし。それをやってのけてしまいそうな強さを持つてそんな女性だったが。

しかし、今はいい人のことを考えていられる状況ではない。

「(……どうするよブラハ?)」

『普通に、「僕は魔王だ道を開ける」とでも言っておけばよからう。それを聞かぬなら強行突破しかあるまい』

ブラハに耳打ちをしながらチラリと守衛の方を見やる篠崎。

槍を構えて今にも襲いかかって来そうだ。

そして、ブラハの上でちょこんと座っているキイトも見る。キイトンとしていて、何が起こっているのか分からないと言った様子だ。もう一度ブラハを見る。『我は別に城壁を破っても構わぬぞ』の勢いでどうでもいいらしい。

ぐるぐると視界をあっちに行ったりこっちへやったりしながらな

んとかいい方法は無いかと頭を巡らしている内に、

ぶちり、と篠崎の頭の中で何かが切れた。

そのままツカツカと槍を構えているのも構わず、篠崎は守衛の方へ歩み寄る。

「な、なんだ貴様へぶツ!？」

篠崎は守衛のヘルムを掴み、持ちあげた。ベゴォ! と金属製のヘルムがへこむ音がした。

そして

「僕が魔王だア! 上の奴呼んでこいやクソボケがアああああああああああ!」

ヨルムンガンド全体に響き渡るような大声で守衛の男に向かって叫んだ篠崎。ヘルムの中で音が反響してくわんくわんと頭を揺らしている。

そのままパツ、とヘルムから手を離すと守衛の男は尻から勢い良く墮ちた。

「キ、キサ」

そこまで言うのと篠崎がギロリと守衛を睨む。それを見て、「ヒツ」と尻をついたまま後ずさる守衛。ガリガリと金属をこする音を立てながら後ずさっていく。ガン、と城門にぶつかると、「ア、アスラ様ア!」と叫んで走り去ってしまった。

それを見て少し冷静になり、少々後悔するが後悔先に立たず。とりあえずブラハ達の元に踵を返す。

「まおーさま、すつごーく大きな声でたね! びっくりしちゃった」キイトの耳も貫いたのか頭をくわんくわんと揺らしている。

『なんとというか、我は早々にお前と言う人物が分からなくなっている』

そんなことを欠伸しながら言ってくるブラハ。絶対に無関心だ、と篠崎は心の中で叫んだ。

とにかく、今から少しの間待ちぼうけフェイズだ、と思っていたのだが、なにやら城門の向こうで叫び声が聞こえる。

「魔王様アああああああああああアッ！！ お迎えに上がりましたぞおオ！」

少ししわがれた、それでいて活力に満ち溢れた男性の老人の声がある。それと同時にガンガンと鉄の城門を殴りつける音もするので大丈夫なのだろうか。

少しすると、ギギイと音を立てて城門が開いた。

そこから現れた篠崎の見立て通りの老人。白髪で眼鏡をかけた宰相らしき老人がその見た目からは予想もつかぬ速度で篠崎の元にかけてきた。

「魔王様ア！ 御降臨おめでとございます！ ささ、こちらへ！」

「……………あの」

自分で魔王は僕だとか言っておきながら若干引きつつある篠崎。

どうも、彼のそばには濃いキャラしか寄って来ないようだ。少しうなだれながらも事情やら何やらを聞こうと老人に離しかけようとしたところ、

「ワシの名はアスラ「ヴィーゼと申します！」

「あ、え、えっと、トモ「シノサキです」

なんとなく敬語になりながらぺこぺこ頭を下げてみた。

すると、「と、とんでもない！ 早く顔をおあげになつて下さい！」と恐縮されてしまったて逆に恐縮する。

そのアスラとかいう老人は後ろのブラハたちを見ると、「なんと黒龍神！？ すでに最上位の魔物がやってきているとは、今代の魔王様も素晴らしきこと限りなしですな！ そして既におなごを連れられているとは、さすが魔王様！ ヨッ！ ニーズヘッグーの色男！」とべた褒めされてしまった。

なんだか褒められるという行為に慣れていない篠崎は背中あたり

がむず痒くなる感覚がする。

「しかし、どうしますか。巨大な生物がいきなり市街に入ってきたらそれなりの混乱が起こるのですが……」

少し言いにくそうにアスラは告げる。

そしてブラハの方を見上げ、「どうする？」と尋ねてみた。

『ふむ。ようするに、小さくなればよいのdarou?』

「それはそうだけど……」

『ちよつと待つておくがよい』

ブラハの背中に乗っていたキイトの体がこちらに向けて飛ばされた。「わーっ！」と若干の恐怖と喜びを声に挙げながら、ぼすんと篠崎の腕の中に収まった。

次の瞬間、ギュル！ とブラハの巨大な体を闇が包む。

「ふむ、こんなモン、か」

闇が引いていく。そこには、黒の長髪少女が居た。

まず目に入ったのが少女に言うのもなんだが、大人っぽく妖艶な顔立ち。

次にまっ平らな胴体。まったくと言っていいほど凹凸がなく腰もくびれてはいない。

次に下腹部。ピーでピーな自主規制がかかりそうなところまで丸見えである。

「フム、こんなところだな」

「……………は？」

篠崎はこれ以降の人生で五本指に入りそうな衝撃を受けた。

彼の腕の中に居るキイトも目を真ん丸にしてその姿を凝視している。

……………ようするに、さようなら龍、ファンタジーこんにちはロリータ、というわけ、

一言でまとめると、素っ裸の少女がそこにいた、というだけだ。

一瞬体を硬直したのち、大きく息を吸い込む篠崎。
そして、

「はあああああああああああああああッ!?!」
彼の、ただ心の底から驚いた叫びだけが、そこら中に響いた。

|| || || ||

彼女は高度千メートルほどから音もなく地面に着地した。見る人が見れば泡を吹いて倒れるような壮絶な光景だ。

折れた腕が痛むが、特に気にせず森の中を進む。

(また、逃げてしまった、な)

そう静かに思いながら、薄暗い木々の間を縫うように進む。

向かうのは誰もいないところ。ただただ、これからは一生誰とも顔を合わせそうにない場所。

(シノサキ。悪いな、私は共には行けない)

伸ばされた手。彼女は確かにその手を取った。あの温かい人の心を。

だけど彼女はあそこにいる資格がない。

アイツを裏切り、国を見捨てて、国民を見殺しにした。

ただ、自分だけを守ろうと無様に生き伸びてしまった。

気付けば、頬に伝う一つの雫。

(シノサキにあてられたな)

そのとき、メギメギと木を吹き飛ばしながらこちらに直進してくる影が三つ。

ドバンツッ! と目の前の木々が粉々に吹き飛ばされる。

「……ベヒーモスか」

紫色の曲をフル活用し、筋骨隆々としたその肉体を森の奥から現した。

「ブルウガアアアアアア!」

その声で森の中の生物共がざわめく。

しかし、彼女は動かない。

彼女の最大の武器はその速さである。あのときは軽く見積もって二・五倍ほどの重量が彼女の体にはかかっていた。

ベヒーモスの大木の様な巨腕が三方向から同時に振るわれる。大気を削り取りながら佇む彼女に襲いかかった。

そのとき、彼女の体が一瞬ぶれる。

「邪魔だ」

刹那、ベヒーモスの体に紅い線が無数に走る。一秒後、その体から紅くどろどろとした液体が噴き出した。

視界が真っ赤に染まる。

消えていく意識の中、彼らが最後に見たのは二つに分かれた視界の中で刹那に動く、夜そのものだった。

|| || || ||

王都の中でも唯一まともと言える（言えない）城もどこか廃れていた。

町並みはそれ以上に酷く、所々に白骨らしきものが転がっていたり、糞尿は当たり前のようにぶちまけられている個所も多数。路上には襤褸衣のような衣服を纏った魔族が人たちがぐったりと頂垂れていた。

王都と言うよりも、スラム街だった。

「……前魔王様が御消息を絶たれて、それともに七公も散り散りに七公派の武官や文官もそれに着いて行き、政治を行っているのはワシとその他数名の文武官だけなのです。情けないところを見せて、まことにすみません。……………悔しい、限りです」

アスラのしわがれた目元にジワリと涙が滲む。

恐らく、長く続く戦争だけではない。貴族派の兵がいなくなり、それに対応して国の金が減り、更には二・スヘッグに生息する屈強な魔物が襲ってきて、それを防衛するだけの兵力すらも残っては

いない。

この国は死亡寸前だ。

城の中に移動し、会議室の様な所に入る。

そこは円形の大きな机にいくつかの椅子を配置した簡素なものだった。

そこに、篠崎、キイト、ブラハが並んで座り、その向こう側にアスラが座った。

状況が落ち着いたところで、とりあえず黒い布を羽織ったブラハがキイトと手を繋いで、

「私の母の記憶では、もつと人が生き活きとしていたがな」

少し残念そうにそんなことを言った。

キイトも何が何だか分からない恐怖に襲われているのか、キヨロキヨロと周りを見ている。

そんな彼女の頭を撫でながらアスラに、

「魔王つてのはそんなに大事なモンなのか？」

魔族一人がいなくなっただけで、そこまでのことが起こるのか。

「はい。魔王とは魔を統べる王。ようするに、全魔族を纏め上げる王のことです」

それでもだ。

魔王と言えど生物だ。急死する可能性だってあるし、そのたびにいちいち国家がここまでの危機に瀕していたらとっくの昔にこの国は滅びている。

だから言っつ。

「他の魔王は立てられなかったのか？」

「『魔王の仮面』です」

『魔王の仮面』とは魔王となるべき者を選定する仮面だ。今は篠崎がそれに認められているが、ようするに仮面に選ばれただけだ。

民には選ばれてはいない。

「ようするに『魔王の仮面』がない所為で、ここまでなったと？」

「……いえ、一番の問題は前魔王様のメイヴ様が御消息を絶たれた

のが一番の原因でございます。『魔王の仮面』が奪われようと、それに選ばれた者ならば魔王として君臨するに値するのです」

メイヴという聞きなれない語に少し眉間に皺を寄せるが、記憶がナイトウォーカーだということを物語っていた。

そこでブラハが、

「それでも、その七公とやらが離れる理由にはならないだろう？」

「……それは初代魔王様の話です。まだ秩序も何もなかったころに一人の男が立ちあがりました。その男はそのころニーズヘッグ領で暴れ回っていた七人の存在を、全て従わせたのです」

昔話のように語るアスラ。

「その男こそが初代魔王様」

「名前はシャン・ノーティス」

アスラの言葉を遮るようにして篠崎が言葉を放った。

驚いた表情で彼を見やるアスラ。篠崎はこめかみあたりをコンコンと人差し指で叩いて、

「件の『魔王の仮面』の記憶だよ。古過ぎて劣化してきてるけどな」
「けど、『思いたしていくうちに』だんだんと理解してきたよ、と篠崎は言う。

「そこでシャンは七人の存在と、ある契約を交わしたんだ。『貴様等は王が健在ならば王とともに国を守れ。王が消えて一年以内に新たな王が現れなかつたら好き勝手にしろ』ってな」

「……アバウトな男だったのだな、母上の初代の友は」

「それを選んだのもお前の母親なんだけどな」

とにかく、と篠崎は話に終止符を打つ。

「とにかく、こんな昔話をしていても何も変わらない。まずは国を立て直す。とりあえず、最低限度の健康が保てるぐらいにはな」

篠崎は、その初代魔王にムカついていた。

お前がちゃんとした契約をしていれば、と。

だが、それすらも、何も変わらない昔話だった。

だから、今から立て直すんだ！！ と格好いい言葉を吐いて立ち

あがった篠崎だったが、瞬間、なよなよと机に突っ伏してしまった。慌てるアスラに顔だけを向けて、一言。

「うな……腹、減った」

『腹が減った。さっさと飯を用意しろ』と受け取ってしまったのか、「は、はッ！ 今すぐお持ちします！」とどこかに駆け出しました。

「……友よ。もう少し魔王らしく振る舞えんのか？」

「……僕よ。もう少し食欲に対して謙虚になれんのか？」

とにかく、腹が減っては戦が出来ぬ、を体現する篠崎だった。

|| || || ||

篠崎達がブラハと出会ったジエネシス森林とは違う森。王都の北側、いくつかの平原を越えた先にある森。

その名も天狼森林。

その間を二つの影が疾走する。

太陽に食らいつく牙と、月に掴みかかる強靱な爪をもった二つの影。

二つの影は突き出した岩肌に飛び乗ると、天を威嚇するかのよう
に遠吠えを上げた。

高笑いをするかのように、憎悪の念を込めたように、二つの影は
吼える。

そしてまた、彼らは森の中へと姿を消した。

|| || || ||

「がつもぐむしゃうまうまごくごきゅぺろりくつちやぱつく」
篠崎の前に運ばれてきたのは大量の料理。『金もないのに云々』
と言いかけたが、その匂いが鼻孔をくすぐった瞬間理性がトンだ。

横ではキイトとブラハが慎ましげに食べ物を咀嚼しているが、そ

んなことは関係ないと言わんばかりとにかく食いまくる。

料理と言えばネコミミメイドのリアはどうしているだろうか、と食べながら篠崎は思う。

そんなことを言えば歯止めが利かなくなるので篠崎はとりあえず口を動かす。

最後に残った肉をペロリと平らげた篠崎は、

「ごちそうさ、ま……ふあ〜」

とりあえず眠気に襲われた。

それを見たアスラは皺だらけの顔にもうちよつと皺を増やして、

「長旅でお疲れでしょう。本格的始動は明日からにしましょうか」

まだ時間的には昼を少し過ぎたぐらいのだが、篠崎はほぼ夜通しで起きている。キイトも眠いのか目をごしごしこすりながら、「まあー、さまー。すこし、おねむです……」とこっくこっくと首を揺らしていた。

ブラハはいまだ懨然とした態度を取っているが、「……ね、眠くなど、ない、の、だ」と自分でボロを出した。

今は眠りたい、色々あった数日間を、今の内に整理したい。

「お部屋はこちらです、どうぞ」

アスラに促されるままに着いて行くと、ファルム王国の自室よりも巨大で綺麗な部屋があった。基調は黒。落ち着きを持った大人っぽい部屋である。

そこでも一際大きなベッドに三人同時に突っ伏す。後ろではドアが閉まる、キイトと言う音がした。

とにかく、今は何も考えずに、寝よう。

彼らの意識は、そのまま闇の中に沈んだ。

ドオンッ！！ という聞いたこともないような爆音で目が覚めた。フィリアの強引起床シリーズとは比べ物にならない、あの暗殺騒動並の最悪な感じだった。

横を向くとすぐ近くにブラハの顔があった。少しドギマギするが、相手は幼女、理性を飛ばしていない相手ではない。

もう片方を見る。またもすぐ近くにキイトの顔があった。こちらも少しドギマギするが、以下略である。

あの爆音から十秒ほど経って、カアンカアン！ と警鐘が鳴らされる。

「……なんだ？」

それから一秒もしない後、狼の遠吠えのような、高笑いのような憎悪の怨嗟のような、何かが聞こえる。

人ではない。魔物だ。

そこまで来ると、ピインと来た。魔物が侵攻に来ているのである。

そのとき、ドアが乱暴に開けられる。

「シノサキ様！ 魔物の侵攻が！」

「ッ！？ ……今行く！」

とにかく篠崎はアスラについて行く。階段を降り、少しボロい石造りの廊下を渡り、古ぼけた城の出入り口であるドアを開け放つと、人が逃げ惑っていた。

「なん、なんだ？」

本当の刹那。そう言っているだろう。

瞬きを初めて、それが閉じる前に、逃げていた魔族の男性が一息に何かに飲み込まれた。

魔王の記憶と経験が何かを叫んだ。

防御しろッ！！

ズオ！ と篠崎の体から魔王の力によって強化されたありとあらゆる闇が噴出し、アストラ自分を守る。

しかし、それすらも強引に引き裂いて、ソレは姿を現した。

魔狼。そう呼ばれる存在が、そこにはいた。

一頭ではない、ソレは二頭。金の毛並みを持つ狼と、銀の毛並みを持つ狼。日没を始めたおぼろげな陽光がそれをキラキラと輝かせ

る。

アスラはその姿を見て言った。

「^{スコール}太陽狼……^{ハライ}月光狼……」

その名は北欧神話の怪物。日蝕と月蝕を引き起こしていたとされる狼。

そして、^{フエンリル}天狼の、子供。

『……アイツは、ドコだ』

金の毛並みの狼は言う。高笑いするように。

『……アイツは、ドコだ』

銀の毛並みの狼は言う。憎しみの怨嗟のように。

二頭の怪物は、魔王に問うた。

『アイツは、ドコだ？』

第十八話：What swallows the sun, and the

いろいろな神話の生き物の名前を多用する廻です。

スコールとハティの解説（ウイキ参照）をしましょうか。

スコールは作中にも挙げたとおり、フェンリルの子供。太陽を飲み込むとされる狼で、日蝕の原因とも言われていました。

ハティも作中通り、フェンリルの子供、月を飲み込む狼で、月蝕の原因とも言われていました。

もちろん、作中のスコールとハティはそんなに強くないです。十分強いですけどね。

さて、色々伏線を忍び込ませてきましたが、全て解放できるのか。それともブラフで終わるのか！？

それでは、ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

次回も宜しく願います。

第十九話：Thank you, the Devil (前書き)

今回は七千文字強。少し短めにしました。

……戦闘フェイズですね。さらに今回で決着がつかなかった。ま、まあ、いいですね。そんなときもありますよね！

では第十八話。

『ありがとう、まおーさま』

どうぞ。

第十九話：Thank you, the Devil

「アイツって誰だよバカ犬」

魔剣を出現させた篠崎がそれを二頭の巨狼に向ける。

それを見たアスラが隣で感嘆の声を上げたが篠崎はそれに目をやらずにまっすぐ巨狼を見据える。

ニホンオオカミ、どここの話ではない。

その巨体はサイより大きく、ゾウよりも少し小さいと言ったところか。

それが、消えるような速度で攻撃を仕掛けてきた。

ギョオ！ と空気を切り裂く音が両側から襲い来る。

片方を先ほどより高密度の闇で押さえつけ、もう片方を魔剣ティアで受け止める。それだけで周囲の雰囲気が震える。

「友よ！ 何事だ！」

何度も響く轟音で目が覚めたのだろう。後ろから出てきたブラハが二頭の巨狼を見て動きを止めた。訝しむような表情で、

「スコールに、ハテイだと！？ なぜ天狼森林にすむ貴様等がここにいる！」

声を荒げるブラハ。その容貌からは想像もつかないような怒気を撒き散らしながら。

それを、高笑いするように吼える金の狼は、

「……魔王はキサマか」

ブラハのことを無視して篠崎に語りかける。低い低い、地獄の底から沸き上がるような音だ。

スコールと呼ばれた狼は彼の顔に生温いト息を吹きかけた。

「……そうだよ。僕になんか用か？」

「アイツはドコにいる」

命令形だった。疑問形にも関わらず、言外に「教える」と言っているのが分かる。

ゾツとした悪寒が背筋を走り抜ける。

その笑いを聞いた周囲の民が一斉に慌てふためき逃げ惑う。一瞬にして阿鼻叫喚の渦が巻き起こった。

瞬間、スコールの姿が消えた。そのあと轟ッ！！と烈風が吹き荒れる。

その直後、逃げ惑う人の一角が石造りの道ごとなにかに飲み込まれた。

スコールは北欧神話で太陽を飲み込むとされる巨狼。それほどまでの力がないにしても、人を飲み込むことは容易い。

『さて、質も』

全てを言い終わる前にハティの銀の体毛に強烈な拳が突き刺さる。ザリザリと地面を削りながら後方へと押しやられた。

そこには、自らの右拳を突き出した篠崎の姿があった。

ゆっくりと、口を開く。

「質問？ 笑わせてくれんなよバカ犬。質問なんか受け付けてやると思ってるのかクソ野郎。だとしたら、お前の脳ミソは幼稚もいところの下劣でクソツタレなドブだ」

そして、闇が顕現する。それが螺旋を描きながら高速でハティへと突き進む。

空気を食い破りながら闇の螺旋は、ハティには当たらなかった。

ハティは消えるような速度で篠崎へと突貫していた。

篠崎は語る。

「そのドブでクソでゴミクズな脳ミソで憶えてられるか分かんないが、テメエらの網膜に刻み込め」

突貫してきたハティの鼻っ柱にまたも右拳を叩き込んだ。巨狼の体は水平に十メートル後ろへふっ飛び、二回ほどバウンドすると受け身をとった。

「バカみたいな悲劇は閉幕だ。今から、アホみたいな喜劇の開幕なんだよ。テメエらの居場所なんて世界のドコ探しても無いってこと、教えてやる」

ゴバア！！ と闇が噴き出て二頭の巨狼を追いかけ回す。
民家の上を高速で移動しながらそれを交わし続ける巨狼。

「我がいることも忘れてはかなわんぞ？」

逃げ惑う黄金の狼、スコールの脇腹にブラハのか細い腕が突き出される。瞬間、スコールの体が隕石のような速さで地面に突き刺さった。

そしてブラハは大きく体を逸らせ、口内に魔力を収束させる。

「がアツ！！」

直径一メートルほどの火球を連続射出する。酸素を喰らう、轟！
と言っ音を上げながら、それらはスコールが居た場所に襲いかかる。

爆炎が上がり、衝撃波で建物がグラグラと揺らいた。

しかし、

『げら、げらげらッ！！ あくまでも逆らうか、弱気者共ッ！』

爆炎による煙が上がる前にスコールは行動を開始する。今までの速度が様子見でしたと言わんばかりの速度でブラハに襲いかかる。空中では身動きが取れないとでも思っていたのだろう、フェイントすらかけぬ一撃必殺。

そのとき、ブラハの背中から悪魔のような黒い翼が突き出た。

「我に勝とうとは。ふん、せめて天狼にでも泣きつくんだつたな」

『げら！ 齢数百年程度の小娘がなにをほざくかッ！！』

空気を蹴散らしながら、二つの影は残像と化して上空でぶつかり合う。その余波でさえ甚大な被害をもたらす。家屋が倒壊し、人々は地面に叩きつけられた。

そして、篠崎の前にハティが現れた。

『ぐっはっはッ！ よいのか魔王よ、民が苦しんでおるぞ？』

「あ？ いいんだよ別に。ボロい建物は全部ぶっ壊して建てなおすつもりだったからな」

篠崎はスタートダッシュを切るアスリートのように、グツと身を低く構える。ただ、まっすぐ進むのを目的としたポーズだ。

ハティも黙らしく四本の足を使いグツと身を沈める。ただ、獲物を捕えるための、スタートダッシュの構え。

ドンッ！ と空気が破裂した。その中間地点では爪と剣を打ち合う二つの姿がある。

空気を切り裂きながら振るわれた爪を魔剣で受け止め、大気を挟りとする足を振るう。それを軽くよけながら銀狼は居並ぶ牙をその足に向けて広げる。篠崎は体を強引に回転させ避けると同時に側頭部に蹴りをかました。

五メートルほど後退すると、銀狼はさらにスピードを上げて、今度は奇妙なステップを使いながら突っ込んでくる。

(……増えてる?)

銀狼がステップをとるたびに、その姿は二倍、三倍と増えていく。この距離でも数回でもステップをとられれば、その数は五十にも上る。もちろん、全てが本物と言うわけではないだろう。おそらく、魔術の類だ。

だが、本物はどれか分からない。

「なら、全部攻撃してやるッ！」

自分の周りに塔のような闇を出現させる。

そして、それは一気に棘と化す。ズドドド！ とその塔全体から棘が突き出した。

高速接近していた銀狼は勢いを殺すことなく上空へと逃げた。しかし、それで増えていた姿は全て消えた。

『ガキが、ナメおって』

「テメエのどこ舐めたらいいか分かんねえよ毛むくじゃら！」
闇を解除し、再びぶつかり合う二つの影。

しかし、その余波で周りにいたもの達が地面に叩き伏せられていた。

「くっ」

『アイツの居場所を教えるだけで済んだものを』

「だから、アイツって誰だよ!!」

高速でぶつかり合いながら、罵声をぶつけあう。

ハティはその質問に、憎悪の笑みを浮かべて、こういった。

『前魔王、メイヴだ』

大きく振るわれた前足の一撃で篠崎は後方へと吹き飛ばされ民家に突っ込む。

崩れ落ちてくる瓦礫を闇で吹き飛ばし、ゆっくりと立ち上がった。

「ナイトウォーカーが、何したってんだよ……」

『ナイト? ……ああ、偽名か。ふん、言う必要はない』

「だったら尋ねてくんなくソボケがッ!!」

再度、二つの影は高速でぶつかり合った。

ギガガギギッ! と鋭い金属音が幾重にも折り重なって衝撃波と化する。

そのとき、魔力の流れが銀狼に向かうのを感じる。

『我の魔術、喰らってみるか?』

「ッ!?!」

なにか不吉なものを感じた篠崎は咄嗟に飛びのく。

『……月よ。生命なき星よ。一面凍る銀世界。その姿を、この場に現わせ』

パキッ、とハティの足元が凍りだす。そして、そこから漏れだす

異常な冷気。自然界ではおおよそあり得なさそうな冷気。

『ムーンエリヤ
月面世界』

その言葉とともにハティが前足を振り下ろす。

一瞬だ。一瞬で、全長十メートルほどの氷の塔が出来上がった。

その天辺で、ハティは笑う。

『ゆくぞ? 魔王』

掻き消えるような速度で篠崎のもとへと突っ込んできた。一步駆

けるたびに、地面から巨大な氷の塔が突き出してくる。

目の前の魔術現象が理解できないまま、とりあえずハティの攻撃を魔剣ティアで迎え撃った。

バギギ！ と魔剣の刀身が凍りつき始め、篠崎の手を冷気で焼いた。

「ッつ!？」

『そら、隙だらけだ』

常人が受ければ頭部が消え去る前足の一撃を受け、篠崎は水平方向に二十メートルほどノーバウンドで吹っ飛んだ。乱暴な受け身をとって地面の上を削り取る。

握られた魔剣を見る。

たしかに、刀身が凍っている。

しかしおかしい。魔剣ティアは魔力を喰らうはずだ。

『ぐっはっは。』エンシェントマジック 古代魔術、ムーンエリア 月面世界。術者の魔力を掛け合わせるこ
とによって大気中に存在する魔素を強制的に凍らせる術式。魔力を喰らう魔剣ティアでは破壊することは不可能だ』

ようするに、この魔術は魔力を媒介とするものではなく、魔素を媒介としている。酸素とオゾンの違いのようなものだ。人は酸素は吸収できるが、オゾンは吸収できない。同じ元素であるにもかかわらず。

『そら、氷に貫かれるぞ?』

銀狼が腕を振るうと氷が空中を駆けて篠崎へと襲いかかってきた。とつさに魔剣を構えようとしたがこれで防御しても恐らく意味はない。

全身を投げ出すように横へ跳んだ。宙を駆けた氷はそのまま後ろの民家にぶつかり、一気に冷凍してしまった。

戦いは、長くなりそうだ。

|| ||

|| ||

ブラハは、苦戦している。

『なるほど黒龍神か。何ゆえそのような格好をしている？』
「趣味だ。笑え」

自分の十倍はあろうかという巨体に向かって軽口をたたくブラハしかし、その体には無数の傷がつけられている。

もちろん、ブラハが少女の姿をしているのにはわけがある。趣味などではないし、望んでやったことでもない。

今は、幼少期。数千年の時を生きる龍種にとっては成長とはいくつかの段階に分けられる。

そしてブラハは幼少期。終盤に差し掛かっているが龍種にとっては完全にその時期を終えなければ成長はしない。

「クソツ」

もちろん、その力は計り知れない。既にSランクほどの実力は備えているし、母からの記憶で経験値も豊富だ。

しかし、それは相手も同じ。

人間の形をとっているブラハだがそれは小回りを期待してのこと、実際元の龍の姿に戻ればこの金狼のスピードにはついていけないだろう。

それが、ブラハのことを苦しめていた。

お互い、掻き消えるようなスピードで激突する。衝撃波が周囲を揺るがす。

そして、打ち負けるのはブラハ。

大きく後方へと吹き飛ばされ、何度もバウンドしながら地面を転がった。

『その小さき体では、無理があるのだよなあ』

そう。単純な体格差が彼女を苦しめる。実力が拮抗していて、それでも勝負を分けるものと言えば体格の違いだ。

一トンのパンチを繰り出せる者が居たとする。片方は犬のような大きさで、片方は巨人のような大きさ。互いに打ちあったとしてどちらが勝つか。

そんなもの、巨人の方に決まっている。

連続で打ち合うが重量の違いでどうしても押されてしまう。ビビビビビ！ と体に無数の切り傷が生まれる。

「ぐウ、がアッ！！」

口に魔力を溜め、放出。紅蓮の炎が金狼の顔面に直撃する。

（やったかッ！？）

刹那、爆炎が立ち上る金狼から音を置き去りにした一撃が繰り出される。

防御は意味を成さず、空気の壁を破った衝撃波がブラハの体に直撃する。

「グ、ウウウ！？」

真空の刃がブラハに襲いかかり、無数の切り傷を残した。

（クソ、出し惜しみは無しだ）

次にブラハの尾？骨から棍棒のような鞭のような尾が出現した。

それを、ビルン！ と音を立ててスコールに向けて振るった。

それを軽く跳躍し、また腕を振り抜いてくる。

その攻撃を身を捻り避け、懐に潜り込む。そして、全身を大きく回転させ、スコールを打ち上げるように巨大な尻尾を振るった。

「ゴ、アア！？」

「やっと苦悶の表情を浮かべたなッ！」

空はブラハの、黒龍神の領域。

空中で身動きの取れないスコールに対して一気に追い打ちを駆ける。さらに棍棒のような鞭のような尻尾で上空に打ち上げ、今度は両腕を龍の腕に変える。

「…… 太陽よ、全てを無に帰す星よ。一面燃える無世界。その姿を、

この場に現わせ」

大気がジリジリと焼ける音がする。それを怪訝に思いながらも攻撃の手はやめない。空中で龍と狼の腕が無数に交差する。

『アドベントゥール
太陽降臨』

次の瞬間、打ち合っていた腕が爆発する。

鋭い痛みが襲うが、どうやら吹き飛んではいないらしい。

「グウ!？」

アドベントソル

『エンシェントマジック 我の太陽降臨は、触れた魔素を任意で爆発させる古代魔術。げらげら! これで迂闊に攻撃が出来なくなっただぞ!？」』

そう言いながらスコールは空中で駆ける構えをとる。

痛みを堪えながら何かが来ると思い、咄嗟に飛びのいた。

刹那、スコールの後方が爆発し、凄まじい推進力で先程までブラ

ハくつやが居た場所を飲み込んだ。

『言っただであらう? 魔素を爆発させると!!!』』

「ク、ソオ!？」

ビュガツ! と両者が交差する。

しかし、打ち合うたびに爆発が起こり、そのたびにブラハが苦悶の表情を上げる。ある程度魔力を拳に集中させているとはいえ、このレベルの爆発を何度も受けていては鱗も吹き飛んでしまう。

ブラハは、苦戦している。

||

||

『オオオオオオオオオオンツ!!』』

咆哮を上げながらハティは連続で前足を振るい続ける。そのたびに氷が宙を駆け抜け、篠崎へと襲う。

篠崎はそれを貫通力の増した螺旋状の闇で迎え撃っているが、どうも上手くいかない。

手応えが軽すぎる、と云えばいいのか。あまりにも簡単に碎け散るのだ。

魔剣ティアは使えないと判断した篠崎は早々に使うのをやめて、闇で創られたチェインソーのように刃が回転する剣で対応する。

それで凍りつくハティの前足と打ち合う。しかし、これもやけに相手が簡単に退く。

「どうしたよ？ 怖気づいちゃったのかな？」

安っぽい挑発をぶつけるが、『くだらん』と一蹴されてしまう。

二つの影は一撃離脱を繰り返していた。

篠崎はハティが何を考えているのか分からないので迂闊に攻め入ることは出来ずにいた。

しかし、戦闘のど素人である篠崎と違ってハティはプロのはずだ。篠崎の戦略なんて軽く踏破出来るはずなのに、それを何故か破らない。い。

「攻めてこいよクソ犬。メスだったら撫でまわして首輪はめて奴隷にしてやる」

思っても無いことを口走りながら、なんとか相手を攻撃に導こうとする篠崎。こちらから攻め込んでもどうせ迎え撃たれる。ならば、カウンターを狙うしかない。

『メスではあるが、キサマに我を屈服させるだけの技量があるとは思えんな。童貞が』

「ぶッ、ぶッ殺す！！」

と、逆に挑発に乗せられてしまった。というのは嘘で、これは演技だ。大根の匂いだぶんぶんする演技だったが。

「燃える、ファイア！ 凍れ、アイス！ 轟け、サンダー！ 吹き荒べ、ウィンド！ 流れる、ウォーター！ 突き出る、アース！」

単語魔術を連発する。

しかしその威力、既に単語魔術の域を超えていた。

爆碎的な炎が出現し、空気中の水分が凍りプリズムを生み、黒々しい球体上の雷は大地を抉りとり、圧倒的暴風は瓦礫を空高く舞い上げ、流れ出る水流は鉄砲水のそれで、突き出た大地は全長二十メートルの岩の槍となる。

それら全てが、一気にハティのもとに襲いかかる。

『フン』

しかし、迎え撃つことなく普通に逃げた。

だが、逃げた場所が予想外。

ハティは、空中に佇んでいる。

『そう不思議そうな顔はするな。黴りたくなるであろう？ なあに、教えてやらんことはない』

そのとき、篠崎が放った魔術がぶつかり合い大爆発を起こす。

その爆発、尋常ではない。お互いがお互いの属性を打ち消し、相殺の大爆発を起こす。

爆風を悠然と受けながら、ハティは語る。

『大気中にある魔素を凍らせては消すという作業を連続して行っているにすぎん』

ようするに、自由落下を始める前に氷で受け止め、その氷が自由落下を始める前に消し、また氷で受け止めるという作業を一瞬で行っているというわけだ。

『終わりだ、弱者』

ストーン、とハティが地面に降り立つ。

その、前足が地面に着いた瞬間、地面が不規則に地響きを起こす。

「ま、まさか、テメエ！」

『戦闘中にトラップが仕掛けられぬとも思ったか？ 小僧？』

篠崎が感じていた違和感の正体はこれ。あの氷が弱々しかったのも、すべてはこちらに力を回すため。一撃離脱を行ったのは、広範囲に移動するのを不自然にしないため。

ベギベギベギ！ と十メートル級の氷の柱が数百本という単位で地面から突き出す。

「ク、ツソ！」

篠崎はなんとか闇で防御しようと体を闇で包み込む。

しかし、甘かった。

その闇を貫いて、篠崎の腹にゴブリ、と氷の柱の先端が突き刺さる。

口からは、甘いような、苦いような、どろどろとした血液が流れ出る。

『ぐっはっはっはっはッ！ 弱者は、弱者らしく、強者の

命に従っておればよいのだ!！」

そのとき、城の入り口から、小さな影が出てくる。

「ま、まおーさまッ!」

小さな、小さな小さな、小さな少女の、小さな悲鳴が、小さく響いた。

心を現したようにふわふわとした金髪に、それがよく似合う金と銀の目。

キイトだ。

「キ、イト……」

一気に血液を失ったからか、ショック症状が出始めている篠崎。それでも、か細い声でキイトの名前を呼んだ。

しかし、ハティは弱者を狩るのみ。小さな小さな少女に、その巨体を近づける。

『どうした？ 少女よ』

「……………ゆ、ゆるさ、ゆるさないっ! わ、わたしは、あなたを、ゆ、ゆるさないっ!」

『ぬ?』

キイトは、その小さな怒りをもって、大きな敵に攻撃を加えた。ペシペシと、握った拳でその巨体を殴りつける。しかし、ダメージを負うのはキイトの方。数回殴っただけで拳が血まみれになっていた。

「に、げろ……キイ、ト……」

そんなか細い篠崎の悲鳴は、キイトの耳には届かない。泣きながら、鼻水をたらしながら、キイトは巨狼の足を殴りつけている。

『ふむ……眠れ、弱者よ。今やめれば、その勇気に免じて許してやるっ』

生かしてもらえる、という極上のエサを垂らされたキイトは

それでも、殴り続けた。

「ま、まおーさまは、やさしい人なんだ！　あなた、あなたなんか
に、き、傷つけられていい人じゃ、ないんだっ！　わ、わたしは、
あなたを。ゆるっ！？」

大きな前足で少し押されただけで倒れてしまった。

それを憐れむように見る銀の瞳。

「……弱き者よ。死ぬ準備はできたか？」

今までとは違い、獲物に対する声ではない。

おおよそ、同格の敵と対峙したときに出す、勝利宣言。敬意を表
した、ハテイなりの最後の手向け。

「キ、イト、キイトオオオオ………」

遠くから眺める篠崎には、呼ぶしかできない。そのたびに、こぼ
りと口から血があふれ出てくる。

指の先まで、冷たくなってくる。体もビクビクと痙攣を始めた。
不意に、キイトと視線がぶつかる。

にっこりと。涙と鼻水まみれの顔で、にっこりと。たしかに、笑
った。

その口が、ゆっくり、こっ、動いた。

『ありがとう、まおーさま』

篠崎の中の何かが、静かに音を立てて、それでいて盛大に弾け飛
んだ。

第十九話：Thank you, the Devil (後書き)

今回はこんな感じなので後書きで壊さないようにしたいです。
なので、ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

では、また次回も宜しくお願いします

第二十話：When rising, it almost came. (前)

遅れてしまってすみません。難産でした。

そして今回は背筋がゾツとするほどの厨二仕様となっております。

廻の信ずる三本柱。『努力 友情 勝利』

さあ、耐えられるでしょうか？（何からだよオイ）

では第二十話。

『そろそろ、立ち上がる時は来たんだ』

べじぞぞー！

ブラハとスコールがぶつかり合う上空からでも、その巨大な氷柱が突き出るのが見えた。

しかし、それだけだ。

「ク、ソ！」

『どうした？ 速度が落ちているぞ？ 天空の王者様？』

「そんな挑発に乗ると思っっているのか？」

『フン。これを挑発だと捉えている時点で少しばかりは気にしているのではないのか？』

「キ、サマ……」

ブラハが空中でホバリングをしているのだが、スコールはその周りをずっとぐるぐると駆けまわっている。おそらく爆発で移動しているのもその場に留まり続けることはできないのだろう。

それでもその速度は脅威だ。速度ゼロから、一気にマックスへと加速できる。

対してブラハも加速までの時間は速いには速いが、ゼロで出来るわけではない。

そこに明確な差が出来ていた。

（いよいよ、出し惜しみが出来なくなってきたな）

ブラハとて全力を出しているわけではない。全力を出してしまえば、一瞬で眼下に広がる王都が灰に変わってしまうだろう。もちろんスコールもまとめたが。

（どうにかして、我が奴よりも低空からアレを放つしか……）

『何を考えているか知らんが、させんよ。ハティも全力を見せた。』

我も、見せるとしよう』

スコールが一段と上空へと駆け昇っていく、さながら、太陽を飲みこまんとする狼。

に向けて使うべき魔術なのだ。翼も上へと飛ぶためのものだし、減速など効くはずがない。

直後、視界の端で黒き炎が、爆発を、スコールの叫びを飲み込むのが見えた。

そして、ブラハは隕石のような速度で地面に叩きつけられる。幸い、広場だったようで誰もいなかった。

「見る、我が友よ。我は、強かったであろう?」

意識が朦朧とする。母の記憶にあったとはいえ、行使するのはこれが初めてだった。

何事も、初体験というのは辛いものである。

「グ、ウウ、オオオオオン!」

そんな咆哮とともにスコールが地面へと落下してきた。

所々が焼け焦げ、ほとんど死に体と言ったところだ。

今までのブレスとは違ったレベルの攻撃だ。攻撃範囲の事象を根こそぎ焼き払う魔術なのだから。それを受けて生きているというだけでなく見上げたものだろう。

「なる、ほど。太陽を飲むものの名は、伊達では、ない、わ、けだな……」

ブラハの体が急速にしぼみ、もとの少女の姿に戻る。

しかし、スコールの姿にも変化が訪れた。

「ク、ソ……忌々しいが、姿を変えねば」

轟ッ!! と炎に包まれるスコール。もちろん、誰からの攻撃でもない。スコール自身が出したものだ。

最高位の魔物は、人型になることができる、という伝承がある。それはブラハで確認済みだ。それは神の最高傑作たる魔物のみに許された特権か。

神々しい炎が消えた先には、所々煤けた金髪金眼の女性がブラハを睨んでいた。抜群のプロポーションがブラハを唸らせるが、今はそんなところではない。

「ハン……おっばい星人が」

「ダメレ、絶壁異星人！」

ブラハは相変わらず黒い布一枚だが、スコールは金色を基調としたドレス。動きやすさを重視し、その胸の部分にはメイルが使われている、所謂、戦装束バトルドレスと言う奴だろうか。

「幼少期にしては、頑張った、ほう、だ。さっさと諦めてくたばれ……ッ！」

「年増のババアにしては、ゲホゲホ!? よくやった。さっさとくたばれッ!」

両者は悲鳴を上げる体を無理矢理動かした。

ジリリと肌を焼くような緊張。

そして、

両者は音を置き去りにして突進した。

腕を振るうことも、足で蹴りつけることもせず、その体全体を相手に思いつきりぶつけると言う、実力を決めるには一番手っ取り早い方法だった。それ以前に、そんなことをするだけの体力が残っていなかったというのもあるが。

ドパンッ!! と音が張り裂ける音の後、轟ッ!! という烈風が続いた。

血が吹き出る。両者の体から、どこにそんな血液が詰まっていたのかというほどに。

「……………」

「……………」

両者は動かさず、喋らない。

痛いほどの破壊を振りまいたのち、痛いほどの静寂を残した。

瞬間、その体がぐらりと揺らぐ。

「ぐ…………クン」

ブラハだ。血まみれの体を揺らしながら、一步二歩と後退していった。

それを見たスコールは高笑いを上げる。

「げ、げらげら、げ、ら……」

そして、崩れ落ちた。

二人が流した血の池の中央に、どしゃりと水気のある音を立てて単純なダメージ残存の差。黒き炎のダメージが思った以上にスコールの体を蝕んでいたということだ。

最後に立つのは、誇り高き龍。

そして、

「我の、勝ち……だ」

ブラハも血の池に崩れ落ちた。

こちらは単純な体格の差。持っている血の量の差だ。

ブラハは消え去る意識の中、死の先にいてくれるであろう友のことを思う。

(友、よ。……どうやら、助けは、無理そうだ)

頑張れ。最後にそう呟いてまどろむ意識に身を任せた。

戦場に立つ者は、いなかった。

|| ||

銀狼の強靱な右前脚が小さな少女に全力で振るわれた。大気を切り裂く鋭い音が一層の恐怖を煽った。

小さな少女は碌な抵抗も出来ずに目を瞑ることしかできなかった。

たしかに、大切な人を傷つけられたのは今でも許せない。だけど、

それでも痛いのは怖いし、死ぬのは恐かった。

それらを恐怖しないというほど滑稽なことは無いだろう。

思い出すのはやはり自分を救ってくれた魔王様。

次に目の前で殺された両親。

そして 兄。小さなころにわかれたきりでほとんど覚えていな

いがたしかに居た。母は違うらしいが、間違いなく兄はいた。

……………?

いつまで待っても、キイトに痛みも死も衝撃もやって来ない。
支配するのは静寂だけ。

(いた、く、ない?)

恐る恐る、その小さな瞼を開いた。

暗い。何かが自分の前に立っている。

黒い。闇のような何かが自分を守っている。

「……………言っでなかつたな。僕は、寝起きは機嫌が悪いんだ」

強い。彼女は、その姿を知っている。

最強でも最悪でも最低でもないのに、どんなに弱くても、どんなに脆くても、どんなに負けても。誰かの為に立ち上がることできる、あの姿を知っている。

彼の名は、魔を統べる者。

人は、畏怖と畏敬を込めて、こう呼んできた。

「まおーさま！」

キイトを守るように右手を振り上げ、スコールの凶悪な一撃を防いでいた。

「……………どんなに弱くても、どんなに脆くても、どんなに負けても、それがどんなに無様でどんなに滑稽でどんなに傑作でも！ それで僕が諦める理由になんて、言いわけになんてならない！ 終わらせられるモンなら、奪えるモンなら、やってみやがれッ！！」

魔王は、誰かを守るために立ち上がった。

まだ会って間もない少女を守るために、まだ会ったことすらない魔族を守るために。

「かかってこいッ！ 発情腰振りクソ犬がッ！！」

文字通りの、死闘が幕を開ける。

篠崎の右腕には変化があった。最初に魔剣ティアを握った時のようにあの黒くて巨大な棘のようなものが無数に右腕を侵食している。痛みは、ない。

「フン、死に体が！！」

ハティは全てを凍らせる腕を高速で振る。そのたびにエイリで巨大な氷の槍が篠崎を襲った。

不安は、なかった。

篠崎はそれを黒いとげでおおわれた右腕で殴り飛ばそうとする。

そして、

「バカめ！ 凍りつくがよい！！」

バギィ！！ と音を立てて砕けちった。

もちろん、高速射出された氷の槍の方が、だ。

「……………その魔術の攻略法、見えたな」

全てを凍りつかせることができたのなら、何故全てを凍らせなかったのか。

篠崎の魔術を凍らせなかった？

大気中の酸素全てを凍らせて窒息させなかった？

「お前は、魔素を凍りつかせると言った」

篠崎は一步、ハティに近寄る。

ハティは一步、篠崎から離れる。

「よつするに、お前は魔力は凍らせられない」

魔力は魔素ではない。これはこの世界の住民にとって当たり前のことだった。

生物は体内に魔素を取り込み、精製して別モノの魔力に変える力を持っている。

魔素を記号Mというふうに置き換えると、魔力はM？といったように。

オゾンと酸素のように、魔素と魔力は別モノだ。

魔剣ティアを凍りつかせたのではない。魔剣ティアの周囲を凍ら

せた。なので魔素を凍らせた氷を魔剣ティアは食い千切れなかった。
「なら、魔力でならくずせッ!?」

ごぼり、と。口の中に鉄の味が広がった。
そして貫かれた腹から血が溢れだす。

傷口をよく見てみれば、篠崎の間がその部位を覆っている。どうやら血液中に闇を混ぜて意図的に血流を誘導しているようだった。
しかし、それでも、無理があつた。

「なるほど。我が弱点を見つけるとともに、かなりの致命傷を負つたようだな、キサマ」

「ゲホッ!? ……うる、せエ。時間がないんだ、行くぞッ!」
血を唾のように吐きだし、右手を構える。

それを見たハティは、

「その腕、よほど魔力消費が激しいと見えるな」

「ッ!? ツガアッ!」

篠崎とハティの距離はおよそ二十メートル。その中間地点で両者は激突した。

ハティの言う通り、篠崎の底の見えない魔力をこの右腕は喰らい尽くしていつている。

おそらくは『魔剣ティア』か『魔王の仮面』に付加された失われ^{ロスト}た魔術^{マジック}の一種だろう。魔剣ティアの魔力喰らいと併用することで完全に使用できる類の。

魔力を喰らい、魔力を使う。

この危ういバランスの元に、この黒い腕の魔術は成り立っていたはずだ。

今は、ただ放出しているだけで、回復という吸収は見込めない。
普通の闇属性の魔力を使っても、硬さに特化したあの氷の魔術は防げないことは身を以って理解した。

しかし。

負ける気は、しない。

「ゲフッ、ゴフッ! ……いくぞ、クソ犬」

『ぐっはっはっ！ 我を奴隷にしてみるがよいッ！』
勝とうとする者と、
殺そうとする者。

怒気と殺気が、ぶつかり合う。
ジリリ、と。肌を刺すような緊張が張り詰める。
次の瞬間、

二つの影は、音を後ろ側に置いてきた。

ドパンツ！ と。空気の壁が破れる音がする。直後に烈風があたりの家屋をギシギシと揺らした。

その真っ只中。黒と銀はぶつかり合う。

右腕を振るい、避け、凍える前肢を振り回す。時には闇で減速させ、ときには氷の礫が弾丸のように飛び交う。

まるで暴風。

魔王は先代たちの記憶を頼りに、
魔狼は本能と経験を頼りに、
命をかけて、ぶつかり合った。

「まおー、さま」

小さな少女は二つの影が打ち合うのを視界の端に微かに捉えながら、小さな呟きを漏らした。

彼女の知る魔王が、巨狼に拳を振るうたびに傷口から血が流れ出て、それが周囲に飛び散った。飛び散った血が自分の頬にぶつかるのを感じる。

あの人は、別に戦士ではない。

自分と笑って、自分と話して、自分と生きられる人だ。

普通、という言葉がこの上なく似合う人だ。

それでもあの人は、笑顔を浮かべられる顔を歪めながら、自分と

普通に喋れる口を意識が飛ぶような苦痛で歪みながら、自分と普通に生きられる命を削りながら戦っている。

「まおーさま……………」

「……………ッ！ 魔王様アツ！！」

隣でいつの間にか気絶していたアスラが飛び起きた。

「魔王様が戦われておられる。……………行かねば！」

「ま、待って！ ア、アスラ様が行っても……………」

そんな言葉を受け取り、アスラは少しだけ俯き、顔を上げた。

「ワシらは昔、大きな過ちを犯してしもうた。それは取り返しのつかぬ事じゃった。そのことが、あのお方を苦しめていたのを知らず、ワシらは頼りきっておった。傷つき、疲れておられたあの方を！

ワシらは、当たり前のように頼ってしもうた！！ そんなことは、もう！ もう！！ 絶対に、いかなのじゃッ！！！！！！！！」

「????？」

キイトには、分からないだろう。彼女にとっての初めての魔王は篠崎だったのだから。キイトだけではない。魔族の子供たちは誰も知らないだろう。

しかし、大人たちは知っている。

まだ若かった、あの小さな背中に、全てを預けていたのを。

だから、悔やんでいる。悔やんでも悔やみきれないほどに、悔やんでいるのだ。

あの若く、小さな背中を、自分たちが折ってしまったのを。

「非情なる紅蓮よ！ 無慈悲なる鉄槌を打ち下ろせ！ 紅蓮の鉄槌

！！」

巨大な円柱がハティに向かって飛んで行く。

周囲の氷を溶かしながら、それは確かにぶつかつた。

ハティの作り出した氷壁に、だが。

「なんだ、死にたい雑魚がまだいたようだな」

ハティがこちらに意識を少しだけ向けた瞬間、篠崎の悪魔のような手が顔に突き刺さつた。十メートルほど水平に飛ばされると、空

中で受け身を取りまた篠崎に意識を向け直す。

『何をそんなに憤るのか？ 雑魚に雑魚と言って何が悪い』

そんなことを不遜に堂々と言つてのける。

篠崎はそんなハティを心底分かつていないと言つた表情で見て、
こう言つた。

「お前は、その雑魚に今から倒されるんだよ。雑魚のことをあまり悪く言わないほうがいいぞ？ かえって自分の立場を悪くするだけだ」

再度口の中の血を吐きだしながら、篠崎は余裕を持たせながらそう言つた。

ハティは、ぐっはっは、と笑つた。

この調子に乗つた魔王だけは、必ず殺し尽くす、と。

「今からお前に見せてやる。誰にも、喜劇の幕は降ろせないってことをッ！」

周囲に、もう悲鳴が起こることはなかった。

|| || || ||

周囲で倒れ伏せる魔族の民。

その大半がもう立っているのもやっつという状態で、ファルム王国の王都とは比べ物にならない生活水準だった。

一日に一食食べられれば僥倖。二日に一度の食事というのは当たり前前。三日に一度となると少々危機感を覚えるくらいだった。

それら全てを、責務を投げ出した前魔王になすりつけることは簡単だろう。

しかし、彼らはそんなことはしない。

子供たちがいくら前魔王のことを悪く言つても、絶対にしない。分かつているから。

悪いのは全部、自分たちの所為だということ。

なんでも出来ると思っていた魔王の背中は、思っていたよりも小

さく、儂く、精一杯のものだった。

期待と信頼の重圧に押しつぶされそうになっているのも知らず、魔王という存在を一個の人間としてではなく、そこに存在しているのが当たり前象徴というふうにししか見ていなかった。

それは、どれだけ辛いものか。

強い。それだけの理由で魔王に祭り上げられた彼女は、どれだけ必死に立っていたのか。

だから、誰も責められず、誰も何もできなく、指導者が現れず、国は腐敗していった。

あとちよつとで、国が滅びると言った時、宰相のアスラ様が、「魔王様ッ！」と叫んで城門の方に駆けていくではないか。

一瞬、期待はした。どんな屈強な者が現れるのかと。城門が仰々しく開けられたその先には、

華奢で、押せば折れそうな線の細い少年が立っていた。

この国は、間違いなく滅びる。

そう思った魔族の民。絶望に打ちひしがれながら、家とも呼べぬ廃墟に戻った。

夕刻。怒号と悲鳴と笑い声が起きる。

何事かと思い、外に飛び出すと金と銀の巨狼が暴れていた。彼はその姿によく似通っているものを見たことがあるが、そのときは味方だったはずだ。

とにかく、凄惨なものだった。

常人では視覚することもできないような速度で、道ごと飲みこまれる。

血は、流れなかった。

絶叫と悲鳴と笑い声が王都を満たす中、城から一人の少年が出てくる。

昼間見た線の細い華奢な魔王様だった。

こんなところに何しに来たんだ、という思いはあった。

しかし、その少年は金狼と銀狼相手に互角以上に立ちまわった。奥から出てきた小さな少女も、龍の化身だった。

いける、と思ったが、次の瞬間、地中から現れた氷の柱に腹を貫かれた。

終わった、と思った。

最後の希望が、打ち砕かれた。

ピクピクと痙攣を繰り返す魔王の体を見ながら、男は静かに涙を零した。

城から出てきたもう一人の少女に、銀狼は歩み寄る。

しかし、その少女は、果敢にも銀狼に向かって怒りをぶつけた。憎悪なんかではない、大切なものを傷つけられたという純粋な怒りだ。

小さな少女が拳を振るうたびに、その小さな小さな手から、血があふれ出た。

銀狼が軽く前肢を前にやっただけで倒れてしまう少女。

銀狼が、その強大な前肢を振り下ろす姿を眺めることしかできなかった男。もう、諦めるしかなかった。

しかし、いつまでたっても、悲劇は始まらない。

小さな少女を守るように、一人の少年が血まみれの姿で銀狼の一撃をその右腕で受け止めていた。

少年は叫ぶ。

会ったことも無いような、全てを捨ててしまった自分達を終わらせないうちに。

苦痛に塗れた少年は、それでも、自分たちの為に戦ってくれる。

あの姿を、疲れ果てた男は知っていた。

そして、このままではいけないということも、理解していた。

宰相のアスラ様が魔術を繰り返す。それは銀狼の作り出した氷壁

に阻まれるがその隙に少年が変質した右腕で攻撃を加えた。いつのまにか、周囲からは悲鳴が起こらなくなっていた。誰もが、命を削ってぶつかると少年、いや、魔王の姿を見つめていた。

疲れ果てた男は、頷いた。

そろそろ、立ち上がる時は来たんだ。

〓 〓

共に一撃必殺を失くした身。

高速で攻撃を加えながら体力を削り合う泥沼の戦いへと変化していった。

篠崎にとって絶対だった闇の魔術は、いともあっさり看破され、ハティにとって完璧のはずだった魔術は、こうも容易く碎かれる。戦いは原始的な殴り合いのようなものとなる。

ハティの大木を一撃で粉碎する前肢の一撃が篠崎に襲いかかる。それを篠崎は臆することなく正面から悪魔のような腕で受け止めた。攻撃を加えたこちらまでもが痛みを感じるほどの硬度だ。

しかし篠崎も無事ではない。一撃を振るうたび、一撃を避けるたび、一撃を受けるたびに血が溢れだす。

このままでいけば、篠崎の削り負けは確定だった。そう。だった。

そのとき、横合いから銀狼にとっては微弱な雷の槍が飛んでくる。それだけではない。様々な魔術が、ハティの体めがけて飛んでくる。

『雑魚共が、調子に乗りおって』

一瞬、周囲に視線をやった。

そこには、先程まで死に体だった魔族の民が思い思いに魔術を行
使している。中には小さな子供までもが居た。

魔族とは、そのまま魔の民。魔力にかけては人族以上の心得はあ
る。その気になれば誰でも人族の宮廷魔術師ぐあいにはなれる素質
を持っていた。

時々、ハティでも無視できぬほどの魔術を行使してくる者がいる。
「……………凄いな。そう思わないか？ クソ犬」

目の前の魔王は、ただひたすらに拳を振るう。それが自らの寿命
を縮めると分かっているが。

最初は、『魔王の仮面』に中てられたくだらない使命感にでも駆
られているのかと思った。

しかし、違う。

目の前の魔王は、自分の意思で、自分の心で、命を削る選択をし
ている。

「出来るはずなんだ。やれば、出来るはずなんだ！」

主語や述語が補完されていない文を、誰に言うでもなく叫ぶ。

しかし、

『魔王よ。キサマこの程度の助力が何になる？ 無駄であろう、こ
んな豆鉄砲』

ハティは全てを断ちきるような言葉とともに前肢を振るい、周囲
を凍らせる。

それを拳で碎きながら、篠崎はもう一度叫んだ。

「無駄であっても！ 無力じゃないはずなんだ！！」

今までは氷を砕くだけに留まっていた拳が、貫くようにハティの
胴体にぶち当たった。

苦悶の表情を浮かべながらハティは『魔王』を睨みつける。

その姿に、幾代もの魔王の姿が重なった。

そして、

魔王の右拳が、銀狼の顔面に突き刺さり、そのまま地面に叩きつけた。

それと同時に、遙か彼方から、ドパンツッ！と音が破裂する音がする。

『ぐ、は、は……』

なんとか立ち上がるうとするが、一気に視界が回転した。氷が、体を覆い尽くす。

『（……これが、忌避なき、戦い）』

氷が砕け散ると、銀髪銀眼の女性が倒れ伏していた。

服装はドレスに胴鎧がつけられた戦装束^{バトルドレス}。

意識が冷たい氷に吞まれるように、銀狼だった女性は少年を見る。

そこには確かに、『魔王』として歓声を浴びる勝者が居た。

『……………我の、負けだ』

その言葉とともに、ハティの体に何か覆いかぶさった。それを魔王になった少年と認識する前に、意識が消え失せた。

ここにも、戦場に立つ者はいなかった。

いや。なんだか自分でも寒気がするほど厨二だった。

とある幻想殺しの方を想像すると、どうしても熱い方向に話しが運んでしまいます。カッコいいな上条の兄さんは。

さて、と。そろそろ第一章も終了です。

第二章のタイトルは『地獄の七公』でしょうか。

これだけで分かってしまいそうですね。

では、ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

これからも宜しく願います。

第二話：The end of one story, and begi

ひとまず投稿。

第二話。

『一つの物語の終わりと始まり』

をいじ。

腹が、焼けるような痛みを発している。

体中の虚脱感は、あのとき初めて魔剣ティアを握った時の感覚に似ているだろうか。ようするに、魔力の欠如。生命力の欠落。

当たり前だ、ともに最高位に位置する化物と死闘を繰り広げたのだ。腕一本無くなっていてもおかしくない勝負だった。というより、いまだに心臓が動いているのが信じられない。

.....?

自分の意識はあるはずなのに、ここはどこだろう。

真っ黒な空間。真っ暗な空間。

自分という意識以外に何も無いはずの虚空の空間に、一つの黒がやけに栄えて見える。

篠崎は、その小さくて、儂くて、精一杯の背中を、そんなには知らない。

だけど、今度『会う』ときにかける言葉ぐらいは、考え付いた。彼女は、今自分の周りにはいないだろう。

だから、夢の中ぐらいいでも、会った時の練習でもしておこう。そんな軽い気持ちで、蹲るように座り込んだ彼女の背中を叩く。

涙で濡れた彼女が、こちらに顔を向ける。
言つべき言葉ぐらい、分かっていた。

『。』

|| ||

「も。お。ろ、と」

頭の上で何度も声がかけられるのが認識できた篠崎。

浮上してきた意識とともに、夢ではない、本当に突き刺すような痛みが彼を襲った。それと共に魔力と血液を失ったことによる虚脱感。空腹すら立派な凶器となって彼に襲いかかってきた。

重い瞼を開けると、間近にブラハの瞳があった。

どうやら自分の顔を覗き込むような体勢らしく、長い黒髪が顔に当たって少々くすぐったく感じた。

漂う薬品の匂い。そして感じるいくつもの視線。

それから察するに、ここは医務室のようだった。外の衛生状況と比べれば次元が違うレベルで清潔感が溢れているし、ピカピカのシートは体にしつとりと馴染み安眠を提供してくれる。

その勢いに負けて、もう一度篠崎は意識を落とそうとするが、耳元でブラハがうるさい。どうやら、起きるしかなさそうだった。

「……？」

そこで気付いた。

声が擦れて上手く言葉が出せない。それに気付くだけで一気に喉が渴いてくるのを感じる。

「どっした？」

「……………」

音が出ない唇を必死に動かして、ブラハに「水」という言葉を伝える。

それを何度か繰り返すとブラハも理解したのか、「誰か水を持ってきてくれ」と声をかけてくれた。それだけのことなのだが周囲の人物は慌ただしく動き出す。

(……腹、うなゝ状態だ。貫かれたから胃の中が飛び出ちゃったテへ、みたいなギャグじゃないけど)

自分はどのくらい長い間眠っていたのだろう。もしかしたらこのたるさは寝過ぎで来るものかもしれないと思うが、クラクラと来る目眩は間違いなく貧血のものだし、体の中身をこっそり持ていかれたような虚脱感は魔力の欠乏のものだ。

そこまで考えて、漸く木製の器に入った水が運ばれる。

起き上がるうとしたが、体に力が入らず、無理に入れようとしても体に激痛が走るだけだった。

こんなとき切に思うのは、やっぱり自分は負け犬なんだな、ということ。勝ったとしても、もつとスマートに勝てないものか。

そんな贅沢なことは言っていられないが、水を飲めるくらいには体力が残っていて欲しかった。

「む？ 起き上がれんのか？ 仕方がない。我が口移しで」

「ッ！ k w t m z w b v c r ツ！？」

そんなこと、幼女にさせたら世間一般からどんな目で見られるか。案外、この世界の結婚適齢期は十五歳程度なのだが、ブラハの見た目はそれよりもさらに低い。実年齢数百年にも及ぶのに。

そんなとき、横合いから声がかけられる。やぼりたいが、聞いたら元気が出るようなハツラツとしたものだ。

「……みゆ？ ふ、ふあゝあ。あ！ まおーさま！！ だいじょうぶ？」

ゆっくりと目だけを動かすと、篠崎の横にはふわふわとした金髪が目に入り、それが快活に動き顔を見せる。

キイトだ。

『だいじょうぶ』と声をかけようとしたが、口を動かすだけが精一杯だった。

とにかく、ブラハにどうにかして水を飲ませてもらわねばならなと思った篠崎はブラハに促す。そして目で語った。『口移しはヤメロ』と。

「なに？ そんなに私の口移しがよいのか？ 仕方がないな」

今度こそ暴れてやろうと脳から体の各所に反乱の信号を送るが、体の各所に控える神経細胞軍は命令を無視してブラハの軍門に下っていた。ようするに、ピクリとも動かない。

「待っておれ……んむ。もごもごもご」

口に水を移して何かを喋ろうとしているが、無意味だ。

そして、不条理にも、その水をたつぷり含んで膨らんだ頬が、ぷるんと柔らかそうな湿った唇が、今にも触れ合いそうになる。

そのとき、横槍でブラハの横腹をぶち抜く勇氣ある勇者が現れた。「ぶぼツ!? なにするのだキイトよ!」

吐きだされた水が思いつきり顔面に掛かる。拭くことも動くこともできないので不快極まりないが、吐いたのがブラハなのでなんとか許容することができた篠崎。

「えっとー……小さな少女の、小さな反撃です!」

ブラハの脇腹を突くために手刀を構えるキイト。

それに対抗するようブラハも手刀を構える。

そんなことしている内にブラハが吐き出した水が口の中に滑り込んできてやつのこと喉を少しだけ潤せた。

篠崎を挟むような形で可愛らしい激闘を繰り広げる幼女たちにやんごとなき危機感を覚えながら、とりあえず腹だけは踏んでくれるなよ、と心の中をお願いした。

〓 〓 〓 〓

とある一国家。

魔術工学や魔術研究においては他の追随を許さない魔術国家デオドランド。

魔力を動力源とした活版印刷の実現に成功。紙自体が高価なため新聞の冊数も少ないが、そこには色々な創意工夫がなされている。

例えば、写っている写真が立体的に動き出すとかである。

そんな貴重な新聞紙を広げながら、これも開発に成功した菓子パンとやらを食べる男が居た。砂糖は貴重なので結構高価なものだ。

金髪に碧眼。

それだけを挙げればなんとも普通なのだが、その威容は異様だった。

すれ違うだけで心臓を握られたかのような圧迫感が襲う。

彼はただ新聞を広げて菓子パン片手に店の前の机で食べているだけなのだが、自然と人が寄って来なかった。

彼の目は、新聞の見出しの隅っこに注がれていた。

「……『魔の国ニーズヘッグの北部にある小さな村を壊滅させ、士気が上がる王国』、ねエ」

北部か、と小さな声を漏らした。

人間がなにをしたいか、魔族がなにをしたいかなんて彼には関係があまりなかった。

新聞のど真ん中に印刷されているのは『王国に魔王現る』との文字だ。何やら王国の召喚術式に混じって飛んできた一人の少年が『魔王の仮面』を持ち出して逃亡とのことだった。

この世界の情報網はあまり発達していない。王国や魔の国あたりの情報が内陸に位置するデオドラントに届くまでどのくらいの間が必要なのだろうか。早くても一週間と言ったところか。

そしてこの隅に書かれた記事はただの隙間埋め程度の役割しかないくらいでも代えの効く見出しなのだろう。おおよそ、一か月以上は前の話なのだろう。

「……はアあ。だりいな、オイ。今日はどうすっかなア」

彼は菓子パンの最後の一欠けらを口の中身に放り込んで木製のコップに注がれたコーヒーのようなもので流し込む。

そしてコップを置くと、大きく伸びをした。

そんな彼の後ろに、一人の女性が居た。一見まったく関係なさそうに見える位置関係で、二人は会話を交わしはじめる。

「今回はどんな任務なんだ？ どオセ、下衆めいた任務だろ」

「いいえ、違います。あなたにやってもらうのは、名実ともに『英雄』になってもらおうと思うの」

「ハア？ 俺がそんなコトに拘るとでも思ってたのかア？ だとしたら、テメエは一辺死んだほうがいい。よかったら格安で死亡ツアーを組んでやるが？」

本当に興味がなさそうに金髪をぼさぼさと掻く。

裏に控えた女性は、かけている眼鏡をクイッと上げながら、さらにこう言った。

「出現した『魔王』の討伐です。ギルドとしても、なにもファルム王国ばかりにその役をやる必要はありません」

そんな言葉を吐くのは、ギルド関係者なのだろう。ギルドでも『闇』の部分か。

「ギルド出身のあなたが、それも第一位のあなたが動けば、世界はガラリと変わるでしょう。一人で戦略的に一国家と張れるあなたが動けば」

ようするに、戦乱の世が、幕を開けると。

一個の戦力として最高峰の力を保有するギルド。

戦乱の世が幕を開ければ、利益を得るのはやはりギルド関係者。足りない資材を運ぶ護衛を雇ってもらったり、足りない戦力を補うために傭兵を雇ったり、利益ばかりが膨れ上がる。

そんなことを望んでいるのはもちろん上層部の者たちだけだろう。王国の小さな窓口にちょこんと座っているあの赤毛の女性なんかは知る由もないことだ。

金髪の男と眼鏡の女性は背中を向けたまま話し続ける。

「……なんだ。結構なストレス解消方法もあるもんじゃねエかよ」
「……ということとは？」

金髪の男性は椅子の背もたれに体重をかけ二本足でバランスを取りながら、事も無げにこう言った。

「ああ。ぶち殺せばいいんだろ？ その『魔王』とやらを」

本当に蟻を潰すかのように宣告した。

その目は対象がどの程度の強度なのか測っているような目だった。「助かります。あなたが動かなければ第二位、第三位の両方にアプ

ローチをかけなければなりませんでしたから」

「あの二人が俺の代わりに？ なるわけねエだろオがよ。俺に片手間で圧碎されるような奴らが」

「まあ、いいでしょう。そういうことにしておきます」

女性の方はスッと立ち上がった。

そして振り向くことなく金髪の男に、こう声をかけた。

あるものにとっては、それは聞くだけで心を震え上がらせるような、あるものにとっては、それを聞くだけで憎悪の念しか浮かべないような、ある種『魔王』と同様な名前を持つ男。

「ギルドランク第一位、『悪英雄』ルシア・ウエーバ。今後の働きに期待します」

そうして、静かにその場を去った。人ごみに紛れた女性は、もう見えない。

くつくつ、と。

『悪英雄』は、静かに笑った。

「さアてとオ！ タノシイタノシイ、殺戮の準備だ」

『悪英雄』ルシア・ウエーバ。

彼が動けば、世界は動く。

それがいい方向か、悪い方向かは、彼次第だ。

|| ||

あれから、思った通り腹を踏みつけられ、軽く傷が開いたが、まあ許せるか、と寛大な心をアピールした篠崎。妙に達観ぶった顔がブラハとキイトに不気味な印象を与えたのだが。

そのあと、急激に空腹に襲われた。腹に半径七センチほどの穴が開いたからとか言うギャグは通用しない。本気の本気で空腹が襲った。

そういえば僕はどのくらい寝てたの？ という当たり前の疑問が今更ながらに浮かんできた。返答はまさかの三日間。その間自分はどうのようにして生きていたのだろうと、悪戯な笑みを浮かべるブラハを見るとゾクゾクと悪寒が走った。

南無南無である。

とにかく、「お腹が減ったうなー」と言ったらお付きの人が慌てて走り去っていった。篠崎としてはどこそこの宰相が目には浮かんだ。十分後、体に優しそうな料理が適量乗せられたトレイが運ばれてきた。

それを持っている侍女のような格好をした女性の手がぶるぶる震えているところを見るとアスラがこの三日間で新たに雇ったということが分かる。そういえば、あの猫耳メイドはどうしているのだろう、と少し感慨にふける。

とまあ、そんな考えは食べ物を目の前にして吹き飛んだ。

がつもぐがつもぐ……と食べ続けようとしたが、思った以上に体は弱っているらしく数口食べると普通のペースに戻る。

ゆっくりと食べ終わると、また侍女の人が不格好にトレイを運んで行った。今後の成長に期待である。

そこで、ふと疑問が浮かぶ。

はて、どうやって自分は助かったのだろうか？ と。

それを聞くには自分が寝ていた間起きていた奴らに聞くのが一番、ということだ。篠崎は何の気なしにブラハにこう尋ねる。

「僕ってさ、何で生きてるの？」

「い、いきなり根暗発言どうしたッ！？ ま、まさか今回の戦闘を通じて振り返りたくないトラウマが掘り返されたとも言っつかッ
！」

「ま、まおーさま！！ し、しんじやだめです！」

「？」

とりあえず、何かの誤解をされたいので、丁寧に誤解を解いてあげる篠崎。

「……言いたくないな、友よ」

「……いいたくないよ、まおーさま」

「？」

今度はとてつもなく機嫌を悪くなされたようで、重傷患者のはずなのに二人の心のケアを始める羽目になった優しい篠崎。

なんとかご機嫌を取ることに成功した篠崎。自分は結構口がうまいのかもしれない、という思いは置いておくことにした。

「……本当に、魔狼種は知能が高い分、何がしたいのか分からん」

「わからないですよ」

「？」

疑問符を浮かべる篠崎に、今度は彼女たちが愚痴を言うように説明しました。

本当に、心底憎たらしげに。

「え？ ハテイが キレイで出るとこはしっかり出ていて、へっこむとこはしっかりへこんでる銀髪銀眼のスーパー美女になっただってツ！？」

「そっちに驚く必要はないだろう！ 我だって、その……、変わったのだし……」

「だって上から下まで眺めてみても凹凸は一切見当たらないぜっぺきゅぼっふッ！？」

「……ほほう。言うなあ、友」

「こっち……怪我、に、ん」

「フンッ！！」

「ま、まおーさまのふらちっ！！」

以上、とある少年の受難である。

少しだけ沈黙を意図的に流した後（神様の意思だったのかもしれない）、篠崎は仕切り直すために真面目に話します。

「……………え？ ハテイが僕を冷凍保存してくれたって？」

「出血を防ぐために一時的にな。それ以降は、目を覚ました我の治癒魔術のおかげだ、礼を言うがよい」

「ありがとう」

まともにお礼を言われたのが恥ずかしかったのか、それとも言われると思っておらず意表を突かれたのか顔を真っ赤にしてゴニョゴニョと何か言っている。

それを見てキイトも、「わ、わたしも手伝ったんだよ！ れいを言うがよい」と無い胸を張って言った。こちらも、「ありがとう」と言ったら俯いてゴニョゴニョと何か言っていた。

そんなトリップ中の二人を置いて、篠崎は真剣に考える。

(……………ハテイが、僕を？ なんでだ？ 少年漫画じゃあるまいし、お互いの健闘を称してなんて世界じゃない。メリットなんかはないはずなのに。なんでだ？)

「じゃあハテイとスコールはどこでなにをしているわけなんだ？ ハテイが僕を助けたとしても、スコールはそうじゃないんだろう？」

天狼森林に帰った？」

「いや。地下の牢獄に自ら入って行ったよ。暴れるスコールをハテイが押さえつけてな」

ますます意味が分からない。

百歩ほど譲って自分のことを助けてくれる善良な狼だったとしよう。

善良な狼くんは困っている人を助けたのに、なんで元いた場所に帰らないんでしょうか？

「続きはWEBで！ とか言ってる場合じゃないんだ」

人の文化とは話しあいだ、とは誰の言か。

相手は魔物なのだが、喋れる以上この文化の方程式は成り立つはずである。

しかし、二人の制止を聞かず、思いつきり立ち上がったのがいけなかったのかもしれない。

足に力が入らずガクンと倒れ、そばに控えていた侍女さんのそれなりに大きな胸にダイブし、氣遣われ涙し、後ろで黒い瘴気が溢れだしているのに気付かず、重傷の上に軽傷を重ねられたのは言うまでも無いだろう。

「理由ならば我が知っておる。友がハティに向かつて言っていた言葉だそうだ」

若干増えた傷を気にしながら、「何言っただけ？」と首をひねらせる。さすが負け犬記憶力も乏しい。

「『奴隷にしてやる』とは誰の言葉か。このような非人道的なことを言っただのは誰なのか。自分の胸に手を当ててよく考えてみるがよい」

「すみません僕でした」

ベッドの上で両手両膝をつき誰に向けたか分からない平謝りを敢行した。

まさか本気にするとは思わなかった、というのが篠崎の本音だろう。あのときは臨戦状態だったし、気分も高揚してアドレナリンも過剰に分泌されていた。少しぐらい汚いことを言っただけなのだが、え、まさかあれか今流行りの奴隷むっはむはハーレム形成うつぶんピンク色の明日が待っている行かなくては待っておれハティ！となったところでキイトに腹をつつかれた。

その目はこうだ。『まおーさまのふらち』。

訂正しよう。『まおーさましね』。

「ごめん調子に乗った許してくださいこの通り」

平謝りを続けるが怒られ続けるという負の連鎖が百連鎖ほど続いた時、見たことのある老人が入ってきた。

「魔王様。……お元気そうだなによりです」

「……………」

何を以ってして元気そうと言ったのか。篠崎は分からないふりをした。

「アスラ、どうしたんだ？」

「その、ご療養中に失礼だということは分かっているのですが、その……」

「老人がそのその言っても可愛くないから先続けて」

アスラは少しの沈黙の後、こう言った。

「もう。民の興奮を抑えることはワシには不可能です。出来ればお立ち台に上がってもらいたいのですが」

一瞬、思考回路が止まった。

民？　なんだそれ？

………　そういえば、自分は『魔王』であるということは今更ながらに思い出す。

そんな魔王が、国の危機に颯爽と現れて血反吐を吐きながら戦ったのだ。それも国民の前で。

全員ではないだろう。しかし、人の噂はまたたくまに世界を駆け巡る。インターネットなどがない分まだ遅いだろうが、一日もあればこのヨルムガンドの中ぐらいならあっという間に広がるはずだ。篠崎は、ゆっくりと意識を切り替える。

したことはないが、とりあえず『仕事』をこなさなければならぬ。

『優しい魔王』になるからといって、どこかの駄王のように玉座でふんぞり返り寝室で侍女といちゃいちゃしていればいいだけ、なんて甘いことは考えていなかった。社会科が得意な自分として、それぐらいのことは知っている。

ようするに、民に自分はここにいる、というアピールをすればいいわけだ。

それも偶像性キローたつぷりに。

覚悟は決まっている。

言っべきことも分かっていた。

そうして、一人の平凡な少年は、

「アスラ。案内してくれ」

『魔王』となる。

|| ||

城の前に詰め掛ける民の群れ。そのどれもがみすばらしげな格好をしているが、数日前と比べ目に活力が宿っていた。

『魔王』が現れた。

これは魔族の民にとって言い知れない幸福感に満ち溢れた言葉だった。

曰く、見た目は華奢なイメージの少年だが、『強い』らしい。それがどの方面への強さなのかはまだ分からないが、魔狼種を打ち倒すほどだというので間違いなく武力の方面は強い。

「皆のもの静まれ！」

前魔王が消えてから実質この国をなんとか保っていた宰相のアスラの声がする。自分たちの上からだ。

民は上を見上げる。

そこは歴代の『魔王』がその姿を民に見せるための、通称お立ち台だ。

この国に王族はいない。ただ一人のみ、『魔王』だけがあそこに立ち、民へ安心と信頼を抱かせる。

今思えば、あそこに立った前魔王の肩は震えていたのかもしれないと、ここに詰め掛けた魔族の民は思う。

「今から、新しく魔王の座につかれた、トモシノサキ様がお立ちになる」

歓声が巻き起こる。一種の爆発のような歓声が城の外壁に叩きつけられた。

自分たちの体のどこにこんな活力が宿っていたのか、と不思議に思うぐらい力が沸いてくる。

「……魔王様、こちらへ」

アスラに導かれて出てきたのは、噂通りの少年だった。おそらく、自分達の半分ぐらいの年だろうか。どこか頼りなさ気に見える。

しかし、違う。

あの目は、『魔王』の目だ。

詰めかけた、およそ一万人ほどの民はその発せられるであろう言葉に思いを巡らせる。

しかし、民の予想を裏切って、『魔王』は言葉を一つも発しない。やはり緊張しているのだろう。無理もない、この数の人間を眼下にして緊張しないなんてことはないだろう。大人であつても足が震えるだろう。それをあの少年に期待するのはただけなかったのかもしれない。

だが、『魔王』は唐突に腕を振り上げた。その手の中に、見たことのある魔剣が握られている。

そして、

「勝つぞ」

その、一言だった。

しかし、十分だったのかもしれない。

この国が立ち上がるには、十分だったのかもしれない。

音によって音が消され、さらなる音が爆音を生む中、人々は思う。立ち上がる時は、来た。

|| || || ||

「……ふへー。緊張したあ〜」

いつぞやの会議室のようなところで机に突っ伏す篠崎。緊張で死ぬかと思つたのは初めてのことだった。初体験とは辛いものである。

「お疲れ様です。ささ、お早く病室に」

「なあ。アスラ、教えてくれ。僕が魔王になつたとしても、この国

は以前のように栄華を取り戻すと思うか？」

いきなり。意表を突かれる形でアスラは動揺する。
とりあえず外面だけは取りつくろう。

「当たり前ですとも」

「僕の見立てでは無理だと考えてる。もう、魔王が出て来たくらいじゃこの国はどうにもならない。そうだろ？ アスラ」

先程までとはまったく違う雰囲気を漂わせながら質問を投げかけてくる篠崎。

なぜ、ここにきてそんな投げやりなことを言うのか、なんてことはアスラは思わない。

それは、その言葉が的確的を射ていたからだ。

この国は、『強い』という素質を持った人間が一人現れた程度では、何も変わらない。この国がここまで荒れてしまった理由は、大前提として魔王がいなくなったことに由来するが、それに伴う事象が一番の原因だと言える。

貴族の離反。これが一番の理由だ。

初代魔王が築き上げたあのアバウトな協力関係。あれを取り戻さなければ現状維持しか出来なくなるだろう。

「だからさ、僕、その『地獄の七公』とやらに会いに行こうと思ってる。初代魔王みたいにさ」

「なっ!?!」

『地獄の七公』。ともすれば、魔王と同等の権力を有する七人の魔族のことである。いや、正確に言えば違うのだが。

初代魔王は、その七人と時には話しあい、時には武力を交えて集めたという。

もちろん、命懸けで、だ。

「それは、本気で？」

「うん、凄く本気。久しぶりに見せる本気」

机に突っ伏したままなのでまったく威厳などないが、アスラは知っている。

『魔王の仮面』で、魔王の記憶を覗ける篠崎にとって、『地獄の七公』がどんな存在かは重々承知しているはずだ。今代の『地獄の七公』は、アスラも知っている。

文に通じた者でさえ、一騎当千のチカラを保有しているのだ。

聞けば篠崎は『魔王』になるまで普通の一般人らしいではないか。そんな一般人が、それらを前にしてどうするのかと。

「どうにかするんだよ。そのための『魔王』だ」
アスラは黙る。

この少年は、本気なのだと。

そして、いくつかの言葉を並べ始めた。それは、呪いの言葉のようにも聞こえるかもしれない。そんな単語の羅列だ。

「【色欲】ラスト「アスモデウス。【暴食】グラトニー「ベルゼブブ。【嫉妬】エンヴィー「レヴィアタン。【怠惰】スロウス「ベルフェゴール。【強欲】グリード「マモン。【憤怒】ラーズ「サタン。そして、【傲慢】プライド「ルシファー」

ぴくり、と。篠崎の肩が動く。聞いたことのある言葉を耳にした時の反応だ。

「既に知っておられると思いますが、今一度心に留め置いてほしいと願う七つの名です」

「七つの大罪に比肩する悪魔の名前ね」

「『黒の書』に目を通していただければお分かりになると思いますが、その最終章に載っている魔術がこの七つの名を活用して創られた、七つの大罪です」
セブン・デッド・ドレイ・シンス

「……………」
篠崎は、その魔術を一度ある女性から行使されている。

「その一撃は山を砕き、海を引き裂き、虚空に浮かぶ月を消滅させると言われる大魔術です」

ナイトウオーカーさん？ 僕は貴女にそれほどひどいことをしたのでしょうか？ と口をぱくぱくさせながら言う。やはり、魔剣ティアでなければあの城は吹き飛んでいただろう。

それはひとまず『会ってから』のオタノシミに置いて、篠崎は話しを進める。

「どこにいるのかも大体は分かっている。するべきことは、まあ、世代も交代してるわけだし変わるだろうけど、本質的なことは変わらない。ここで一番重要なのは、僕がいなくなつて誰が政治のかじ取りをするかということなんだけど」

篠崎はまったくもって迷わず、こう言った。

「アスラ、やってくれるか？」

「ッ」

アスラは一瞬逡巡した。

驚愕。その一言に尽きるだろう。

この国を崩壊させないで留め置くことしかできなかった自分を、ここで登用するのか、と。

「偉そうなことは言えないけど、アスラ以外にはいない。そして多分、民衆もアスラ以外にはいないと思つてる。だから、今更だけど礼を言うよ。　今まで国を守つてきてくれて、ありがとう」

報われる。

その一言で、全てが報われた。

目の前で苦しむ民。それをどうにかする策は浮かんでも、どうにもすることができない。精々『最悪の結果』に向かうニーズヘッグを、少しでも押し留まらせておくだけのことしかできなかった。

悔しい。

だが、それも、終わりだ。

「アスラ。指をくわえて見ているのは、もうしなくていい。今から勝つことだけをすればいいんだ。もう、何の躊躇もいらぬ」

年老いた宰相は、静かに涙を噛みしめた。

そう。

すでに、年老いた宰相は戦っていた。

一週間後、魔の国ニーズヘッグの上空に一つの黒が舞った。
その背中には一人の少年と、小さな少女。
それを見送る一人の老人と城の使用人たち。
空に響き渡る龍の咆哮。

反撃の狼煙が、今まさに上げられた。

『魔王』は、その手で困難を掻きわけ、その足でどんな絶望も乗り越えるだろう。

悲劇の幕は降ろされ始めた。

そんな『魔王』の手によって、誰も傷つかないという甘い喜劇ほっほうの脚本が紡ぎ出された瞬間だった。

「待ってる、ナイトウォーカー。待ってる、ダレン＝スカーレット。
待ってる、白神真」

様々な思惑が混ざりあい、やがて一つの流れへと収束していく。
そんな中で、一人の少年の物語がひとまずの終わりを迎えた。

そして今、新たな物語に、少年は一歩足を踏み出す。

第一章：『優しい魔王になるために』 完

第二一話：The end of one story, and begins

久しぶりにギルドが活用できたし伏線の回収もできました。

まだ『悪英雄』の出番は少し先になりそうですが、とりあえずまあ国力を回復させないといけません。

とりあえず、第一章：『優しい魔王になるために』完結です。

結構うれしいです。いえ、とっても嬉しいです！！

第二章に入る前に閑話を数話挟みたいと思います。

物語に関係あるようでないような、そんなお話しにしたいと思いません。

では、これにて。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

次回も宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7933v/>

優しい魔王になるために

2011年9月26日02時11分発行